

新潟大学考古学研究室
調査研究報告
20

2021
新潟大学人文学部

新潟大学考古学研究室
調査研究報告
20

-新潟県佐渡市-

西三川砂金山跡測量・発掘調査報告

Investigataion of Nishimikawa Placer Gold Mine,Sado,Niigata Pref

-新潟県五泉市-

新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター
村松ステーション旧陸軍関連施設跡第1次・第2次発掘調査報告
Investigation of Field Center for Sustainable Agriculture and Forestry
Faculty of Agriculture,Niigata University ,Gosen,Niigata Pref

2021

新潟大学人文学部

例 言

1. 本書は、新潟大学考古学研究室が 2019 年度に実施した新潟県佐渡市西三川砂金山跡（にしみかわさきんざんあと）の測量・発掘調査および、2019・2020 年度に実施した新潟県五泉市新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーション旧陸軍関連施設跡（むらまつすでいしょんきゅうりくぐくんかんれんせつあと）の発掘調査報告書である。
2. 測量・発掘調査は考古学実習 C および D（担当：清水 香）として実施した。調査経費には、清水に配分された教育基盤経費ならびに、人文社会・教育科学系長裁量経費（教育支援経費）をあてた。
3. 発掘調査の日程と参加者は以下の通りである。
 - ・平成 31・令和元（2019）年 4 月 30 日～5 月 3 日（西三川砂金山跡 测量調査）
長谷川眞志（人文学部 4 年）、浅見希徳、佐藤由羽、藤田啓吾、山木円香（3 年）、弓田和美（創生学部 3 年）、青木亮子、阿部紀佳、舟山直希、松井翔吾、山本和音（2 年）
 - ・令和元（2019）年 8 月 12 日～8 月 17 日（西三川砂金山跡 発掘調査）
新井 達、岩 戎哉、長谷川眞志（人文学部 4 年）、浅見希徳、佐藤由羽、藤田啓吾、山木円香（3 年）、青木亮子、阿部紀佳、舟山直希、松井翔吾（2 年）、高木優花（理学部 4 年）
 - ・令和元（2019）年 8 月 19 日～8 月 24 日（村松ステーション旧陸軍関連施設跡 第 1 次発掘調査）
大森千尋、小林舞花、佐藤菜々美、長谷川眞志、野呂 梢、平山千尋（人文学部 4 年）、山木円香（3 年）、青木亮子、阿部紀佳、舟山直希、松井翔吾（2 年）、草牧里佳、村上ちひろ（理学部 4 年）
 - ・令和 2（2020 年）8 月 17 日～8 月 28 日（村松ステーション旧陸軍関連施設跡 第 2 次発掘調査）
長谷川眞志（考古学研究室 O.B.）、浅見希徳、佐藤由羽、山木円香（人文学部 4 年）、青木亮子、阿部紀佳、舟山直希、松井翔吾（3 年）、新井健太、遠藤純夏、大島早紀、野村郁仁、原田優海、宮島龍志（2 年）
4. 整理作業は、清水および新潟大学考古学研究室の学生が行った。遺物洗浄・注記・接合・分類について、村松ステーション旧陸軍関連施設跡 SU01 の遺物洗浄のみ清水、その他は清水の指導のもと、学生が行った。
5. 本書は、新潟大学の教員と学生が分担して執筆し、執筆箇所に担当者名を記した。掲載した遺構写真は学生および教員、遺物写真は松井翔吾を中心として、舟山直希、野村郁仁、宮島龍志が撮影した。西三川砂金山跡の遺物図版は浅見希徳、佐藤由羽、藤田啓吾、山木円香、写真図版は浅見希徳、山木円香、遺物一覧表および遺物観察表は佐藤由羽が担当した。村松ステーション旧陸軍関連施設跡の遺物図版は阿部紀佳を中心として、松井翔吾、遠藤純夏、大島早紀、原田優海、写真図版は各地点の担当者および青木亮子、遺物一覧表・遺物観察表は舟山直希を中心として阿部紀佳、松井翔吾が担当した。測量は技研コンサル株式会社に委託した。
6. 本書の編集は清水が担当した。
7. 西三川砂金山跡および村松ステーション旧陸軍関連施設跡の出土遺物は、研究の終了まで新潟大学考古学研究室で保管し、その後、佐渡市教育委員会と五泉市教育委員会にそれぞれ返却する。図面・写真類は新潟大学考古学研究室で保管する。
8. 調査から整理・報告にいたるまで、次の方々・諸機関に御協力・御教示いただいた。御芳名を記して、謝意を表する次第である（敬称略、五十音順）。
相羽重徳、相羽理恵、青木由利子、荒川隆史、飯島康夫、井戸良太、井川恭一、石本光明、伊藤道秋、福田ミツエ、宇佐美亮、卜部厚志、大潤章雄、小野浩史、加藤 学、鹿取渉、金子一雄、小泉玲子、坂井秀弥、坂田和三、櫻井準也、佐藤 翼、佐藤峰雄、白石典之、杉野ゆかり、高井忠美子、高橋美由紀、高橋能彦、滝川邦彦、土屋謙夫、中山 昇、中村 元、西川孝一、橋本博文、

長谷川眞志、羽田清五郎、平野 琴、堀 健彦、本間 勉、満尾世志人、盛山 保、山崎琢朗、山田耕作、山田宣永、吉田智佳子、若林篤男、脇本康史、技研コンサル株式会社、並川集落の皆様、並川の景観を守る会、佐渡市教育委員会、トキ交流会館、新潟市歴史文化課、新潟県教育庁、新潟県埋蔵文化財調査事業団、新潟市文化財センター、新潟大学旭町学術資料展示館友の会、新潟日報社、村松ステーションの皆様

凡 例

1. 西三川砂金山跡測量・発掘調査報告および村松ステーション旧陸軍関連施設跡発掘調査報告におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅷ系（原点：北緯36度00分00秒、東経138度30分00秒）に基づく座標値（m）を、方位は座標北を示す。
2. 土色の識別は、農林水産省農林水産技術会議事務局が監修した『新版標準土色帖』による。
土層の繊り・粘性については、強・やや強・中・やや弱・弱・なしの6段階に分けて記した。
3. 遺物観察表における口径・器高・底径各値の単位はmmである。（）内の数値は推定復元値、[]内の数値は遺存値である。
4. 写真のスケールは不同である。
5. 第1章の第1図は新潟県地質図（改訂版）平成元年3月発行（1:200,000）を用いた。第2図は国土地理院地形図（河原田）平成11年1月1日発行1刷（1:50,000）を80%縮小して用いた。第3図は国土地理院電子地形図和2年9月17日調整（1:25,000）を50%縮小して用いた。第4図は国土地理院地形図（羽茂本郷）平成28年11月1日発行1刷（1:25,000）を用いた。第2章の第1図は国土地理院地形図（村松）昭和9年4月30日発行（1:25,000）を縮小して用いた。第4図は新潟県地質図改定委員会（編）2000「新潟県地質図説明書」を一部改変し用いた。第5図は国土地理院地形図（新津）平成9年1月1日発行1刷（1:50,000）を50%縮小して用いた。第6図は国土地理院電子地形図和2年9月17日調整（1:25,000）を50%縮小して用いた。第7図は国土地理院地形図（村松）平成21年8月1日発行1刷（1:25,000）を50%縮小して用いた。
6. 第2章の第5図は『櫻表遺跡』（2005）、「安出遺跡発掘調査報告書」（1999）を基にした。
7. 本報告書の出土磁器と陶器の分類は、原則的に光源に当てた際に光が透過し、胎土がガラス質のものを磁器、光が透過せず胎土がガラス質でないものを陶器とした。上記の方法で分類できないものは陶磁器とした。ガラス瓶については『ガラス瓶の考古学』（2019）、『会津藩保科（松平）家屋敷跡遺跡』（2011）を参照した。
8. 出土遺物実測図で陶磁器に付けた▲は釉際を示している。また、磁器の退色した文様は炭粉によって可視化し、写真で表現した。

目次

第1章 新潟県佐渡市西三川砂金山跡 測量・発掘調査報告	
I 調査の目的と概要	
1. 調査の経緯と目的	1
2. 調査の概要	1
II 西三川砂金山跡の環境	
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	4
III 測量・発掘調査の成果	8
第2章 新潟県五泉市新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター 村松ステーション旧陸軍関連施設跡 第1次・第2次発掘調査報告	
I 調査の目的と概要	
1. 調査の経緯	18
2. 聞き取り調査について	20
3. 調査の目的	61
4. 調査の概要	61
II 村松ステーション旧陸軍関連施設跡の環境	
1. 地理的環境	62
2. 歴史的環境	63
III 発掘調査の成果	68
第3章 考察	
I 村松秘匿飛行場について	93
II 練兵場と塹壕について	96
III 遺物集積地点の廢棄について	102
IV SU01のアンプルについて	104
第4章 文献史学－日本近現代史研究からのアプローチ 五泉村松地域の旧軍用地と新潟大学	107
第5章 自然科学分析	
トレンチ断面からみた地質層序	113
第6章 西三川砂金山跡および村松ステーション旧陸軍関連施設跡における 調査の成果と課題	118

表・図版目次

第1章 新潟県佐渡市西三川砂金山跡 測量・発掘調査報告	
第1表 西三川砂金山跡周辺遺跡の一覧表	6

第2表	西三川砂金山跡遺物一覧表.....	10
第3表	西三川砂金山跡出土遺物観察表.....	11
第1図	佐渡の地形概略図.....	3
第2図	周辺遺跡位置図.....	7
第3図	遺跡の位置.....	12
第4図	調査地点.....	12
第5図	石組遺構平面図・立面図(北壁)・エレベーション・遺物分布図.....	13
第6図	石組遺構出土遺物微細図.....	14
第7図	鉄砲場遺跡・砂金江道遺跡出土の石組遺構.....	16
第2章 新潟県五泉市新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター 村松ステーション旧陸軍関連施設跡 第1次・第2次発掘調査報告		
第1表	村松ステーション旧陸軍関連施設跡周辺遺跡の一覧表.....	67
第2表	軍用飛行場地点出土遺物観察表.....	72
第3表	堀・溝状遺構地点出土物観察表.....	78
第4表	遺物集積地点SU02 遺物一覧表.....	83
第5表	遺物集積地点SU01 出土遺物観察表.....	86
第6表	遺物集積地点SU02 出土遺物観察表.....	88
第1図	村松兵営周辺図.....	57
第2図	兵営内建物配置図.....	57
第3図	新潟大学農学部附属村松農場 空中写真.....	58
第4図	遺跡の地形区分と所在地.....	63
第5図	周辺遺跡位置図.....	66
第6図	遺跡の位置.....	68
第7図	村松ステーションおよび調査地点.....	68
第8図	村松ステーション旧陸軍関連施設跡 土層柱状図.....	69
第9図	村松ステーション旧陸軍関連施設跡 調査地点の位置.....	70
第10図	軍用飛行場地點(第3圃場) トレーニング位置図.....	73
第11図	軍用飛行場地點 第1トレーニング平面図・断面図.....	74
第12図	軍用飛行場地點 第2トレーニング平面図・断面図.....	75
第13図	軍用飛行場地點 第3トレーニング平面図・断面図.....	76
第14図	軍用飛行場地點 第4トレーニング平面図・断面図.....	77
第15図	堀・溝状遺構地点平面図.....	79
第16図	堀・溝状遺構地点断面図.....	80
第17図	遺物集積地点SU01・SU02 平面図、SU01 断面図、SU02 エレベーション図.....	89
第18図	遺物集積地点SU02 遺物分布図.....	90
写真1	新潟農専農場碑.....	59
写真2	建物配置図.....	59
写真3	新潟大学農学部附属農場建物平面図.....	60
写真4	農場用建築物使用設計図.....	60

第3章 考察	
I 村松の秘匿飛行場について	
第1図 村松ステーション周辺の空中写真（1946年撮影）	95
第2図 村松ステーション周辺の空中写真（1947年撮影）	95
II 練兵場と塹壕について	
第1表 各遺跡の塹壕規模	97
第1図 塹壕掘削のマニュアル（1）	100
第2図 塹壕掘削のマニュアル（2）	101
III 遺物集積地点の廃棄について	
第1図 第1回遺物集積地点周辺の地図（1948年撮影）	104
第2図 第2回遺物集積地点周辺の地図（1956年撮影）	104
IV SU01のアンブルについて	
第1図 アンブル模式図	106
第2図 SU01出土アンブル	106
第3図 アンブルの種類	106
第5章 自然科学分析	
第1図 第1トレーナー上部の堆積物	117
第2図 第1トレーナー下部の堆積物	117
第3図 ローム質シルトブロックの圧密による変形	117
第6章 2019年・2020年度調査のまとめ	
第1表 新潟大学農学部村松ステーション関連年表	122
第1図 村松ステーション調査地点位置図	123
第2図 村松ステーションの標柱	123

卷末図版目次

- 卷末図版 1 西三川砂金山路（1）
卷末図版 2 西三川砂金山路（2）
卷末図版 3 西三川砂金山路（3）
卷末図版 4 西三川砂金山路（4）
卷末図版 5 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（1）
卷末図版 6 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（2）
卷末図版 7 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（3）
卷末図版 8 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（4）
卷末図版 9 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（5）
卷末図版 10 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（6）
卷末図版 11 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（7）
卷末図版 12 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（8）
卷末図版 13 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（9）
卷末図版 14 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（10）
卷末図版 15 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（11）
卷末図版 16 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（12）
卷末図版 17 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（13）
卷末図版 18 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（14）
卷末図版 19 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（15）
卷末図版 20 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（16）
卷末図版 21 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（17）
卷末図版 22 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（18）
卷末図版 23 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（19）
卷末図版 24 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（20）
卷末図版 25 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（21）
卷末図版 26 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（22）
卷末図版 27 村松ステーション旧陸軍開港施設跡（23）
卷末図版 28 作業風景および実習の様子（1）
卷末図版 29 作業風景および実習の様子（2）
卷末図版 30 作業風景および実習の様子（3）
卷末図版 31 作業風景および実習の様子（4）
卷末図版 32 作業風景および実習の様子（5）

第1章 新潟県佐渡市西三川砂金山跡測量・発掘調査報告

I 調査の目的と概要

1. 調査の経緯と目的

鉱山としての西三川砂金山（真野地区）は、平安時代末期に成立した『今昔物語集』や、室町時代（永享6〔1434〕年）では世阿弥による『金鳥書』、近世では『佐渡相川志』などの文献史料に「金」に関する記述が認められること（橘1964、真野町史編纂委員会1976、小田2009）を根拠として、江戸時代には大規模な砂金採掘が行われたことを示す痕跡が多数確認されており、明治5（1872）年に操業が終了した後も、小規模な採掘が継続したという（佐渡市教育委員会2009）。

このように、西三川砂金山は、平安時代以降から近代まで継続的に砂金採掘が行われたと考えられる、全国的にも希少な鉱山遺跡である。西三川砂金山における歴史や技術の変遷は、日本各地の鉱山遺跡に関連して、さらに江戸時代には日本最大の相川銀山を持つ佐渡において「砂金」を特徴とする地域として注目される。なお、佐渡市教育委員会による分布調査で確認された、砂金採掘に関連する水路跡や石組造構・石積造構などは、江戸時代の文献史料や絵図にもみることができる（佐渡市教育委員会2009、佐渡市世界遺産推進課2012）。そのうち、西三川砂金山で多数発見された石組造構については、これまで1箇所のみ発掘調査が行われており、そこでは石組みの内部に鍛冶に関する遺構が検出されている。（真野町教育委員会2004）また、集落からの聞き取りでは、鍛冶小屋や水路管理、見張り小屋、あるいは休憩所、住居という推測が示されている（佐渡市世界遺産推進課2012）。この石組造構は西三川砂金山以外の銀山においても確認されているため、今後、全国の鉱山遺跡との技術交流について、実証的に研究する指標ともなりうる重要な遺構として位置づけられる。

そこで、新潟大学考古学研究室では、佐渡市教育委員会が実施した分布調査で確認されている石組造構の砂金山における機能および砂金採掘に関わる技術との関わりを追究する目的で、2019年に佐渡市教育委員会との事前協議に基づいて設定した調査範囲について発掘調査を実施した。（清水 香）

2. 調査の概要

（1）測量調査

<調査体制>

調査主体：新潟大学考古学研究室

調査責任者：清水 香（新潟大学人文社会科学系 助教）

協 力：相羽重徳、鹿取 渉、鶴川邦彦、若林篤男（佐渡市世界遺産推進課）

調査参加者：長谷川眞志（人文学部4年）、浅見希徳、佐藤由羽、藤田啓吾、山本円香（3年）、青木亮子、阿部紀佳、舟山直希、松井翔吾、山本和音（2年）、弓田和美（創成学部3年）

調査期間等：2019年4月30日（火）～2019年5月3日（金）

<調査の経過>

4月30日（火）雨時々曇り：機材搬入後、石組造構とその周辺状況の確認。草木の伐採を行う。

5月1日（水）曇り：草木の伐採後、石組造構の写真撮影を行い、杭G 1～G 3を設定した。

5月2日（木）晴れ：清掃後の写真撮影を行った後、造構の平面図、北壁の立面図の作成。

5月3日（金）晴れ：宿舎の清掃を行った後、相川郷土博物館、北沢浮遊鉱場跡、佐渡奉行所跡、きらりうむ佐渡を見学し、撤収。
(藤田啓吾)

II 西三川砂金山跡の環境

(2) 発掘調査

<調査体制>

調査主体：新潟大学考古学研究室

調査責任者：清水 香（新潟大学人文社会科学系 助教）

協 力：相羽重徳、鹿取 渉、滝川邦彦、若林篤男（佐渡市世界遺産推進課）

調査参加者：新井 遼、岩 佑哉、長谷川真志（人文学部4年）、浅見希徳、佐藤由羽、藤田啓吾、山本円香（3年）、青木亮子、阿部紀佳、舟山直希、松井翔吾（2年）、高木優花（理学部4年）

調査期間等：2019年8月12日（月）～2019年8月17日（土）

<調査の経過>

8月12日（月）晴れ：笹川集落センターに機材搬入後、石組遺構の写真を撮影し、草木の伐採および清掃、杭の確認を行う。

8月13日（火）晴れ：石組遺構の清掃後の写真を撮影した後、前回の測量調査に引き続き北壁立面図の作成およびA～Cトレンチを設定、各トレンチ内の掘り下げを行う。

8月14日（水）晴れ：前日から継続して北壁立面図の作成、各トレンチ内の掘り下げを行い、出土遺物を平面図および微細図として記録した。

8月15日（木）晴れ：前日から継続してCトレンチの掘り下げ、北壁立面図の作成を行った。また平面図に各トレンチの位置を記録し、Bトレンチの写真を撮影した。作業後、翌日の台風に備えてトレンチをブルーシートで被覆した。

8月16日（金）雨：降雨のため午前は佐渡博物館、午後は佐渡歴史伝説館を見学した。

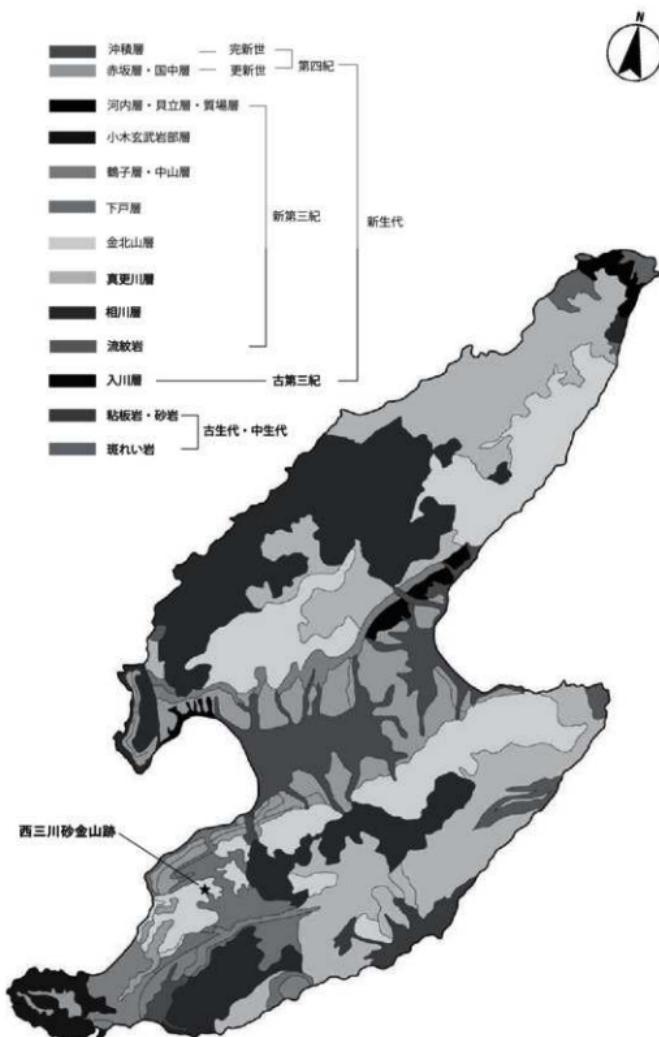
8月17日（土）晴れ：北壁立面図の作成終了。各トレンチで遺物の微細図の作成を終了後、遺構全景の写真を撮影して調査終了。その後、宿舎の清掃を行い撤収した。
(浅見希徳)

II 西三川砂金山跡の環境

1. 地理的環境（第1図）

西三川砂金山跡は、小佐渡山脈の南西部、真野湾南西端の田切須崎の南側で日本海に注ぐ西三川川流域一帯に位置する。この地域の地形は、数段の海成段丘とそれを侵食して流れる西三川川などが形成した小規模な河成段丘・低地からなっている。金山地区から笹川地区にかけての北北西～南南東方向に、砂金採掘の鉱山開発に伴う人为的な地形変容も認められる（鈴木 2011）。遺跡周辺の地域では、16,000年前頃の海成層（下戸層）が広く分布しており、そのため山容は緩やかな傾向を持つ。西三川周辺での岩石は灰褐色～緑色の変質安山岩溶岩（プロビライト）と同質凝灰角砾岩であり、西三川鉱山には礫岩・砂岩層に含まれる砂金からなる砂金鉱床が形成されている（小林ほか 2011）。

西三川川河口から約4km上流の、西三川川と笹川川に挟まれた小佐渡山麓の丘陵地に、かつて西三川砂金山の中心地として栄えた笹川集落が所在する（佐渡市世界遺産推進課ほか 2012）。集落の南には立残山、山居山、中瀬山、岬坂山などがある。この集落は砂金採掘の発達とともに形成された集落であり、周辺には砂金採掘用具の製作や鍛造を行ったと考えられるカジ屋敷遺跡や、砂金流しに使った水路の石組遺構が残る砂金江道路など数多くの鉱山関連の遺跡が確認されている。今回調査を行った石組遺構もこのような砂金採掘に関わる遺構の一つである。石組遺構の位置は、笹川集落開発センターから北に約1.6km離れた森林の内部に位置している。（浅見希徳）



第1図 佐渡の地形概略図（新潟県 1989 を一部改変）

2. 歴史的環境

(1) 西三川砂金山遺跡の歴史

中世以前

西三川川流域は『今昔物語集』巻26、「宇治拾遺物語」巻4に同様の佐渡における産金の記述がある。『今昔物語集』は平安末期の嘉承年間（1106～1108）に編纂され、平安末期には佐渡における産金は行われていたと考えられる。『宇治拾遺物語』において当時の能登国司が藤原実房とあることから、治安年間（1021～23）頃の様子と考えられる（小菅2000）。

鎌倉時代における砂金採掘に関する記録は伝わっていないが、砂金開発がなかったとはいきれない。砂金山は鉱石採掘の金銀山と異なり長期的に稼行する傾向があるためである。また、西三川川河口流域から4kmほど上流の笹川集落には、承久3（1221）年の承久の乱によって佐渡に流された順徳上皇の第三皇子彦成親王の墓と伝わる法名院塚が所在する。順徳院は佐渡で崩御され、その菩提を弔うため佐渡に渡った彦成王は殊勝誓願興行寺を真野地区竹田の夏渡りに興し、笹川の地へ寺基を移したという。笹川での建立地は西三川砂金山最大の稼ぎ場とされる虎丸山の中腹の「野田」という場所があり、笹川の稼ぎ場を一望できる立地である（真野町史編纂委員会1976、小菅2000）。

鎌倉後期以後の砂金山の史料はわずかであるが、長尾高景が康応元（1389）年2月28日に佐渡で戦死したと『長尾系図』に記されている。佐渡の南北朝の動乱は、砂金山の領有をめぐり、越後勢まで呼びこんだものと思われる。永享6（1434）年には能の大成者世阿弥が佐渡に流罪となり、佐渡での体験を小説集『金島書』に書き遺した。ここには「金の島佐渡」と表現がなされ、佐渡の産金が現実のものであるという意識がうかがえる（小菅2000）。

室町時代～桃山時代

室町時代から安土桃山までの砂金山に関する史料は、江戸時代後期の編纂となる佐渡史書等に散見される。江戸中期以降の『佐渡相川志』の「寛正元（1460）年始まる」「永正一〇（1513）年中絶」「文禄二（1593）年に（再）開発」。また、『佐渡風土記』の文禄2年の条「三月十五日西三川金山始」「幾筋にもねこだわしひつけ、流一筋に月の上納白銀一八枚の定め」、そして『佐渡國略記』の「弘治元（1555）年松浪道仁砂金山を稼ぐ」「天正一七（1589）年、上杉代官大井田監物・富永備中」「太閤秀吉公伏見御在城之節、文禄二（1593）年三月十八（より）西三川砂金、毎年三駄宛伏見の御蔵へ納」など、多様な変化がうかがえる（小菅2000）。

西三川砂金山の周辺部は戦国末期には本間三河守という赤泊の地頭の領内であったと考えられる。西三川川河口より、1.2kmほど上流の右岸段丘先端部に3郭の西三川城跡が、笹川集落南部の山頂平坦面には笹川城跡が存在し、西三川砂金山を支配するための支城であったと思われる。上記で示したように、文禄2年に西三川砂金が毎年3駄を伏見へ送ったとある。当時の1駄は30貫匁内外であった。同年の文禄2年に大山祇神社は鉱山の繁榮と安全を願い建立されたと伝わる（新潟県神職会佐渡支部1926）。また、慶長3（1598）年の伏見蔵納目録に記載されている上杉景勝領佐渡黄金山からの上納は、金799枚5両1匁6厘（金35貫978匁5分6厘）であった。このように、佐渡・西三川砂金山の最盛期は文献史料の少ない戦国末期といえる（小菅2000）。

近世

江戸時代になると、西三川砂金山に多くの山師が進出し、周辺の鉱山開発が行われた。江戸時代の西三川砂金に関する最古の文書として慶長9（1604）年の敷賀七助の請負証文がある。これによると敷賀七助は当時の西三川地域の金銀山のすべてを請負ったとあり、当時は西三川、田切須と大須山において鉱山開発が進んだ場所と考えられる。また、江戸時代中期の『佐渡四民風俗』において「背合村より田切須邊迄は以前稼ぎの銀山銅山鉛山等古間歩數ヶ所之有。」と記される。周辺に中世以前の埋蔵文化財包藏地や垣のない村落が存在せず、先述の江戸中期以降の『佐渡相川志』の「寛正元年（1460）始まる」「永正一〇（1513）年中絶」「文禄二（1593）年に（再）開発」とあるように、笹川は砂金開発に伴い中世以降に形成された集落と考えられる。

江戸時代の砂金運上高は、『佐渡年代記』では慶長18（1613）年の660匁、慶長19（1614）年では2貫872匁8分とある。元和年間（1615～1624）では多い年で元和元（1615）年の金4貫108匁8分、元和7（1621）年の金4貫831匁2分とある。元和5（1619）年が少ない年であるが金1貫6匁8分であり、平均が2貫前後となる。1700年以降は金子勘三郎家の『宝暦以来砂金上納方覺』で年間砂金運上推移は宝暦年間（1751～1763）から寛政年間（1789～1800）までは1貫程度である。しかし、享和年間頃から低下し、文化文政年間（1804～29）では200匁。天保年間（1830～1843）では約10匁前後。安政年間（1854～1859）以後では100匁を割る年が増加している。そして元治元（1864）年では40匁あまりの運上となる。このように、江戸時代中期以降から砂金運上高は衰退傾向であったことがうかがえる（真野町史編纂委員会 1976、小菅 2000、若林 2012）。

近代～現代

明治5（1872）年に砂金山は廃絶したが地元住民による砂金採取は以降も細々と行われた。昭和23（1948）年に新潟県による西三川全城の川底のボーリング調査が行われた。翌年に西三川村長本間栄太郎氏が三菱金属株式会社から西三川砂金山の鉱区権を買い取り、砂金山の再開発に取り組んだ。昭和末年になって西三川砂金山の鉱区権は高野氏に譲渡され、砂金祭りというイベントが行われた。現在では地元住民による砂金採取は行われておらず、平成2（1990）年に西三川河口付近に一般観光客向けの砂金採り体験施設「西三川ゴールドパーク」がオープンした（小菅 2000）。（松井翔吾）

（2）西三川砂金山跡周辺の遺跡（第2図、第1表）

旧石器時代

西三川周辺では、旧石器時代の遺跡は確認されていない。

縄文時代

西三川右岸の海岸段丘上に縄文時代草創期の遺跡が存在し、にいやの田遺跡で局部磨製石斧、小布施遺跡で尖頭器が出土している。前期には、三貫目左岸の沢おくに位置する大工町遺跡から前・中期土器や土偶が出土している（真野町史編纂委員会 1976）。前期後半に入ると、遺跡の分布は国仲平野の舌状台地に移り、県指定史跡である中期の藤塚貝塚からは貝輪や人骨、獸骨が出土している。後期では、浜田遺跡からは後期土器や石鎌、三宮貝塚からは石棒や骨角器が、また両遺跡から人骨が出土している。晚期では、三貫目沢洞穴から晩期土器が出土している。

弥生時代

佐渡の弥生時代の遺跡の主体は国仲平野に位置し、ほとんどの遺跡で佐渡の碧玉や鉄石英などの原石を加工して、管玉などの玉類を多量に制作していたということが大きな特徴である。若宮遺跡では、竹ノ花形式の後期の土器や石器、管玉や勾玉などの玉類、石鋸などの玉造工具が出土している。

古墳時代

若宮遺跡では、弥生時代後期の遺物だけでなく、それに続く古墳時代の甕、壺、高坏などの土師器や、そののちの須恵器や瓦もみられる。また、佐渡にある古墳は大部分が円墳であり、後期古墳の時期に属する。三貫目沢東・西古墳、蝦夷坂第1号・第2号古墳、ケラマキ第1号～第6号古墳、大須第1号～第3号古墳、大立蝦夷沢古墳は県指定史跡である。

古代・中世

平安時代後期には、製鉄集団との関連から海岸部の砂鉄採取と結びついていたと考えられ、採取が行われていたのは西三川川の河口付近だろうと推定されている（真野町史編纂委員会 1976）。中世後半からは、砂金採掘について文献等に散見されるようになる。当時の砂金山開発には、赤泊地区蓮場にある淨土真宗本龍寺が深く関わっていると考えられる。ここは赤泊の山中を経て錦川へと通じる交通の要衝であり、対岸越後への渡海場でもあったため、採取した砂金を越後方面へ運ぶ積出港であったと想定される。

現在のところ、平安時代から中世後半までの砂金採取の遺構は確認されていない。砂金採取という

II 西三川砂金山跡の環境

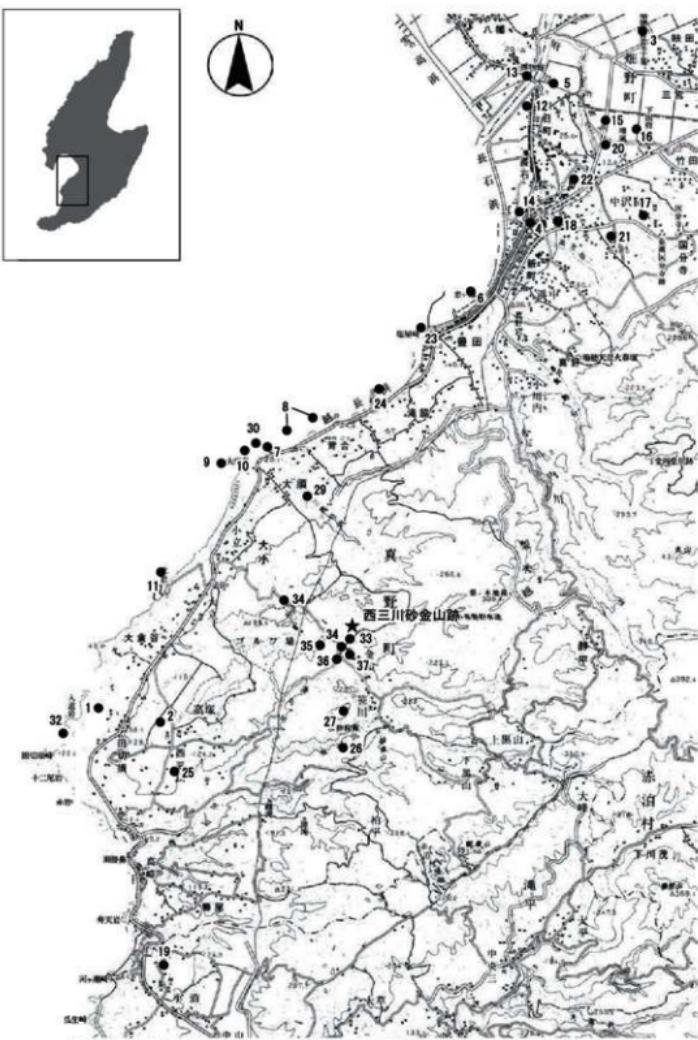
技術的性格上、遺構は残りにくいものと考えられる。

近世

江戸時代には真野地区滝脇から田切須にかけての海岸段丘上や段丘間の沢沿いに、^{北山}背合銀山、^{北山}大須銀山、大須三貫目沢銀山、花見沢銀山、田切須銀山といった鉱山遺跡、篠川集落内には、^{北山}西三川金山役所に比定される篠川十八枚遺跡のほか、カジ屋敷遺跡、せりば遺跡、鉄砲場遺跡、砂金江遺跡といった鉱山関連の遺跡が存在する。砂金山は江戸中期以降次第に産金量が減り、明治5(1872)年に閉山となった(佐渡市世界遺産推進課 2011)。
(佐藤由羽)

第1表 西三川砂金山跡周辺遺跡の一覧表

No.	遺跡名	時代	種別
1	にいやの田	縄文	遺物包含地
2	小布施	縄文	遺物包含層
3	三宮貝塚	縄文	貝塚
4	藤塚貝塚	縄文	貝塚
5	若宮	弥生～平安	遺物包含地
6	農田浜田	縄文・奈良～平安	遺物包含地
7	三貫目沢東・西古墳	古墳	古墳
8	鶴ヶ塚第1号・第2号古墳	古墳	古墳
9	ケラマキ第1号～第6号古墳	古墳	古墳
10	大須第1号～第3号古墳	古墳	古墳
11	大立鰐夷沢古墳	古墳	古墳
12	佐渡国街跡	奈良	古墳
13	四日町高野	平安	遺物包含地
14	庚門塚	奈良	条里跡
15	竹田沖条里	奈良	条里跡
16	下国府	奈良・平安	遺物包含地
17	佐渡国分寺跡	奈良	寺院跡
18	仲畑	平安	遺物包含地
19	小泊窯跡群	奈良	窯跡
20	壇鳳城跡	室町	遺物包含地
21	吉岡城跡	室町	城館跡
22	吉岡元城跡	室町	城館跡
23	済手城跡	室町	城跡
24	滝脇城跡	室町	城跡
25	西三川城跡	室町	城跡
26	篠川城跡	室町	城跡
27	法名院塚	中世	塚
28	背合銀山	近世	鉱山跡
29	大須銀山	近世	鉱山跡
30	三貫目沢鉱山跡	近世	鉱山跡
31	花見沢銀山跡	近世	鉱山跡
32	田切須鉱山跡	近世	鉱山跡
33	篠川拾八枚	近世	鉱山跡
34	カジ屋敷	近世	鉱山跡
35	せりば	近世	鉱山跡
36	鉄砲場	近世	鉱山跡
37	砂金江道路	近世	鉱山跡
38	西三川砂金山跡	近世・近代	生產遺跡(鉱山跡)



第2図 周辺遺跡位置図 (S=1:62,500) 国土地理院地図 S=1:50,000 を改変

III 測量・発掘調査の成果（第3図～第6図・第2表・第3表）

石組遺構の概要

佐渡・西三川地域は歴史的に砂金の採掘地として栄え、現代にも砂金採掘の痕跡が色濃く残っている。そのような砂金採掘に関する遺構の一つに石組遺構と呼ばれるものがある。しかし、石組遺構は佐渡市教育委員会が2002年に1基のみ発掘調査を行ったにすぎず、いまだ調査の類例が少なく具体的な用途については判明していない。そのため、新規に発掘調査を行い石組遺構について実証的に研究を進める必要性がある。

今回、新潟大学考古学研究室は2019年5月と8月に佐渡市教育委員会との協議に基づいて設定した、荒川集落の北上に位置する1基の石組遺構について測量・発掘調査を行った（第3図、第4図）。調査前の遺構周辺の環境は草木が生い茂り、遺構を構成する積石は苔が一部覆う状態であった。また、遺構内部に伐採不可能な樹木が存在していた。そのため伐採などの清掃作業を行った後、石組遺構の現状記録を目的として、写真撮影と平面図作成を行った。また、積石の記録として石組遺構北壁の立面図も作成した。発掘調査では、遺構の状況や規模を確認するために遺構周囲の東・北・西にそれぞれA・B・Cトレンチを設定、掘り下げを行った。トレンチは当初遺構の中心を通るように設定する予定だったが、遺構内部の樹木が遮るために変更し、樹木を避けて東に0.4mずらして設定した。出土遺物は適宜、微細図を作成し記録した。今回の調査では石組遺構の現状記録を行う調査であり、遺構の規模の検出が中心であった。遺物は表土付近で採取されたものが多く、セクション図を記録し、土層解釈するには至らなかった。

石組遺構は確認された範囲で、東西6.8m以上、南北6.4m以上、高さは最大で約0.65mにおよぶ。遺構は調査で確認された面よりもさらに南・北・東に広がりがあると推測され、平面形は正方形かやや東に長い長方形である。遺構を構成する積石は、幅が約0.3m程度の自然石が組み合わされている。

出土した遺物は第5図、第6図、第2表に、主要な出土遺物は巻末図版（1）に図示し、第3表にまとめて掲載した。

A トレンチ

本トレンチは石組遺構の奥部にあたる東側の遺構の広がりを確認することを目的としたため、石組遺構東外壁に設定を行った。東西に設定した遺構中軸を南辺として、南北に1m、東西に2mのトレンチを設定し、掘り下げを行った。3～5cm程度掘り下げたところ石組が確認されたため、これを石組遺構の東側への広がりの一部であると判断し、トレンチ内にある石組の表面をすべて検出したのちに発掘を終了した。

検出遺構

発掘調査前に確認可能であった範囲より東側に続く石組遺構を検出した。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。

B トレンチ

本トレンチは石組遺構北側の遺構の広がりを確認することを目的としたため、石組遺構北外壁に設定を行った。南北に設定した遺構中軸を西辺として、南北に2m、東西に1mのトレンチを設定し、掘り下げを行った。3cm程度掘り下げたところ石組が確認されたため、これを石組遺構の北側への広がりの一部であると判断し、トレンチ内にある石組の表面をすべて検出したのちに発掘を終了した。

検出遺構

発掘調査前に確認可能であった範囲より北側に続く石組遺構を検出した。

出土遺物

トレンチ内東側で瓶1点(巻末図版(1)17)が出土した。

(浅見希徳)

C トレンチ

本トレンチは石組遺構入り口にあたる、遺構西側の広がりを確認することを目的としたため、石組遺構北壁西端に接し、東西に設定した遺構中軸を南辺とした、南北に2m、東西に2mのトレンチを設定し、掘り下げを行った。A・Bトレンチ両者とは異なり、本トレンチ内では石組の広がりは確認されず、土中から多数の遺物が検出された。そのことから、石組遺構全体の西端は現在確認できている範囲であると判断できる。出土遺物の位置とレベルを記録した後、調査を終了した。

検出遺構

遺構は検出されなかった。

出土遺物

計20点の遺物が出土した。磁器の碗、ガラス、焰烙、簪、石英などが見られた。2・3は碗で、染付が施されている。前者が口縁部、後者が腰部。4は磁器の蓋で染付が施されている。10は焰烙の口縁部である。11・12は金属製の簪。先端が匙状で全体の途中で折れ曲がっている。15・16は前者が石英、後者は水晶と思われる。

(浅見希徳)

その他の出土遺物

1は磁器碗の口縁部で、石組遺構内側の東壁沿いから出土した。

遺構東側では遺物21点が出土し、そのうち14点が接合した。5は灯明皿の口縁部。外面は無釉と思われ、口縁部にタールが付着している。6は爛徳利の口縁部から胴部。口縁部に花、胴部に松と鳥の文様がみられ、内面は無釉。7は燭台。脚部内面は無釉で芯部が鉄製。

遺構内側の南西部から土器の焰烙が16点出土し、うち9点が接合、全て同一個体であると考えられる。8・9は口縁部で内外面にスヌが付着している。13は鉄製品の工具で、遺構の入り口付近の石の隙間に置かれた状態で発見された。14は赤褐色の砥石の破片で、遺構内側の北壁沿いから出土している。

(山木円香)

III 測量・発掘調査の成果

第2表 西三川砂金山跡遺物一覧表

報告番号	取り上げ番号	種別	器種	文様・技法・色調・備考
1	3	磁器	碗	楕円成形、染付、透明釉、口縁部破片
2	7・38	磁器	碗	楕円成形、染付、透明釉、腹部破片、肥前系、近世
3	5	磁器	碗	透明釉、口縁部破片
4	12	磁器	蓋	楕円成形、透明釉、染付あり、破片
5	33	磁器	灯明皿	楕円成形、透明釉、口縁部外面タル付着、外面無釉
6	15・16・18・19・20・21 22・23・25・26・28・30	磁器	徳利	楕円成形、透明釉、外面に染付・松と鳥の文様、銅板絵付け 胴～底部欠損、脚部内面無釉
7	31	磁器	燭台	透明釉、脚～底部欠損、脚部内面無釉、芯部は鉄製で落書き
	17	磁器	破片	透明釉、外面に文様（青色）あり、内面無釉、取り上げ No.24, 27 と同一個体か
	24・27	磁器	湯呑み？	楕円成形、透明釉、外面に文様（青色）あり、銅板絵付け、 脚部破片、内面無釉
8	43・52	土器	焙烙	型打楕円成形、外面にスス付着、口縁部破片、 直径 6mm の穴あり
9	53	土器	焙烙	型打楕円成形、内外面にスス付着、口縁部破片
10	1	土器	焙烙	型打楕円成形、口縁部破片
	40	土器	焙烙	型打楕円成形、破片
	41	土器	焙烙	型打楕円成形、破片
	42・54	土器	焙烙	型打楕円成形
	44・46・49・50・51	土器	焙烙	型打楕円成形
	45	土器	焙烙	型打楕円成形、破片
	47	土器	焙烙	型打楕円成形、外面にスス付着、口縁部破片
	48	土器	焙烙	型打楕円成形、破片
	55	土器	焙烙	型打楕円、外腹にスス付着、口縁部破片
11	36	金属	簪	銅合金キ、先端がさじ状（耳かき）、折れ曲がっている
12	4	金属	簪	銅合金キ、先端がさじ状（耳かき）、折れ曲がっている
13	62	金属	工具	鉄製品、全体に錆付着、先端を欠損
14	61	石	砾石	砾石、赤褐色、ノコギリ痕あり
15	59	石		石英
16	14	石		水晶
	6	石		石英
	9	石		水晶カ
	11	石		メノウ
	56	石		石英
	57	石		石英
	58	石		石英
	60	石		石英
17	2	ガラス	薬瓶	茶色、透明、気泡なし 胴部に「精力素」、「國民體力改造同志會」のエンボス有り
	8	ガラス	不明	無色、透明
	10	ガラス	不明	淡緑色、透明、気泡なし
	32	ガラス	底部	無色、透明、気泡なし、筒状の体～底部破片、医療関係カ
	37	ガラス	不明	透明、気泡なし
	39	ガラス	不明	透明、気泡なし
	29	動物遺体	貝類	カタツムリの殻カ
	34	動物遺体	貝類	アワビカ
	35	動物遺体	貝類	貝の破片

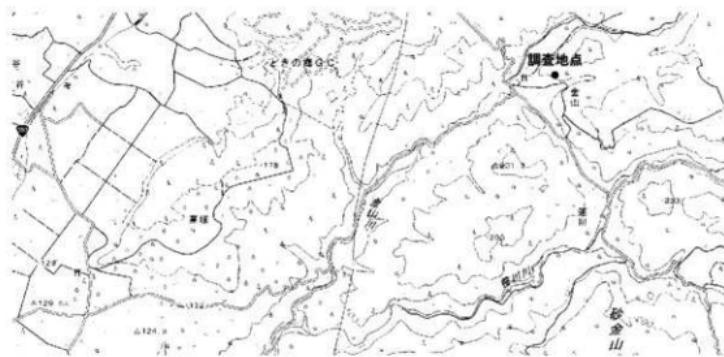
第3表 西三川砂金山跡出土遺物観察表

報告番号	取り上げ番号	種別	器種	計測値 (mm)			技法・文様・色調・備考
				口径	底径	器高	
1	3	磁器	碗			最大厚5	織籠成形、染付、透明釉、口縁部破片
2	7・38	磁器	碗			最大厚6	織籠成形、染付、透明釉、腹部破片、肥前系、近世
3	5	磁器	碗			厚3	透明釉、口縁部破片
4	12	磁器	蓋			厚3	織籠成形、透明釉、染付あり、破片
5	33	磁器	灯明皿	(61)		12	織籠成形、透明釉、口縁部外側タール付着、外面無釉
6	15・16・18・19・20・21 22・23・25・26・28・30	磁器	徳利	[25]	最大幅59	[128]	織籠成形、透明釉、外面に染付・松と鳥の文様 銅板貼付け、胴～底部欠損、胴部内面無釉
7	31	磁器	燭台			[68]	透明釉、脚～底部欠損、脚部内面無釉、針部は鉄質で鶴付着
8	43・52	土器	培塔	(314)		最大厚12	型打織籠成形、外面上にスス付着、口縁部破片、 直径6mmの穴あり
9	53	土器	培塔	(400)		最大厚13	型打織籠成形、内外面上にスス付着、口縁部破片
10	1	土器	培塔			最大厚17	型打織籠成形、口縁部破片
11	36	金属	簪	最大長(172)	最大幅8	最大厚2	銅合金、先端がさじ状(耳かき)、折れ曲がっている
12	4	金属	簪	最大長135	最大幅10	最大厚3	銅合金、先端がさじ状(耳かき)、折れ曲がっている
13	62	金属	工具	長344	幅20	厚4	鉄製品、全体に錆付着、先端を欠損
14	61	石	砥石	最大長21	最大幅46	最大厚8	砥石の破片、赤褐色
15	59	石		最大長40	最大幅36	最大厚30	石英
16	14	石		最大長29	最大幅22	最大厚13	水晶
17	2	ガラス	薬瓶	37	54	130	茶色、透明、気泡なし 胴部に「精力素」「國民體力 改善同志會」のエンボスあり

III 測量・発掘調査の成果

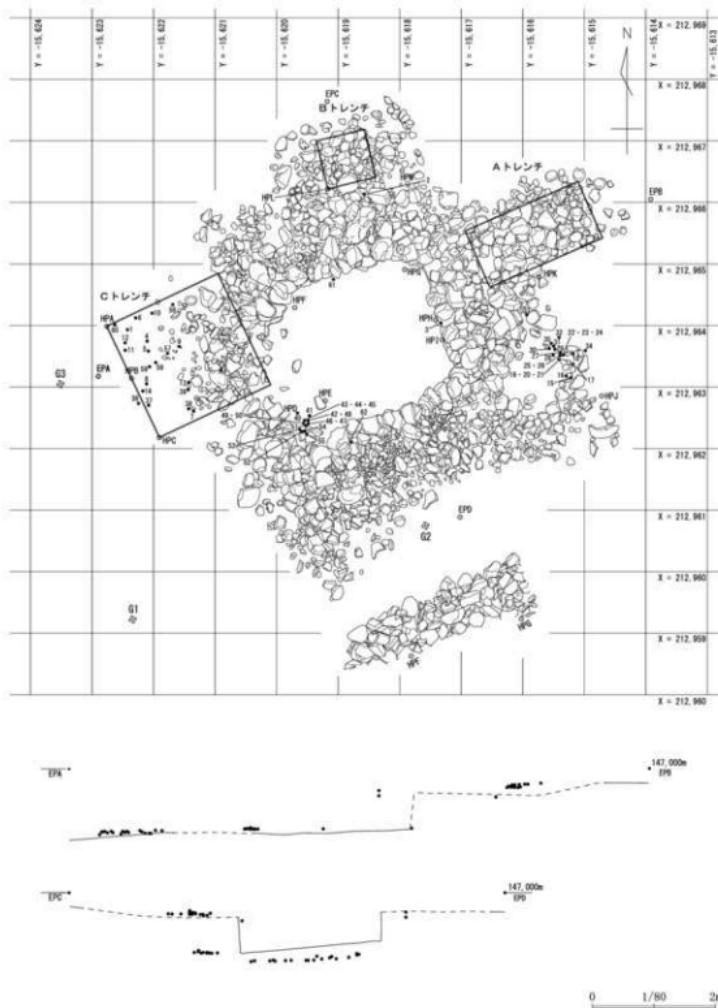


第3図 遺跡の位置



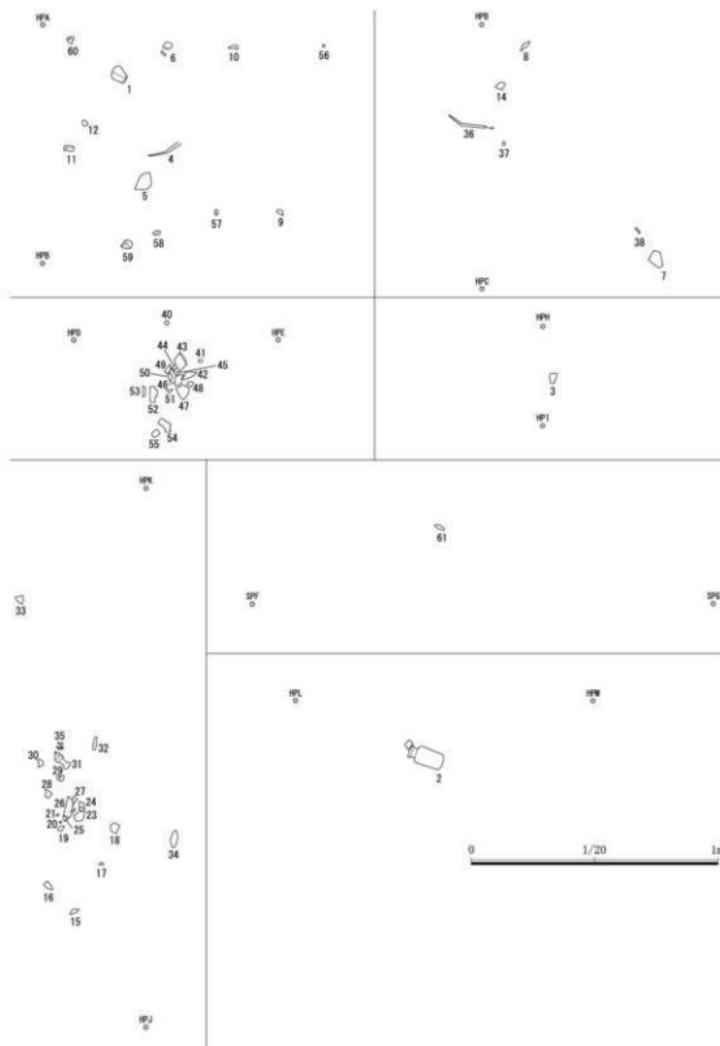
国土地理院地形図（昭和本郷）平成28年11月1日発行1刷 (1/25,000)

第4図 調査地点



第5図 石組遺構平面図・立面図（北壁）・エレベーション・遺物分布図

III 測量・発掘調査の成果



第6図 石組遺構出土遺物微細図

西三川砂金山跡第1次調査のまとめ

西三川砂金山遺跡に関する石組遺構については平成14～16年に佐渡金銀山遺跡調査検討準備会が主体となって分布調査を行っている。この調査では49箇所の石組遺構の存在が確認され、五社屋山・立残山・山居山・虎丸山・鶴鉾山・杉平・影平・牛場・石原などの山々の麓の平坦地に所在しているということがわかった。形態はほぼ方形や長方形、楕円状などであり、小型のものは一辺が約2～3m、大型のものは一辺が7～8m、とくに大型のもので一辺が約10mのものが一ヶ所に数基ずつ固まって存在するという状態であった。また、各石組はそれぞれ頭大くらいの自然石を高さ1m内外で周囲に積み上げ、前面には入口状に積石をしないものが大部分である（佐渡市教育委員会2004）。

上記の分布調査によって確認された石組遺構と、今回調査した石組遺構を比較すると、立地や使用している石の大きさ、前面が入口状で積石をしていないという点は同様であるといえる。形もやや長方形であり、これまで確認された石組遺構と異なる点はない。規模は遺構内部の壁面が約25m、高さが約0.6mで小型だが、調査区全体でさらに遺構の広がりが確認できた。

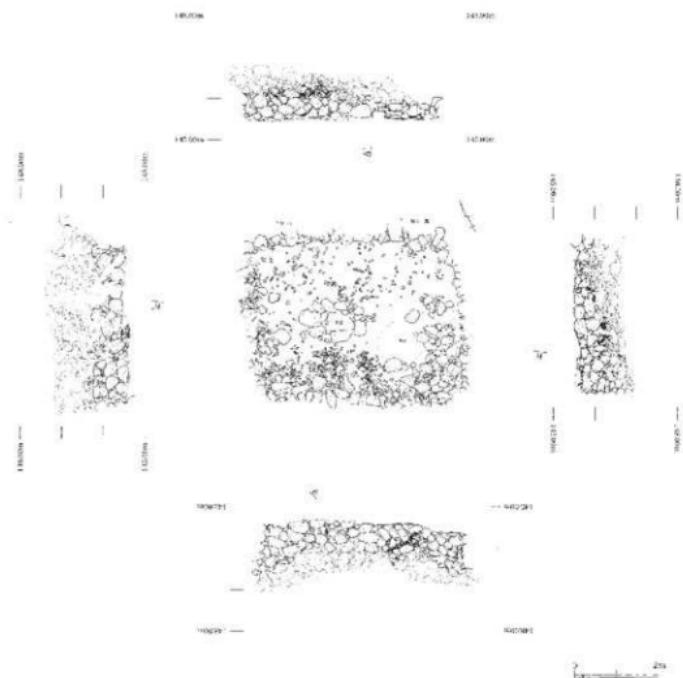
石組遺構の性格については不明なものが多いが、以前から絵巻に表現されている道具類の修理を行う鍛冶小屋や作業場兼住居という指摘に加えて、休憩所や砂金採集道具の保管場所など多くの用途に使われたという意見もある（佐渡市教育委員会2004）。石組遺構の発掘調査は平成14年に1基のみ、本遺跡と同じ笹川集落内の鉄砲場遺跡・砂金江道遺跡の調査で行われた（第7図）。形態は長方形、内壁は最大で4.85m、高さは1.5m前後で出入口部にも0.4mほどの積石が確認された。また、底部から炉状遺構・鉄滓・小須恵器片が出土したため、鍛冶小屋として利用されていたものであると考えられている（シン技術コンサル2004）。

今回の石組遺構の発掘調査では全体で62点の遺物が出土した。調査区全域に遺構が広がり表土の深さが4cm前後であったため、ほとんどの遺物が地表に露出している状態であった。種別でみると培塿の出土が最も多かったが、ほぼ同一個体であると考えられるため、これらを除くと磁器やガラス、石英の出土が主であった。遺物には他にも金属製の簪や貝類の動物遺体などがあり、年代は幕末・近代ごろであると考えられる。

前述の鉄砲場遺跡・砂金江道遺跡の石組遺構と比較すると石組遺構は小型であり、形態および出土遺物の様相が異なるため、鍛冶小屋として使用されていた可能性は低く、休憩所や砂金採集道具の保管場所として利用されていた可能性の方が高いと考えられる。しかし、今回の調査では遺構内部の発掘ができなかったという点に加えて、いまだ砂金山跡に関する石組遺構の発掘調査が2件しか行われていないことから、その用途について断言することは難しいだろう。今後、調査が継続的に行われ、類例が増加することに期待したい。

（山木内香）

III 測量・発掘調査の成果



第7図 鉄砲場遺跡・砂金江道遺跡出土の石組遺構（『鉄砲場遺跡・砂金江道遺跡』2004 第11図より引用）

参考文献

- 小田由美子 2009「第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境 2A 歴史的環境 佐渡島内の鉱山の概要と展開」『佐渡金銀山 カジ屋敷遺跡・せりば遺跡調査報告書：一般県道静平西三川線改良事業発掘調査報告書』佐渡市教育委員会。
- 小菅徹也 2000「佐渡西三川砂金山の総合研究」『金銀山史の研究』高志書院。
- 小林巖雄／神藏勝明／鳥津光夫 2011「4 自然特性（2地質）」『佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観 保存調査報告書』、佐渡市世界遺産推進課、39-53頁。
- 佐渡市教育委員会 2004「西三川砂金山石組構造調査」佐渡市教育委員会。
- 佐渡市教育委員会 2009「佐渡金銀山 カジ屋敷遺跡・せりば遺跡調査報告書：一般県道静平西三川線 改良事業発掘調査報告書」佐渡市教育委員会。
- 佐渡市世界遺産推進課 2011「佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観 保存調査報告書」佐渡市世界遺産推進課。
- 佐渡市世界遺産推進課 2012「佐渡金銀山 西三川砂金山遺跡分布調査報告書」佐渡金銀山遺跡報告書 第16集、佐渡市世界遺産推進課／佐渡市教育委員会／佐渡市。
- シン技術コンサル 2004『鉄砲場遺跡・砂金江道遺跡：一般道静平・西三川線辺地道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』真野町教育委員会。
- 鈴木郁夫 2011「4 自然特性（1地形）」『佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観 保存調査報告書』佐渡市世界遺産推進課、30-38頁。
- 竹内利美／原田伴彦／平山敏治郎 1969「佐渡四民風俗」「日本庶民生活史料集成」第9卷 風俗、三一書房。
- 橋 正隆 1964『川崎村史料編年志－佐渡島中世までのいいたち』上巻、両津市河崎公民館。
- 新潟県 1989「新潟県地質図改訂版」新潟県商工労働衛生部工業振興課。
- 新潟県神職会佐渡支部 1926『佐渡神社誌』新潟県神職会佐渡支部。
- 新潟県立佐渡高等学校同窓会 1985『佐渡国略記』上巻、新潟県立佐渡高等学校同窓会。
- 真野町教育委員会 2004『鉄砲場遺跡・砂金江道遺跡：一般道静平・西三川線辺地道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』真野町教育委員会。
- 真野町史編纂委員会 1976『真野町史』上巻、真野町教育委員会。
- 若林篤男 2012「歴史的環境」『佐渡金銀山 西三川砂金山跡測量分布調査報告書』佐渡金銀山遺跡調査報告書第16集、佐渡市世界遺産推進課。

第2章 新潟県五泉市新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーション旧陸軍閲連施設跡 第1次・第2次発掘調査報告

I 調査の目的と概要

1. 調査の経緯

調査地である新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーション（以下村松ST）の敷地は、明治末期に村松に設置された陸軍の連隊の練兵場に端を発しその後幾つかの曲折を経て現在に至っている。この村松STの概要と敷地の来歴については、第4章で詳述することとし、ここでは調査の経緯について述べる。

新潟大学における村松STを中心とした旧軍用地に関する調査が始まったのは、2014年秋のことである。この年、日本近現代史の卒業論文で村松地域の「軍隊と地域」の関係を扱う学生がおり、筆者はその関係で村松STに何か歴史資料がないか問い合わせを行った。2000年代の日本近現代史研究では「軍隊と地域」研究が活性化しており、これをふまえ村松地域での研究を模索したことが調査の発端であったといえる。

この問い合わせに対して、村松ST職員の青木由利子氏が、村松STの歴史に詳しい方々として、2005年まで村松STにおられた伊藤道秋新潟大学名誉教授、元技術職員の中山昇氏、技術職員の石本光明氏からの聞き取り調査をセットして下さった（2014年10月13日）。この聞き取り調査では録音を行わなかったが、筆者はこの調査で初めて村松ST敷地内の陸軍標柱や塹壕跡と考えられた遺構の存在を伺うと共に、敗戦直後の旧練兵場敷地をめぐる農専の動向などを教えて頂いた。その後青木氏、および長く村松にお住まい同地の歴史に強い关心を有する高井恵美子氏にご協力を頂き、日本近代史ゼミの学生・院生と共に新潟県の新聞である新潟日報で「証言村松の少年通信兵」と題する取材記事を連載されていた鈴木啓弘記者からお話を伺った。

さらにその後も青木氏にご尽力を頂き、村松出身で新潟農専一期生である羽田清五郎氏へのインタビュー調査（2015年6月29日。本報告書20頁以降所収）を実施した。この調査では、羽田氏が1928年村松町出身ということで、戦前の子供の目からみた練兵場の状況について、貴重な証言を得ることができた。特に塹壕の様子については、具体的な深さなどについても触れられている点は重要である。また戦時の飛行場（滑走路）にまつわる施設の様子などについても具体的な証言を得ることができている。羽田氏はまた新潟農専一期生でもあるため、加茂から村松への移転直後の農場の開拓などについても詳細な証言をされており、戦後村松地域における旧軍用地利用を考える上でも示唆に富む。

統いて同じく青木氏にご尽力いただき、村松出身で少年時代に旧練兵場で飛行場（滑走路）建設に従事した経験を有する佐藤峰雄氏へのインタビュー調査（2015年7月9日。本報告書32頁以降所収）を実施した。この調査では、佐藤氏が1932年村松町生まれということで、戦前の射撃場や練兵場などについて証言を得ることができた。また佐藤氏は旧制村松中学校在校時に勤労動員の一環として、1945年に旧練兵場を中心とした地域で実施された飛行場（滑走路）建設作業に従事しており、その際の状況について詳細な証言を行っており、その内容は、今次の考古学的調査と突き合わせ得る重要な情報と考えられる。

その後、新潟大学に引き継がれた後の旧兵舎や農場の状況について、上述の中山氏、石本氏に改めてインタビュー調査をおこなった（2016年4月25日。本報告書46頁以降所収）。このインタビュー調査の際には、中山氏が退職後、別の元技術職員の方から託され村松STに寄贈した「建物配置図」（59頁の写真2）を見ながらインタビューを実施した。この調査の中で同様の図面等はまだ残っているのではないかという話があり、青木氏に調べて頂いたところ、後述のような旧兵舎の利用状況を示した図面や、建物現況写真などが若干見つかった。

このインタビュー調査では、特に旧兵営内の兵舎の利用状況について、新潟大学農学部に引き継がれた後の兵舎の利用状況を具体的に知ることができた。また旧練兵場であった農場部分については、かなり広範な範囲に「塹壕」らしき遺構が存在したことが証言されており、先に触れた羽田氏の証言や、今次の考古学的調査とも重なる重要な情報となっている。

なお戦後の旧兵舎の利用状況については、さらに新潟農専二期生であった山田辰二氏にもインタビュー調査をさせて頂いた（2016年6月3日）。以上の調査で得られた知見については、2016年7月13日から9月25日までの期間に新潟大学旭町学術資料展示館において実施した企画展「新潟大学から考える戦争の記憶—新潟大学に残る資・史料に即して—」で紹介をおこなったほか、2017年の拙稿「新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーションに残る旧陸軍施設関連資料の基礎的検討」（『資料科学研究』14号、2017年）で発表した。その後考古学的調査を待望していたところ、2019年度、2020年度に至り、新潟大学考古学研究室による今次の報告書にまとまる調査が実現した。
（中村 元）

2. 聞き取り調査について

(1) 羽田清五郎氏インタビュー

(文字起こし 野村郁仁・宮島龍志)

日時：2015年6月29日

場所：新潟大学農学部附属科学教育研究センター村松ステーション会議室

参加者：中村元、高井恵美子、青木由利子

備考：羽田清五郎氏は、昭和3（1928）年新潟県中蒲原郡村松町生まれ。幼少期から村松に在所した練兵場で遊んだ経験を有する。また昭和21（1946）年には、新潟県立農林専門学校（新潟農專）の一二期生として、同校の村松の旧陸軍兵営への移転や、旧練兵場の開墾にも立ち会った。その後、新潟大学農学部助手、加茂農林高等学校教諭等を経て現在に至る。

また参加者の一人である高井恵美子氏は、羽田氏と同じく村松町生まれで、昭和19（1944）年に村松町村松国民学校に入学、在学中の1946年5月8日に村松大火で学校が被災し、その後兵営の一角を仮校舎とした時期の学校生活を経験している。

青木由利子氏は、新潟大学農学部附属科学教育研究センター村松ステーション事務職員。

なおインタビュー中の①～⑩については、57頁の第2図を参照。

新潟農專の旧村松兵営移転時の状況について

中村 昭和20年5月に加茂で新潟農專に入学されて、一年くらいですか、加茂に農專があったのは。

羽田 そうです。

中村 こちらへ昭和21年に移ってくるわけですよね。で、その時が、丁度、先生がお書きになつたものなんかを拝見するとこう、村松の大火。

羽田 大火で。丁度21年の…。

高井 5月8日。

羽田 8日ですかね。大火ですね、町中7割から8割焼けましたね。

高井 うん、そうそう。

羽田 大火でした。風が強くてね、しかも5月っていうと春先の乾燥した。

中村 乾燥してますもんね。

羽田 それで、わたしも當時村松にいたんですがね、すごかったです。

中村 そうですか。

羽田 しかもね、夜の火事でしょ？

中村 夜、夕方から？

羽田 夕方から火が出てたんです。それで、7割焼けてしまったんですね。

中村 農専が来たのは秋ごろ？

羽田 秋ごろ。それまではね、ここ、ごった返してました。兵舎側のところをね、小学校が使う、中学が使う、当時できた中学校が使う。いろんなものが使ってね。まあ奪い合いがちでね。建物を。

中村 そうですか。これが、高井さんが丁度いられた時もそのころですけど。

羽田 はい。

旧兵営利用の状況について

中村 学校はこの建物だとどの辺に農専は入られたんです？

羽田 学校本部が、これ本部だったんですね。

中村 そのまま本部として。

羽田 はい。②が、授業する講義室ですね。

中村 なるほどなるほど。

羽田 正面のね、②。ここが、学校の本部でした。

中村 本部。右の将校集会所が講堂で、お使いになつて。

羽田 講堂で。それから、⑨のおっきな建物が、これが講義室。

中村 講義室。

羽田 全部ね。講義室ですわ全部ね。そして、先生方が住んでるところは、そんなかを分割して。

中村 ええ。先生方の宿舎。

羽田 部屋。

中村 ええ。

羽田 教授三名、助教授だの、そういう、まあ、助教授と教授は一緒にいなかったかな、いる人もいたしね。

中村 ええ。

羽田 そんな余計に部屋が無かったもんだから。まあ先生方全体が集まっている、ていうとこじゃなくてね、そういう個室にいたような形に。なんか模様替えて自分で。

中村 なってたんですか。寄宿舎は？

羽田 寄宿舎はね、ここです。(5)。

中村 ああ、そちら側? ⑤? なるほど。じゃあわりと正門の手前の方?

羽田 そうなんです、入り口に近い方使ったんですね。あとねえ、こちらの方はね、中学だろうね、小学校、中学校、それから、通信、⑥の通信講堂でありますよね。

中村 はい。

羽田 ここにね、これも意外だったんですけど、まあ、後で出て来る、この、なんとか碑のとこに書いてあるんです。トラブルみたいな。

中村 はい、ありますよね。

羽田 これ、鉄道教習所があった。

中村 鉄道教習所? はい。

羽田 はい、新津からね、引っ越してきたんですよ。

中村 ええ。

羽田 なんでここに来たかって理由はね、よくわからなかったんだけど、後で聞いたらね、まあ、町にお願いしてね、来たんだそうです。それから、町に許可もらって来たんだそうですけども、当時、鉄道も教習所でいつて、若い人を鉄道員のひと、そこに入れとく寄宿舎みてえなものですね。

中村 ええ。

羽田 そうするとやっぱ食糧難で、当時。だから、畠の練兵場を開墾して、そこで、なんかいろんな生産物つくって、そして、生徒に食べてもらおうって。

中村 あ、なるほど(笑)。

羽田 そういうのがね、魂胆だったらしいよね。

中村 ああ、もうそういうこと込みで、こっち来てるわけですね。

羽田 それが、トラブルのもとになったんですね。

中村 なるほど。

羽田 あのね、小中学校とかね、町のは、全部火災で焼けたもんだから、臨時の入ってた。

中村 ええ、入ってた?

高井 じゃあ、私記憶違うねえ、うん、⑪が中学校で。小学校は⑫?

羽田 女学校もいたよ。

高井 女学校は私分からない。女学校は上だから。

羽田 女学校も居たった。

高井 それでは、⑫のね、この端っこに私たち6年生の時いたはず。

羽田 ああ、そうですか。

高井 うん、私の記憶ではね。⑫の。

羽田 私もね、この⑫ではあんまり入ったことない

からわからないからね。

高井 ⑫のこの端っこにね、私たち4、5、6といたような、なんだけど。1…。3年生の始めに私たち入ったんだけども、その記憶はないけど4、5、6がね、なんとなくわかる。中学校來たときは⑬が完全に中学校。これは、よく覚えていますよね。⑭はね、私ね記憶になつていうかね、入つたこと無いんですね、ナントカ寮とかつて言ってなんだけど。私の小学校これね、もっと他の人に聞いてみようかなとも思うんだけども(笑)。

羽田 私もそっちの方はね、全部郊外だから、どこに何が入ったかよくわからんけども女学校とか中学校とかが来ましたよね。

高井 もちろんそうですよね。女学校もね。

羽田 そしてね、町の中でも焼け出されて困った人が、居るところが無いって人が。

高井 後ろにね、愛宕荘ね。

羽田 うん、ここらにおられたんでねえかな。

中村 練兵場との境目のところに?

羽田 境目のところに。

高井 ここにね、いまでも、なんとなくね。

中村 ええ、ありますね。

羽田 雪中演習場ってあるでしょ?

高井 そこらへんですね。

羽田 ここに、いわゆる、焼け出された人用の、まあ、簡単な、今の流行りのね、災害の。

中村 あ、仮設みたいな。

羽田 仮設住宅。あれをね、町で作ってくれて、そこに住んでた。

高井 愛宕荘と言つて。

中村 愛宕荘。

高井 いま、それもね、なんとなくね、ずっと続いで。

羽田 そういう大きな部屋に入らねってね、入ると間仕切りしなきゃダメでしょ? それでむしろ、そっちに仮設住宅作った方が早いって言って。

中村 ああ、なるほど。あの、体育館の今の、脇のところがそんな感じですけどああいう、あのへんですか?

高井 それが、昔の愛宕荘。

中村 その、あたりですか。

高井 いまも、ずっと名残っていうか。

中村 ええ、ありますよね、ちょっとね。

I 調査の目的と概要

新潟農専での学生生活

中村 それで、こちらに、昭和21年の秋に来られて。

羽田 はあ。

中村 それで、こちらで実習でいうか、あの、勉強もされるし、その、いわゆる農業の、あの・・・。

羽田 ほとんど、勉強しませんでした（笑）。

中村 あ、そうですか（笑）。

羽田 なにしろ、来たばっかでしょ、加茂にできたでしょ？で、加茂に出来てから、いきなり、また、1、2年経たないうちに、またここでしょ？おーで、それでね、机もね、県がやつと作ってくれて、勉強机が、長机が間に合った程度ではある。

中村 あ、なるほど、学校としての施設が。

羽田 学校は、はい、だから、いいこと幸いに、まあ、学校は、勉強はあればから、煙へ出で開拓せい、ってそういうことばっかりで、はい。

中村 そうすると、こちらを開拓してくれ。この練兵場の跡をと。

羽田 そうそう。あと、兵営のまんなかはね、これ全部、練兵場で。

中村 ええ、あ、このなかも？

羽田 これも練兵場だったし、ここは、芝生の練兵場。これは土の、珍みたいなのが、敷いてあったよね。

中村 あ、じゃあこももやっぱり、畳っていうか。

羽田 いや、畳はしなかった。

中村 あ、畳はしなかった？

羽田 グラウンドにした。ここは学校のグラウンドにして、真ん中に、しかし、道路が横切ってるけど、かまわず、グラウンドにして、こっち側・・・。

高井 そうですね、中央にこう走ってたね。

中村 道路ですか？

高井 はい、こうなってた感じだったと思う。

羽田 正面からまっすぐだ。

青木 うん、まっすぐ。

羽田 ⑫に向かってね。

旧練兵場（現村松ST）について

中村 この練兵場側は、今の農場なってるところはどうですか？

高井 ここはわたし来たことないからわからないわね。

羽田 ここらはね・・・そのね・・・あれだな、あのね、射撃場。

中村 あ、射撃場。

羽田 軍の。軍の射撃場で、射撃場っていってもね、ふつうだとね、土壘をつくってあって、ずっとね、そこでもって、大体、標的から30mが一番近いの。

中村 ええ、ほう。

羽田 それから、50m、70mっていって、なんか、2、30mずつ奥へ行って、最後一番遠いのが100m。だから、射撃場の的から、100mずっと延びてた。

中村 延びてるわけですか。

羽田 だから、場所とるんですよ。それが、そこだつたんですね。ここも一画、低かったんでねえかな。

青木 ここは私、記憶ないわねえ。

羽田 それで、射撃場のね、危険な話だけどね、やつてる、100mくらいのところをね、県道が通ってた。この道路が⁽¹⁾。

中村 ええ、ここそうですよね。射撃場のところを通ってる（笑）。

羽田 通ってる。ど真ん中を、通ってるの。

中村 （笑）。

羽田 でもまあ、100mとこからは撃たせなかつたからね、せいぜいで50mですから。

高井 いまの、愛宕中学校のところも、ここ。

羽田 あれが、射撃場の跡だよね。完全に。的のあつたの。

中村 ええ、的があつたんですか。

羽田 土壘があつて、こう土の、そこに的があつたんですよ。

中村 はあ。あ、ここのがま裏つ側あたりにもちょつと土壘がありますけども、それもそうですかね？ここのみちのこっち側のところ、それは違いますかね？

羽田 いやあ、ここは違いますね。

中村 ここは違いますか。

羽田 ここは、まえに、道路側にやぶになってるでしょ？

中村 ええ。

羽田 なんか、稲荷様が。

高井 今もあるみたいなんです。

羽田 ありますか？ある？

青木 ここにあります。

羽田 あの裏ぐらいはね、ほとんどあれですか、松林だった。はい。

高井 今のがま松林になってるところ、昔の・・・。

青木 ここから、丁度、後ろになるから。

羽田 私たちね、これね、子供のときね、練兵場ね、日曜日になると、軍隊が使わないからね、使ってもい

いってことで、風掲げに来たの。

中村 ほう。

羽田 広くて、いいでしょ？

中村 (笑)。

高井 私、こっちは、ほとんどの記憶にないですね。

羽田 そうするとね、みんなね風ね、あのこの風を掲げつつ、お互いに、切り合いするんだわ、風を。

中村 あ、糸ですね (笑)。

羽田 糸のところにね、ガラスの粉をね、ガラスをつぶしてね、ずーっとね、のりで貼り付けて、それで、一部こう印、糸に茶色か色使って。

中村 つけたところですか (笑)。

羽田 それで、こうやって、ぎゅーんって、他の人の風に絡み合わせて。

中村 あ、こうやって (笑)。

羽田 そこ、絡んだら、そこ緩めてやると、すーといて、そのあとガラスなので、相手のがビュッと切れる。

中村 なるほど (笑)。で、切り合いになるわけですね (笑)。

羽田 それがおもしろくてねえ。

青木 やっぱ、男の子ですね。

羽田 うん。んで、また、それ飛ばされるとね、ずーと拾いに、番板越えて向こう側まで拾いに行つたことがあります。

中村 (笑)。

羽田 でも、どこへ飛んだかわかんないよね。

中村 はあ。先生はその、お子さんのころは、そういう土日なんかは、自由に入れたらですか? やっぱり、こっそり入るような感じなんですか?

羽田 いや、その練兵場?

中村 練兵場。ええ。

羽田 練兵場は自由に入れましたよ。

中村 あ、入れたんですか。はあ。

羽田 あの、日曜だとかね、そういう時にはね。

中村 あ、じゃあ、使ってないときは割と?

羽田 開放してました。

中村 ああ、そうですか。へえ。

羽田 そのかわり、射撃場のところはね、柵があつてね入れなかつたです。

中村 ああ、なるほど。

羽田 あそこはやっぱり、弾のね、中には、弾のね。その掘ってね、先ね、掘ってそれなんか商売にしてる人もあつた。

中村 ああ。

羽田 そんなことがあって、掘るとみんな、削られるでしょ? それから、ずっと入れなかつた、有刺鉄線張ってね。

飛行場について

中村 その、芝生だったところの練兵場ってのは、そのあと、開拓されていくんだと思うんですけど、そこつてのは、一時、あの例の、飛行場のようなものがあつたと思うんですけど。

羽田 はいはい。

中村 あれは、先生、ご記憶ありますか?

羽田 あります、はい。

中村 ああ、そうですか。あれは、高校の中、この敷地の中も入つたんですか?

羽田 入つたよ。

中村 ああ、そうですか、ほお。

青木 佐藤先生、の話をもうしましたよね。

高井 でも、使わなかつたって。

青木 いや、使つたんですって。降り立つたんですって。

羽田 降りたね。あの、一回か、なんか飛行機かね。主として、ここじゃなくて、ここは、着陸するとき、愛宕山あるでしょ?

中村 ええ。

羽田 だから、頭を超えて来るから、だから、あんまりすぐ着陸できないんですよ。

中村 ああ、なるほど、なるほど。もうちょっと先になるわけですね。

羽田 もうちょっとね、向こうのね、八幡通(2)つてわかりますか。

中村 兵舎はね、ここが兵舎だと思います。ええ。で、ここが練兵場ですね。

羽田 まあ、大体ね、こういう、関係、こういうことですわ、これが滑走路の。

中村 ああ、はあはあ。あ、じゃあ兵舎の裏あたりまで。

羽田 裏です。

中村 ああ、はあはあ。ああ、なるほど。

羽田 それで、本来道じゃなかつた、これ、全部掘だつたの、ここ。

中村 ええ、ああ。

羽田 煙みんな買取されて、強制的に取り上げられて、滑走路でした。

中村 ああ、なるほど。

I 調査の目的と概要

羽田 んで、こっちも一部ね、ここね、このへんからかな。

中村 入ってたわけですか？

羽田 はい、入ってた。

中村 じゃあこらは、芝生っていうよりも、こう固めてあつた？

羽田 はい、このへんね、一部ね。この辺かな。

高井 茶畠・・・。

中村 じゃあ、ローラーかなんかで、バーンと固めた？

羽田 このへんザートとローラーでプレスされたんです。機械ですね。

中村 ローラーで固める時ってのは、土のまま固めるんですか？それとも砂利かなんか敷くんですか？

羽田 土のまま固めたね。

中村 土のまま固めましたか。

羽田 私が見てた時、そうだった。

高井 すごいですねえ。

青木 歴史ですね。

羽田 そして、わたしのうち、この辺^③なんですよ。このへんに、滑走路から、ザートとまたね、畑をね畠敷で、畑のところにね、幅30mくらいのね、誘導道路をつくって。飛行機を隠すの。部品とかいろんなものを、飛行機もそっちの方隠してカモフラージュするの、そういうのが、やたらと作られたの。

中村 ああ、そうですか。じゃあ先生のお宅のほうにも？

羽田 うちの裏にもあったですよ。

中村 じゃあ結構幅の広い道路、バーンとこうまっすぐな道？

羽田 いや、まっすぐじゃなくて、こう、あれはただゆっくり。

中村 なるほど。

羽田 こう、飛行機がゆっくり行くから、そんな飛び立つ直線じゃなくても良い。

中村 直線じゃなくてもいいわけですね。

羽田 隠すためやから、あんまり広い道やすぐわかるでしょ？

中村 なるほど。じゃあ、僕等、山の方に作ったのかと思ってたんですけど、そうじゃなくて。

羽田 うん、平地。

中村 のほうに、そういうもの作ったわけですか。はあ。

高井 だって飛行機は隠しようがないもんね。

羽田 大体、飛行機の部品だね。

高井 石本さんの記憶にも聞いてみますか。

青木 そうですね、石本さんね、あれなんですよね、そうなんです、石本さんなんか言ってましたもんね。

高井 鳥居から、鳥居のとこあるでしょ、そこから、まっすぐ行った、突き当りの山のところに愛宕山の所に、村松少年通信兵学校の生徒だった大口光威さんたちが作った、部品を隠すところ、つくった穴があつたって、言うんですけど、先生お分かりになりますか？

羽田 それはわからない。

高井 部品工場があるって言ってましたよね。それで、そのね、飛行機の木製の部品を作つてたって、そんな話をしたね。

羽田 それもわからない。あのね、愛宕山には、ずいぶん穴があるの、横穴が。

高井 穴がね、それがなんなのか。

羽田 それをね、人の、私は、当事者から聞いたわけじゃないから分からんけども、想像するとね、通信学校でのができたの、ね、終戦の前に。

中村 ええ、ありますよね。

羽田 その、通信学校の生徒さんが、穴の中から通信するときに、やっぱ、ふつうの平地だととかとは、違うでしょ、条件が、電波の関係でね。そこで、穴を掘つてそこで通信の練習したり、いろんなことをやつたんだそうです。その時の穴だつていう人もありますけどね。飛行機の部品を隠したんじゃないの。傾斜があるから、隠すとなると、なんかまたね坂道登ったり、しなきゃいけないでしょ？

羽田 機械隠したのはね、私の、裏まで来たもの。

中村 はあ。先生のお宅の方までくるっていうことは、かなり長い。

羽田 かなりね、長い誘導路とみんな作つて、簡単ですものあれ、見てるとね、茶だけ機械で引っこ抜いてさ。

中村 そうですか（笑）。

羽田 そのうえ、ローラーでバーッとあの、ブルで平らにザートとしてて、そのうえ（転圧？）してれば、それで終わりだもん。

高井 この辺、全部茶畠だったわけですね、これ全部ね。

羽田 昔は、この練兵場ができた当時、明治30年ごろは、茶畠だった、全部ね。

中村 こここの土地って、元々はどなたかもってたの買ひ上げっていうか、そういうかたちですか。

羽田 そうそうそう、はいはい。町をあげて、軍隊が

来ること、今みたいに反対って言わなくて、賛成したんじよ。今だとどうしてね、軍閥係、自衛隊なんて来たなんつうのも反対でしょ、みんなね。終戦当時ね、ここ農学部が来たでしょ、その前もね、なんに使うかってことで、問題になってすごかったんです役場で。

高井 一回、自衛隊の話も、あったんですよね。

羽田 そこに、日農が入ってきて。

中村 あ、組合の。農林組合。

羽田 日本農民組合が入ってきて、その、軍隊を、こういうところにね、また、軍隊のあれをね、教育施設なら良いけども、最初は役場はね、自衛隊を引こうと思ったの、陸上自衛隊を連れてこうと思ったの。そしたら、反対が、村松の人が反対が多くてね、辞めざるを得なくて、それで、農学部が来るって、あー農専が来るつつたら、学校なら良いだろうということで、それで、許可なった。

中村 なるほど。

戦後村松の旧軍用地をめぐって

青木 そうですね、しかも、その農学部になった後もなんか一回危ないことがあったんですか。近藤亨先生のこの本によるとなんか。

羽田 それはね、それが碑の話⁽⁴⁾と同じ、碑の中にある。

中村ええ、危機の話ですか。

羽田記念碑の中にある、危機。

中村ありますね、それこそ、「幾多の困難、追害ヲ突破克服」っていう、是非、この辺もお話を伺いたいんですけども。

羽田まあ、ちょっとオーバーな、表現で書いてあるんですけど、これは、鉄道教習所との問題なんです。あれは、手で開墾したでしょ。

中村ええ。

羽田何も機械もないし、それで開墾して、先生方もでて、みんな、汗水出して、流して開墾して、それみろというばかりに、鉄道教習所がでっかい、ファーガソンなのかな、あのフォードのトラクター持ってきて、バーッと機械で開墾し始めたの、そしたら、私どもがやる予定の、図面だけつくって、そしてここは、農専の土地で、ここ、開墾して、何号の畑にするって、なんとかって、設計図まで作ってね、開墾を始めたの、私どもが開墾しないところをね、手でしたって、知れたもんじよ、進む程度は、ねえ。それを機械もって

きてバーッとしたわね、元々、茶畠を埋めた、塑塙掘つたりして、少しは、平らにはなってなかたけども、そこにトラクターで開墾したの、いきなり。我々もそういうの初めて見るわけ。

中村ええ。そんな大規模にダーッとやるのを？

羽田そうそう。いや、トラクターっての聞いてたけどね、あれはアメリカとか、海外の、でかい農場でね、やるんだと。

中村あ、そういうとこの。

羽田日本でも、青森あたりの、開拓地なんかでは、岩手もやってましたけど、やるのはあっても、ごく限られたところだったでしょ。しかも、みんな、外国製品でしょ、国産なんてなかったもの、トラクターなんで。

中村そうですよね。アメリカの、会社とか。

羽田ファーガソンとかフォードとかね、そういう会社の、それが来て、そうやったもんでしょ、と、みると内に開墾されてくじゃないですか。

中村なるほど（笑）。

羽田我々、農専の生徒がね、一ヶ月かけて開墾したことなんか、一時間でやっちゃう。しかも深く。すげーもんな。

中村あ、なるほど。掘れるわけですよね。

羽田いや、あのころはね、開墾ていうのは、いわゆる、ロータリーでないんです。ロータリーで。

中村あ、じゃないですか。

羽田はあ、勘で。

中村ええ、あ、追っかけて、ガーッと掘るわけですか。

羽田そう、ずっと、土をひっくり返していく感じ。

中村じゃあ、その、茶畠に埋めてあったのなんかも、みんな、掘れるわけですね。

羽田はあ。下からグーっと持ち上げて。すごい力だもんね。

中村これ、どんどんじゃあ・・・。

羽田それでね、やったもんだから、向こうはそれでやってきたでしょ。だから、だんだん、鉄道の教習所が、やつてくところの面積が増えてくわけ。我々が別にしたところは、どんどんやられてしまって、そうすつと話がね、話が違うじゃねえかって、いうことで、いやいや、ちゃんと町の許可得ていると、いうことなんで、んで町に言うたら、それは困るなって言ってね、トラブルがあったの、町を挟んで。

中村町、間に挟まっちゃって、こう農専と。

羽田それが、これなんですよ。

I 調査の目的と概要

中村 ああ、この文章の、意味なんですね。

羽田 丹羽さん⁽²⁾が作ったのね。ちょっとオーバーだけどね。

中村 (笑)。はあ。他にもあれなんですか、ここ耕してたのは、基本は農専と、教習所だけども、他のいわゆる普通の人なんかも入ってきてたんですか?

羽田 いや、入ってきません。

中村 入ってきてないんですか、そうですか。

羽田 はい。

中村 じゃあ、もうこの組織が、両方がこう作っちゃうような形になるわけですね。

羽田 そうそう。まず、鉄道は大きいのね、日本国鉄ですからね。かなり大きい力持ってるし。はい。

中村 そうですよね、で、そんな機械も。

羽田 機械も自由だしね。

中村 それで、実際、鉄道教習所にいっぱい掘られちゃうわけですよね。

羽田 はい、取られて。はい。

中村 それで、農専の方はその後、どういう風に回復したんですか。

羽田 いや、話し合いでね、これは一時ね、自分達はここに長くいるんでねえんだと、そういう鉄道教習所をそのうち作って、また別の所に作って、そして、将来養成するんだから、ここは永久的で無いから、その少しの間だから勘弁してくれという。畑作っていくのに、ひとつこういう話になつた、最後。

中村 なるほど。そう言って落ち着いたわけですか(笑)。なるほど(笑)。

羽田 それで、全部いまこうある畑、手で開墾するなんて大変な話でしょ、それが、半分以上、トラクターでやってくれた。

青木 開墾してくれた。

羽田 それが、まあ、今度はね、役場でなくてねえ、県も中に入つてもらって、新潟県立ですから、ここね、だから、県も中に入つてもらって、そして、あの県の関係者と農専の関係者と、話し合いで、鉄道の教習所と話し合いで、初めはめだめ、なんてね、鉄道教習所、いばつてね、そういうこと言ったけども、やっぱ話し合ひすればわかってくるものだね。

青木 いや、苦労されたんですね。

羽田 それがね、一時ね、生徒が騒ぎ出してね。

中村 ええ、生徒が?

羽田 俺たちの土地を、みんな、予定地を、みんな、鉄道取つてしまつて言つてね。

中村 ああ、なるほど、なるほど。

羽田 内容よくわからんでしょ。それで、怒り出して、それで大分ね、いざこざあったの。いざこざでは、そんなあれだけね。

青木 先生は何歳ごろの時ですか? 教師になってからですか?

羽田 いやいや、私はね、ここ一回卒業生だから、23年卒ですわ。

中村 ああ、じゃあまさに丁度、こちらに。

羽田 はい、そして、こっちきて、まもなくですから、丁度、23年ですからね、21歳くらいのころかね、20歳が21歳の時ですよ。

羽田 そういう速中が来たもんでしょうか?

中村 ああ、その騒ぎ出して、あの、怒る対象はやっぱり先生に向かうんですか、それとも、教習所‥‥。

羽田 教習所。先生も困るもの。先生もみんなね、農専のね、県立農専の土地だと言つてね、与えられて、ここを農場で作つてください、て言う、言い方で來たのが、トラクターが来て、よその者が、鉄道がじゃんじゃん、作つて、農場作つてるということで、これは、話が違うじゃねえかということで。

中村 向こう(鉄道教習所)も若い人たちがいるわけですもんね。

羽田 向こうも若い人いる。でも向こうは若い人がこう起こそんじゃなくして。

中村 機械でやるだけだから(笑)。

羽田 あのとき、初めて、機械の魅力ってのはね、生徒はみんな分かたし、先生方もわかつたろうね。まあ、あれだけの力があるってことはね、あのトラクターはね。いま、常識なっていますけどね。

旧練兵場敷地の整備について

中村 ええ。この練兵場の中は、耕したところは、芝もあったと思うんですけど。

羽田 ありました。

中村 それ以外にこう、整備というか、ちょっとこう、掘ったような跡があるとこもありました?

羽田 はい、ありましたよ。

中村 こう溝みたいのが?

羽田 いや、整備で。

中村 整備?

羽田 こここのね。

中村 深いですか?

羽田 1mね60か70くらい深さある。深いところはね。

浅いところは1mくらいだけどね。そういうのがありました。

中村 そうですか。結構こう、くねくねしててるような感じですか。

羽田 はい、はい。

中村 今もその裏あたりにちょっと、そんなようなのがね。

羽田 ありますか。

中村 あるんですね。

羽田 あー珍しいですね。

中村 ええ。あの、林の中ですけども。

羽田 ああ、塗壕って。

中村 ええ、ああ、そうですか。

羽田 子供の時はね、よくね、遊びに来てね。日曜日になるとね、行っても良いでしょ、遊んでもね。そうなると塗壕の中に入ってかくれんぼしたりして、かけっこしたりして遊んだもんですね。そして、芝生には全部、野芝が、敷いて植えたからね、軍隊はね。だけどだんだん手入れが悪くなるとね、いろいろなすきとか、それからチガヤとかね、こういう植物が生えてきて、そして、寝そべってる時、寝てるとね、先がよくみえねえくらい、こう草がだんだん。

中村 高くなつて?

羽田 はい、軍隊がしおちゅう使ってるから、あまり伸びないけども、だんだん雑草がね、増えてきて。

中村 先生も23年に卒業されて、農専があったのは26年で、農学部なつて、河渡の方に行っちゃいますよね。

羽田 はい。

中村 そのあとこのちらは、人数が減るから、今までよりもちょっと規模は小さくなる?

羽田 いや、それがね、農学部なつてからはね、すぐもう、農専の時から、終わりころからやっぽり、まだ、日本もねトラクター今度は作り始めてね、東芝、芝浦って言ったね。

中村 ああ、なるほど。

羽田 芝浦のね、機械を入れてね、ここ。

中村 ああ、なるほど、なるほど。じゃあ、新潟大学の方になつてからは。

羽田 なつてからは、機械でやりました。その当時、私も、助手で残った時にね。

中村 はい、いらっしゃった。

羽田 はい。最初、牛でね、牛耕ってのをどんなものかやってみようって言ってね、農夫の人にね、お願ひ

して、牛でね、牛は倒つてましたからね、牛でこうやつたらね、いや、あの、傾斜がね、働つてのはあるでしょ。

中村 はい。

羽田 あれの、傾斜によって深くすると、バーツで入っちゃうの、そうすると、牛が動けなくなるの、そのまえに、もう、腕木がこうあったのが、バーンと折れることありましたけど。そして、叱られましたけど。素人がするなって言って。

中村 (笑)。

羽田 牛が氣の毒だって。毎回毎回・・・。

青木 やっぱ、加減があるんですね。

羽田 やっぱり、慣れねえとね、一定の勘の角度が、土質によってみんなそれぞれ変わるんですよね。田んぼでもううですよね。今ね。まあ、牛なんて今勘なんて無いからね、今、田んぼいきなりトラクターで、サイド兼ねたロータリーでしょ昔はみんなこうやって土を反転しながらやって、そのうえにまた今度はもう一回ロータリーかける。

高井 牛種のホルスタインで、牛乳用だったんですか、それともそうじゃなくて農耕用とか?

羽田 農耕用が二匹ね、二頭いましたよ。

中村 いたんですか。

青木 農耕用だったんですね。

羽田 二頭いましたよ、赤いの。黒でなくてね、赤牛がね。

高井 ねえ、今はもう、ほんと、売るために。

中村 そうですね。

高井 ホルスタインんですけど。

羽田 今はねえ、まあ、赤牛なんてのは居ないわね。ほとんどが、黒くなつたでしょ、和牛は。

中村 そうですね。丁度その、26年、碑をお作りになったときは、あの向こうの、それこそ、今ヒマラヤ杉がある。

羽田 こっちですからね。こっちが、あれでしょ。

中村 これは、学校の。

羽田 こっちはこの、練兵場って書いてあるでしょ。ここからずっと道路を挟んでずっと練兵場でしょ。

中村 ええ。

羽田 その、道路に出たところですわ。

中村 あ、出たところに

羽田 道路から越えたところに、農耕側の方に作ったんですね。

中村 はあはあ。あの、移もその時に植えたんですか、

I 調査の目的と概要

ヒマラヤ杉って二本。

羽田 そうです、そうそうそう。二本あるでしょ？

中村 あ、そうですか。ええ。

羽田 ヒマラヤ杉を両端に植えてね、それで真ん中に、これを、挟むようにして。

中村 ええ。あ、それであったわけですか。あの、ナンキンハゼが一個手前にありましたけど、あれは、その前からあるんですか？

羽田 その前から、あったはずですね。

中村 ああ、あるんですか。

羽田 いや、ナンキンハゼは植えたんですわ。

中村 植えたんですか。

羽田 植えた。

中村 あれも、そんなにずっと前からあるわけじゃなくて。

羽田 はい。

中村 あれは、農専が来てから植えたもんですか。

新潟農専農場碑について

羽田 これもね、苦労したんですわ。ええ、これもね、碑。

中村 ありましたね、あの、そこにあった、日露戦争の。

羽田 そうそう。村松の役場にお願いに行ってね、愛宕山に日露戦争の記念碑がいっぱいあったの、あっちこっちに。終戦になつたらいらしないじゃないかと、我々こういうの欲しいから、ただでくれって言って。もらつてきて、それで、町の。

高井 石屋さん。

羽田 石屋さんにたのんで、削ってもらって、こういう、丹羽、前の校長からね、碑の全面と裏面と右に、書いてもらって、そして、それを、だから、これはいつたん削ってまた作ったから、薄くなつての、そうでしょ？

中村 ええ、そんなにね、あれですよね、厚くないでしょね。

羽田 厚くないでしょ。このくらいの高さだとね、相当、しかも厚いはずなんですよ。これ、薄っぺらな記念碑で。でも、大丈夫って言うからね、記念碑で力がかかるんでねえから、置いくだけだから大丈夫ですよ、なんて石屋が言うから。それで。

中村 ねえ、今もそちらにありますけどね。色々伺うとね、いろんなことがわかつて、助かります。

羽田 いやいや。苦労したから、よくわかるんですよ。

高井 いやあ、ねえ。

敗戦後の旧兵舎の利用・米軍駐留時の記憶

羽田 で、こんなところでね。ここもね、寄宿舎ですね、寮。

中村 あ、そちらもですか。

羽田 ⑤ね。

中村 ええ、⑤も寮。

羽田 これ、寮になった。

中村 ええ。

羽田 で、知新寮って言ったんですよ。

中村 ほう、どういう字ですか、知新は？

羽田 知る、新しい。

中村 知る、新しい。温故知新の、知新ですか？

羽田 あ、そうですね、温故知新の知新。

中村 これで、ここ農専時代は、お使いになってて、農学部なって、農学部は河渡移っちゃいますよね。

羽田 はい。

中村 それからも、やはり、しばらくはこちら、使つてゐるわけですか？

羽田 そうですね、はい。

中村 これは、今まで通り、使えてたというか。

羽田 使われたけど、建物はね、まず、農専が来てから、まもなく、来る前だったかな、それちょっとはつきり、日にちわかりませんけどね。

中村 ええ。

羽田 この、⑥の通信講堂って書いてあるでしょ。

中村 ええ。

羽田 ここにもね、建物があつてね、あ、こっちに、こっちに入つたんですね寄宿舎は。

中村 あ、そうですか。

羽田 うん、⑥だ。で、⑥てのはね、私どもが入る前には、焼けたんですよ、これ。

中村 あ、焼けた？

羽田 うん。火災を起こした。ていうのはね、進駐軍がね、来て、ここへ来て、管理したの、一時。

中村 はい、なるほど。

羽田 兵舎を。

中村 ええ。

羽田 そのときに、連中が、木造だから、そういうの持つてきて、火を焚いたもんだから、ストーブ。それで、燃やしてしまったの。

中村 ああ。

羽田 この一棟ね、二階建て。

中村 あ、じゃあこの手前側の一棟、その時に、焼け

ちやつたわけですか。

羽田 焼けたの。その後ろにね、防火用水があったの、それだけ残って、そこへ、中の品物みんな、入れたの。そしたら、その中にね、缶詰がいっぱいあったっていうことで、寄宿舎の生徒がね、これまあ、潜ってね、それを拾ってね、食ったなんて話がありますけど(笑)。私はそれを見聞いたんだけどね(笑)。あれ、深かった、水深ね。水深3mくらいあったかな。

中村 そんな深い防火用水があったんですか。

羽田 これがね、ことこね、ここにあったんです。

中村 やっぱり、弾薬庫の傍にあったわけですか。

羽田 はい、こっちの。あ、貯水槽で書いてありますね。

中村 はいはい、ありますね。

羽田 そして、私たち、第一回の、最初にね、終戦なってから、この兵舎に、民間人が入ったの、私とね、役場の人と、それから、もうひとり、もうひとり誰だったかな、三人ですよ。

中村ええ。

羽田 そんで、来てね、ここが、今度は、こういう風に上がってるから、下見しようっていって、俺は、村松だから、知ってるだろから、来いなんつってね。

中村 ああ、なるほど。

羽田 言われて、私も一緒に来たのに、その前は、終戦なって直ちに、8月なって終戦でしょ?

中村ええ。

羽田 それからね、9月ごろね、ジープで、アメリカの兵隊が来た。占領っていうかね、建物と兵舎の維持管理をやるんでしょう。まず、来ました、武器が隠れてないかとかね、いろんなこと調べた。

中村なるほど。

羽田 そんときね、やったらと銃弾が転がってるんですわ、小銃の弾がね。ルーズなもんだなって思ってね、日本なんか、どうしてね、弾一発兵隊さんが無くして、なんか罰則くうろう?

中村 ああ、なるほど。

羽田 ごろごろしてたですよ。

中村 ああ、先生、下見に入られたのって、昭和21年ですか、20年?

羽田 うーんとね、20年だね。火事になる前だから。

中村 その米兵が居て、その居なくなった後くらいに。

羽田 はい、そういう話があったからね、案内しなきゃいけなくてね、まあ、建物の案内は私分からないんだ

けれども、場所はね、案内したですよ。その時。

中村 その時は、じゃあ、もうこの中は米軍も居なくて、がらんどうですか?

羽田 がらんどう。

中村 ああ、そうですか。

羽田 だけど、バリケードで入らないようにしてありましたけどね。

中村 ああ、なるほど。

羽田 それから、農専が入る前にね、全部こんなかの軍のものは、軍が来て、村松から作業員を徵募っていうか出していただいて、そして、軍隊の品物全部この練兵場のところですね、裏へもっていって焼き払ったの。

中村 ああ、そうですか。

羽田 石油かけてね。すごかったですね。

高井 先生、なんか好きなものを持ってけっていうのは無かったですか?

羽田 それですね、そんなこと、なかったんですけど。

青木 そういうの無かったですか。

羽田 うん。それをねやったときには、なんでもかんでも焼いたでしょ。(笑)。ね、その中に、いろんな軍の中でもね、事務的なものも、書簡もあったんですよ。

中村 あるってことでしょうね。

羽田 私は、なんか良いもんねえかって、こんなん持つてけってなんて言われてさ、広辞苑なんて、こんな厚いの、昔ね。辞書もらってきた。あの人はね、いや、毛布持つてたりね、それからね今度は町民がね、焼いてるところいうとこ来ると、くれるって言うから、みんな町民がワーウーーって来てね、練兵場のところ、ワーウーってきてね、俺が農専入る前ですよ。奪い合いでね、持つてたって。そしたら、あまり、今度は人がくるんで、アメリカ人怒ってね、銃口向けて、撃つぞって言ったって。それでもね、燃えてる中飛び込んで、持つてたって、あさましい話ですよね。それみんな写真撮られてるんだわ、アメリカに、本国に送られてるんじゃないかな。子供は子供で、みんなみすばらしい格好して、ガムもらったり、チョコレートもらったりして(笑)。

高井 いや、うちの親が、これ、どこから買ってきたんだって言って、私ね、今見ますと、通信兵のね、箱、そこに通信のなんかが、入ってるんでねえかなっていうような箱がね、二つあるんですよね。まあ通信兵の人が見なるのが、一目瞭然で分かるんですけど。

羽田 いや、投げて燃やすにはね、欲しいものみんな、

I 調査の目的と概要

向こうはね。

高井 だから、その時、もろてきたのかな。

羽田 一括して、全部、石油かけて燃やした。毛布なんてね、東のままね、燃やした。結束してあるまま。

中村 そうすると、あれですが、昭和20年の、9月以降のどこかで、それをもう・・・。

羽田 おう。

旧兵舎に居住していた人々について

高井 それと、もうひとつ、お聞きしたいんだけどどね、私の同級生にね、お父さんがこら辺に住んでたんですね、Yさん?って言ってね、うーんと、新田町の人。わかりますか?

羽田 わかる。

高井 私たちはね、カズコさんという人がね、ここに住んでらしたの、どこの寮だかは知らないけど、やっぱ居なしたんですね。

羽田 農専のね、事務職員の中にね、居なったわ。Yって人。その人だろうと思うんだ。それで、このなんか、中に住んでなった。

青木 こら辺に住んでいた?

羽田 住んでたね。

中村 さっき先生もおっしゃってましたけど、学校の先生も住んでる方もいたわけでもんね?

羽田 先生はね、ええ、②の学校本部ってあるでしょ?

中村 はい。

羽田 これが一階がね、事務室。でもね、学校事務なんてそんなおっきい部屋いらねんだわ、一部屋あれば、たくさんのことできるもんね。それで、あの、空き地にね、空いた部屋にね、みんな、先生方ね、みんな所持持って、住んでた。

中村 なるほど。

羽田 でもな、年取った先生呼ばなかつた、来られなかつたから、みんなね、若い先生が。

中村 若い先生が多かった?

羽田 ああ、二人ぐらいのね、ペアの先生が多かった。中村 なるほど。

羽田 俺らのころね、あの先生とかや、遊びに行くと、まあ・・・。

青木 ごちそう?

羽田 ごちそうが出るからって言って(笑)。

中村 なるほど(笑)。

羽田 そうすと、先生方も逃げるから、荒らし、先生方の部屋荒らしみたいなもん(笑)。なんにも、無

い時代だから。

高井 先生って何人ぐらい居られたんですか?

羽田 いっぱい、居ましたよ。うん。最初は少なかつたけどね、若い先生がね、こっち来てからね、呼んだからね、みんなね丹羽さん、校長さんがね。

高井 なるほどね。初代の校長先生ね・・・。

ふたたび旧練兵場敷地について

中村 ここ、その、耕される時、農専時代ですね、あの、最初芝生で、一部は飛行場のあれで、固めたりしたと思うんですけど、やっぱり、砲弾とか、軍隊の関係のものも出できたりするんですか。

羽田 いや、ほとんど無かった。

中村 無いですか、ああ、そうですか。

羽田 昔は、嚴重で、砲弾をそこへ、捨ててくことは、そういうことは、絶対にさせなかつたですよ。

中村 ああ、そうですか。

羽田 なんかは、人の話だと軍隊だとね、あの、鉄砲に刺すでしょ、銃剣みたいな先あれでもね、ケースをケースは体から、入ってないときはさ、それをね、匍匐前身なんてこうやって、手で這うようにして前进する、その時に体重かかると、あそこの上から、それになると(聞き取れず) そうすとね、ものすごい怒られたそですよ、ビンタ喰ってね。

中村 ああ。

羽田 陛下のものを、なんだぞんざいにしてってこういう形で、ましてや、弾なんて無くしてたらね、もともと、演習で使うのは、実弾は使いませんし、空砲だろうけどさ、それでも、空砲だって使った後は、必ずね、その数、数えてね。

中村 ほお。

羽田 出させられるそうです。

中村 へえ。

羽田 私は軍隊に入った経験ないけどね。

中村 あ、じゃあ・・・。

羽田 だから、そんなの持つてませんわ。

中村 無いんですか。じゃあ、基本的には、きれいなもんだってか、そのそういう。

羽田 中は、ま、昔の茶烟の中ですか。はい。

中村 茶烟の跡、ああ、なるほど。

羽田 ただ、あの壇壝掘った時に、石ころが出たのが、やっぱりそういうところに流れこんだりして、で石ころはいっぱいあった。

中村 はあはあ、なるほど。

羽田 もともとここは、いしづねっていうところでね。

中村 あ、地名そうですよね。

羽田 地名。荒れ地で、河原の石みたいのがいっぱいあって、不毛の地で言われるところが、そね、って言うんだって。

高井 でも、ここ良い土なんですよ。

羽田 まあ、全体はさ、石曾根地区ってのはそういう地区なんだそうです。大体曾根という地区は。

中村 ええ、ああ、場所、名前、地名。

羽田 あちこちにあります、そね、がつくのね。

高井 ありますね。

羽田 荒れ地の、ことを言うんだって。

中村 ここ、その戦後、例えば、元の土地を持ってた人とかってのは、返せてことはあんまり無かったんですね？

羽田 やっぱり、それは、代金払ったんじゃ、ないでしょうか。

中村 ああ、お金払って。

羽田 そういう回答が無いとこ見るとね、全部国が買収したんじゃないですかね。

中村 あ、きれいにやったんですかね、権利関係は。

羽田 国が欲しいって来て、役場でじゃあってことで、みんな、個人で交渉して役場が交渉して、ねえ、一反いくらって言う形で買い上げたんじゃないですかね。

中村 なるほど。

羽田 まあ、明治30年の話ですからねえ。

中村 そうですよね。

高井 そうですよね。明治30年。

中村 いやでもね、今日、このね、農專のところのところ、ほんとよくわかりました。この、お話を伺って。なぜ、たとえば、それこそ、昔の通信兵とか、その前、それこそ、三十連隊が居たと思うんですけど。あるけれども、ようするに軍隊関係のものが少ないなって印象があったんですね、それはさっきのお話にもあった通り米軍来た後で燃やしたりって、っていうのをはっきりわかりましたし。

羽田 うん、燃やした。米兵はろくな事しないね。

中村 (笑)。

羽田 建物まるまる燃やしたりさ。まあ、そうすると、中身の設備もね、みんな燃やしたり。

高井 でも、よくこれ残りましたね。ここのは。

羽田 何？

高井 この建物は良く残りましたね。

羽田 うん。

中村 ね、さっきの話だとここは⑤が木で燃えちゃって、で、寄宿舎は。

羽田 じゃあ、そっちです、となり。

中村 ⑥？

羽田 はい。

中村 あの、教習所はそうすると、どこになりますか、鉄道教習所が居たところは。

羽田 鉄道教習所が居たところはね、ちょっと待ってくださいよ、やっぱそこ、この辺だったな。

中村 ここらね。

羽田 その、鉄道教習所が行ってから、寮が出来たんですね。

中村 ああ、そうですか。じゃあ、鉄道教習所の後に、寮が入ったわけですね。

羽田 そうですね。

中村 ああ、なるほど。

羽田 最初の寮はね、こっちのほうに来たんでねえかな、こっちのほうに、居たんでなかつたかな。

中村 ああ、ここに。ああ、ほんとだ。ああ、わかりました。ありがとうございます。鉄道教習所は年ごろまで居たんですね、こちらには。

羽田 3年ぐらいいましたね。

中村 ああ、そうですか。

羽田 はい。私が卒業するころ、引き上げるんでねえかなって話しましたから。

中村 あ、そうですか、もう、そういう話出てて。

羽田 最初は私、23年ですから、3年にまだ居ましたからね、24、25年行ったんでないでしょうかね。

中村 居なくなつた。

羽田 はい。そして新津に立派な場所を作つて。

中村 なるほど。

羽田 あそこのね、あの無線区だか、あの立派な土地を使って。

中村 ええ (笑)。

羽田 あるでしょ？

中村 ありますね、新津の鉄道。

羽田 昔は鉄道員って、やっぱりあれなんかね。

高井 良かった。

羽田 旧制中学校でなくとも、入れたのかね。入れたかもしれませんよね。

高井 そこから勉強して、事務の方なんてことも、あるんでしょうかね。

羽田 あれ、あの、教習所ってのはほとんど、鉄道のあれでしょう、保線とあと機関区の人たちの、養成

I 調査の目的と概要

所でしょうね。だから、ここで、小さい時、若い時ね
基本的にこと習って、教習所はね、交通に関するね。

中村 はい。

羽田 鉄道に関するの習って。そして、新津行って、
また、ちょっとそこで現場講習やって、それから、配
属されたんじゃないでしょうかね。だから、鉄道教習所
の人たちも、ここへ来たとき、あんまり見ませんで
したよ、トラクターを動かすような人くらいで。

中村 あ。

羽田 あと、あんま生徒さんての見ませんでしたね。

中村 大勢居たわけじゃないわけですか。

羽田 はい。

中村 ああ、はあはあはあ。

羽田 そうだろうと思います。

中村 ああ、そうですか。

羽田 ただ、あの、鉄道教習所の食料をね、なんか、
少しでも貯うために。

中村 ああ、なるほどなるほど。

羽田 寄宿舎のね、食料を貯うために農場欲しかった
んでないでしょうか。

中村 なるほど。

青木 (笑)。そっちだったんですね。

中村 あ、それで、だいぶイメージ出来てきたのは、
あの、さっきおっしゃってた通り農専の方は学生さん
いるから、若い人いっぱいいるわけですよね。で、向
こうは職員が耕して、畑をやってたんですね。

羽田 そういうことです、はい。そういうことです。

中村 なるほど、なるほど。わかりました。

羽田 だから、ここで、教習所で授業やるとか、そ
ういうこと無かったみたいです。

中村 なるほど。

羽田 みんな、新津でやったんでねえかな。

中村 なるほど。

羽田 だから、建物だって一棟、要らないんですね。

中村 なるほど。そうですよね、だって農専の方は生
徒さんがいるから、結構たくさん建物使うわけだけど。

羽田 そうそうそう。

中村 なるほど。いやあ、だいぶいろんなことがわ
かりました、ほんとに。

註

(1) 【第3図】(58頁) の a を参照。なおこの道は、
1934(昭和9)年の【第1図】(57頁)でも確認できる。

(2) 【第3図】の b を参照。なおこの道は、昭和9
(1934)年の【第1図】でも確認できる。

(3) 【第3図】の c を参照。

(4) 村松ST 内に所在する「新潟農専農場碑」を指す。
59頁の写真1を参照

(5) 丹羽鼎三(1891～1967)。東京帝国大学農学部
教授。昭和20(1945)年に新潟農専が設置されると
同校長を兼任した。

(2) 佐藤峰雄氏インタビュー

(文字起こし 新井健太・遠藤純夏)

日時: 2015年7月9日

場所: 新潟大学農学部附属科学教育研究センター村松
ステーション会議室

参加者: 中村元、石本光明、高井恵美子、青木由利子、
新潟日報記者S氏。

備考: 佐藤峰雄氏は、昭和7(1932)年新潟県中蒲原
郡村松町生まれ。幼少期から村松に所在した練兵場で
遊んだ経験を有し、村松中学校在学中の昭和20(1945)
年には、勤労奉仕として練兵場に飛行場(滑走路)を
造成する工事に従事している。その後新潟大学教育学部
で教鞭をとり、インタビュー時は新潟大学教育学部
名誉教授。

参加者の石本光明氏は、村松町育ちで昭和44(1969)
年から新潟大学農学部附属村松農場で勤務し、農場敷
地内を知悉している。インタビュー時は農学部附属科
学教育研究センター村松ステーション技術専門職員。

同じく参加者の高井氏、青木氏については、(1)
を参照。

旧練兵場・射撃場の記憶について

中村 戦争の頃の事って言うのはきちんと伝わってい
ないので、色々調べているんですが、そういう経緯で
色々調べていたらまたまた佐藤先生が、こちらで飛行
場を、滑走路を建設する作業の時に関わっていたと
いうお話がありましたので、そのお話を特に伺いたい
んですけども、少しその前から村松と佐藤先生の
間わり、ご経歴などのお話とか、子どもの頃にどの
ようなご記憶があるかなどを含めてお話を伺えればと
思うのですけれども、先生はご出身はまさにこの辺り
ですか?

佐藤 村松です。

中村 そうですか。

佐藤 よく書いてありますね。

中村 これは前回羽田清五郎さんという新潟農専の一
期生の方にお話を伺ったんですけれども、先生は昭和

何年のお生まれですか？

佐藤 昭和七年。

中村 七年ですか。

佐藤 七年の二月。

中村 そうすると、子どもの頃にはやっぱり練兵場なんかはおいでになったご記憶が

佐藤 ここは私の遊び場でね。大事な遊び場でした。ここに書いてある通りです。いつでもここへ来て風掲げをしたんです。

中村 やっぱりそうなんですね。

佐藤 はい。

中村 その頃もやっぱりこう、休日だと入れたわけですか？

佐藤 入れます。あのね、いつでも入ってましたね。小っちゃい子どもは自由に入ってましたよ。ただ、あんまり中までは入れなかつたね。

中村 ああ、あの。射撃場っていう風になってるのは別に

佐藤 今もね、ちょっと見てきたんだけど、あそこに、村松何だけ、デイサービスセンター⁽¹⁾。愛松園⁽²⁾とは違うんですか。

石本 この愛宕中学校⁽³⁾の裏でしょう。

佐藤 ありがとうございます。そことこころはね、愛宕山の、あの裏に道がありましてね、そこをずっと出てくるんですよ。そこを射撃場のところに出てくるんですよ。で、ちょうど、そのセンターのあたりがどうもね、射撃場みたいな感じがします。下手するとね、センターの敷地になったところかもしれません。平らになってしまった。

中村 そこはやっぱり入れなかつたわけですか。

佐藤 いや、入りましたよ。

中村 ああ、入れたんですけど。

佐藤 はくらしょっちゅう弾拾いを行ったよ。

石本 私も結構行きました。

佐藤 ねえ。いっぱい落ちてるんですよ。そこでこうやって、そこほじくるといっぽい出てくるんですよ。

石本 ちょっと土盛り上がってて気しますよね。だから土ん中に撃ってたんですかね。

佐藤 あの。

石本 なんかありました？

佐藤 ありました。かなりしっかりしたコンクリで塙が掘ってありますね。塙がかなり、けっこう長い。胴を出す場所がきちんとあります。下から胴を出して、こっちの方でちょっと盛り上がったところにね、

盛り上がった土手みたいなのがあって、こうなってこうなってるんですよね。ここへ兵隊さんが腹ばいになつて、こう撃つわけです。

中村 その、ちょっと盛り上がつたところに。

佐藤 ええ、そうです。もっとその先に、コンクリがあって、弾が飛んでくるわけです。

中村 そこへの出でますわけですか。

佐藤 そう、で当たつたとか見てるわけじゃないですか。だから、それがまあ後ろの山の方の崖ぶつちにみんな入っちゃう。みんなそれを取りに行く。だからね、弾がゴロゴロしてるんです。

中村 そういう事なわけですか。

佐藤 何も怒られなかつたねえ。見張りもいなかつたし。誰もいなかつたし。

中村 そうですか。誰もいなかつたんですか。

佐藤 誰もいなかつたです。いつでも入れましたよ。

中村 ジャあそんなに頻繁に使ってたわけじゃなかつたんですか、この射撃訓練の時は

佐藤 ある時は誰かいたんだと思いますけど、ない時はほっぽらかして。おそらく、射撃の時は見てないです、そのものは。いつも誰もいない時に入る。

中村 それは先生が丁度小学生くらいの頃ですか。

佐藤 そうです。小学生くらいの頃です。

石本 うちらが拾いに行ったときはあそこに営林署がありましたよね。営林署と民間の方に入ってた気がする。そこで弾拾った記憶あるんですよね。その当時は煙なんかなにもなかつたです

佐藤 周り全然ありません。営林署なんでもちろんありませんし。

中村 ジャあこっちはもうずっと林ですか。

佐藤 山の続き。

中村 ああ、山の続き。

佐藤 でね、その射撃場のちょっと奥の所にね、山のギリギリはぎれです、そこにね、格納庫作つたんです、飛行機を入れる。かなり大きな穴掘つたんですよ。トンネルっていうか。そこへその、飛行機を入れるんだっていう話は聞いて、直接見たような気もするけど、今行つたらみんな林で、あれかなっていうのは、見えるような見えないような。あんまりよく見てこなかつたんすけれども、外から見るとなかあります

中村 それっぽいものがちょっと。

佐藤 うん、崖を削つたようなところ。での辺のね、後ろにね、なんか今、砂利とかね、土みたいなの盛つ

I 調査の目的と概要

て、どっかの建設会社の敷地になっていんじゃないのかね。だから、その辺の土でもほじくったら出てきますよ多分。その奥ですよ。

中村 ああ、もう色んなの置かれちゃったんですね。

佐藤 うん、もう色んなの置かれちゃった。それも土とか石とか。置いてあってね、その裏の敷ん中にね、アツがある。弾が。

中村 じゃあもう今弾を掘ろうしたらもう。

佐藤 いや、うん、だけに、本気になって一生懸命シャベル持ってやれば出てくるかもしれない。結構出てくると思いますよ。もう昔の話ですが。

飛行場・滑走路の建設について

中村 今その格納庫のお話が出てきましたけれども、先生はその、飛行場の滑走路の建設のところで少し関わられたと。何歳くらいの事ですか？

佐藤 あれは中学校ですかね。負けたのが中学二年生ですから、中学二年生のね、はじめの頃じゃないですかね。

中村 あれは確か昭和二十年の、割と早い時期に建設やってますよね。あの、滑走路。

佐藤 そうそう、その時ですよ。

中村 ああそうですか。って言うと、まあ、それこそ夏前ですよね、八月に負けるわけですから。

佐藤 夏にもやってたよ。六月とか七月とか。

中村 六月とか七月ころですか。

佐藤 うん、そんな頃だ。暑かったですよ。

中村 で、中学生で、やっぱり学校で、その動員されてたわけですか。

佐藤 そう、動員されて。僕ら二年生だったからね、何年生まで来てたんですかね。三年生はもうだいぶ取られてましたからね、軍隊自体。

中村 もう行っちゃってる方も。

佐藤 そうなんですよ。で僕らがね、ギリギリのところなんですよ。戦争行かんで済んだ。

中村 なるほど。

佐藤 摘切り一杯で僕らの上のほうはもう、戦争行ってんですよ。それもね、予科練ですよ。予科練習生と、養成所ですね。うちの兄貴なんかそうですけど。

佐藤 それから、みんなそういう、なんとも言えない

少年兵みたいなのにね、志願させられたんですよ。陸軍か、海軍か、空軍か。その三つのうちのね、お前どこが好きだ?って言われて、志願をさせられてね、みんなそこの、新兵養成みたいなところに行った。一つ。

中村 じゃあギリギリ先生の世代は。

佐藤 ギリギリ。だから僕らの一つ上の人は死んでる人もいますよ。戦争で。ギリギリ一杯のところでしたね。それで、頑張って飛行場作って言われて。飛行場づくりでまた、なんも勉強しなくて。

中村 あれですか、こう、下を平らにならしていくつて作業をやる訳ですか。

佐藤 そうです。あの、その時にね、学校から来たんですけどね、学校は山を越えればすぐですから、そこからずっとそこへでてくるんです、公園の方に。公園からこっちへ入ってくるんですよ、そしたらね、今のモーターグレーダーってのがあるんですけど、地ならし機、あれのものすごく良いのが三台も四台も居ましたよ。いっぱいいますよ。ブルドーザーもね、五、六台いました。

中村 じゃあ重機もけっこ入って。

佐藤 重機はいっぱいあったんです。それで10トンローラーってのがあって、今そこにあるローラーは5トンか3トンで小っちゃいんですけども、飛行場作りでね、もう馬鹿みたいにでかい10トンローラーってのがね、何台あったんですかね。三台か四台ありましたよ。

中村 じゃあそのかなり重機を使って本格的にやる訳ですね。

佐藤 ものすごく急いでいました。

中村 やっぱりそれだけ急いで。

佐藤 急いでいたんですよ。で僕らは、そのブルドーザーで押し切れないような山があるんですよ、ところどころにほかほかとね。それをシャベルで、線路を敷いて、トロッコを置いて、そのトロッコに土を入れて、そのトロッコを押すんですよ。人力で。それはさすがに大変ですよ。上りが大変だった。

中村 押していくのに?

佐藤 押していくのにね。けっこう上ったり下がったりするから。ちょうどね、この辺なんですよ。この辺ずっとあの八幡⁽¹⁾のあたりまで、作りましたよ。それでね、今はこの辺水平になってるけど、けっこう凸凹だったですよ。

中村 あー、そうですか。これはじゃあ、耕して今みたいに?

佐藤 そう。はい。

中村 じゃあ練兵場の時はもうちょっと起伏があったんですか?

佐藤 起伏。だって壇場もいっぱいありましたしね。

塗壁はいっぱいありました。だから、掘っては積み上げるわけですよ。凸凹になってるわけですよ。あちこちあちこちね。ですからそれを全部平らにするわけです。

中村 なるほど。

佐藤 そのために動員された。僕らはそのトロッコを押して、怪しげな線路があるんですよ。

中村 そのトロッコ用の線路？

佐藤 トロッコ用の。いい加減なものでね、時々外れるんですよ、押していくとね。

佐藤 そうするとまた上げるのに全部下ろさんばならない。そういうね、本当に馬鹿みたい、今考えると馬鹿みたいなことをやってた。でもね、僕らはね、中学校2年生ですよ、今の中学校2年生と同じですよ、年はね。僕らにしたら、勉強しなくてもいいから遊び半分、もう必死になって押してさ、行きますよ。帰りはね、それをこっちに持ってくれればいいわけですよ。

中村 あ、空になったやつを？

佐藤 空になったやつ。それをボーンとやって「おーい、いくぞー」なんて言って、ガングンガングンってね、勢いつけてね帰ってくるんですよ。それはね、面白くてね。お腹もすいてたしね、食うもんもなくて、だけどそれは遊び、半分遊び。だからね、それほど大変だとは思わなかったです。

中村 ああ、そうですか。

佐藤 ただね、その押してくれるのが大変だったです。4人だから5人でね押すんですよ。いくつかくついたのを、1つじゃないんですよ、くついてるんですよ、トロッコが。

中村 トロッコですか？

佐藤 トロッコ。だからね、大変なんですよ。後ろで押すんですけどね、前見えないわけですよ。いい加減にやってるわけです。とにかくなんでもいいから押して。だからね、外れると大騒ぎするわけです。

中村 カタツとなっちゃう？

佐藤 なっちゃうんですよ。

中村 そうですか。そしたら大変ですよね重いから戻すのも。

佐藤 大変、戻すのが大変ですよ。もう必死です、みんなで。お国のためにからね。お国の為だからがんばる。兵隊さんも一緒にやってましたから。でもあまりね、兵隊さんの数はあまりいなかつたですね。みんな重機のほうへまわって、ぶらぶらしてる人はいなかつたですね、あんまりね

中村 ジャあそういう、具体的に、肉体的に土を運ぶような作業は勤労動員の、先生たち中学生の皆さん？

佐藤 そう。

中村 あと他にはどんな方がいましたか？

佐藤 他？うーん、あんまり。そんなことしか知らないですね。

中村 そうですか。ジャあ基本的には学生たちがみんなでやるという、その作業に関しては？

佐藤 そう、あのトロッコをね押して、低い所へ土を持って行って、土をひっくり返すという、そういう作業です。だから、ある程度の所はブルドーザーでダダダダッとやってますから。

中村 ああ、でも僕らはイメージとしてどういう作業をやったのか具体的に分からなかつたんですけど、今の説明を聞いて、要是重機も入っているんだけども。

佐藤 入ってるんですよ。

中村 重機だけではやっぱりその間に合わないことがあって。

佐藤 重機だけではちょっと無理だ、これだけの広さですから。

中村 そうですね。で、場所なんですけれども、この間羽田先生に伺った時は、今この農学部のフィールドからずーっと、えっとこれが例の少年通信兵の学校の跡ですけれど、その裏手あたりまでずっと飛行場だったんじゃないかとおっしゃっていたんですけど、先生の印象だとどの辺という場所の感覚でいますか。

佐藤 うーんと、これは。

中村 ここが今我々がいる所で、こっちが小学校。

佐藤 あー、そうか。これがグラウンドだもんね。

中村 で、ここが愛宕中で。

佐藤 うーんとね、このね、これ愛宕中？愛宕中学校ね、愛宕小学校どこだろう？

中村 愛宕小はどこでしょう？今の愛宕小はここには載ってないですね。

佐藤 これ？

中村 これは。

佐藤 たぶん、たぶん今こらでねえかな。

中村 今の愛宕小はそうですね。

佐藤 営所通り⁽³⁾はこれですか

中村 これが営所通りじゃないですか？

佐藤 これが営所通りか。

中村 ここがあの、例の連隊がいたところですので。

佐藤 これが？

I 調査の目的と概要

- 高井 それが今の愛宕小。
佐藤 愛宕小だ。こんなに近いのが。
中村 意外と近いですね。
佐藤 あ、そっか。だとするとね、うーんとここに少年通信兵があった?
中村ええ。
佐藤 農学部があった。
中村 そうです。
佐藤 これはね、ここはね、この辺まで⁽⁶⁾か、これが軍隊の跡じゃねえかな。
中村ええ、たぶんそうだと思います。
佐藤 この辺までですや軍隊の跡は。
中村で、あの飛行場はどうですか?
佐藤 飛行場はねえ、うしろですからねえ、ここへ作ってるんですよ。この辺からね、この辺からこう作ってるんですよ。ガーッとこう作ってる。
佐藤 うーんと、八幡はどこだ? この辺が八幡か。
高井 八幡は。
佐藤 アップル屋⁽⁷⁾はどこだ。
高井 アップル屋はこっちのほう。
佐藤 ん?
高井 こっちのほう
石本 だってこれ營所通り、これで矢津のほうに行く道だから、アップル屋はこの辺だわな。
佐藤 この辺ですよね。あ、これアップル園じゃねえか? アップル園のね、すりきれいっぱいの、アップル園まで引っかかるんかったから、この辺ですよ。こいう作ったわけですよ。
中村ほお、じゃあもうちょっと向こうなんですね。
佐藤 これは、これはね、兵営の跡、四角の。
中村そこには触れてなかつたわけですか?
佐藤ここには触れてない。
中村あーそうですか、じゃあそれよりも裏側なんですね。
佐藤 その裏側、ここですここ。
佐藤 今ここに家いっぱい建ってますけど、これ何もなかつたですよ。
中村で、ここのアップル園ってところにはからないくらい?
佐藤かかるないくらい、からんぐらいで、ここにバーッとあったんですよ。それで、これ愛宕中学か。愛宕山はこれですか?
中村これですね。
佐藤えーっとね、たぶん、これは何だろう?
- 中村 これは何でしょう?
佐藤 忠魂碑かな。これ、遊園地かな。
中村 この間知ったんですけどね、これ何年のだったかがちょっとね
佐藤 ああ、これ。
青木 こっちが平成6年
佐藤 こっちのほうがよく見えるじゃん
中村 そうですね
石本 いやーこれ今ね、今いるところで見るとこういう感じになってんだわ。これが県道でしょ? こう行つてるわけだら、今の県道さ。
佐藤 ここ忠魂碑があるところだからね。これ、この2つはね、高射砲陣地ですよ。
青木 あー、それが。
佐藤 今遊園地になつてます。ここ行くとね、ぐるーんとね、あの今でもね、石がね、高射砲陣地の外をぐるーっとね残ってる、石が並んでます。
中村 あー、並んでますか。
佐藤 これだけが残ってる。
中村 あー、そうですか。へえー。
佐藤 造構。そっくり。誰もあれ知らないんでねか。
石本 その辺うろちょろっと行ったよね。
青木 行きましたね。
佐藤 石が並んでたはずです。石って言つてもね、ものすごく高い石ですよ、高射砲陣地ですからね。けつこうでかいですから。
S氏 高射砲陣地。
佐藤 この2つそうですよ。
中村 あー、そうですか。
佐藤 で、ここに飛行場作つたから、この辺うーんと。
中村 これが練兵場ですよね。
佐藤 これが練兵場、はい。こう作った。こう作ったから。
中村で、リンゴ園っていうのはたぶんさつきの。
佐藤 ああ、リンゴ。これリンゴ園だ。
中村 そしたらその手前ぐらいまで斜めに入つていた?
佐藤 そうですそうです。こう作ったんです。
S氏 練兵場かなりかかってますよね。
佐藤 全部です。ほとんど全部。
S氏 こうなんですね。
佐藤 こうです。こうかかって。この家は新しい家ですね。うーんとね、これはね、この辺まで軍隊じゃなかったですか?

中村 そうですね、軍隊ですね。そうだと思います。
はい。

石本 あれ、弾薬庫がその緑色の辺りかな。もっと右下かな？これ？こっち？うんそれその辺かな。それが弾薬庫。

中村 今ゲートボール場⁽³⁾のところですか？

石本 はい。

佐藤 飛行の格納庫はね、ちょっとこの辺見えないも
んでね、この辺ですよ。射撃場はここですか？

S氏 射撃場はこの辺なんですよ。

佐藤 この辺ですか。

S氏 この辺がスタートなんですよ

佐藤 いえ、あのこっちからこう撃ちますから。射撃
場は。

S氏 あー、いえ、その滑走路。

佐藤 あー、飛行場のほうね。はい、そうそうそう。
そうなんです。この辺から作り始めた。この辺にそう
して穴⁴聞いて、ここにあの格納する。ここからバーッ
とここまで。

中村 あー、斜めにね。

佐藤 この先はね、分かりません。

S氏 練兵場を斜めに突っ切っていたという言い方で
いいんですね。

佐藤 いいですいいです。ほとんどね、練兵場は全部
使ってましたね。僕が風掲げたのはここです。

石本 今は愛松園があるわけすけど、そこに墓地が
あったっていうんですけど。

佐藤 陸軍墓地ありました⁽⁴⁾。

石本 やっぱりそういう関係ですか？

佐藤 この辺かね、だから。

石本 この辺に墓地がある。

佐藤 ここに陸軍墓地があって、立派なお墓があつて。

中村 今も？

石本 ないですないです、何もないです。愛松園で潰
れた。

中村 なるほど。これ今昭和9年の地図なんですけど
も、お手元に今ね、あの地図があるんですけど。たし
かに、この今お示しいただいたところにお墓のマーク
ありますよね。これ。射撃場の右下のところに⁽⁵⁾。

佐藤 ん？あ、こう見るのか。

中村 あ、ごめんなさい。こちらの下の地図になるん
ですけども。

石本 お墓のマークって？

青木 お墓のマークってどのマーク？

中村 ここが今の練兵場で、ここがずっとその前の通
りなんですけども、これたぶんその。

佐藤 ああ、これだ。ここに2つある。

中村ええ。

佐藤 これは陸軍墓地。

石本 冂型の？違う？

佐藤 止まるっていう字みたいなやつ。

中村ええ、止まるみたいな。

石本 石塔をイメージした感じの。

中村ええ、じゃないかと思います。

佐藤 そうです、Tっていう字がひっくり返ったよう
な。これがお墓の。ここが陸軍墓地です。その反対側
に、このところにね、ここが射撃場。射撃場って書いて
あるじゃん。

青木 あっ、射撃場。

佐藤 ああ、射撃場だ。僕ら射的場って射撃場だ。ほ
ら、ここにビヨンビヨンビヨンビヨンっていうのが書
いてある、よく書いてあるこれ。

佐藤 ここがね、弾があたるところです。

中村 ああ。いくつかあったんですか？こういう。

佐藤 3つぐらいありました。

中村 ああ、3つぐらいありましたか。

佐藤 このあなたのこっち側にね、3か所ぐらい。

中村 3か所くらいあったんですね。なるほどなるほ
ど。

佐藤 いちばん近いのなんてね、すぐそこなんですよ。
あれじゃあ誰でもあてられるなんて言って。

中村 近いから、そこはすぐあたるんですね。

佐藤 そう、はい。少年兵はそういうところからやる
んじゃないですか。

中村 ああ、なるほど。最初はって感じですね。

佐藤 ここ隙間をね、ここに点々点々って道がある
じゃないですか。

中村 はい。

佐藤 これを行くんですよ。トゥーっと行くとここに
出てくる。僕の家はこの辺ですから。この辺ですか
すぐなんですよ。

中村 ああ、じゃあ愛宕山を。

佐藤 愛宕山を登らんたっていいんですよ。この隙間
を。

中村 なるほどなるほど。

佐藤 つい先だって熊が出たとかって言って。

中村 ああ、そうですか。

佐藤 村松公園にクマがでた。クマの通った当たり

I 調査の目的と概要

ですよ射撃場ってのは。今も気持ち悪くてね、真っ暗だから。

中村 この間のお話だとこっちは飛行場を掘った後に横造みたひなのが出てて、こっちの方にも格納庫があった?

佐藤 この辺にはありました。

中村 山の裾野?

佐藤 ちょうどこのあたり。警戒警報がなると敵がくるでしょ。そん時はね、木が植わってるんですよ。結構大きい木ですよ。作った平らなところに植木鉢をダーッと並べるんですよ。木が植えているようにカモフラージュする

中村 あ、平らじゃないという風に。

石本 飛行場らしくしてないぞと。

佐藤 それが重くてね。ものすごく重いですよ。土が入ってるから。結構でかい木が植えてあるんですよ、杉の木。

S氏 それは生き残ってる通信兵の方も同じことおっしゃって。その木は、早出川の河原まで行って切つてきたと。それを植えてカモフラージュしたと。

佐藤 それがえらい重いんですよ。全部木ですから。それを4人で持つわけですよ。4人で持ってやっても重い。ろくなもん食ってないんだから力がでなくてね。とにかく造った平らなところにね、なるべくまとめてダーッと置くんですよ。

S氏 それは警戒警報が鳴るとそういう作業に出たんですか。

佐藤 そう、鳴るとそういう作業をやらせられるんですよ。

中村 この間は羽田先生のお宅の裏まで道が伸びてそこにも格納庫があったと。

S氏 複数あったそうで。

高井 石曾根神社の前

中村 滑走路が終わるころの横から道が出ていてその中にあつたっていうんですよ。

高井 土蔵があるんですよ。土蔵を兵隊さんたちの食糧庫に貸してくれってきた。でも終戦になつたら全部引き払ってきたって。

佐藤 いや、思い出しますよこれね。由緒正しい中学2年生だもん、まだちびっこだったからね。

中村 飛行機がここに着いた着かないって話なんんですけど、どうでしたか?

佐藤 一機降りたって話は聞いたことあるんですけど見たことない。ちょうど終わった時しか知らないけど

ね。みんな特攻用ですね。特攻用の飛行場をものすごくいっぱい作ったんですよ、全国にね。その一環のようすです。もうみんな飛行場やられて飛ぶところがない。だからものすごく急いだわけですよ。

S氏 今のお話ってのは当時も誰から聞いた?

佐藤 それは分かりません。ずっと後に聞いた。当時は中学生だから言われるまま聞いてた。ただ、ものすごい立派な飛行場ができるだけ。ただね、僕も不思議でしょうがなかったのがね、芝生を植えるんですよ。芝生の上に飛行機が降りるのかなと思って。ただね、ローラーでだーんとやるとすごい綺麗になるんですよ、たしかに。すごく綺麗にはなるんですけど、大丈夫なのかなって。

中村 ローラーかけて平らにしたところに芝生植えるんですか?

佐藤 いや、なんとなく平らにしたところに芝生植えてまたローラーで。

石本 そうすると碎石なんかは入れないで? この辺の畑を見ても全然入ってないけど。

佐藤 そんなものは一切入れない。

中村 ローラーをかけて芝をおいてまたローラーをかけて。

佐藤 それだけでもね、飛行場にするんですから

石本 そうすると、そんなでかい飛行機は下りられない設計なんですね。ゼロ戦くらいしか。

佐藤 あれもあったようなね、んですけど、あまり数はなかったような、あのよくある穴の開いた鉄板。長くて穴が開いてる。広い所に作業車が入ったりする。ああいうのをダーッと敷いていけばすぐできるけど、そんなものはあの時にもあったような気もするけど、まずないです。鉄がないですから。ほんとにねえすごかったですよあの時は。トラックもいっぱい来ました。すごいトラックが来たんですけどね、そのトラックはなんと全部ニカンボックみたいな、エンジンのところは全部木で作ってあるんですよ。木で屋根も作って、そしてヘッドライトはその上に1つですよ。俺はあんなトラック見たことないですよ、なにこれと思ってね。

石本 ちょうど犬小屋みたいな。

佐藤 そうですよ、犬小屋に電気付けたみたいな、こりゃもうだめだと思ってました。

石本 思ってても言えないでしょ。

佐藤 はい。緑色みたいな色塗っただけですよ。そんなトラックです。やっと動いてるというね。ほんとにねえ、なにもなかつたですね。だけどね、グレーだ

とね、その10トンローラーとブルドーザーはね、いわゆるボロで、今のコマツで作ってるようなそのものですよ。すごく立派なのがいっぱい来ました。だからあれ見たとき心強いと思ってね。はー、まだこんなのがあるって。いつだっけそれで怒られたことある、その運転手にね。僕ちょっと遅れてきたんです。そしたらそれに挟まれてさ、あっちからこっちからうわあーっと「何やってんだー」と怒られてさ、「はやくいけえー」と。隙間を狙って走りましたけど、なんてみんなカリカリしてやってましたね。すごいあの、急いでたんですね。

中村 まさかねここでそんな歴史があろうとは思わなかつたですね

佐藤 だからこんなに平らになってるんです。僕もね、あんなにローラーで固めたところをね、よくこんなにね、耕したって。びっくりしますね。機械で耕したんですね。手じゃダメですね。

中村 それで一悶着あったんですね。結局、機械を使うのか、農専はみんな手でやるらしいんですけど。

佐藤 大変だよ。

中村 新津に鉄道教習所が入ってたらしいですね。あそここの少年通信兵のところに。あれは機械を持ってたらいいんですよ。あれは機械でパンパン掘ってくから、農専の人たちからすると、「何だ」と、自分たちは専門家なのに、鉄道教習所のほうが早かったと。

佐藤 そうだ、鉄道教習所も入ってました 奥の方に。

中村 建物の中にね。

旧兵舎について

高井 これが兵舎の中です。

中村 これが兵舎ですね。

佐藤 兵舎のなかね。練兵場がくっついてるんですよ。少年通信兵学校か。

中村 先生はこれ、戦後の思い出というかご記憶はありますか？

高井 村松高等学校の前身の中学校のご出身ですね。

佐藤 ここはね、農学部がここそこにありました。このへんも使ってた気がするかな。教習所がね、ここに隣に。これはね、ニューヨークの州の連隊が入ったんですよ。

中村 あ、米軍が来たときに。

佐藤 来たときに。あの連中に入ってきたときに、ほんとに凄かったです。

中村 ご記憶ありますか？

佐藤 ありますよ。だって、攻めてきたんだから。怖かったです。その前もね、それが来る前の負けですぐもね、ほんとにね、負けてしばらく、二ヶ月か三ヶ月くらいかな、秋ぐらいまでだな、毎日のようにね、鉄砲の音聞こえましたよ。

中村 あ、そうですか。

佐藤 パーン、パーンとね。みんなね、将校が自決するの、壇場で、あるいはその陸軍墓地の前とか。そういうところでめぼしい将校はね、みんな自決してたんですよ。今日はなんとかさんが亡くなつたとか。なんなく聞こえてくるんですよ。ほんとにね、氣の毒でしたよ。

中村 ジャあけっこうそういう形で亡くなつていった…

佐藤 戦争直後っていうのはほんとにねかわいそうだった、悲惨なものでしたよ。みんな練兵場で自決して。特にこの陸軍墓地のあたりね。

中村 しかしながらあった墓地もみんな無くなつちゃつたっていうんですからすごいですね。

佐藤 全部無くなっちゃつた。跡形もなくなつた。

佐藤 小さいときは軍隊と一緒に、軍隊町でしたから。うちもよく、兵隊さんが泊まりに来ましたよ。休みになると多い人は帰らないでしょ、だから民宿みたいな感じ。町中のところへみんなを分散して、そこでご飯食べたり遊びたりして、夕方になると家に帰つてくるという、そういうことがありますたね、時々ありました。

中村 やっぱりその軍隊の中ではなくて、民間でご飯を食べたりして。

佐藤 みんな若いのはばかりくるの。一緒に遊びましたよ。小さかったからね。遊びてくれたし。

中村 あれですか、それこそ少年通信兵のよりもうちょっと前ですか。

佐藤 僕ですか？ 来るのが？ 来るのはもっと大きい人、少年通信兵でない普通の兵隊達、ここなんでしたけ？ 十六連隊でしたか。

中村 三十連隊、そのあとそれが出て行っちゃって、あととは新発田の。

佐藤 新発田の十六連隊の一部がこっち来たんだよね。

中村 いろいろ、イメージが変わってきました。具体的にどう飛行場を作ったのかっていうのは今までにはっきりしてなかったので。

佐藤 いや大変でした。これに非常ににはっきり書いて

I 調査の目的と概要

あるじゃん、この衛兵の大きさ。ちゃんと真四角なんですよ。

中村 この真四角の端々にはちゃんと生け垣みたいなのはあったんですか？

佐藤 ここ、かなり盛り土してあって。

中村 あ、盛り土してあった。

佐藤 その上に、生け垣ありましたね。

中村 私はこの後もうちょっと専門の話も少し伺いたいんですけど、Sさん、飛行場関係で何か是非。

ふたたび飛行場について

S氏 あの、射撃場から飛行場、滑走路伸びてくと、若干ちょっと、ここの道も突っ切ったんでしょうね？

佐藤 突っ切ってますよ、突っ切ってると思います。

S氏 なるほど。

佐藤 ここ、すり切りにこうやってますからね。

S氏 そうんですね。あと先ほどの、あの 戦後というか後から、特攻用の飛行場にしようとしたんじゃないかってお話をされましたけど、それはいつ頃どのような方面からお聞きに？

佐藤 いや比較的最近ですよ。あの、特攻機がでるところなくなったりっていう。今、ほら、8月近くにあちこちで日報さんやってんじゃん。

S氏 僕最近そういう話を聞いたんです。

佐藤 そのころはそんなことはね、全然夢にも思わなかつた。

S氏 その頃は全くそんな話はなかった。

佐藤 そう。第一特攻なんてのはあんまり聞かなかつたね。

S氏 そうですか。もしわかれればなんですが2キロくらいじゃないかっていう卒業生いるんですけど

佐藤 長さ？

S氏 はい、滑走路ですね。

佐藤 滑走路、多分僕らいたのがね、農学部の前のあたりにうろちょろしてたんで。この先是分からいいんですよ。どのへんまで行ってたかね。このへんずっと畠でしたからね。確かにね、作りやすい。2キロまで行ったのかなあ。これだと1キロってどれくらいのかな。

中村 どうだろ、縮尺が。これね、角が切れちゃったんですけど、1キロってこれくらい。

佐藤 2キロいかないね、熊野堂⁽¹⁾まで行くじゃん。熊野堂までは行きませんわね。

中村 長過ぎますか。

佐藤 長すぎる。

中村 この学校のすぐ裏あたりじゃないですか 学校っていうか。

佐藤 兵舎のね？ 兵舎のうらのね、熊野堂がここがもうちゃんとね、家がいっぱいありますから。あの頃の熊野堂はいい部落だから。熊野堂の手前のあたりまででないですかねえ ここなにもないから。

S氏 1キロ以上。

佐藤 2キロくらいなりますよ。これ測ってみれば。こっからでしょ？ 1キロここだよね。

S氏 そうですね。熊野堂の手前だとそうですね、熊野堂まで行けばそうですね。

佐藤 行けばね。そのちょっと手前まで、この辺まで行ったんじゃないかな。

S氏 わかりました。

佐藤 2キロちょいだね。2キロ足らざっていう。先まで見たことないです。どこまでやつてたのか。

S氏 さらにはあの、すごく急いでたつていう話で、それがもう少し具体的な指示みたいなのあったんですか？

佐藤 いや、急いで作れとかそういう具体的な話は全然ありません。

佐藤 そうです、だって僕らは下の方。まだ中学2年生…

S氏 ああ、雰囲気として…

佐藤 みんなものすごく急いでいた感じがしますね。どこで食事してたのかなと思うぐらい、ものすごく一生懸命でしたね。本当にね、食事してたところ見たことないですよ。いつでも皆が何かやってた。グワーッとね。

中村 ジャア交代制みたいな感じでザーっとやってるんですか？

佐藤 そうですね。そうだと思います。僕らはのんびりやってたけど。すごいみんな真剣でしたね。どっからやっぽり厳しいお達しがあったんでしょうね、「何年何月何日までに仕上げろ」という。だからあの戦争に負けてからね、あそこの公園のところにね、今はグラウンドになってますけどあの辺にね、その重機をね、全部集めたんですよ。

中村 はい。全部集めた。

佐藤 うん、ローラーとかね。それでそのまままね、かなり長い間そのままになってた。

中村 ああ、そうですか。

佐藤 僕らそれを見に行ったんですよ。なんかの機械みたいな、みんな盗られたみたいになってて、惨憺たるものだったね。あれよく動かしたなと思ってね。何か新しくくっつけて持ってったんですかね。動かしたんですねかね。あの重いの。

中村 数か月とかそういう単位ですか？

佐藤 うん。相当ほっぽらかしてありましたね。どうしょもなかつたんじゃないですか？負けてからは。

中村 米軍が来てからってわけでもなく？

佐藤 米軍が来てからもほっぽらかしてあったですね。

中村 あつたんですか。

S氏 グラウンドって今、陸上競技場になっている⁽¹²⁾？

ふたたび旧練兵場について

佐藤 そう。あの辺にね。あの辺は昔、公園だったんですから。本当にね、この辺でやってたんですよ、この前のあたりで、ちょうどこの辺でやってたんですよ僕ら。けっこうだらね、凸凹がありましたよ。この、こっち側はけっこう木が生えてました。だからそれが、かなりたくさんの方モフラー・ジュする木をね、ダーフと作っておいて、それをね、並べるわけですから。これまた一苦労ですよ。

中村 この、今も裏あたりに少しこの、溝っていうかですね、くねくねした溝みたいなのがあるんですよ。土を掘ったような。っていうことはやっぱりこう、なんかあれですかね。塗壕の跡みたいなそういう。

佐藤 そうかもしれませんね。

中村 こっちのほうは基本、林だったんですかね？

佐藤 まあ、けっこう木がありましたね。ほとんどこの辺全部練兵場ですからね。軍隊のね。僕らこんなところまで来ない。

石本 向こう、演習林に使った。あの辺もけっこうそういうこの前見たような感じであったらしい。いやー、あの辺にちっちゃいなんか建物あつたんだって話ですよ。この演習林の畠のあたりに。何が入ってたんですねかね、昔。

佐藤 この辺までは来ないから。いや、軍隊が使う時は駄目でしょうけど平素はね、まあ立派な遊び場ですよ。塗壕の中も入ったし。

中村 いや、それはもう私の思い込みですけど、私の思い込みだと基本的には平らだったんだと思ってたんですよ。でもそうじゃなくて、けっこう起伏があつて。やっぱりそういう、その、掘ってあるようなところが

あって？

佐藤 そうですね。そうそう、塗壕はいっぱいありました。

中村 あつたんですね。

佐藤 まあ全体からみると平らですかね。

中村 こういう今みたいな感じとは全然違う？

佐藤 いやー、全然違いますね。こんな立派な。

中村 そしたら中学に戦争終わってお戻りになってからしばらくは村松にいらっしゃったんですか？高校ではやり出されて？

佐藤 戦争が終わって高等学校に名前が変わったでしょう？で、ある時突然、「お前たちは高等学校2年生だ！」って言われてさ、中学4年生だったんですよ。4年で卒業するのもいた。5年で卒業するのもいた。僕らは4年までいて、4年だってのにさ。で、5年になると突然、今度2年生だって言われて。なに！ってなってさ。まだ2年、もう2年もいるんだって言われて、何年ここにいるんだって、そういう時代でした。だから6年いたんです。

中村 なるほど。ちょうど切り替えの時ですね、新制と旧制の。

佐藤 だから僕、中学校の卒業証書持っていないです。無いんです。いつの間にか高等学校。突然高校生になつた。中学の卒業証書持つたことがない。見たことがない。僕らの年代はみんなそう。

1946年5月8日の村松大火について

中村 じゃあ先生、大火の時もこちらに？

佐藤 いました。あれは20年でしょ？負けた時。

中村 翌年ですか。

佐藤 ああ、21年。20年は五泉でしたっけ。

中村 そうですね。あの時は先生のご自宅は大丈夫だったんですか？

佐藤 うちは大丈夫だった。風上でした。もうちょっと向こうはグワーッと、こう、焼けて。大変でしたね。中村 だいぶ避難して、それこそ兵舎のところへ来られて。もう学校も、高井さんなんか小学校も来られたつておっしゃって。

佐藤 学校はね、みんな燃えましたからね。女学校も燃えました。

高井 先生、女学校もここへ入られたんですか？女学校の生徒さんもここにはいられたんですか？

佐藤 ここですか？

高井 この兵舎の中。

I 調査の目的と概要

佐藤 女学校はね、だから高等学校

高井 先生たちは？

佐藤 20年ですから戦争負けでますからね。もう負けついでだったっつて、あの女学校、どつかで女学校やっていたんじゃないかな。すぐ、村松が好一緒にになったから、中学校と。

高井 ああ男女共学になったんですね。

佐藤 そう、男女共学。

高井 なるほど。何年だったかな。

佐藤 何年だらうな。

高井 そっか、じゃあ焼けてすぐくらいなのかな。

佐藤 4年生、高等学校2年生で、高等学校2年生だった時に女学校と一緒にになりましたから。高等学校ってのができて変わったんだろうね。だからその時はもう。高井 焼けてしまったから、その時男女共学になりましたからね。

佐藤 すぐ来たんでね。

高井 じゃあ女学校の生徒さんたちはすぐ今の松高に。

佐藤 きっとそうだと思います。

高井 それで男女共学になったんでしょうかね。

佐藤 やむなく。まあわかりませんけど、ちょうどそのスリッキリのところなんで。懲えたから行くところがないってのもあったし。

高井 その頃の女学校だった生徒さんに聞ければいいんですけどね。

佐藤 そういうのよく知ってる人います。その頃の女学校のところにはどうやったっていうのを。1さんなんて、すごいよく知っています。

高井 あー、そうでしょうかね。

佐藤 1さんは僕と同じですから。

高井 7年生まれですか？

佐藤 何だか知らないけど、I醤油屋さん。まだ元気です。村松合唱団Yさん。

高井 わかりました。女学校がね、どこにいたのかなって。

戦後の旧練兵場敷地について

中村 さっきのちょっと、これはもうひょっとしたらご記憶にないかもしれませんんですけど、先生が工事なんか終わられて、戦後になって学校に戻られてから、ここはその後農専の敷地になつて、後に農学部になつていくんですけど、何か、ご記憶ってありますか？このあたり、その後の事。

佐藤 いやー、飛行場づくりだけしかやらないからね。あとは崩掲げもしませんし。

中村 そうですね。わかんない。もう大人になっちゃうと。

佐藤 みんな大人になって、練兵場はその後どうなつたかってのは全然わからない。そのまままたんじやないですかね。いつの間にかこんなきれいな煙になつた。

中村 そうですか。気が付いたらきれいになつてたと。

佐藤 そうそう、そんなものです。

中村 やっぱりその、ポイントポイントで聞わられてる時期ってのがあるんですね。ちょうど先生はそれこそ、ここが飛行場になるっていうタイミングでここに聞わられて。そのお話をもう今先生にうかがわない多分、なかなかこれだけクリアには教えていただけない。

旧制村松中学について

中村 ところで旧制の村松中学校については、古い資料などは残っているのでしょうか。

佐藤 残っていると思います。

中村 残っていますか。

佐藤 残っていると思います。あると思います結構あると思いますよ。

中村 特に位置も変わってないです。

佐藤 変わってないです。建物は全く変わりましたけどね。

中村 場所はもうあそこに。

佐藤 そこは全然変わりませんね。焼けてもいませんし。僕ら戦争中は中学校1年生の時はね空襲がくるって長岡空襲ね。あの時、僕はね学校の奉安殿つてござじですか？ その奉安殿の守りだったんですよ。がっかり。うちが中学で一番近いんですよ。一番近いのは、学校の一番大事なところを守れと。僕ら町内のね、近所の連中は奉安殿を回ったんですよ。真っ暗闇の中をバーと機械でゲートルきちんとまいて中学まで走つていって。奉安殿をばかみたい。奉安殿はね、うちの奉安殿はね鉄筋コンクリートなんですよ。どっからも入る事はできない。ちいちゃい建物で、写真が入つてているだけでそれを守るわけですよ。それよりちょっと遠いのは物理室ね、薬品がある。物理化学のねそういうところ。それからね遠いのは教務室のありがたいい成績棒とかさ集金幕とか、決まってたんですよ係の

中村 どこが空襲あった時どういう対応をするか

佐藤 どこのまちの子はどの場所を守れと。その必要なものを運んだりとかいざってときは。でも僕ら奉安殿を守って今考えると一番楽な仕事。

高井 先生それはどちらにあったんですか。校舎の中にはありましたですか？

佐藤 入ったらここにあります。門をはいてすぐ、必ずそこを札をして

高井 小学校は私ね薄っすら分かるんですけど

佐藤 小学校はね入ったこっち側でね。今考えると、今時からボーケーとみて長岡爆弾打っててや。なんか赤くなってきたなー。真赤になりましたバーと空が。長岡空襲でね。空が真っ赤になりました。大変だなーって。

中村 音は聞こえないものですか？

佐藤 全然聞こえません。いやほんとにね、あれはね一番気楽だった。物理化学の係はみんなは嫌がっていましたよ。よく今ね、あんなことやったなって思いますけど。中学1年生の時にかく結構しょっちゅう警戒警報鳴りましたからね。って聞きましたから。起きてすぐには真っ暗闇の中でねバーと着替えてますよ。順番に並べておいて。だんだんと着替えて最後にゲートルきちんとまいて帽子かぶって走っていくんですよ。今やれって言われたら全然できない。

中村 あ、じゃ何回かあるんですか？ 警戒警報で

佐藤 ありました。何度もありましたね。よく走りましたよ。

中村 いわゆる意味ではね長岡はね被害を受けた村松はねそんなに空襲がなくて

佐藤 軍隊があったからねやられるかなって思ったけど、全然例にもなかったですね。ただ米軍が入ってきたからねものすごい火事あったけど。

中村 校舎の中の一棟燃やす

佐藤 あれはね、中身のガソリンが燃えたんですよ。これですよ、これが燃えたんですよ。真赤ですよバーンって。

中村 一棟ね燃えたんですね。

佐藤 一棟燃えた

中村 あと先生、米軍が入ってきた後にここにあった旧兵舎のいろんな物資を練兵所に持ってきて焼いたことがありますか？

佐藤 いやー、分かりません。ただね、あの一終戦直前にね、ある時突然にね村松中学の廊下にねものすごい沢山のね、毛布とかね靴とかね軍需品がね廊下に

ダーレーと積まれたことがあります。誰が持ってきたのかわからないですよ。おそらくね、軍隊のをもってきたりのかもしれません。

中村 あっ、じゃ中学の方に持ってきた

佐藤 中学にね全部持ってきた。中学はもちろんその当時は中学の中はねその時は工場に変わっていましたからね。

中村 工場になってたんですか？

佐藤 工場になっていた。あのーなんていうか運動場っていうか。運動場と講堂と二つ繋がっているんですけど、そこは両方とも機械がね結構ね立派な機械いっぽい入っててあのコンプレッサーいっぽい入っていて。僕はその中でね特攻機の翼端灯つくりやったんですよ。木ですよ木。木を削るんですよ。カンナでこんな。その頃のね飛行機は敗戦間際に緑とか赤のペンキを入れる翼端灯っていうのがある。そこのねとこだけ削るんですよ、これくらいの大きさで、大きくないんですよ。ここにこうへこんでたところをもうちょっとと奇麗にねそういう作業をね奇麗にねカンナかけたりする。今考えてみるとねあんなことね、あれで飛んでたのが一本だよ木。模型飛行機みたいなものだ。本物ですからね。そういうことをやっていました。

中村 じゃ、それこそ飛行場のあれだけじゃなくてその中の中学の中の軍需工場で勤労動員として担当の

佐藤 飛行場をね作ったのはギリギリ一杯で

中村 負ける？

佐藤 それまでの間に。学校の中全部工場になって、そしてね僕不思議に思ったのは、あのー柔道場ってのがあったんですよ。別棟になってましてね。ロッカーがあって、学校の別棟に一つ柔道場っていう結構いい立派なそこはね軍隊が入ってね通信所になった、変えられたんですよ。長いアンテナが何本も立ってましてね2、3本それくらいかな木の中に木の中に立ってるんですよ。折れないようにしてたんですよ。まともに立ってるのは1本ぐらいですよ。もうねその中でね柔道場の周りにね全部発電機をねダーレーと置いてね、その発電機がバーとすごい音がゴーーとね気持ち悪い音がする。それでねそのなかでね通信をやってるんですよ。窓はね全部、あの暗幕赤と黒の暗幕あるじゃないですか。あれを全部下げてね中をね完全見せられない。柔道場の入口にはね兵隊さんがねしっかりこうやって立っててね近寄らせないんですよ。近寄れなかった。いつも立っていた。

中村 じゃ、そこはもう全然学生は入れないんですね。

I 調査の目的と概要

佐藤 近寄れない。僕らも絶対立ち寄らない。その前にトイレがあるんですけどねそこわね恐る恐る前を通って、いつもそこに立ってたね。あれはね戦争末期の連絡を密かにやっていたんだね。今どこが負けるとかさ。そういう連絡をやってたんですね。

中村 なるほど。通信兵の学校は学校でこっちにあるけども、でもそれは別にやってた

佐藤 別にやってた。こっちの方が狙われやすいって。

中村 敷地も目立ちますしね。こっちの方がね。

佐藤 それがね、その中の一部分がごく一部分なんですよね。それはね中学校の柔道場占拠しててねそこでやってたんですよ。本当に暗い感じだったね。中でねみんなね黙って、ガチャガチャガチャやってて大変だなって思いました。

中村 ちょっと話は戻ってしまうんですけど、先生が中学校に入られたころには中はもう結構軍需工場化していましたか。

佐藤 いや、入った時は何にも本当にね学校そのもの、まだしっかりしていました。

中村 ということは、お入りになった昭和19年はまだ大丈夫。

佐藤 大丈夫

中村 昭和20年になると

佐藤 20年なったら突然、もうバタバタバタと、授業はないし。授業なんてやってらんない

中村 授業がなくなつて軍需工場化してくるし、それこそ春からこっちの勤労員はあるし、

佐藤 こっちの方でやったね。これが終わつて終戦直後かなー、食料がありましたからあのシロサキっていうところあるでしょあっちの方の津川行く山をね、僕らあれをね2年生とか3年生とか残っている人とか1年生もいた気がするんですけど、山の峰にね一列にズーと並べられてね、登れって言われてさ、そして皆カマ持つて登ったんですよ。ビーと合図が鳴つてその山の斜面をね草を刈るんですよ。グーと刈つて下りてくるんですよ。下へ。それで作業させられました。要するね、焼き畠を作るんですよ。

佐藤 一年生なんてね結構急な坂なんですよ。そこをねカマ一丁で降りて来いって。運の悪い奴なんかさ、ハチの巣のところにぶつかってさ、ブワーンてかわいそうだねなんて言ってね。僕はね遠くの方で威張りますけどハチに刺されたりしながら下りてくるんですよ。とにかく結構時間がかかるんですよ。結構太い木もありますからね。そういう風にして下りてきて、結

局それで何するかってね結局後で、枯れたときに火をつけるんですよね。焼き畠をやるわけなんですよ。

中村 そこに一気にスペースができる

佐藤 そこにそばとか薄くんじゃないですか。それで降りてきてお昼にお昼、何をお昼に食べさせられるかっていうとね木の葉っぱにさ、ホウの葉っぱのようだ。はっぱにじゃがいもをこれぐらいのじゃがいもですよ！これ2個しかないんですよ2個！たったのこれだけだって。ほんで塩一つまみね、それもお昼ですよ。こんな大きさのじゃがいも2個だよ！なにこれってさ、食べ盛りになります。それに塩を一つまみ木の葉っぱにね山だから。食器なんてねえんだもん。それでね、なんか大ききな釜みたいなのね、それ茹でたんだね、じゃがいもをこんなちっちゃい。あれにはまいったねほんとにはね、お腹すいて。それしかなかったんですね。ほんとにお腹すいたんですよ。今でもよく覚えてる。だから僕ら年代の人はデカいのがいいんですよ。

中村 栄養状態が

佐藤 ダメなんですよ。

中村 そうですねえ。これだけ働いて、肉体労働してこれ…（笑）。

佐藤 うん。2個ですよ。お昼なんてみんなサツマイモ2本とかさ。そんなもんですよ。お昼持つてって食べてたのは。サゾネの枝まで食べてましたから。葉っぱはさすがにダメだったね。不味くって。枝は食べられる。

中村 こういうところで働いてる時もお昼は基本的に自分で…？

佐藤 自分です。

中村 なるほど…。いやー、やっぱり…。

佐藤 いやあ、ここはねえ、ある意味ではね、なんていうか遊びみたいなので、トロッコ押しじゃね、ま、時々つらいときははあるんだけどね。ほんと遊びで、帰りはみんなで乗って、「いくビー！」とかってさ。がらがらがら、つつってさ。すごいよね。馬鹿みたいなことやってたんですよ。

中村 いえいえ…。でもねえ、なんか、具体的にどんなことやってたかとか全然イメージつかなかったです。

佐藤 いやほんとにね、あんなことでね、飛行場出来るなんて思わんかった。

中村 やっぱりこう、ねえ…。

佐藤 結構こうやってみると広いよね、確かに。

中村 広いですよね、ほんとに。

佐藤 これここまで行ったれば、もうねえ。1500 や 2500 くらいあるかなあ。2 機ぐらい降りられるわね。簡単に。

青木 こう、降り立ったっていうのは…なんか、見たことは…?

佐藤 見たことない。降りたって話は聞いてるんですけどね。

射撃場内を通る道について

中村 先生この、いま、まさにここ、公園とここの中を通ってくこの道って、道自体はあったと思うんですけど、この道は、やっぱりかなり狭かったんですか？ 当時は。

佐藤 いやいや、結構広かったです。広かったです。

中村 実はその、うかがった主旨というか、その…。

佐藤 でもねえ、広かつたって、子どもの頃ですからねえ。広く見えるかもしれない。こんな広くはなかつたかもしれません。

石本 まあ、我々がものごろついてたころは、確かに、あの、道路としてはあって、車はまあ、ほんの一台ぐらいしか通らねえような気がしたんですね。

佐藤 ああ、そうでしたか（笑）。

石本 砂利道。こう、ほんほんともう埃だらけになつて。

佐藤 砂利道のことは、どこもみんな砂利道（笑）。

石本 んで、冬場になると、もうその、除雪とかないんで、もう、駄道じゃないけど、

佐藤 ああ、そうそう（笑）。

石本 んで、人が来なたなつてよけるとこう、ずっと踏んで、ここでよけてる、という感じで。

佐藤 そうそうそう。

石本 常に冬場、町に出る時（笑）。

佐藤 いやほんと、大変だった。

中村 例えば、これで見ると、その、この地図で見ると、こここの、えーっと、練兵場と射撃場の間にこの道は通ってるんですけど、まあ、両方またがってるみたいに書いてあるんですよ。この、境目みたいなのははっきりしてたんですね？ 道の向こうとこっちとで。

佐藤 いや、境目なんてないですよ

中村 じゃもうこの辺一帯は練兵場…。

佐藤 うん、練兵場ですよ。うん。

中村 練兵場ですか。じゃあ練兵場の中を道が通つてるって、そういうイメージ…。

佐藤 そう。そういう感じですね。

佐藤 この地図だとね、この射撃場ってのが偉いおっしゃく書いてあるけど、本当のとこ、こんな大きくないですよ。

中村 ああ、そうですか。

佐藤 うん。

中村 もっとちっちゃいですか？

佐藤 這のこっちから射撃場なんてなってるけど、こんな広くないですよ。この、少なくともこの道のこっち側だけです。こっちもこの辺からだなあ。これぐらいなんだ、射撃場は。こんなところから射撃場なんて、当たるわけねえ（笑）。

中村 これだったら距離でいったら、かなりの距離になっちゃう…。

佐藤 だから先生（笑）。あんなん当たらんですよ。村田銃みたいなのでやってたんだから。

石本 とにかく当たるためにあそこのお宮で拝んで、当たりますように、って拝んで、射撃場いくっていう（笑）。

佐藤 そうか、なるほど（笑）。そうかもしれない。そりゃ信心深いですからね、みんな、昔の人は。そうだ。

中村 なるほど。いや、だいぶイメージが見えてきました。でね、今日いろいろお話をかがつてそろそろね、その高射砲陣地の件もそうですが、陸軍墓地とかね、お墓の件もそうですし、いろいろ、分かったことが多かったです。

註

(1)【第3図】(58頁)dの位置に現在は五泉市福祉施設村松デイサービスセンターが所在する。なおその隣に愛松園と経営母体を同じくする養護老人ホーム桜花寮が所在する。

(2)【第3図】eの位置に所在する特別養護老人ホーム愛松園を指す。

(3)【第3図】fの位置に所在した五泉市立愛宕中学校は、2017年4月同市立山王中学校と統合され、現在は同市立村松中学校となっている。

(4)【第3図】gの位置に所在する矢津八幡宮を指す。

(5)【第3図】hを参照。

(6)【第3図】iを参照。

(7)【第3図】のjを参照。「アップル屋」は、りんご園の別称と考えられる。jには現在佐藤りんご園が所在する。なお1934年の【第1図】(57頁)でも同じ位置に果樹園が確認できる。

(8)【第3図】のkを参照。

(9)前掲(2)を参照。1934年の【第1図】では、

I 調査の目的と概要

該当する場所に墓地の記号が確認できる。

(10) 以下では、【第1図】に掲げた1934年の地図を見ながらインタビューを実施している。

(11) 1934年の【第1図】では、兵営の右斜め上に「熊野堂」という地名が確認できる。

(12) 【第3図】の1を参照。

(3) 中山昇氏・石本光明氏インタビュー

(文字起こし 大島早紀・原田優海)

日時：2016年4月25日

場所：新潟大学農学部附属科学教育研究センター村松ステーション会議室

参加者：中村元、青木由利子、新潟日報記者T氏

備考：中山昇氏は1946（昭和21）年生まれで昭和40（1965）年に新潟大学職員となり、農学部附属演習林村松苗畑で技術専門職員として勤務。石本光明氏は1954（昭和29）年生まれで1969（昭和44）年に新潟大学職員となり技術専門職員として勤務。両氏とも着任以来、旧村松兵営・旧練兵場を利用していた新潟大学農学部附属演習林・農場で長年勤務した経験を有する。

旧兵営内の兵舎等の建物について

中村 旧兵舎は、結構長く使ったわけですね？この形で⁽¹⁾。

中山 そうですね、最後に残った軍隊の建物そのものはこれが最後ですね。

中村 ああ最後まであったわけですか、この、演習林⁽²⁾のところで使ってる建物。

中山 農場がこら辺にあった。

石本 宿舎はあったけど俺が昭和44年に入ったときは農場全然関係なく収納スペースで。

中山 倉庫だな。

石本 ここあとほとんどジャガイモの収納スペース。

中山 それで二階が学生の実習の宿泊棟になっていた。

中村 あれですかじゃあ、最初はそれこそ倉庫みたいに使ってたんだけど後で演習林の管理室の中にできるんですか？そういうわけではない？

中山 その前に演習林ありましたね。

中村 ああ、あった。

中山 年が何年って言われると分かんない、とにかく私が勤めたのが昭和40年で、そのときすでにこれかいぶ使われてましたからね。

中村 ここに書いてあるような名前の管理室⁽³⁾とか

こういうそのところは、こんな名前でお二人が入ったときも使ったような感じですかね？

中山 そうですね、これ学生のトイレだとさ、炊事場、ここで炊事をしたんですよね、食事もここで学生、その時代の学生。

中村 ああじゃあ、ここでこう書きこんであるのはね、この鉛筆書きはいつ頃書いたものなのか、お二人が入ったころの昭和40年代にはこういう使われ方をしていましたわけですかね？

中山さん 40年…以前…昭和40年前ですね。

中村 前ですか。

中山 前にもうすでに使われてましたね。ここからちょっとあっちいきますけど、このへん、昭和40年に勤めてた頃、この事務室にいたんですけどね、管理制度室。

中村ええ。

中山 こちらへんは中学の、まだ、学校として使ったんですよね。このへんの建物。

中村 ああー。

中山 建物あったんですよ。この中学は書いてないけども、それ以前の建物ですね、分かれたのは。

中村 ああー、なるほど。

中山 昭和40年まだいっぱい建物ありました。

中村 あとで徐々にこの建物ってなくなっていくんですか？いくつか昭和50年代にこっち新しいの移ってきましたけど、その前にも端から使わなくなったりは潰していったりしたんですね？そうでもない？

中山 こっち側はね、あの、米軍が焼いてしまったんですよ。

中村 ああ、ここ⁽⁴⁾ですね。

中山 進駐軍がね、それで、このピンクの色⁽⁵⁾がね、

中村 これなんですか？

中山 これは本当に大雑把な境界ですわ。

中村 これは演習林とか大学が使ったところの。

中山 文科省の財産の、そのこっちが中学の、敷地で、中学はなくなったら住宅地として売った。

中村 今この写真⁽⁶⁾では住宅地になっていますよね、こっちがピンクよりこっちっていうことになるわけですか。

中山 あと、これは弾薬庫でこれだけはなぜか国のものだったんですね。

中村 ああー。

石本 実際畠としては利用しなかったけども、草刈とかね、管理してましたね。

- 中村 そこに入って？
 石本 やってましたね。
 中村 建物はあったんですか？ 大学校っていうのは。
 中山 いや、ない、崩れた状態でこんくらいあつただろ。
 石本 うんー、そういうような、あつたけども木そのものは何にもないよね、雑木林はあつたけども。
 中村 その、少年通信兵の後、もちろんその前から、兵舎であるわけですけど、大学が使ってた期間ってのも結構長いわけですよね？ さっきのお話で言うと。
 中山 戦後すぐでないなんかねえ。
 中村 戦後すぐから始まって、こっちへ、昭和50年代に、この管理棟ですか？ それとも向こうにあった、入口のほうに建物があったときにこっちへ来たんですか？
 石本 あれが何年くらいに移ったんだ？
 中山 昭和50年代。
 石本 あそこのところはうちらが入ったときに完全にあそこにあつたんだよ。
 中山 だいぶ何年か経てただろ？
 石本 そうすると30年代とか20年代くらいにあつたのかな。
 中山 20年代ってのは…戦後すぐかはわからないけど…。
 石本 30年くらい？
 中山 そこらへんはね、農場のなんかの書類に入ってると思うんだなあ。
 中村 あ、ありますか。
 中山 どこかにあると思うよ。
 中村 それこそ向こうのヒマラヤスギの方に建物があると、こっちはこっちで使ってたわけですよね？
 石本 演習林として。
 中山 こっちはね、赤いこっちの方はここが演習林の畠として使つたような場所ですよね、グラウンドの3分の1くらいかね、グラウンドの、こっち野球場があつたんですよ、昭和40年は、中学のね。これが3分の1くらい大学が使ってた敷地ですね。
 中村 だから、今見ると建物が建つてますけど、この真ん中の空いているところなんかは演習林の畠として使つた？
 中山 畠として使えない場所も結構ありましたけどね。木造の建物そのものではなくても、土台が残つてしまつたからね。
 中村 なるほど、下の土台があるところは耕さずそのままで？
 中山 こっちは無理だったね、このへんから。
 石本 水門とかここにずっと道路あつたってことか？
 中山 道路なんかなかったよ。
 石本 ここにでかい松がある。
 中山 あれここにあつたやつ枯れた。
 石本 このへんに畠あつたよね？
 中山 もっとこっちね。
 石本 あとブルもあつたね。
 中村 ブルもあつたんですか？
 中山 ブルっていうより農家用水。
 中村 ここに水槽なんて書いてありますよ。
 石本 じゃあここだね。
 中山 それで、このへんのところにウサギの飼育小屋作つたんだ。
 石本 あれ？ このあれでなかつたっけ？
 中山 それ一番最初だ、それがこっちになつたの、この後にきて。
 中村 へー。
 中山 これが最後ここにきて。
 中村 このピンクのが何だろうと思ってたけど、これが使つてる場所を示しているわけですね？ ここから向こうは違うよっていう。
 中山 要するに、門が大学の、その頃は農専だったけど、農専が使ってた、敷地。
 石本 民間の、宅地だよね。
 中村 こっちに①宅地が建ち始めたのはいつ頃ですかね？ 大体でいいんですけど。
 中山 私が勤めたばっかりの頃はね、まだこのへん宅地造成したばっかりで、住宅は3~4軒くらいしかなかつたんだけど、昭和44~5年にかけて一気に増えたね。
 中村 じゃあ中山さんがお入りになった昭和40年頃はまだそんな多くなかつたけども。
 中山 ほとんどなかつたですね。
 中村 じゃあ急に増えた感じになるわけですか。
 中山 そうですね。
 石本 ここらへんまだ建物あるけどね。
 中村 うん、あの体育館の向こう側の。
 中山 うん、体育館の横のはうの町営住宅。
 石本 8戸建てのね。
 中山 こっちも町営住宅になってますけどね、少し。
 中山 弾薬庫はどうなつたんだい？
 石本 弾薬庫は払い下げたね、今はゲートボール場に

I 調査の目的と概要

なってる（笑）。

石本 あれがいつ頃だったんだろうなー、うちら入ったころからしばらくあった。

中村 だからけっこうそういう意味じゃ建物は、だいぶ長くお使いになつたってことだよね。

中山 国として使つたのが最後。

石本 漢れなければまだ使つてるからね。

中村 半分潰れたんですか？

石本 雪ですね。

中村 ああー。

中山 59年豪雪か。

石本 そのとき、大音響と共に。

中山 だってね、瓦破いたってね。

石本 雨漏り三昧でね。

中村 半分潰れてもなお、しばらくは使つたわけですか？

中山 しばらく使つた。

石本 修理してね、完全にね。

中村 これらの図面については、いつ頃の物だろうかっていうのを今伺つて、調べているような感じなんんですけど。

中山 この少年通信兵のものがあると。

中村 もっといいですよね。

中山 面白いかもね。もっと正確でしたよ。

中村 ああそうですか、それはあれですか、捨てられたところから拾つてっていうか。

中山 これと一緒に置いてあったね。

中村 じゃあどっかにあるかもしれない。

中山 かもしれないし、ないかもしれないし。

石本 その後数年前にここにあった古いやつ全部処分した。

中村 処分したんですか。

石本 その中に入つたかもしれない。

中村 残念だ。

中山 物好きがいないとね、残らないかもしれない。

中村 そうですよね。

中山 昔の誰も見てもわからない、捨てるしか。

中村 ああでもやっぱりなんか古いものはあったんですね。

石本 うん、こういう古いものはたぶん事務所にあつたんだろうけど、事務所の中の古い奴とか、全部集めて束ねて業者に持つてもらつた。

中村 なるほどね。

石本 そのなかに入つたのかもしれないね。

旧練兵場敷地について

中村 やっぱりだんだんなくなっちゃいますからね、古いものはね。残つてたのは貴重でしたよ、本当によかったです。

これ、旧兵舎に演習林の事務室があつて、お勤めのときは、こっちにも耕しにいらっしゃ、こっちにも来られたんですか？

中山 ここに演習林ってありますけど、私は演習林のほうは兵舎側、この外側は道路になつますよね、こっち⁽¹⁾へ移つたのはだいぶ後だよなあ。

石本 それ、開墾してもみ穀投入して作つたときは、こっち管理棟で、できて、あとだつたって。

中山 段がそっくり全部移つたのはだいぶ後だつたよね。

石本 うん、だつてこっち建物できて将来にこっち来るんだよって言って、もみ穀前面に撒いた。

中村 それはこっちの管理棟ができた後?できる前?

石本 できた頃だと思うけどね。できてから完全に移つた。

中山 牛よりも遅いんだ。

石本 そりゃそうだ、だいぶね、こっちが名残惜しいのか知らんけどね（笑）。

中山 畑が残つてた。

石本 それで開墾して、完全にふかふかになるようになってから移つたんだよ。

中村 一番最初は練兵場で、その後農専が来て一時耕したじゃないですか、こっちも。

中山 ここはね。

中村 こここの農場やつてるときって、もう完全に昔の、例えば塹壕なんてのはあったんですか？

中山 ないね、このへんは。塹壕はね、この辺はあつたかもしれないよ？

石本 この辺は松藪だったからね。

中山 戦後どさくさに割れて誰も手入れもしない。

中村 あ、こっちのほうは。

中山 それでね、松藪で塹壕もあったね。

中村 今はきれいになつますけど、あるところからこっちは藪だったわけですか？

中山 貞ん中の、舗装道路ありますよね、舗装道路からあっち側は比較的…。

石本 畑 105口あって、その次のあたりが。

中村 このへんが三角ですか？

中山 もうちょっとこっちまできて、三角のあたりは

荒れ地になつたんですよ。

中村 ここまですか？ ここが今管理棟ですよね。

石本 これが今放牧地⁽¹⁾だよね、ここもうちら入ったときは完全に林つていうか、桐林があつて、けっこう茅とかあって、そこから茅買つて、スイカの敷き壠にしたの。

中村 このへんはもう。

中山 三角は全部じゃないけど。

石本 この部分は林。

中村 ここ林だったんですか？

中村 こっちのほうは？

中山 松林で。

中村 松林の中はなんかありましたか。

中山 ありましたね。

石本 結構、キノコ採りとかけっこ行ったよね。

中山 この辺にね、軍隊の、本当かどうかわからないけど、毒ガスかなんかの処分施設が、あってね。それ建物は、中はなんにもなかつたけど。この辺一帯は塹壕いっぽいありました。

中村 下の方にくねくねと？

中山 下つていうか、地面掘つて、兵隊さん隠れて訓練する。

中村 ちょっと深くなつてる？

中山 そういう場所もありましたし、警がつて、塹壕も掘り方があるんだろうけど私はわからない。この一帯はそういう場所でしたね。

中村 あ、そっち側にもあつたわけですか。

中山 この道路まで。このへんはわかりませんけど、この辺全体はいっぽい塹壕ありましたよ。

中村 今牛舎⁽²⁾になってるあたりなんかは？

中山 も、ありました。

中村 それは中山さんがお入りになつたころですか？

中山 やっぱり演習林として整備する前。

中村 ああーなるほど。

中山 ですねえ。

中山 防空壕はこっちにあつたことはないね。

石本 ない

中村 今建物があつたとおっしゃつたのはこの辺ですか？

中山 真ん中くらい。

石本 5番圃場にあつた建物って移築したものなのかな、一番下の、果樹園の方。

中山 果樹園の管理棟みたいな。

石本 うちら勤めたときもあつたのさ、あれがどうい

う利用の仕方してたんだろうね。

中山 あれもなんか使ってたんだろうね。

石本 ここ職員の宿舎に提供されて。

中山 管理宿舎みたいな。果樹園に。

中村 けっこう古いようなものだったんですか？

石本 けっこう古かつたね。

中山 ちなみに、これが、これですね。

中村 そこでちょうど分かれていますもんね。

中山 この中に防空壕いくつありましたね。

中村 ああー。

中山 防空壕いくつぐらいだったかな、この辺に2つぐらいあったし、こっちの方にも2つくらいあったな。

石本 で、畑も、トラクターでどかっとやってたな。

中山 意外にわからないもんだね。

青木 ここはもううちの土地ではないです、売つている場所。

中山 そこを売つて、ここ⁽³⁾を整備するために回しましたよ。

中村 ああー、なるほど、ここの敷地を売つてこっちを整備したんですね。

中山 そうです、この建物を造つたり、トラクター買つたり。

青木 へえー。

中山 あの頃はね、政府の方針でなんかするにはなんかを出しなさいみたいな。

中村 ここはだからあれですよね、もともと旧兵舎にあつた建物に演習林も入つてこっちでやってたんだけども、旧練兵場側へ移つてくるって話になつたときにはその準備なんかやつてるときには防空壕や塹壕なんかは。

中山 ええ、いっぽいありました。松藪になつたもんで。

石本 放牧のところもみんなあつたんだよね。なぜか簡単に。

青木 ね、耕しちゃつた。

中山 松の木切つてしまつて、松だけでない、雜木も切つて、それで根っこまで取つたからね。

石本 整地したんだ。

中山 そのとき塹壕はほとんど平らになつてしまつて。今一部しか残つてない。

中村 こっちの方ですよね。

石本 この前耕した、あれぐらいなもんさ、あるとしたら。

中山 あと昔のウサギ小屋の端っこがちよつとある。

I 調査の目的と概要

中村 あの辺サギ小屋？

中山 あの辺一帯サギ小屋。

中村 それこそこっちの方ですもんね。

こっちの方からモノが出てくることはあったんですね？耕したりして、砲弾とか。

中山 それはSさんの机の上によく上がったて。

石本 だってあれは畑から出たもんだと、言うことで机の上に無造作に置いてあつたっていうね。こっちに移ってくるわけだけど、建物壊したけど、Sさん辞めたとき持ててかないもんね。

中山 持って行かないけども、邪魔なだけ、誰かが捨ててしまったんでないの？

石本 うんー、それが業者が持っていたか。

中村 (笑)。

中山 あと薬莢みたいなのもあったけど。

石本 それは俺見ないけどね。

中山 砲弾の弾だけあった？

石本 弾はこういう丸いやつ、2つ、二種類あったけどね。

青木 こっち移ってきてからも出て…。

中山 しばらくないんだよなーと思ったら、たまたまどっかから出てきたんだよな、畑から、それで理科室のそっちのほうに投げてあったんだけど、Wさんが持っていたんだよな、これ貴重だとか言って。

青木 一番最近に出たのがそれですか？

石本 うん、ここへ来てから。

中山 ちなみに道挟んでこっち側が、下の方、整理した戻のほうありますよね。

中村ええ、これ。

中山いや、その上、畑みたいになってるでしょ。

中村ああ、こっち。

中山これ、最後営林署の畑に使ったんですけど、これ、この辺は射撃訓練場の。

中村ああ。

青木ああ、先週その土地を持ってる方とたまたまお話ししたんですけど、今デイサービスとかになってるそっちのほう。

中山今愛宕中学の。

青木奥？

中山いや、建物そのもの。

青木なんか射撃場があったって…。

中山射撃場があった。

中村実際ね、これ大正時代の軍の資料なんですが、これを見るとね、たしかに道挟んでこっち側に射

撃場って書いてあるんですよね。

中山この道路っていうのは、リヤカー1台通るくらいの道通ってますからね。

中村ああ、そうなんですか、ならかなり狭い道だったわけですね。

中山それで兵舎から兵隊さん出ていくときに、歩いていて射撃場行く前に、ここに裏にはこらがありますよね、そこへ拝んで、弾が当たりますようになって、そういう言い伝えがありますよ。

石本だから、俺も実際中学の時弾拾い行ったからね、射撃場のことに。いろんな形の弾とか出てくるもんね。そこに鉛流し込んでベンダントにしたりしてたけど。

青木(笑)おしゃれですね。

中山こっち⁽¹²⁾から砲弾が出るってのは、本当は、射撃場がないんだけどね。

中村ああ、そうですね。

石本たまたま練習で間違って飛ばしたみたいんじゃないのかね。

中村この敷地の中で例えば昔の少年通信兵とか軍隊の時とかのゴミ捨て場みたいなのはありましたか？掘るとやたら缶みたいなの出てくるとか。

中山いや。

石本ただね、皿の破片とか、あれってその戻にあるんだけどさ。

中村あるんですか？

石本あれってなんであんなとこ捨てたんだろうね。

中山わからない。

中村ありますか？戻のところに。

石本俺も春先ちらっと見てきたんだけど。

中山登り口のあたり。

石本登り口っていうかちょうど林の茂っているようなあたりなんだけど。なんかね、コップみたいなのとかさ。

中山軍隊のゴミ捨て場はどっかにあると思うけども。

中山ちなみに軍隊の水道が旭山の、なんとか山。矢張のこれが、この辺にちょっとした小高い山があって、山の上に軍隊の水揚げて、兵舎の中に入れる水道のあれありましたよ。

中村施設みたいな？

中山施設みたいな。

中村今、指していただいたあたりに、お墓の跡のような、要是陸軍の墓地みたいのがあるとかないとかいうのは、それはそこじゃないんですか？

中山 いや、聞いたことないな。

石本 あれは結局、あれでしょう、愛松園だったとこ。

中山 その辺にあったんだ。

石本 そこに墓あったですね。

中村 お話を伺ってると、塹壕の跡みたいのがけっこうこっちの方もいっぱいあったわけですよね？

中山 いっぱいありました。

中村 それが今残ってるのが裏手のあたりのごく一部っていうことですよね。これが発掘なんかして上手く時代が出てくれば、非常に歴史の遺産っていうかね、なるんだろうなって。

中山 そういうのが出るって~しかないですけどね。

中村 あと、さっき言っていたいたい畠なんかが出るようなところ。

石本 もうね、かけらみたいなのね。

中村 今もありますか？

石本 多分あると思う。

中村 古いんですか？

石本 俺春先ちょっと見てきた。それがその軍隊当時なのか、例えば農専時代に捨てたのか、ここ的新潟大学になってから捨てたのか分からないですね。

中山 新潟大学になってから捨てる子は…。

中村 わざわざね。

石本 なぜか林の一部のところにね、そういう場所があるんですよ。

中村 今けっこいろいろなところで軍隊のことなんか調べるも、そういうゴミ捨て場なんかを調べて、いつのものなかって考えるのをやるらしいですよ、だからそこへ行ってみて古いものだってことになれば、遺構も軍隊時代の物だっていう有力な証拠になってくると思うんで、ぜひそれもあとで教えていただければと思います。

石本 うっかりすると、どこだっけってね。

中村 だんだんこれからね、草だらけになってきちゃうから、今くらいの時期に拝見するのがいいのかなと。

青木 テレビとかも捨ててありますね、頭の大きいテレビというか、あれはもう最近のなんでしょうね？

石本 ボイラー室のどこにロッカーがあるじゃない？

青木 ボイラー室？入れます？

石本 ボイラー室今なくなつたんだけどさ、今はガスになつて。このどこかにロッカーがあるんだけど、そこに古いやつとかいっぱいあったんですよね。

青木 あったんですね。

石本 一気にね。下手したらあのロッカーの中にこう

いうものがコーナーとしてあるかなって思ったの、事務所の。

中村 事務書類とか？

石本 道具とか。

中村 もしあれだったら一回見ていただければ。

中山 運営委員会の書類なんかがいっぱい入ってたと思うんだ。

青木 運営委員会の？あんまり大事じゃなかった？

中山 昔のものですからね、昭和40年過ぎ。

石本 ロッカーあけてみないと分かんないね。

中山 なんか古いのあるなっていう。

石本 あれはだってロッカーそのものはうちらがわざわざそこに設置したものだからね。

青木 あ、それは使ってたんですか？

中山 その前にあっちから持ってきたんだろ？お前たち運んだんでないの？トラクターで。

中山 それは全く記憶にない。

青木 一応あとでロッカーの場所教えてもらって、ちょっと見てよろしいでしょうか。

中村 なにか出でてくればね。

青木 ばばっとだけでも中村先生いるうちに。

石本 ほとんど事務のなんかだね。

中山 農場委員会かなんかの。

中村 最後に撤収するときのこういうのでもあれば、いくつか図面を見比べて、使い方はこうこうありますとかね、あればね、それもいいんじゃないかと思いますけどね。

中山 けっこう詳しいね。

中村 けっこう詳しく書いてあるんですよ、いろんな使い方を。

青木 使ってたんでしょうね、これからすると。どんな字だっていうのはわかりますか？

中山 わからない。

青木 もしかしたらと…。

中山 俺なんか入るずっと前の。

中村 達筆なんですよね、書いてる人が。

青木 なんか特徴あればね、意外に。

中村 この「貯蔵」っていう字の「藏」っていう字も、崩し字でうまく書いてる。

中山 やっぱり教官の仕事だろうな、事が時間がないうから。

ふたたび旧兵舎について

中山 この②の建物も古くない？

I 調査の目的と概要

中村 一番正面の？

中山 一番正面の。

中村 そこは宿舎みたいになつたんですか？

中山 これもね、俺たちが入つたころはジャガイモの乾燥。

石本 こっちにも入れたよ。

中山 Tさんって人が。

石本 Tさんって人が住んでたんだよね。

中山 用務員さんでなかつたかな、Tさんって。

石本 Yさんはどこにいたの？

中山 Yさんはこっち側でなかつたかな。

石本 ほー。

中山 Kさん、Yさん。

中村 ここは養鶏だの養豚だの牛馬だの書いてありますけど、そういう使い方はもうしてないわけですか？ そのころ。

石本 牛馬の建物はあったよね。

中山 技官の方が住んでたりしたもんだから、この建物2つは廻しまで残つてましたね。この隅も1つ残つてたけど、なんの建物だかは記憶がない。

石本 牛馬のあともあって、ここで牛のやるために、牛馬のほうにもサイロあつたんだよね、このサイロの日誌をここからこっち持ってきて利用した。

中山 サイロも3つ4つあつたよね、1つ2つではないな。

石本 うん、もっとあつたね。

中村 ここに農夫住宅だの農産製造室だのって書いてありますけど、そんな呼び方は今はしてないわけですね？

石本 跡形もないもんね。

中村 すみません、話があつちいったりこっち行つたりなんですが、この三角っていうのは三角なんですか？ ここから向こうは早くからやつてたけど、ここから下が後から、そういうことですか？

中山 もともとはあつち入っていくところに道路がある、馬車が通るくらいの。

中村 ここが？

中山 いや、ななめの。

中村 ああ、これが。

中山 あとはそれ軍隊から帰ってきた連中が開墾したりさ、学生さんが明けでも暮れでも開墾だつたなんて話も。羽田さんがその時代の人。

青木 すごい大変な時代だったそうです。

中山 それで芋蟹って。

青木 すごく大変だったって、戦前・戦中でしたからね。

中村 こちらもね、塹壕があつて、この裏にもあって、こちらもあったわけですよね？

中山 そのへんも本当はあつたと思うけれども農専なつて、開墾したってことじゃないでしょかねえ。

中村 お二人が入られたときにここまでではもうやつてあつたんですか？ この三角よりも下まできました？

中山 だいたい使ってたよな。

石本 うん、この区画は、この辺まではしてある。

中村 この辺まではしてあるわけですか。

石本 でこれはねちょっと飛び出すような感じ。

中村 ななめみたいになつてねえ。

中村 はあはあ、じゃあこんな感じなわけですか。

中山 そうですよ。

中村 なるほど。あ、じゃあけっこう。

中村 じゃあこういう感じで、あれなんですね、載が残つてるような感じなんですね。載の中にちょっと掘つてたっていうね。

中山 ちょっとどころじゃない、だいぶありますよ。俺の感覺ではね。

中村 深かったです？ けっこう。

中山 落ちたりなんだりそう深くはないけども、明らかに人為的なものがありますね。

中村 裏にあるのも明らかに掘つたような感じですもんね、人為的に。ああじゃあそういうのはかなりあつたんですね。

石本 裏の方にもね、もっと先にもあつたと思うんですよ。町には除雪のね、ああいうのに貸したりしたわけだから。どんどんどんどんブルでこっちのほうに押したんですね。だから、すぐななめに高台みたいになつてた。実際あれは山なの。

中村 あ、山なんですか。

石本 昔は一山あったの。

中村 それが押して押して壊みたいになっちゃつてる？

石本 それは業者がほとんど持つてたよね。

中山 だいたい隠してた。全部、良い杉の木なんてあるとさ、それを切つていつの間にかなくなつてた。

青木 えー、それは盗られちゃうんですか。

中山 どうなつてたんかねえ。俺は入つたばっかりの頃だから怒られると思って何もわからない口出す立場じゃない。

石本 今言うと完全に恵着してたんだろうね。

中山 直すたって予算もローンで、杉を切って、杉の木代わりに使ってさ。

青木 現物ですか。

中村 Tさんこっちはかなりそういうのがあったみたいですね。

T氏 そうみたいですね。

中村 なにかありますか?

T氏 基本的な事なんですか、この校舎ってできたのいつなんですか?

中村 こここの建物ですか?

T氏 この建物。

青木 昭和50年ですね、ちょうどその遠藤先生が来られたころなので…。

石本 昭和53年。

中村 昭和53年ですか。

青木 53年12月です。村松農場管理宿泊棟完成。やっぱ農専の方々っていうのは思い入れが当時あったのかなあ、入り口が反対になるっていうことで碑の移設を願ってたっていう話がちょっとあって。

中村 ああ、それね。

青木 碑の移設自体はあれだったんだけど。

T氏 先生が書いたこれと一致するわけですね。

中村 ああ、そうですね。

T氏 できるまで現兵舎を利用してあったけど、実際はもうちょっと使ってたっていうことですよね?

中山 使ってましたね。4~5年使ってたかなあ。

青木 最終的には取り壊して、いたのが何年くらいだったんでしょうね。

中山 で、学生が、こっちへ宿舎がないもんだからね、しばらく学生実習でこれ使ってたんですよ。

中村 ああ、実習で。

中村 じゃあこの頃の学生の人だったらここに泊まつたことある農学部のいるかも。

中山 いるんじゃないですかねえ。

青木 そいえば岡崎先生もこの前來られた時少し記憶があつて、まだあったということなので。

中山 カミタニ先生なんか実習で来てたんでないかなあ。

青木 いつでしたっけ?お会いになりましたっけ?8月にカミタニ先生来られて中村先生その時。

中村 いやあ。

中山 ちょうど来るか来ないかくらいの年代だと思うんですよ。

青木 あとは農業系の学科の人しか来てないんですよね、だから岡崎先生は建物は覚えてるんだけども森林系とかの方だと。

中山 森林はねえ、泊りに来てる。化学、第二学科の人は来ないんだわ。

青木 ああ、そうですね、たしかに。

中村 まだこれくらいに泊まってるんですけど、一番最後の人はまだ定年になってない先生もいるんじゃないですかね。

青木 いますね。

中山 いると思いますよ。

中村 じゃあちょっと誰か聞いてみるといいかもしませんね。

青木 まあちょっと私はあれですけど、例の同窓会の関連の話もあるので、その時一緒にいた人もいいかもしれません。

中村 なるほど、そうですね。

青木 また五十嵐のほう行きましょう、その時は。

青木 あつたんですよ、同窓会の、進藤先生っていうんですけど。

中山 聞いたことがあるな。

青木 その方は同窓会長だった方で、その方からお話を聞いてくださるそうなので。

中村 それはいいですね、そうするとここへ泊ったとのある人たちの話を聞くと学生からするとどんな感じだったか。

石本 そこまで覚えてるかどうかわからないけど。

中山 昭和40年に学生っていうと、いまいくつだろくな。

中村 昭和40年に学生っていうと、けっこう、けっこういってますよね。

石本 90ぐらいですか。

中村 だから、最後の最後の方の例えば昭和50年ごろに学生だった人は今ちょうど65に近くなってるかもしれませんね。

青木 カミタニ先生お判りかもしれませんね。

中山 カミタニ先生そんぐらいの年になってきたろ。

青木 はい、そうなんです、なってきますね。

中山 森口先生は来てないかな。

青木 若いですね。井口先生は中田先生より記憶がなかったんですね。

中山 来てない。

青木 来てないみたいでした。

T氏 この管理棟ができる直前なんんですけど、ここを

I 調査の目的と概要

使ってたわけですよね？

中山 はい。

T氏 それでこっち開墾していくわけですよね？

中山 こっちですね。

T氏 ああ、こっちか、そうか、ここから通って行つてたってことですか？

中山 寝泊り、風呂だのみんなここを使ってましたからね、ここは出ていったんだね。

T氏 もともとはこのあたりに農場があったわけだけど。

中山 農場はもっとこっちですね。

中村 ここの中はまた別の畑ですね。

中山 ここは演習林。

T氏 あ、別のあれなんですか。

石本 要するにこの場面ですね。

中山 農学部のものではあるけど、こっちが農場でこっちが演習林ですね。

T氏 あ、違うわけですね、なるほど。

T氏 当初からこっちを使ってたわけですか？

中村 元々向こうは練兵場があって、農專が耕したりして、そっちですね。

T氏 あ、そっちなんですね。

中村 で、それが一番向こうのその端のほう。

T氏 ここは農学部と関係なかったということですね。

中村 ここは建物としてはその農学部が使ってたんだけど、演習林がここ使いだしたのもあとですよよね？

中山 あとですね、でもあっちいったりこっちいったりなんという話はよく聞いてるけど。

石本 三か所くらい動いたんでないかい。

中山 開墾しては農場に取られ、俺の先輩がそういう話をしましたからね。

中村 中山さんが入られたときはすでに使ってましたか？

中山 ああ、演習林として使ってました。昭和35～6年から使い始めたんじゃないかな。なぜかね、私中学野球してたんで、ここで町の大会ここグラウンドですね、こっちにバドミントンあって、グラウンドで野球の試合して、ここすでに畑になってたんですね。

中村 あーなるほどそれで覚えてるわけですか。

中山 中学の時なぜか覚えてて。自分が勤めるとは思わないで（笑）。

青木 農場はいろんな方に使われてる場所なんですよね。そういう町の人が村松大火で学校として使ったと

か。

中山 それは全然聞いてない。

青木 そういうのは関係なく、その後の時代ですか。

中村 35～6年にここをそう使ってた、で、40年に入られた時はここは完全に。

中山 35～6年に演習林として開墾始めたんだよ。これおそらくグラウンドって書いてあるのも園庭ですね。

中村 要はね軍がいたときの前庭ですもんね。当然軍隊のときには畑にはしないわけだから。

中山 防空壕がこの辺に。

中村 建物の位置と関係させると、中ですか？

中山 中にね、防空壕が、畑の下になってるってわかるんですね。それでこの辺に防空壕があって、2つつか3つくらい。

中村 この辺に。

中山 この辺にもありましたね。

中村 そうですか、へー。

T氏 これは？

中村 これは旧軍の時の。

T氏 旧軍のときもあったわけですね。

中村 この敷地自体は相当古いと思うんですよ、この建物自体。

中山 ただこの辺はね、自動車修理したりなんかする場所だったということは聞いています。

中村 こっちのほう？

中山 このへん。

中村 ああ、ここら。

中山 戰争負ける頃の話でしょうね。

中村 ああー。

中山 納き砂利をしてね、砂利固めしてある場所ですからね。

中村 ああ、ここいら。

中山 はい。

中村 じゃあ畑なんかやる時は邪魔になる？

中山 ちょっとね、硬くて大変ですよ。人力では無理だった。機械で掘り返さないと。

中村 ああー。

中山 木を植えようという話があつたんだけど、とても掘れなくて。機械なしでは。

中村 なるほど。

中山 飛行場はどこだったんだろうね。

石本 あの、なまに向かって。

中山 戰争、三角の飛び出しからずっと住宅の裏の

方つていったよなあ。

中村 こっちの方なんですよね?

中山 うん。

石本 だからうちら入ったときさ、測量の入ったんだけど、敷地こうあるじゃない。この線よりも畳飛び出してたよね。

中山 んだよな。

石本 住宅のほう。

中山 道路自体がさ、大学のほうに入ってる。それで測量して右と左から測ってくると絶対合わないのさ。あとで本部の連中が来て地元の地権者と話し合いしてなんとかまとめたんでないかね。その頃は開拓はなかったから、私は事務の仕事で。事務員はダメのさ、2~3年で異動するから。

中山 現場の時間押さえとかないとさ。

石本 我々だけ回って歩いたんだよね、何年計画じゃないけど、その時びよーんと飛び出た部分あった、それだけ記憶あるのさ。

中山 連中は中に入ってきたからさ、許可したかどうかは分からぬ。

青木 何年かがかりで貴種職員の方は調査したんですか?

中山 こっちの測量したのはね、建物の牛小屋の裏あたりからさ。

青木 作る必要があつて測量したんですか。

中山 移転があつて、この建物から移転がらみで、山本先生が測量士の免許持つてたから、引っ張り出してさ、右と左と比べてしまいに民間の畠、道路なんか見えなくなっちゃつた。

陸軍標柱について

中村 この後見せていただこうと思うんですけど、中山さん に案内していただいたんですけど、こっちの方に陸軍の標柱が三つくらいありましたけど、もっとこっちの方にも会った記憶中山さんあります?

石本 それはね、こっちの方に中山さん あったかね。

中山 うん、あったよ。

中村 三つあったんですね?

石本 あつた。

中山 陸軍のがたぶんここにあって。

中村 あ、ここにもありましたか。

中山 ここにあって、それからね、この辺にあったのいつの間にかなくなつて、ここにもあって、小さい三角ね。

中村 あ、こっちだ。

中山 ここに三つあったでしょう、これはね、文科省の杭だと思う、あっても。

中村 この三角のところだ、ごめんなさい。

中山 このちょっとした飛び出した三角のところで、頭、こっちだ。

中村 ありますね。

中山 これはね、よく邪魔にしてましたね。

中村 ここから入れますか?

石本 うん、まあ、民間開通すれば。

中村 じゃあこっちも行ってみていいですか?

石本 要するにここ?

中村 この角、前中山さんに案内してもらったココだと思うんですよね、この角にもあるっていってたんですけど。

石本 これは結局、ここが杉なんだよ、この前渡波のステーションで松切ったときに。

青木 きれいになつてるとこ。

中村 じゃああればわかりやすいかもしれないですね。

石本 角はまだ見てないですね。

中村 塵埃があるのはこの裏でしたっけ? このへん? もうちょっとこっち?

石本 結局牛舎が? これが器具庫、うちら歩いて、この辺に道あつたでしょ? この辺にあつたんだったな。

中村 ここが盛り上がつてることですか?

石本 うん、で、ここがちょっと色変わつてるあたりが平らになってるんだけど、うちらの土地のほうでガクッと下がつてる。で、この辺がうちらが歩いて三角になつてるとこ。

中村 ごみ捨てのところがあるってのはこのへんですか?

石本 ごみはこっちですね。

青木 今見やすいかもしれないですね。

石本 このへんかなあ、破片とかある、徳利の破片とか。

青木 割と近いかも、こっちから行つたらそんなに大変じゃないかも。

註

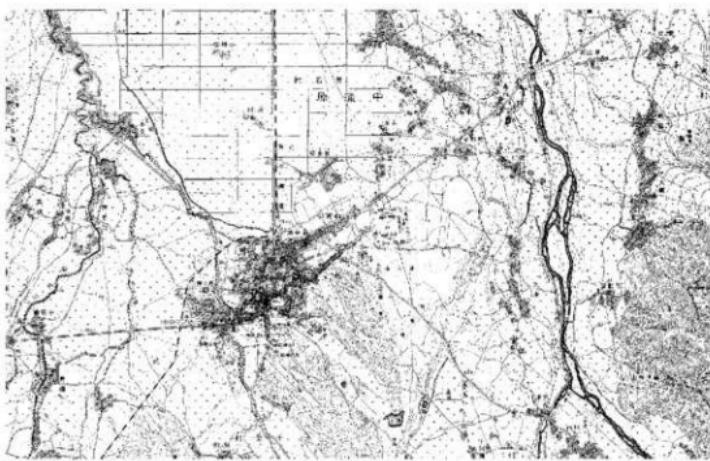
(1) 本インタビューは、2014年に元職員の方から村松STに寄贈された「建物配置図」(59頁の【写真2】)を参照しつつ行われている。

(2) 「演習林」とは、農学部附属演習林村松苗畑を

I 調査の目的と概要

指す。新潟農専林学科に由来し、1956（昭和31）年4月より旧農専校庭内に所在していた農学部の付属組織であり、旧練兵場で畑作物等を研究していた村松農場とは組織としては別個に存在した（『新潟大学二十五年史』部局編、新潟大学、1980年、918頁）。本インタビューで参照している「建物配置図」（【写真2】）には、鉛筆で多くの書き込みがなされており、【第2図】（57頁）の⑤の位置にある建物に「演林管理室、倉庫、廊下」や「農場貯蔵庫、廊下」などの記載が確認できる。

- (3) 「管理室」等の言葉は、前出の「建物配置図」（【写真2】）の建物に鉛筆書きで書き込まれている。
- (4) 【第2図】の⑤の位置を参照。
- (5) 「建物配置図」（【写真2】）内には、ピンクの線が書き込まれている。
- (6) 【第3図】（58頁）を参照。
- (7) 【第3図】のmの辺りを参照。
- (8) 【第3図】のbの道路より南側の 旧練兵場敷地を指す。
- (9) 【第3図】のnを参照。
- (10) 【第3図】のoを参照。
- (11) 【第3図】のpを参照。現在の管理棟を指す。
- (12) 旧練兵場の現在の農場を指している。



第1図 村松兵営周辺図



第2図 兵営内建物配置図

五泉市村松郷土資料館所蔵「村松通信学校」図面を基に作成し、用途と番号については、村松少年通信兵学校生徒であった大口光氏が作成した『心のふるさと・村松』(非売品、2013年)の配置図に従った。

I 調査の目的と概要



第3図 新潟大学農学部附属村松農場 空中写真（1994年撮影 新潟大学農学部所蔵）

この写真是、1994（平成6）年7月24日に新潟大学農学部附属村松農場（現村松ST）を空中撮影した1:5000の写真である。農場敷地や建物の位置は、現在の村松STと大きく変化していないため、旧線兵場敷地が村松STでどのように利用されているかを知ることができる。なお農場の上方の旧陸軍建物等があった敷地には、現在は五泉市村松体育館（さくらアリーナ）や五泉市立愛宕小学校となっている。



写真1 新潟農専農場牌

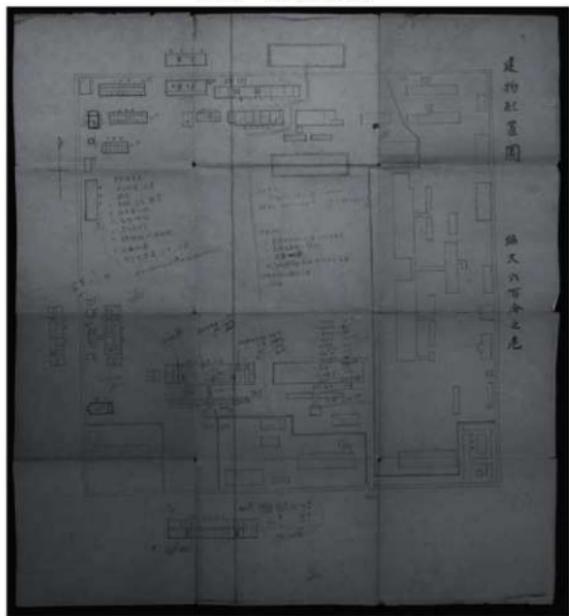


写真2 建物配置図

I 調査の目的と概要

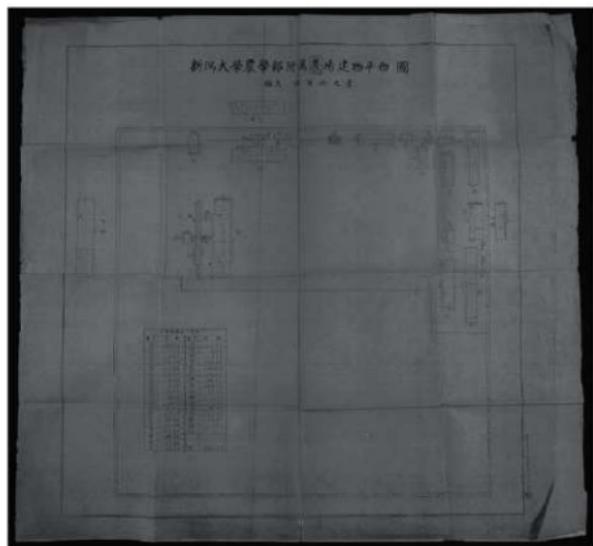


写真3 新潟大学農学部附属農場建物平面図

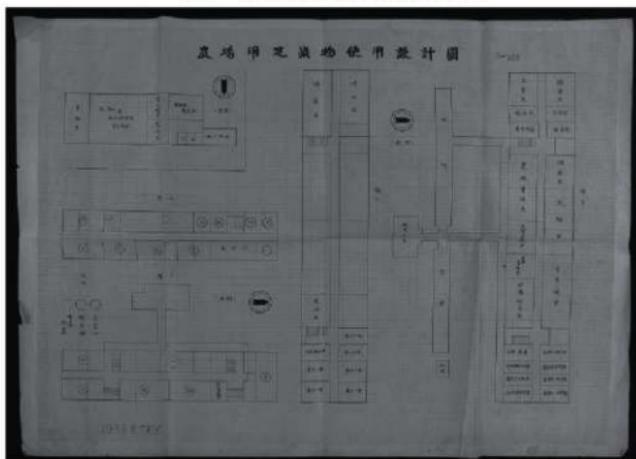


写真4 農場用建築物使用設計図

3. 調査の目的

新潟県五泉市の新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーションは、明治30年以降、旧陸軍の村松練兵場および射撃場として記録に残されている。

先行研究である中村 元氏による旧陸軍関連施設の調査では（中村 2017）、現在の管理宿舎棟、東側の樹林内に残る堀・溝状の遺構と、旧陸軍時代の練兵場にあったとされる「蟹塙」跡との関連について、さらに村松ステーションの「戦争遺跡」としての性格の掘り下げ、旧軍施設と地域社会の関係の考察という方向性が示されるなかで、学問的および地域貢献の上でも、歴史的価値を確認することの重要性が指摘されている。

そこで、新潟大学考古学研究室では、2019年・2020年に「戦争遺跡」としての位置づけを行う目的で、村松ステーションにおいて本格的な踏査および発掘調査を行った。
(清水 香)

4. 調査の概要

<調査体制>

2019年度 第1次調査（発掘）

調査主体：新潟大学考古学研究室

調査責任者：清水 香（新潟大学人文社会科学系 助教）

調査協力者：中村 元（新潟大学人文社会科学系 准教授）

調査参加者：大森千尋、小林舞花、佐藤菜々美、長谷川真志、野呂 楓、平山千尋（人文学部4年）、山木円香（3年）、青木亮子、阿部紀佳、舟山直希、松井翔吾（2年）、草牧里佳、村上ちひろ（理学部4年）

調査期間等：2019年8月18日（日）～2019年8月24日（土）

<第1次調査の経過>

8月18日（日）晴れ：村松ステーション到着。荷物の積み下ろしを行う。

8月19日（月）晴れのち雨：中村先生から遺跡についての説明を伺い、現場踏査の後、調査開始。堀・溝状遺構地帯草木の伐採。悪天候のため午後からは室内で整理作業を行う。

8月20日（火）雨：悪天候のため室内で整理作業を行う。

8月21日（水）曇りのち雨：堀・溝状遺構地点、遺物集積地点にて草木の伐採および杭打ち、写真撮影。

8月22日（木）曇りのち雨：堀・溝状遺構地点にて遺構の上端、下端の確認作業。遺物集積地点では引き続き草木の伐採、杭打ちを行った後 SU01 のペルル設定および写真撮影。

8月23日（金）晴れ：堀・溝状遺構地点において平面図作成。遺物集積地点SU01の平面図作成および掘削、SU02の遺物の記録および取り上げ。写真撮影。

8月24日（土）晴れ：引き続き遺物集積地点SU01の掘削およびSU02の遺物取り上げ。遺物集積地点SU01の保護のため、ブルーシートで被覆し撤収。写真撮影。

<調査体制>

2020年度第2次調査（発掘）

研究主体：新潟大学考古学研究室

研究責任者：清水 香（新潟大学人文社会科学系 助教）

調査協力者：中村 元（新潟大学人文社会科学系 准教授）、卜部厚志（新潟大学災害・復興科学研究所 教授）

調査参加者：長谷川真志（考古学研究室OB）、浅見希徳、佐藤由美、山木円香（人文学部4年）、青木亮子、阿部紀佳、舟山直希、松井翔吾（3年）、新井健太、遠藤純夏、大島早紀、野村郁仁、原田優海、宮島龍志（2年）

II 村松ステーション旧陸軍関連施設跡の環境

調査期間等：2020年8月17日～2020年8月21日、2020年8月24日～2020年8月28日

<第2次調査の経過>

- 8月17日（月）晴れ：村松ステーション到着。堀・溝状遺構地点および遺物集積地点で草木の伐採を行う。
- 8月18日（火）晴れ：軍用飛行場地点にて草木の伐採と第1～3トレンチの設定および掘削を行う。遺物集積地点にてSU01の第1次調査で設定したベルトを確認し、北の4分の1の区画の掘削を行う。堀・溝状遺構地点にて第1トレンチの設定および掘削を行う。
- 8月19日（水）晴れ：軍用飛行場地点にて第3トレンチの壁面および周囲の清掃を行う。村松ステーションの高橋能彦先生より周囲の環境、圃場についてお話を伺う。杭G1、杭G2を設定する。遺物集積地点にて北の4分の1の区画の掘削を行う。堀・溝状遺構地点にて第1トレンチを掘削する。
- 8月20日（木）晴れ：軍用飛行場地点にて第2トレンチと第3トレンチの壁面を清掃する。遺物集積地点にて北の4分の1の区画の掘削を行う。堀・溝状遺構地点にて第2トレンチを設定し、第1トレンチのサブトレンチの設定および掘削を行う。
- 8月21日（金）晴れ：軍用飛行場地点にて第1トレンチと第2トレンチの壁面清掃および分層を行う。遺物集積地点にて北の4分の1の区画の掘削を行う。堀・溝状遺構地点にて第2トレンチを再度設定し、第1トレンチのサブトレンチを掘削する。
- 8月24日（月）晴れ：軍用飛行場地点にて第1トレンチを拡張し、拡張部を掘削する。第2トレンチの断面図を作成する。第3トレンチを拡張し、さらに掘削する。第4トレンチを新たに設定し掘削を行う。遺物集積地点にて北の4分の1の区画の掘削を行う。堀・溝状遺構地点にて第1トレンチと第2トレンチを掘削する。
- 8月25日（火）晴れ：軍用飛行場地点にて第1トレンチの壁面清掃および分層を行う。また、東壁で確認した落ち込みのラインにテープを張り写真を撮影。遺物集積地点にて北の4分の1の区画の東壁と南壁の断面図を作成する。堀・溝状遺構地点にて第1トレンチの掘削および壁面清掃を行う。第2トレンチを掘削する。
- 8月26日（水）晴れ：中村先生に村松練兵場についてのお話を伺う。軍用飛行場地点にて第1トレンチの断面図を作成する。第3トレンチと第4トレンチの壁面を清掃する。堀・溝状遺構地点にて第1トレンチの壁面を清掃する。第2トレンチの掘削および壁面清掃を行う。
- 8月27日（木）晴れ：軍用飛行場地点にて第1トレンチの西拡張部の落ち込みのラインを検出する。第4トレンチの分層および断面図作成を行う。堀・溝状遺構地点にて第1トレンチの断面図を作成する。第2トレンチの掘削を行う。
- 8月28日（金）晴れ：軍用飛行場地点にて第1トレンチの分層および断面図の作成を行う。第3トレンチの分層および断面図の作成を行う。土層サンプルを採集する。堀・溝状遺構地点にて第1トレンチの断面図の作成を行う。第2トレンチの掘削および分層、断面図の作成を行う。土層サンプルを採集する。
(阿部紀佳)

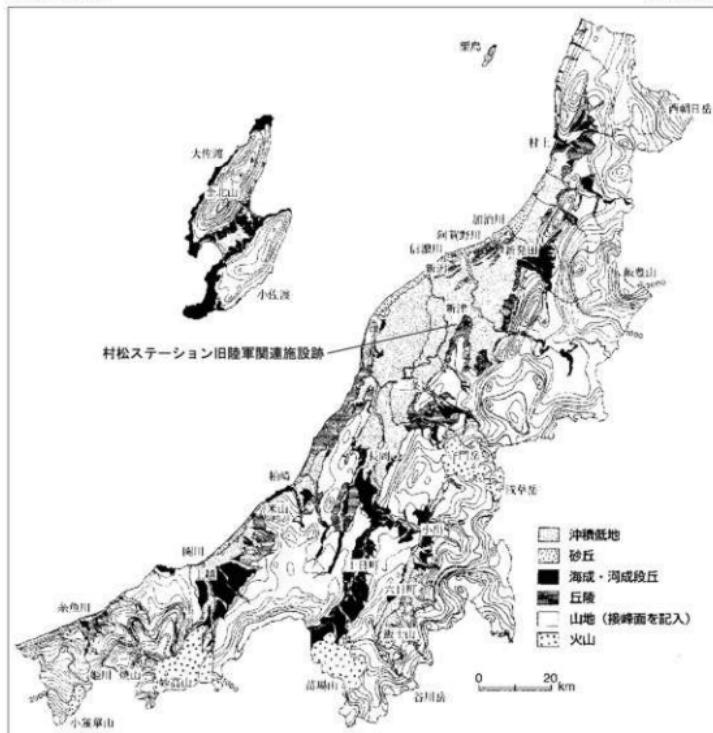
II 村松ステーション旧陸軍関連施設跡の環境

1. 地理的環境

新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーションは、北緯37度30分から37度43分、東經139度6分から139度21分と東西22.0km、南北23.2km、面積253.15km²の広大な地域を占めるかつての中蒲原郡の南部に位置する旧村松町（2006年の合併により現在は新潟県五泉市となっている）に創設された施設である。旧村松町の東南部には矢筈岳があり、青里岳等1200m

級の山々が連なり、それらを源流とした早出川がそれに合流する仙見川と共に北に流れている。北部を除き、三方を山で囲まれているため、町の南半部は山地、北半部は平野となっている（村松町史編纂委員会 1983）。

早出川沿いの段丘面を変位させる東落ちの活断層である村松断層は、村松南方から猿和田付近まで連続しており、この付近の地形は早出川が作った合成扇状地である。扇状地の扇面は3面に区分される（柳田 1981）。（青木亮子）



第4図 遺跡の地形区分と所在地
(新潟県地質図改定委員会編 2000「新潟県地質図説明書」を一部改変)

2. 歴史的環境

五泉市の周辺遺跡について

旧石器時代

五泉市内の旧石器時代の遺跡では音名連峰大藏岳西麓の丘陵に位置する薬師寺堂遺跡がある。この遺跡ではナイフ形石器や石刃など計232点の石器類が見つかっている。また、羽場山丘陵に位置する

羽場山遺跡の搔器は素材・形態・剥離技術から旧石器時代最終末のものと考えられるという。その他、能代川に近隣する新津丘陵の新潟市秋葉区草水二丁目遺跡および八幡山遺跡において石刃が数点出土している（村松町史編纂委員会 1980、管沼 1992、五泉市史編集委員会 1994、五泉市教育委員会 2003）。

縄文時代

縄文時代の遺跡は新津丘陵や丘陵縁辺、音名連峰縁辺に多く分布する。一方で、平成 14 年に能代川改修事業により発見された新田遺跡や巳ノ明遺跡、能代川左岸の自然堤防上の五百地遺跡など沖積面下での遺跡の存在を示唆する事例も報告されている（五泉市教育委員会 2003）。

市内の草創期の遺跡は見つかっていないが、新潟市秋葉区草水二丁目遺跡、平遺跡において草創期前半の遺物が報告されているという。早期の遺跡は常世式土器が細片かつ少數出土している薬師堂遺跡が報告されている程度である。市内の前期の遺跡と考えられる切畠遺跡では無節斜縄文が施された土器が採集されている。また、安出遺跡では前期に特徴的な織維土器が出土している（新潟県 1983、村松町教育委員会 1994、五泉市史編集委員会 1994、五泉市教育委員会 2003）。

中期では東日本全体と同様に市内においても遺跡数は増加傾向をもつ。音名連峰大蔵山麓の段丘に広がる大蔵遺跡は市内最大の遺跡である。この遺跡では新崎式や天神山式、馬高式などの土器が出土している他、住居址や祭祀遺構の検出もされている。また、能代川と城入川沿いの微高地に位置する下戸倉遺跡では、大木 8a ~ 10 式土器などが出土している。その他市内では下野山遺跡や赤坂遺跡、牧遺跡、岡屋敷遺跡などこの時期の遺跡として報告されている（村松町史編纂委員会 1980、五泉市史編集委員会 1994、五泉市教育委員会 2003）。

後期では前葉を中心として、沖積地の新田遺跡や巳ノ明遺跡、その東方約 9.6km には馬下稻場遺跡が位置しており、北越地方の後期前葉の標識土器の一つである刺突文を有する三十稻場式土器が出土している。その他、市内では矢津遺跡、矢津川遺跡、牧遺跡、安出遺跡、岡屋敷遺跡、下戸倉遺跡などからも縄文時代後期の遺物が出土している（村松町史編纂委員会 1980、五泉市教育委員会、国際航業株式会社文化財事業部 2004b）。

晩期の遺跡は少数である。矢津遺跡では大洞 A 式期の土器が出土している。上野遺跡は出土した石棒および石鎚の形態から当該期の可能性が指摘されている。この他、矢津川遺跡、牧遺跡、安出遺跡などが挙げられる（村松町教育委員会 1973、村松町史編纂委員会 1980）。

弥生・古墳時代

市内における弥生・古墳時代の遺跡は少ない。能代川改修事業に伴う発掘調査では覧下遺跡から弥生時代の土器が若干数出土し、古墳時代の遺構および遺物も確認されている。また、住吉田遺跡でも古墳時代の遺構と遺物が調査された。その他、市内には、弥生時代後期の高地性集落として著名な新潟市秋葉区八幡山遺跡と同様の性格を有する大倉山遺跡が存在する（五泉市教育委員会、国際航業株式会社文化財事業部 2004a, 2004b、五泉市教育委員会・山武考古学研究所 2004b）。

奈良・平安時代

奈良・平安時代には、「一群一窯体制」の下で古代蒲原郡を代表とする新津丘陵窯跡の存在が特徴的である。市内の山崎須恵器窯跡は、新潟市秋葉区七本松窯跡、草水町二丁目窯跡等とともに新津丘陵窯跡群に加わるものである。また、金津丘陵に製鐵遺跡群として新潟市秋葉区大入遺跡、居村遺跡などが存在する。そのため、主に 8 ~ 9 世紀にかけての官営工場が立地する地域が五泉市域まで及んでいた可能性が考えられる。その他、須恵器や土師器が出土している集落跡の遺跡として、覧下遺跡や新保遺跡、住吉田遺跡、住吉田南遺跡、橋田 B 遺跡、橋田 C 遺跡、中田遺跡などがある。覧下遺跡や新保遺跡では多数の墨書き土器が出土している（五泉市史編集委員会 1994、五泉市教育委員会 2003、五泉市教育委員会・山武考古学研究所 2004a, 2004b）。

中世・近世

中世の遺跡では土坑や井戸址などの遺構が検出された複数遺跡、14 ~ 15 世紀主体の船載磁器と県

内初見の滑石製スタンプが出土した複表裏遺跡がある。また、大倉山尼寺跡では全国的に希少なデュボ資料とよばれる明青花皿が報告されている。デュボ資料とは収蔵、貯蔵等の目的で一括埋蔵された資料である。その他、五泉市域には数多くの城館跡が地名や伝承から知られているが、実際の遺構として確認されている遺跡は少なく、能代館址には中世の土塁が残る。また、村松城跡からは中世の生活面や遺物が出土している（村松町教育委員会 1981、五泉市史編集委員会 1994、五泉市教育委員会・吉田建設 2004、五泉市教育委員会・みくに考古学研究所 2005）。

近世の遺跡として報告されているものは少数で前述の村松城跡では近世の堀・土塁が検出されている他に、瀬戸・美濃産の陶磁器が多く出土している（村松町教育委員会 1981、五泉市史編集委員会 1994）。

（青木亮子・松井翔吾）

III 発掘調査の成果

遺跡の位置

今回、調査を行った村松ステーション旧陸軍関連施設跡は、新潟県五泉市の新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター敷地内の遺跡である。本遺跡の東 1.6km には早出川、西約 0.6km に五泉市村松にある愛宕山が位置している（第6図）。

発掘調査は軍用飛行場地点、堀・溝状遺構地点、遺物集積地点の3地点で行った（第7図）。軍用飛行場地点は村松ステーションで現在も利用されている圃場、堀・溝状遺構地点、遺物集積地点は管理宿舎棟の東側の樹林内に位置している。今回の調査地点は、中村 元氏による先行研究および聞き取り調査、また同氏と石本光明氏による踏査によって確認された痕跡を対象として設定した。

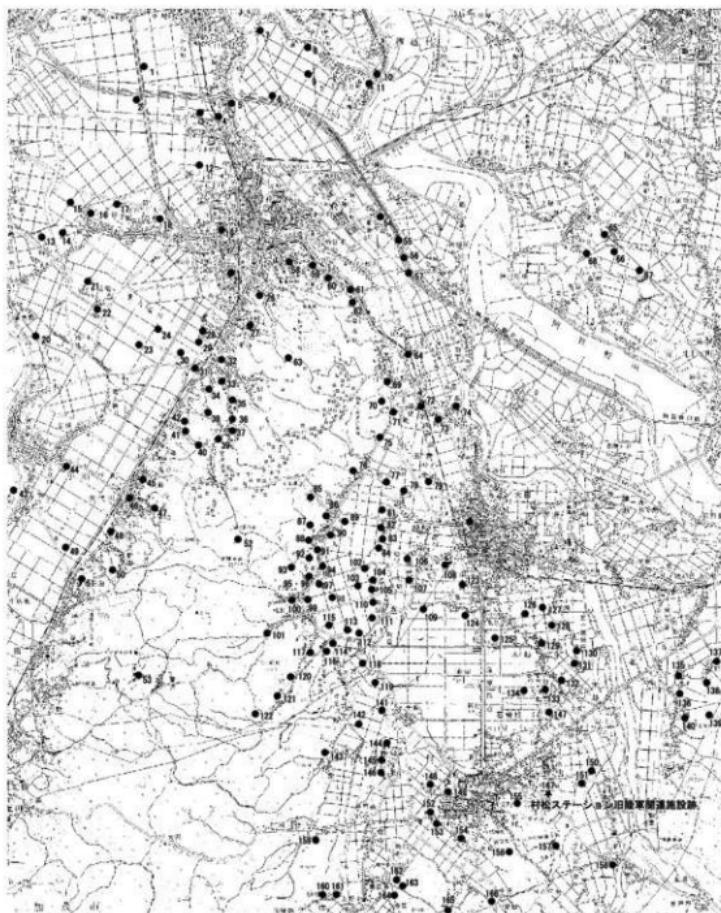
基本層序（第8・9図）

各調査地点は、軍用飛行場地点の南東側に堀・溝状遺構地点、遺物集積地点が位置する。軍用飛行場地点は標高約 39m、堀・溝状遺構地点標高約 44.5m、遺物集積地点は標高約 46m である。

基本的な層序として軍用飛行場地点はトレンドごとに状況はやや異なっているものの、第1トレンド～第3トレンドでは、圃場の耕作土および農道に関連すると考えられる表土Ⅰ層の堆積の下に、人为的な堆積である1～3層がある。さらに、その下には塑壙跡と判断した堀・溝状遺構のSD02、平面形状を確認していない落ち込みが認められる。また、軍用飛行場地点第4トレンドは、Ⅰ層（耕作土）より下層はⅡ層の黒褐色土層、Ⅲ層の黄褐色土層で、各トレンドや堀・溝状遺構地点でも同様の層序で確認できる。そのため、Ⅱ～Ⅳ層は自然堆積層としてとらえられる。堀・溝状遺構地点では自然堆積層のⅡ層、Ⅲ層の上に堀・溝状遺構のSD01がある。

（松井翔吾）

II 村松ステーション旧陸軍関連施設跡の環境

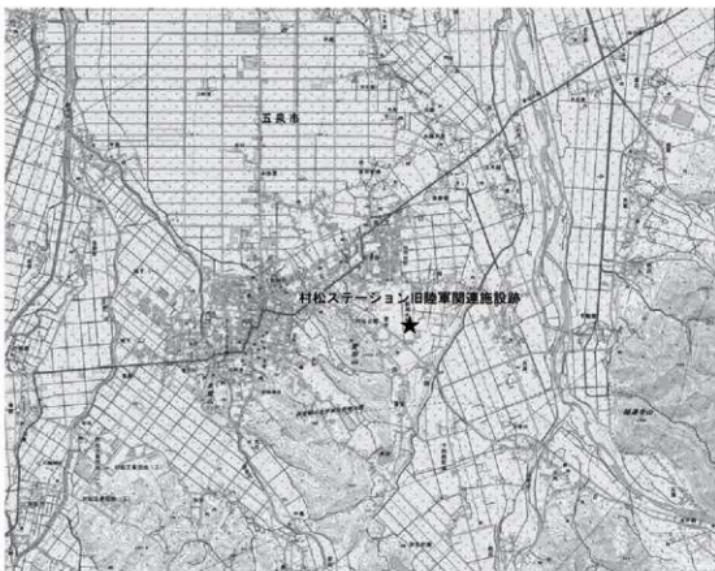


第5図 周辺遺跡位置図 (S=1:100,000) 国土地理院地形図 1/50,000 を改変

第1表 村松ステーション旧陸軍関連施設跡周辺遺跡の一覧表

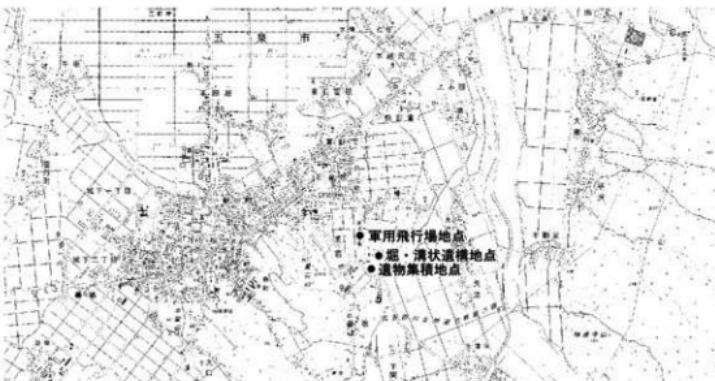
No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	祐	古墳	遺物包含地	59	日本松原跡群	奈良～平安	須恵器窯跡	115	前ノ田南	古代	遺物包含地
2	上浦	奈良～平安	集落跡	60	浦谷窯跡	奈良～平安	須恵器窯跡	116	便住城	中世	城郭跡
3	川口乙	平安	遺物包含地	61	明治丁目遺跡	奈良～平安	須恵器窯跡	117	中田	平安	集落跡
4	川口甲	平安	遺物包含地	62	明治丁目遺跡	奈良～平安	須恵器窯跡	118	衛谷地	古代・中世	遺物包含地
5	江内	中世	遺物包含地	63	東島城跡	戦国	城郭跡	119	町屋六条	古代・中世	遺物包含地
6	沖ノ羽	奈良・平安	遺物包含地	64	大間跡	戦国	城郭跡	120	八幡	縄文	遺物包含地
7	中谷丙	平安	遺物包含地	65	新明野	奈良	遺物包含地	121	八幡平	縄文	遺物包含地
8	新久免の塚	奈良～江戸	塚	66	分田越跡	奈良	城郭跡	122	宮古	縄文	遺物包含地
9	内野	平安	遺物包含地	67	或田星載	奈良	遺物包含地	123	ソブタ	奈良～平安	遺物包含地
10	寺鳥	中世	遺物包含地	68	内山王	奈良	遺物包含地	124	石ノ子	奈良～平安	遺物包含地
11	長崎城跡	奈良	城郭跡	69	小糸谷	奈良～平安	遺物包含地	125	赤舗	奈良	遺物包含地
12	山谷北	古代	遺物包含地	70	下野山	縄文	遺物包含地	126	中本田	古代	遺物包含地
13	川根	奈良～平安	遺物包含地	71	山崎平	縄文・平安	遺物包含地	127	西原敷	遺物包含地	遺物包含地
14	其左衛門沼	平安	遺物包含地	72	船越古墳出土 その2	中世	遺物包含地	128	中本田東	古代・中世	遺物包含地
15	西沼	平安	遺物包含地	73	船越古墳出土 その3	中世	遺物包含地	129	伝本ノ坂	塚	遺物包含地
16	小下ノ祖	奈良～平安	遺物包含地	74	下条館	城郭跡	130	上本田	古代・中世	遺物包含地	
17	淨宗	奈良	遺物包含地	75	山崎短悲跡	奈良～平安	短悲器窯跡	131	願成寺経塚	奈良	遺物包含地
18	圓圓	別荘・愛土地	遺物包含地	76	日光寺	中世	遺物包含地	132	町	中世	遺物包含地
19	新津城跡	南北朝・戦国	城郭跡	77	見下	古墳～平安	集落跡	133	八反田經塚	塚	遺物包含地
20	溝興野	古代	遺物包含地	78	村付	奈良～平安	遺物包含地	134	八反田	中世	遺物包含地
21	下施ノ木	奈良～平安	遺物包含地	79	中野	奈良～平安	遺物包含地	135	下夕野	平安	遺物包含地
22	曾根	平安	遺物包含地	80	五泉城	奈良	城郭跡	136	菅出	平安	遺物包含地
23	中郷	奈良～平安	遺物包含地	81	新田	縄文	遺物包含地	137	幡	縄文	遺物包含地
24	古通	平安	遺物包含地	82	己ノ明	縄文	遺物包含地	138	上ノ平	縄文	遺物包含地
25	猪島船	戦国	城郭跡	83	櫻表	中～近世	遺物包含地	139	豪御堂	羽石郡・縄文	遺物包含地
26	城見山	縄文	遺物包含地	84	櫻表南	中世	遺物包含地	140	豪御平	縄文・平安	遺物包含地
27	大坪	奈良～平安	遺物包含地	85	堤	奈良	遺物包含地	141	千原	平安	遺物包含地
28	桜大門	奈良～平安	遺物包含地	86	丸田船	奈良	城郭跡	142	中名沢	平安	遺物包含地
29	西島船	城郭跡	遺物包含地	87	中沢	平安・中世	遺物包含地	143	山ノ入	平安・中世	遺物包含地
30	北郷	奈良～平安	遺物包含地	88	人小路	古代	遺物包含地	144	豊野町A	平安	遺物包含地
31	舟戸	古墳	集落跡	89	丸田	奈良～平安	遺物包含地	145	豊野町B	平安	遺物包含地
32	塙半	奈良～平安	遺物包含地	90	道全	奈良～平安	遺物包含地	146	豊野町新跡	奈良	遺物包含地
33	古津初越B	奈良～平安	製鉄跡	91	鶴田北	奈良～平安	遺物包含地	147	馬場船跡	奈良	遺物包含地
34	八離山	弥生・平安	集落跡	92	四十九沢	縄文・古代	遺物包含地	148	城下	平安	遺物包含地
35	古津初越A	奈良～平安	製鉄跡	93	幸坂	縄文	遺物包含地	149	村松船跡	近世	遺物包含地
36	金津初越B	奈良～平安	製鉄跡	94	寺北	縄文・古代	遺物包含地	150	矢津	縄文	遺物包含地
37	金津初越A	奈良～平安	製鉄跡	95	大倉山	洪生	遺物包含地	151	旭山	縄文	遺物包含地
38	大入	平安	製鉄跡	96	大倉北	縄文・古代	遺物包含地	152	一本砂	平安・中世	遺物包含地
39	岩村C	平安	製鉄跡	97	鶴田D	奈良～平安	遺物包含地	153	光原	平安	遺物包含地
40	居村B	平安	製鉄跡	98	鶴田A	奈良～平安	遺物包含地	154	奉堂山城跡	奈良	遺物包含地
41	居村A	平安	製鉄跡	99	鶴田C	奈良～平安	遺物包含地	155	愛宕山	弥生	遺物包含地
42	神田	奈良～平安	遺物包含地	100	鶴田E	洪生	遺物包含地	156	深沢	縄文	遺物包含地
43	横川浜堤外	縄文・平安	遺物包含地	101	香州	古代	遺物包含地	157	中番坂	縄文	遺物包含地
44	奥屋村	平安	遺物包含地	102	五百石	縄文・平安	遺物包含地	158	矢津川	縄文	遺物包含地
45	三沢	平安	遺物包含地	103	鶴田D	古代	遺物包含地	159	御崎山	先史器	遺物包含地
46	三沢	奈良	製鉄跡	104	五百石南	奈良～平安	遺物包含地	160	牧	縄文	遺物包含地
47	了了寺船	中世	寺院跡	105	新保北	平安	集落跡	161	上野	縄文	遺物包含地
48	五本田船	奈良	城郭跡	106	江中	奈良～平安	遺物包含地	162	小原野	縄文	遺物包含地
49	大沢谷内	平安	遺物包含地	107	礎代館	城郭跡	163	カウノス	縄文	遺物包含地	
50	西紀原山船	奈良	城郭跡	108	福島	古代・中世	遺物包含地	164	寺田A	弥生	遺物包含地
51	六兵衛沢	平安	塙跡	109	段ノ越	奈良～平安	遺物包含地	165	寺田B	弥生	遺物包含地
52	金津城	南北朝	城郭跡	110	新保	平安	集落跡	166	安出	縄文	遺物包含地
53	瀬摩堂城跡	奈良	城郭跡	111	住吉田東	平安	集落跡	167	村松ステーション 御跡園遺跡	昭和・大正・昭和	戦争道路
54	西江浦	平安	遺物包含地	112	住吉田南	平安	集落跡				
55	寺道上	平安	遺物包含地	113	住吉田	古墳～平安	集落跡				
56	木津橋	奈良～平安	遺物包含地	114	衛谷西	平安	遺物包含地				
57	細池	奈良～平安	遺物包含地								
58	秋葉ヅドウ園	縄文	遺物包含地								

III 発掘調査の成果



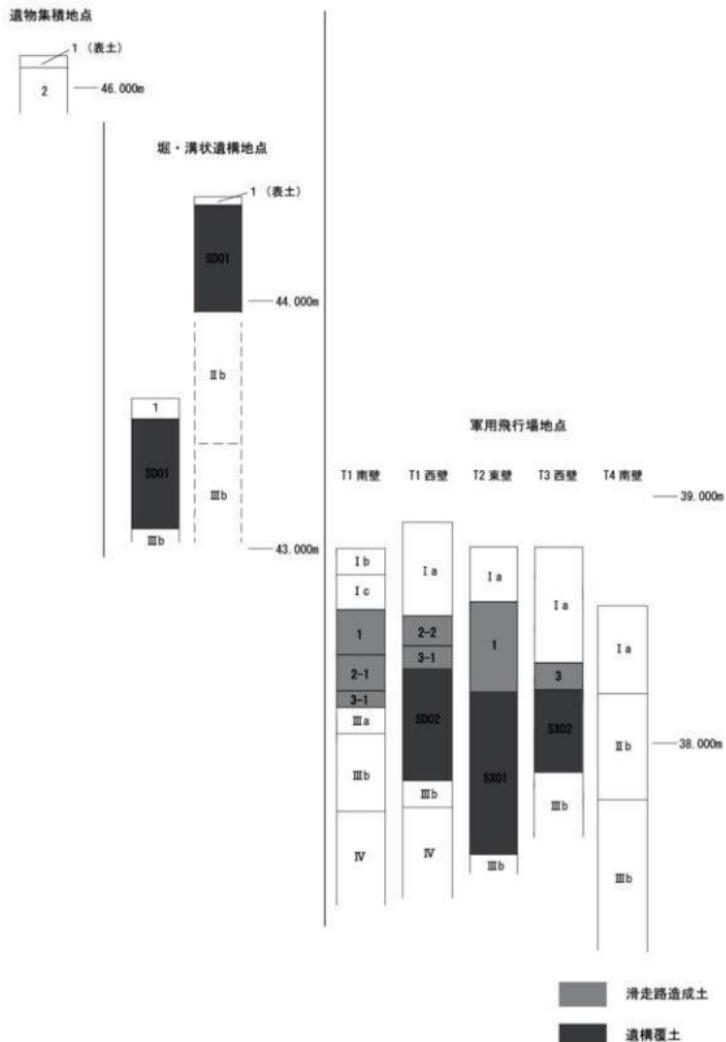
国土地理院電子地形図 令和2年9月17日調査 (1/50,000)

第6図 遺跡の位置



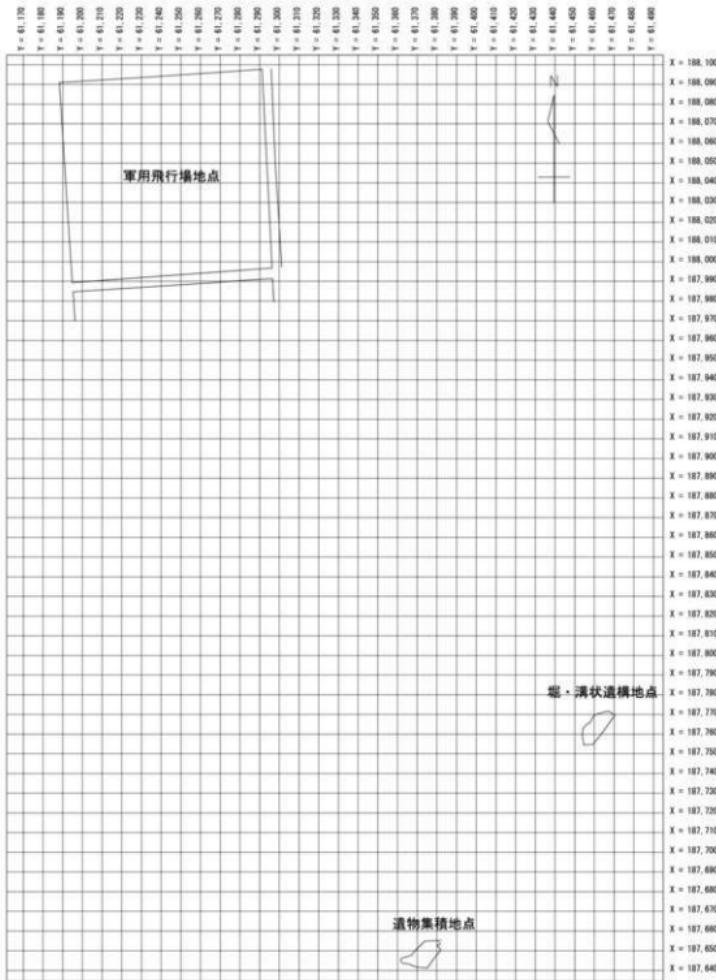
国土地理院地形図(村松) 平成21年8月1日発行 1/25,000 を1/50,000に改変

第7図 村松ステーションおよび調査地点



第8図 村松ステーション旧陸軍関連施設跡 土層柱状図 (S=1/40)

III 発掘調査の成果



第9図 村松ステーション旧陸軍関連施設跡 調査地点の位置 (S=1/2500)

軍用飛行場地点の概要

練兵場として記録される村松ステーションの敷地の大部分は、現在は圃場として利用されている。聞き取り調査によれば、圃場には塹壕があり、終戦直前にはそこに滑走路がつぐられたという。滑走路の位置を特定するために1946年6月に米軍によって撮影された航空写真を確認したところ、センター内東側の第1～第5、第17圃場にかかる南北に幅約100m、長さ約1000mおよびそれに交差する南西から北東に幅約100m、長さ約800mの範囲に滑走路と考えられる痕跡が認められた。そこで、確認できた痕跡のうち、掘削の許可を得られた第3圃場について、滑走路跡の確認を目的として2020年度にトレンチ調査を行った。調査地点の標高は約39mで、前年度に調査した堀・溝状造構地点および遺物集積地点と比較すると、5～6mほど標高が低い、平坦面に立地する。米軍が撮影した航空写真では、圃場を格子状に区画する農道が1947年11月には認められる。そのため、畑として利用される圃場よりも、農道部分には当時の痕跡を確認できる土層がある可能性が高い。しかし、農道自体は現在も利用されているため、今回の調査では、第1～4トレンチを、圃場と農道の境に沿うように設定した。第三圃場の北側の農道沿いに西から順を追って、第1トレンチ、第1トレンチから約40m東に第2トレンチ、第2トレンチから約15m東に第3トレンチを、さらに第1トレンチから約20m北に第4トレンチを設定した。

第1トレンチ

第1トレンチは、東西15m×南北1.5mで設定し、地表面から約1.5m下までバックホーで掘削した。その後、西壁で確認された造構の平面の形状を確認するため、東に約1.5m、圃場側の土層をより詳細に確認するため、北に約2mトレンチを拡張した。拡張部は地表面から約1m掘り下げ、造構の確認面を検出した。

西壁の造構については、東壁にかけて同様の幅、深さの造構が確認されたことから、これが東西に掘り込まれた溝状の造構であることが明らかになつたため、これをSD02とした。

なお、中村元氏による聞き取り調査によると、戦時中に調査区周辺は練兵場として使用されており、訓練用の塹壕が作られた。また、終戦直前にその土地を均して滑走路を重機で造成したことが分かっている。発見された溝状造構SD02は、Ⅲ b層を振りこみ、黄褐色土と3層の黒褐色土を地表に上げて造った塹壕の上部が滑走路造成の際に削平され、両者の混合した土で埋め立てられた塹壕の下部であったことが推察される。さらに、その上に堆積している1層～3層は、しまりの強い土や砂礫を含む土で形成されているため、滑走路の造成に伴う土層であると判断した。

その他、西壁北側上層には耕作土、南側の表土下には大きなものは10～15cm程度の石を多く含む黄褐色土層がみられ、これは、農道の整備に関連する土層であると推測した。

出土遺物

SD02は東西にかかる幅0.8m、深さ0.4mの溝状造構で、Ⅲ b層で確認された。トレンチ調査では溝の端部が検出できなかつたため、長さについては約3mまたは3mを超えることが推察される。

出土遺物

磁器片2点とボタン1点が出土している。1は3層から出土した江戸時代の磁器の底部片で、高台周辺が欠けている。2は3層から出土した磁器の体部片であるが、何の破片であるかは不明である。3は廃土から回収したボタンで、銅合金製で直径1.6cmの円形、裏側に直径0.6cmの足がついている。

第2トレンチ

第2トレンチは東西15m×南北15mで設定し、地表面から約1.5m下までバックホーで掘削した。東壁でⅡ a層とⅡ b層とⅢ b層を、南壁でⅡ b層とⅢ b層を切る造構を確認した。この造構が土坑であるか溝状造構であるかは判断できなかつたためSX01とした。

III 発掘調査の成果

出土遺構

SX01は、深さ約0.6mで平面の形は不明である。覆土は、色調と黄褐色土の割合の違いから2層に分かれている。北壁と西壁に類似した覆土の堆積は認められなかったため、この遺構が、東方向か南方向、もしくは南東方向に広がる遺構であることが推測される。

出土遺物

なし。

第3トレンチ

第3トレンチは、東西15m×南北15m、地表面から約1.4m下までバックホーで掘り下げた。北壁および南壁でⅢb層直上に、東側に立ち上がる土層を確認、この層を遺構と判断した。なお、全体の幅と長さが不明であることから、この遺構をSX02とした。

出土遺構

SX02は、深さ約0.4m、平面の形は不明である。第3トレンチ自体が1.5m×1.5mで設定されていることから、大きさが1.5m以上となる可能性がある。

出土遺物

なし。

第4トレンチ

第4トレンチは、東西15m×南北15mで設定し、地表面から約1.5m下までバックホーで掘り下げた。第1~3トレンチとは異なり、農道から離れた耕作地側に設けた第4トレンチでは、耕作土より下層で人為的な擾乱のない自然堆積層を確認した。

出土遺構

なし。

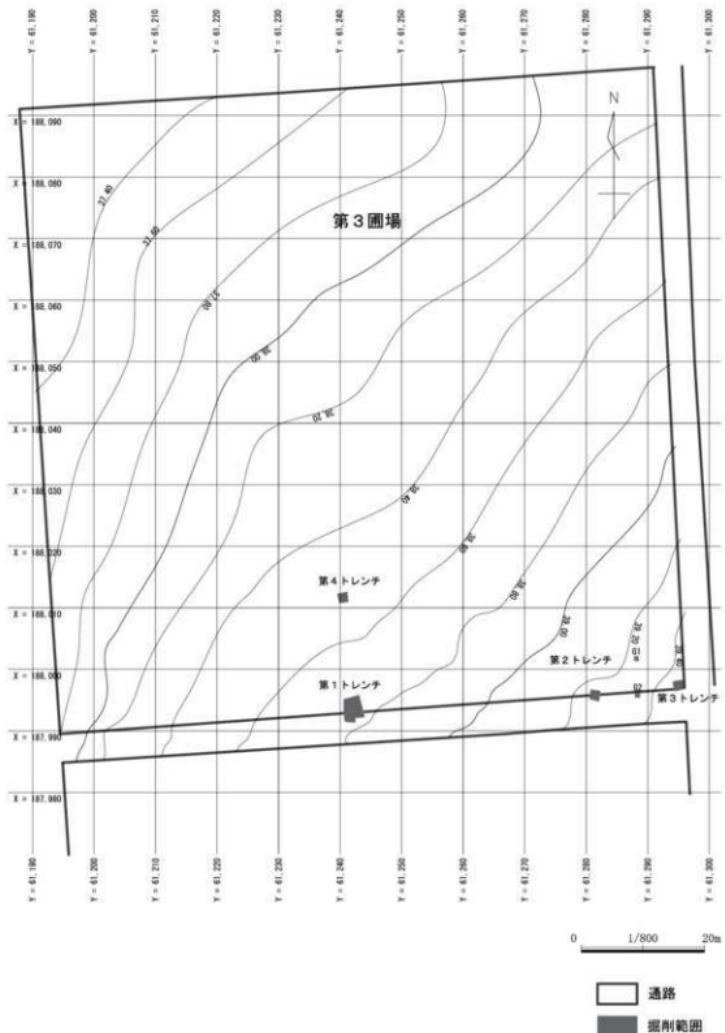
出土遺物

なし。

(阿部紀佳)

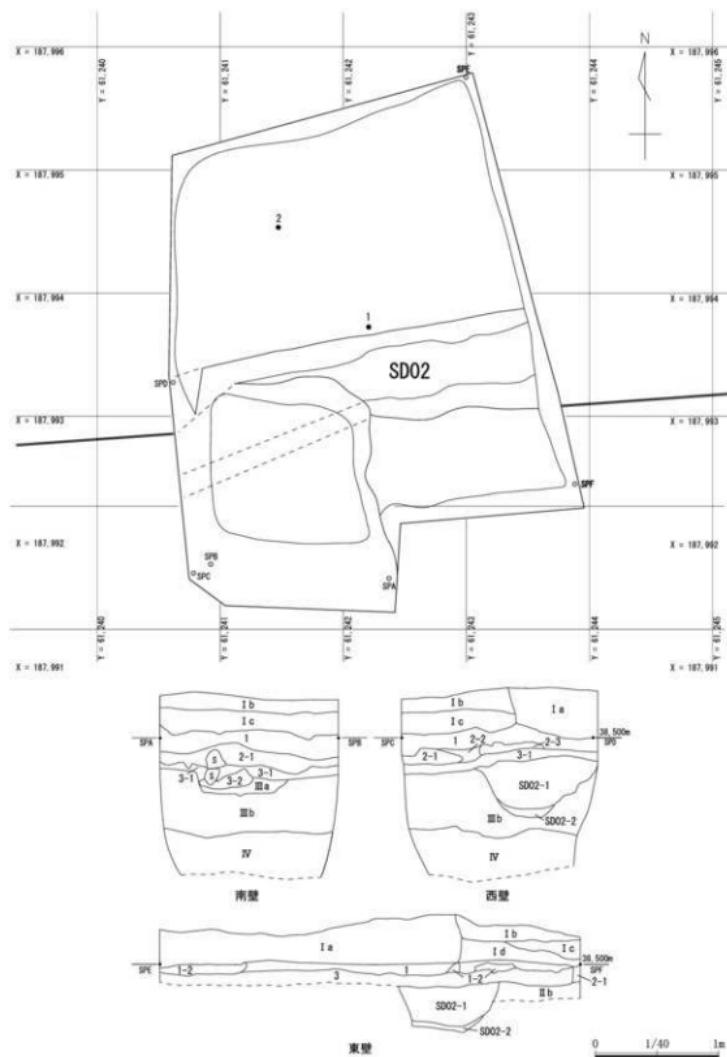
第2表 軍用飛行場地点出土遺物観察表

報告番号	種別	器種	計測値 (mm)			技法・文様・色調・備考
			口径	底径	器高	
1	磁器	碗		40	13	染付、透明釉、高台内外染付團綴あり、肥前系、近世、底部破片
2	磁器	両・鉢		65		染付、透明釉、肥前系、近世、胸部破片
3	金属	ボタン	最大径 165		95	銅合金、中空、円形の留め具あり

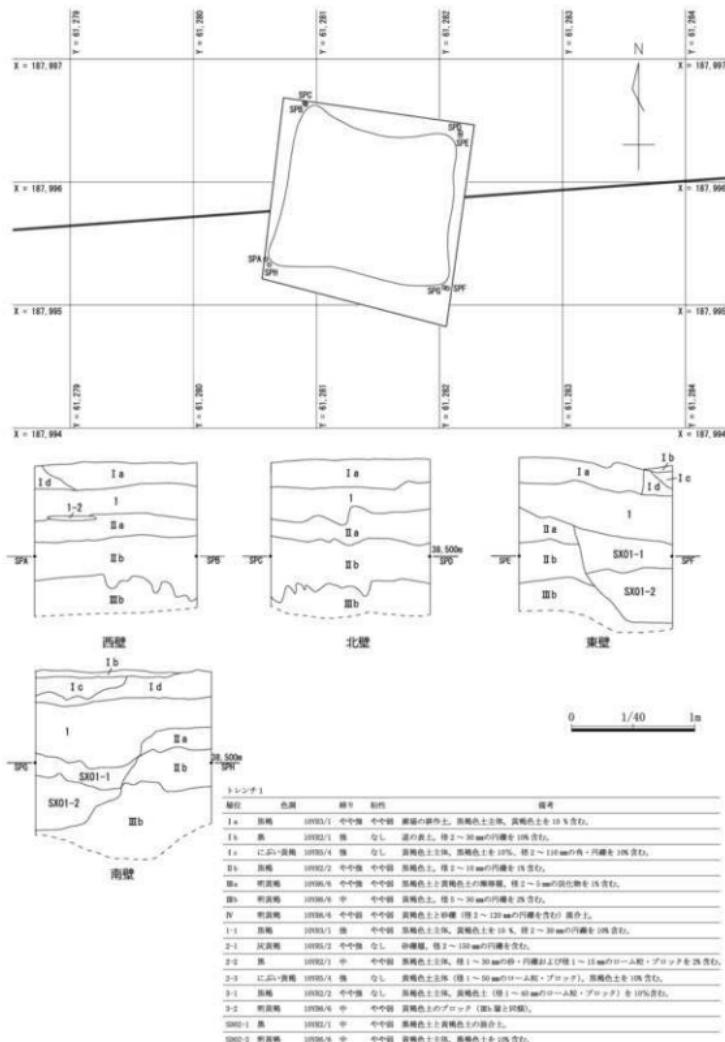


第10図 軍用飛行場地点（第3圃場）トレーンチ位置図

III 発掘調査の成果

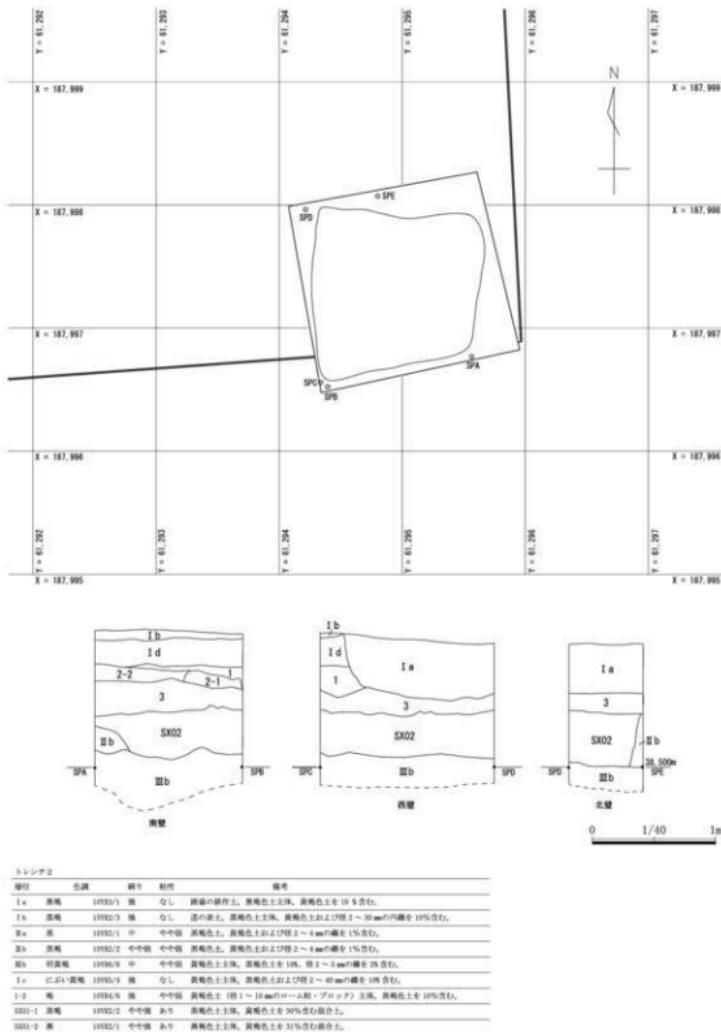


第11図 軍用飛行場地点 第1トレンチ平面図・断面図

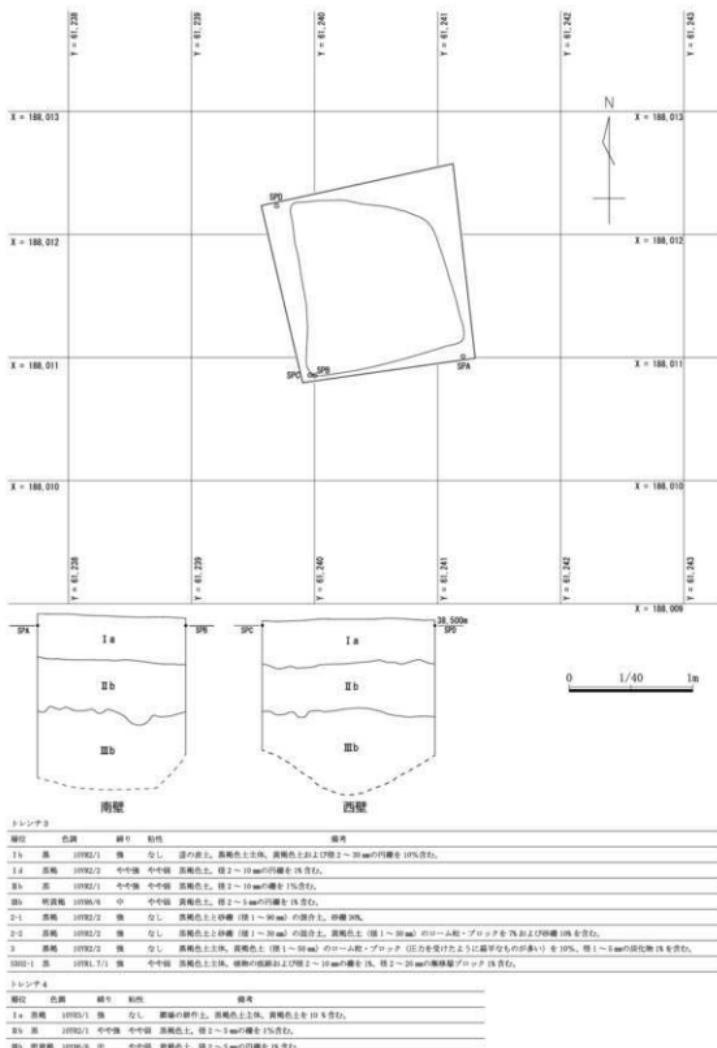


第12図 戰用飛行場地図 第2トレンチ平面図・断面図

III 発掘調査の成果



第13図 軍用飛行場地点 第3トレンチ平面図・断面図



第14図 軍用飛行場地点 第4トレンチ平面図・断面図

III 発掘調査の成果

堀・溝状遺構地点の概要

村松ステーション内はかつて練兵場であり、多くの塹壕が存在していたことは聞き取り調査から明らかになっている。今回調査を行った堀・溝状遺構地点 SD01 は以前より練兵場に伴う練習用塹壕として考えられていた。しかし、実際に練習用塹壕であるのかこれまで実証的な調査はされてはいなかつた。

今回、新潟大学考古学研究室は 2019 年、2020 年の計 2 次にわたり調査を行った。SD01 は当初、周囲は雑草や樹木が繁茂し、堀・溝の落ち込みにはキツネによる巣穴がいくつも確認できる状態であった。そのため、2019 年の第 1 次調査では、堀・溝状遺構地点 SD01 の現状把握を目的として、草木の伐採および平面プランを検出、SD01 の上端と下端のラインを引き、平面図作成を行った。2020 年の第 2 次調査では、SD01 の発掘調査を行い、練習用塹壕として位置付けることが可能か、また当時の塹壕の状態を確認するために発掘調査を行った。SD01 の比較的樹木および巣穴が少ないところに第 1 トレンチを設定した。そして、SD01 には東西にのびる溝と北に向かう溝が分岐する箇所があり、分岐点での移動が当時多かったこと、そこから遺物が出土することを想定し、第 2 トレンチを設定した。

第 1 トレンチ

本トレンチは利用時の遺構の検出を目的としたため、樹木および巣穴が少ない場所に設定を行った。まず、SD01 の東西ラインに直交する形で南北に 6.0 m、東西に 1.0 m のトレンチを設定、さらに遺構の状態を確認するために東壁際に 0.5 m の幅で深く掘削を行った。結果、遺構が自然堆積の II b 層と III b 層を掘り込んで構築されていることを確認できた。西側は遺構底面の検出を行い、掘削を終了した。

検出遺構

自然堆積第 II b 層と III b 層を掘り込む上端から下端までの深さ 1.18m、上端の幅 3.24m 下端の幅 0.6m 程のもの。

出土遺物

南側上端の第 6 層出土の 3.0 × 1.1cm の陶器片 1 点。

第 2 トレンチ

第 1 トレンチでは塹壕利用時を示す遺物が出土しなかった。そのため、塹壕の具体的な時期を把握する目的で、東西にのびる溝と北に向かう溝の分岐点に位置する場所に第 2 トレンチを不整形で設定した。北壁、東壁、西壁はいずれも約 10m の幅である。掘削は、塹壕利用時の下端面までを掘削。下端の幅は約 0.5 ~ 0.6m であった。

検出遺構

自然堆積第 II b 層と III b 層を掘り込む下端の幅 0.6m 程のもの。

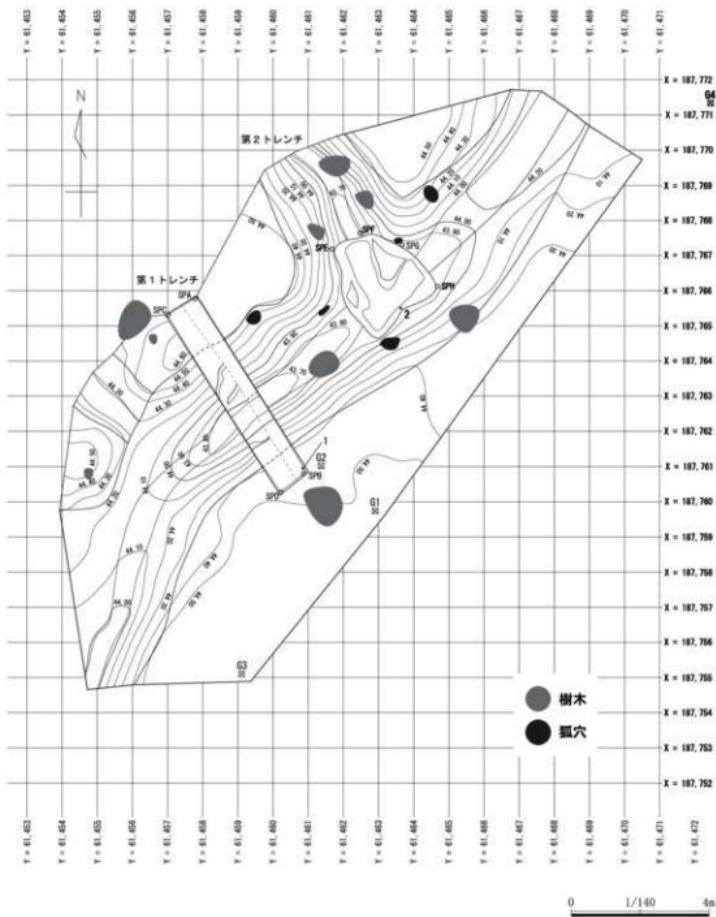
出土遺物

2.7 × 1.3cm の陶器片 1 点。

(松井翔吾)

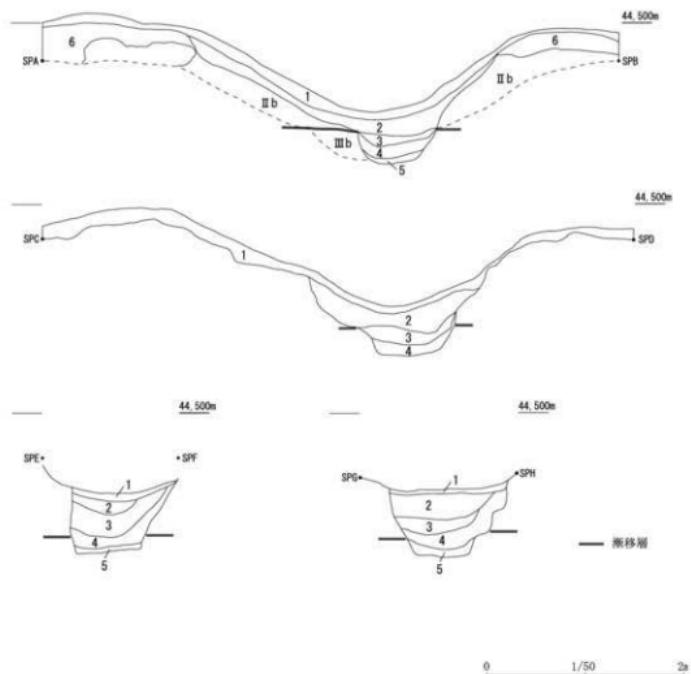
第 3 表 堀・溝状遺構地点出土遺物観察表

報告番号	種別	器種	計測値 (mm)			技法・文様・色調・備考
			最大長	最大幅	最大厚	
1	陶器	不明	30	19	11	輪轂成形、内外面鉄軸
2	陶器	不明	27	13	4	輪轂成形、内外面鉄軸



第15図 堀・溝状遺構地点平面図

III 発掘調査の成果



ID01	層位	色調	繊り	粘性	標号
1	黒褐色	10103/2	なし	なし	赤土、黒褐色土で、表面に落葉などを多く含む。
2	黒褐色	10102/2	弱	弱	植物の根を多量に含む。黒褐色土と黒褐色土の混合土。
3	黒褐色	10102/1	弱	弱	植物の根を含み、しまりが弱くなっている。
4	黒褐色	10102/2	強	やや弱	植物の根を含む。白い層と無縫。
5	黒	10102/2	強	やや弱	4層よりもしまりが弱い。ローレブロックを10%含む。
6	黒褐色	10103/1	強	やや弱	黒褐色土とローム粒・ブロックの混合土。
II b	黒	10102/1	強	やや弱	黒褐色土。径2~5mmの礫を1%含む。
III b	黒褐色	10103/1	強	やや弱	黒褐色土。径2~5mmの円礫を1%含む。

第16図 塙・溝状遺構地点断面図

遺物集積地点の概要

遺物集積地点は踏査で遺物の集積が確認されていた場所である。今回は遺物集積と広がりおよび堆積状況を、発掘調査で明らかにする目的で調査を行った。

2019年度の1次調査では踏査の後、遺構の範囲の確認のため草木の伐採を行い、SU01、SU02の範囲を確認した。SU01はガラス製の医療用品を中心とした大量の遺物が広範囲に認められた。そこで十字にベルトを設定し、まず北側4分の1の掘削を行った。一方でSU02は地表面に遺物が散乱している状況であったことから、廃棄の状態を空間的に把握するために遺物の位置の記録を行った。

SU01

SU01は長軸5.6m、短軸4.9mで円形の範囲に遺物が堆積、大形の遺構であることから、十字にベルトを設定し、北側4分の1を掘削し、遺物の堆積状況および遺構の掘り込みを確認した。

その結果、掘り込みはみられず、上層に遺物主体の層があり、下層にはガラス製品の破片が少數含まれていた。また、覆土中の木の根にそって遺物が出土したことから、遺物が廃棄されてから長期間経過していることがうかがえた。遺物は1953年から1957年に製造された味の素の調味料瓶や、昭和のものが含まれることから、1940～1950年代の生活用品が中心であると思われる。また、SU01では被熱したと思われるものが多く見られ、医療廃棄物も大量に見られた。そのため近隣の医療機関が被災、もしくは廃業時に医療機器・生活用品をまとめて廃棄したと考えられる。

出土遺物

出土した遺物の多くがガラス製の医療用品であり、他に陶磁器の碗・皿といった生活用品も少數含まれる。また、火を受けて変形したガラスや、小石や鉄を含む、溶融・固化した遺物も多く認められた。

1～12は磁器である。1～4は磁器の碗で、1は外面に緑色系の文様がある磁器の碗、2は内面に退色した文様のある碗、3は外面に赤色の文様がある碗、4は外面に青・赤色系・緑色系の文様がある碗。5～9は磁器の皿で、8は内面に青色系の文様が見られた。9は銅板絵付の皿である。10、11は蓋で10には青色と緑色の文様、11は高台内に「山邑」の銘がある。12は燭台である。13～17は陶器で、13は灰釉が施された碗、14は外側が茶色の蓋、15は陶器の鍋。16は外面に人物の絵が描かれた湯呑みで17は骨子である。18～30は金属製品で、18～24は薬品瓶の蓋。19・22には「DAIICHISEIYAKU CO LTD TOKYO」という文字がみられる。25～28は注射針で、29は煙管の吸い口、30は昭和17年の5銭硬貨であった。31～102はガラス製品で、31～41は薬品瓶、35～38はバイアル瓶である。41は無色透明の目薬瓶。43・44は飲料瓶で、43の瓶には三ツ矢のエンボスが見られ、44はニッキ水であった。45は味の素の調味料瓶、46はペロペロ、1950年頃から出回った駄菓子の容器である。47は化粧クリーム瓶で、48・49はインク瓶。48は底部に「SIMCO」のエンボスがあり、篠崎インキ製である。50・51は染料瓶で、51の君が代染料には「君が代」「意匠登録93658」、「定量」、「HAIR-DYE KIMIGAYO」のエンボスがみられた。52～57はガラス製の栓であり、52～54はガラス瓶の栓。55・56は医療用品で用いられた栓であると思われる。58～73はアンプル、74～76は点滴瓶。77～88はガラス製の注射器。無色の注射器と淡緑色の2色の注射器が確認された。89は試験管、90～93はガラス管で、点滴の際に用いられたと思われる。94・95はガラスの容器でシャーレの破片と思われる。96・97・98はビー玉、99は吸飲みの飲み口部である。100はガラスベンの先で、101はおはじき、102はメガネに用いられたレンズである。96～110はその他の製品で103は耐火煉瓦片、104は手抜き成形の煉瓦。105はゴム製の栓でバイアルのゴム栓。106は歯ブラシで「ダイジェスト B109」の文字がある。107・108はプラスチック製の札で、107には「□ヨコ」、108は「一ノ二 ハヤシカ」とある。109はハート形のアンプルカッターである。

III 発掘調査の成果

SU02

SU02は長軸7m、単軸3.5mの梢円形に遺物が散乱する遺構である。SU02では遺物の廃棄状況を把握するために点上げを行った。なお、本遺構はほぼ平坦な地表面に遺物が点在するため、点上げは平面的な位置を示すのみとし、遺構の長軸でエレベーション図を作成し、標高を示した。

SU02の遺物の分布を検討したところ、種別や器種ごとに遺物をまとめて廃棄してはいないことが分かった。遺物は統制陶器や1937年まで製造されていたカメセの瓶、1951年までの味の素の瓶などからSU01同様、1940年代～1950年代の遺物が中心と思われる。遺物は生活用品が多く、医療用品(注射器・アンプル・バイアル等)や被熱したものはほとんど見られなかった。

出土遺物

SU02の遺物は陶磁器を中心である。1～12は磁器の碗。1は統制陶器であり、「岐 □□19」(□内は判読不能)の銘が高台内にみられる。2は外面に青色の文様がある碗。3は外面に青色と茶色の文様がある碗。4は高台内に九谷の銘、5・6は底部や高台が打ち欠かれたような痕跡がある碗で、7は高台内に九谷の銘がある。8は外面に青色の文様、9は外面に緑色系の文様がある。10は碗の破片、11は高台内に銘がある。12は碗の破片、13～28は磁器の皿である。18・19は退色した文様がある皿、20は銅板絵付けの皿、21は高台内に酒と思われる銘があり、22は高台内に「春遊」という銘、27は高台内に「YAMAKA TAKAKI」の銘がある。29～32は磁器の蓋で、外面に青色の文様があるものが多くみられる。29は銅板絵付けの蓋と思われる。33は磁器のカップで13の磁器の皿と合うことから13の皿とセットであると思われる。34は緑と白の文様が施された徳利。35は注ぎ口に九谷の銘がある急須。36～43は陶器。36・37は陶器の碗である。38は陶器製の皿で、高台内に「□ MOND」の文字がある。39はレートの陶器製瓶、底面に「セ 538」の銘がある統制陶器。40・41は蓋で41の「LAIT」とある蓋は39の瓶の蓋である。42は陶器製のおろし金で「文化おろし」の文字と「□□16」の統制番号がみられる。43は陶器製の器。47は土器で七輪の一部である。45～67はガラス瓶。45～51は薬品瓶で、45は底部に「S」のエンボス、46は底部に「A 15」とある。47は金冠瓶、48はメモリ付きの瓶。49は無色透明の瓶、50は蓋に「Haliva」とある薬品瓶。51は金冠「キンカン」瓶。52は味の素の調味料瓶、53はカメセのふりかけ瓶である。54～57は化粧クリーム瓶。54は「N 37」とある瓶で、55は白色で不透明。56は「PIAS COLOR」とある。57はクラブホルモンのクリーム瓶。58は「SUNSTAR」のエンボスがある歯磨き粉瓶、59はインク瓶。59～61は染料瓶で、60は「みづほ染料」のエンボス、61は「みや古染」のエンボスがある。62～67は用途不明のガラス瓶である。65の蓋には「REBAIL OSAKA JAPAN」、瓶には「REBAIL PHARMACIST K.TAKEMURA」の文字がある。68は1930年代のラジオの真空管の部品であり、胴部に「マツダ UX-26b」の文字がある。

(舟山直希)

第4表 遺物集積地点 SU02 遺物一覧表

番号	測定上げ番号	種別	基準	文書・技法・起源・備考
1	60	絵図	絵	輪郭線形、透視線、高さ約17cm、「圓」、「△」の記述あり。（は倒れ不倒）、輪郭輪廓、高さ約16cm
2	274	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓、内側に輪郭、高さ約16cm
3	12	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓、内側に輪郭、高さ約16cm
4	166	絵図	絵	輪郭線形、上側開口、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色）、赤色。輪郭約17cm。「九谷」の字と書かれた文字あり
5	165	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色、黄色）あり。高さ約16cmの輪郭に打ち加わった可視的な文字あり
6	117	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色、黄色）あり。高さ約16cm
7	34	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色）あり。輪郭約17cm。「九谷」の字あり
8	168	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色）あり
9	120	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色）あり
10	259	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色）あり
11	30 149 170	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色）あり。輪郭約17cm。「九谷」の字と書かれた文字あり
12	205	絵図	絵	輪郭線形、透視線
	196	絵図	絵	透視線、内側に文字（白色）あり。文字あり
	268	絵図	絵	透視線、内側に文字（白色）あり。文字あり
13	137 - 139	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色）あり。輪郭約17cm。「九谷」の字あり
14	120	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色）あり
15	269	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色）あり。輪郭約17cm。「九谷」の字あり
16	14	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色）あり
17	66 - 67 - 268	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭輪廓の輪郭（白色）あり
18	79 - 175 - 221 - 240	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり
19	29	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり
20	64 - 73 - 196	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。輪郭輪付け
21	43 - 89	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。高さ約17cm。「酒」と書かれた文字あり
22	147 - 240	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり
23	45	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。内側内に「赤龍」の字あり
24	3 - 167	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり
25	26 - 82	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり
26	261	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり
27	80 - 242	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり
28	10	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり
29	3 - 61 - 67 - 160	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。赤色と青色の「YAMAKI SAKABE」の記あり
30	36	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。内側内に「赤龍」の字あり
31	66 - 75	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。内側内に「赤龍」の字あり
32	30 - 31	絵図	絵	透視線
33	41	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。文字あり。輪郭約17cmと同様度
34	205	絵図	絵	輪郭線形、透視線
35	234	絵図	絵	輪郭線形、透視線、輪郭約17cmと同様のもの
36	199	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。輪郭輪付け
37	35 - 36 - 37	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。輪郭輪付け
38	35 - 38 - 32	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。輪郭輪付け
39	303 - 306	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり
40	32	絵図	絵	輪郭線形、内側透明輪、外段透明輪、乳頭N26.2と重複
41	21 - 97 - 242	絵図	オーバー	透視線
42	10	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。内側内に「赤龍」の字あり
43	42	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。内側内に「赤龍」の字あり
44	124	絵図	絵	透視線（青色）と輪郭輪付け
45	124	絵図	絵	透視線（青色）と輪郭輪付け
46	127	絵図	絵	透視線
47	129	絵図	6-61	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。萬の山付記号
48	132	絵図	6-61	透視線、萬の山付記号
49	139	絵図	6-61	透視線、内側に文字（透け）あり
50	225	絵図	6-61	透視線、内側内に文字（透け）あり
51	223	絵図	6-61	輪郭線形、内側は透明輪、内側は透視輪し、内側に文字（透け）あり。透視の範囲小。輪郭に透視輪あり（モノクロ）
52	226	絵図	6-61	輪郭線形、内側は透明輪、内側は透視輪し、内側に文字（透け）あり。透視の範囲小。輪郭に透視輪あり（モノクロ）
53	211	絵図	6-61	輪郭線形、内側は透明輪、内側は透視輪し、内側に文字（透け）あり。透視の範囲小。輪郭に透視輪あり（モノクロ）
54	227	絵図	6-61	輪郭線形、内側は透明輪、内側は透視輪し、内側に文字（透け）あり。透視の範囲小。輪郭に透視輪あり（モノクロ）
55	265 - 266	絵図	6-61	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり。内側内に「赤龍」の字あり
56	181-1	絵図	6-61	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり
57	22 - 280	絵図	6-61	輪郭線形、透視線
58	111	絵図	6-61	輪郭線形、内側は透明輪、内側は透視輪し、内側に文字（透け）あり。透視の範囲小
59	20 - 38 - 60 - 140	絵図	6-61	輪郭線形、透視線、内側内に文字（透け）あり。透視の範囲小。輪郭に透視輪あり（モノクロ）
60	84 - 92 - 92 - 173 / 107 - 108 - 199 - 232	絵図	絵	輪郭線形、透視線、内側に文字（透け）あり
61	142	絵図	絵	透視（「△」）の字あり。透視輪
62	150	絵図	絵	輪郭線形、内側に文字（透け）あり。透視輪
63	294	絵図	絵	輪郭線形、透視線
64 - 65 - 81 - 87	66 - 67 - 131 - 280	絵図	6-61	輪郭線形、透視

III 発掘調査の成果

順位 番号	第 1-17 号令	題目	若林	支那・指吉・色謙・藤原
223	海田	不明	無題 (一茶地図が描かれている)、瓦の櫓ものか	
226	海田	不明	無題、瓦の櫓ものか	
251	海田	不明	無題、瓦の櫓ものか	
96	海田	不明	無題、瓦の櫓ものか、瓦の櫓ものか、取り上げ No.21, 22, 23, 24, 25 は同じものか	
101	海田	不明	無題、瓦の櫓ものか	
216	海田	不明	無題、瓦の櫓ものか、瓦の櫓ものか	
113 - 115 - 303	海田	不明	無題、瓦の櫓ものか	
113	海田	不明	無題、瓦の櫓ものか	
124 - 127 - 328	海田	不明	無題、水田敷き上げ No.303, 102 を参照。二点の方より連続	
43	163 - 196	海田	不明	不明、不明、不明
206	海田	不明	不明、不明、不明	
24	18	上田	不明	無題ふたり、七輪の御品か
10 - 95 - 97 - 98 - 99	上田	七輪	無題七輪	
17 - 265	上田	五燈	無題五燈、別名「五燈」の文字あり、内側、特に木が使っている	
210 - 282 - 287 - 288	上田	不明	無題	
299	上田	不明	一輪もアラシが付属している	
300	上田	不明	丸か	
210	上田	不明	無題圓鏡	
211	上田	不明	無題あり、水井	
212	上田	不明	無題あり、瓦か	
63	本多詮	不明	青い水井付のもの	
121	本多詮	不明		
242	金城	不明		
77	金城	高麗香形	緑色、「PEAR SHIBURO DENTAL CREAM」反対側に「春牛堂バーレム高麗 クロフタリン AG 梱式分包包装 茶葉袋中性洗 液内子丁(三五)」の文字あり、(1933)年左右のもの	
146	金城	高麗香形	赤色、「LION DENTAL CREAM ライオン歯科」の文字あり	
156	金城	高麗香形	緑色、「DAIICHI LION DENTAL CREAM」 反対側に「DIAICHI LION DENTAL CREAM」 と書かれており、「DIAICHI LION DENTAL CREAM」 と書かれた二つの文字がある、(1953)年頃のものか	
195	東國	高麗香形	緑色、「ダブルルームバーレム 銀葉洗口シスター歯科用品会社 大阪府工事局總務課(新規)」 反対側に「Green Star 花王製造販賣社 花王元化粧品會株式会社 大阪府新規特許(三月一周年)」の文字あり	
219	金城	瓦戸壁	「マーダー・ウエーブ」の文字あり、1904 - 1905 年のものでナジオの瓦戸壁の御品か	
280	金城	瓦戸壁	「リリミテッド瓦戸壁の御品か	
276	金城	瓦戸壁	瓦戸壁、瓦の瓦戸壁	
277	金城	瓦戸壁	瓦の瓦戸壁	
243	金城	瓦戸壁	瓦か、瓦の瓦戸壁あり	
244	金城	瓦戸壁	瓦か、瓦の瓦戸壁あり	
247	金城	瓦戸壁	瓦か、瓦の瓦戸壁あり	
110	東國	不明	漆塗の器の二つのもので一個は人物有り、縁の仕込みなし	
279	東國	不明	漆あり	
219	東國	不明	漆塗の器の、縁か	
242	モリス	漆	マダガスカルの漆器	
271	モリス	漆	マダガスカルの漆器、同じものか	
45	23	ガラス	無題、無題、白手すり、瓦の瓦戸壁に「(KUN)」のエンボスあり	
46	179	ガラス	瓦戸壁、瓦戸壁、瓦の瓦戸壁あり、瓦戸壁に「(KUN)」のエンボスあり	
57	36	ガラス	瓦戸壁、瓦戸壁、瓦の瓦戸壁あり	
48	280	ガラス	無題、透明、瓦かに瓦戸壁あり、メモリ传说「(KUN)」のエンボスあり、縁と拘束する	
49	85	ガラス	無題、透明、瓦の瓦戸壁	
50	120	ガラス	無題、白手すり、瓦戸壁、(KUN)、金剛童子のエンボスあり	
51	36	ガラス	瓦戸壁、半透明、白手すり、漆の「(KUN)」字が隠れている	
52	171	ガラス	無題、半透明、白手すり、漆の「(KUN)」字が隠れている	
53	1	ガラス	無題、透明、瓦の瓦戸壁	
54	254	ガラス	無題、透明、瓦の瓦戸壁	
60	161	ガラス	無題、透明、瓦の瓦戸壁	
118	ガラス	無題	無題、透明、瓦の瓦戸壁	
126	ガラス	無題	無題、透明、瓦の瓦戸壁	
184	ガラス	無題	無題、透明、瓦の瓦戸壁	
252	ガラス	無題	無題、透明、瓦の瓦戸壁	
32	221	ガラス	化学ガラス、半透明、瓦の瓦戸壁	
59	178	ガラス	無題瓦戸壁、瓦の瓦戸壁	
54	217	ガラス	クリヤー瓶	
55	2	ガラス	クリヤー瓶	
56	8	ガラス	長崎リードガラス 漆に「TAS-COLOR」の文字あり、1960 年代	
57	227 - 284	ガラス	佐賀リードガラス 漆の手すり、瓦の瓦戸壁	
58	190	ガラス	無題瓦戸壁	
59	194	ガラス	イントラ	
60	119	ガラス	イントラ(日本)イントラ	
62	163	ガラス	無題、透明瓦戸壁なし、みや吉樂の手すりあり、後継のものか	
60	172	ガラス	無題瓦戸壁	
62	75	ガラス	無題、透明瓦戸壁なし、無題(手すり)瓦戸壁のエンボス 無題(手すり)瓦戸壁の瓦戸壁の手すり	
62	78	ガラス	無題瓦戸壁	
63	20	ガラス	クリヤー瓶	
64	212	ガラス	無題	
65	145	ガラス	無題、半透明、瓦の瓦戸壁	
66	31	ガラス	無題、透明、瓦の瓦戸壁	
67	6	ガラス	無題、透明、瓦の瓦戸壁	
68	9	ガラス	無題、透明、瓦の瓦戸壁	
69	269	ガラス	白色、不透明、瓦の瓦戸壁	

第2章 新潟県五泉市新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター

規格番号	品目と規格番号	種別	特徴	文例・検査・包装・備考
53 - 56 - 59 - 63 - 68 - 150 -				
169 - 125 - 144 - 201 - 258 - 273 -				
274 - 275 - 276 - 277 - 278 - 279 -				
280 - 281 - 286 - 299 - 300 - 301 -				
302 - 312 - 313 - 321 - 323 -				
142	ガラス	半透明	無色、透明、気泡なし。サントリーネ製の個包装か	
294	ガラス	半透明	無色、透明、気泡なし。サントリーネ製の個包装か	
311	ガラス	半透明	無色、透明、気泡なし。LTDのミニボトル。サントリーネ製の瓶身か	
217	ガラス	コップ	無色、透明、気泡なし。コップの上部	
258 - 299	ガラス	コップ	無色、透明、気泡なし。底部	
111	ガラス	コップ	無色、透明、気泡なし。コップの底部	
225	ガラス	コップ	無色、透明、気泡なし。コップの底部	
126	ガラス	アーバル	無色、透明、気泡なし。アーバルの個包装か	
212 - 214	ガラス	瓶ガラス	無色、半透明、気泡なし。敷きガラス	
158	ガラス	半透明	無色、透明、気泡なし	
286	ガラス	半透明	無色、透明、気泡なし。ガラスのコップの瓶身か	
255	ガラス	半透明	無色、透明、気泡なし。底部のみ	
130	ガラス	半透明	無色、透明、気泡なし	
161	ガラス	試験管	*新セリフ No.161 はこの形状	
269	ガラス	ツバメ		
129	ガラス	ツバメ	無色、透明、気泡なし。黒のツバメ	
259	ガラス	半透明	無色、透明、気泡なし。底部	
260	ガラス	半透明	無色、透明、気泡なし。瓶の底部に新鮮なカクテ	
269	ガラス	半透明	無色、透明、気泡なし。底部	
329	黒鉛	標準	子供用鉛筆	
204	グム	半透明	黒色、透明感。ゴムの形のもの。No.204(2)は同じものか	
265	グム	半透明	黒色、透明感。ゴムの形のもの	
266	グム	半透明	黒色、透明感。ゴムの形のもの	
273	グム	半透明	黒色、透明感。ゴムの形のもの	
268	グム	半透明	黒色、透明感。ゴムの形のもの	
261	グム	半透明	黒色、透明感。ゴムの形のもの	
271	グム	半透明	黒色、透明感。ゴムの形のもの	
300	プロテック	蜜	CJUS/PAT705060006 の文字あり。新規 No. 65 のセロシルームの蜜	
220	プロテック	蜜	ホルモンドリームの蜜	
225	プロテック	蜜		
7	プロテック	丸	丸 (wood-wool) ハニカム	
279	プロテック	丸	丸入のツバメ、茎白、細胞網あり	
281	プロテック	丸	丸入のツバメ、茎白、細胞網あり	
34	プロテック	容器	新色。手袋用。SHISEIDO OLIVE SHAMPOO LIQUID / 東京牛乳 新宿 / 水野製印「二本足」「シャンゲー 清作」の文字あり。新色モリモリブリュー	
48	48	ガラス容器	ガラス容器 (ノマド UX-200) の文字あり。直管型の商品か。プロテックと新規登録からなる	
258	ガラス容器	瓶ガラス		
249	ガラス容器	マーティ	無色、楕円形の蜜の文字あり。(直角底のもの。上部にスクリューヘッドあり)	
27	ガラス容器	40ml	高品質シートオフ	
123	ガラス容器	40ml	(4ml) 3 通り	
133	ガラス容器	40ml		
180	ガラス容器	40ml		
221	ガラス容器	40ml		
245	ガラス容器	40ml	青色、内側のプラスチック	
275	ガラス容器	容器材		
262 - 263 - 264 - 265 - 267 - 268 -				
310 - 316 - 317 - 320 - 322 - 323 -	コンクリート	建築材	斜面のコンクリートを。No.320 は他のコンクリートより堅く。No.262 は他の形状	
325				
90	ビニール	筒		
218	ビニール	筒		
329	電池(リチウム)	半透明	底板のような形状	
138	電池(リチウム)	半透明	黑色、ゴムか	
214	電池(リチウム)	半透明	被膜物か	
315	電池(リチウム)	半透明	被膜物か	

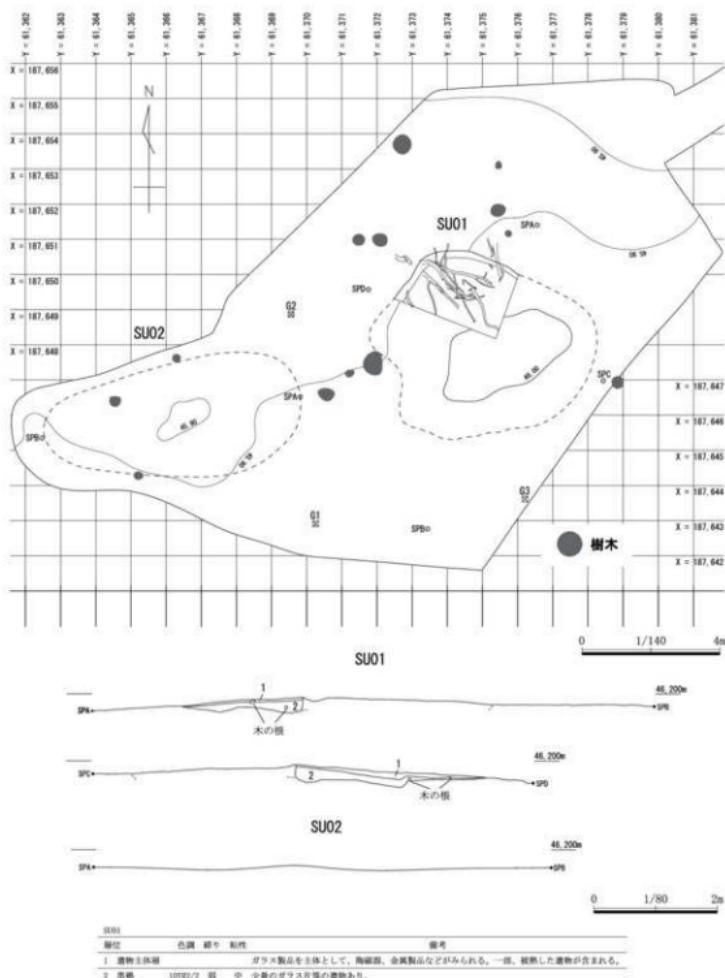
III 発掘調査の成果

第5表 遺物集積地点 SUO1 出土遺物観察表

番号	種別	器種	登録番号		説明	技術・文様・色調・筆者
			178	出埋		
1	鉢	鉢	021	460	6	織機目形、透眼模、外輪に火照、緑色系、赤色
2	鉢	鉢	022	460	6	織機目形、上口付、透眼模、内輪に火照模、緑色系、(三)織機の模があり
3	鉢	鉢	028	460	25	織機目形、上口付、透眼模、外輪に火照、(火照模あり)赤色、藍色
4	鉢	鉢	029	132	154	織機目形、穿孔、上口付(透眼模、外輪の火照、赤色、緑色系、緑色系)赤色
5	鉢	鉢	1923	460	25	織機目形、透眼模、(半透眼模で有り)
6	鉢	鉢	1330	170	17	織機目形、透眼模、内輪に火照(赤色)赤色
7	鉢	鉢			1315	透明模
8	鉢	鉢	026	120	22	織機目形、透眼模(半透眼模で有り)、内輪に火照(青色系)あり
9	鉢	鉢	129	460	122	織機目形、透眼模、内輪に火照(緑色系)あり、透眼模付
10	鉢	鉢	025	223	26	織機目形、穿孔、透眼模、外輪に火照(火照模あり)赤色
11	鉢	鉢	16	16	16	織機目形、穿孔、透眼模、外輪の火照(火照模あり)赤色
12	鉢	鉢	30		102	織機目形、透眼模、外輪に火照(赤色)赤色
13	鉢	鉢		55	103	織機目形、底模、底部内輪に「財布」の文字あり
14	鉢	鉢	125	111	104	織機目形、底模、底部内輪(「財布」)の文字あり
15	鉢	鉢	1310	460	92	織機目形、底模
16	鉢	鉢	699	33	102	織機目形、透眼模、上口付(透眼模あり)、内輪に火照(赤色、白色)青色、「久野」の款あり
17	鉢	鉢	36		106	底模
18	鉢	鉢	22	23	208	底模に「久野」と「アマノ」の文字
19	鉢	鉢	129	460	103	底模に「DAIBICHI SEI KAI CO LTD TOKYO」の文字あり、ハイアルの墨
20	鉢	鉢	20	26	85	底に「一」あり、ハイアルの墨
21	鉢	鉢	105	22	75	底に「一」あり、ハイアルの墨
22	鉢	鉢	30	23	8	底に「DAIBICHI SEI KAI CO LTD TOKYO」の文字あり、ハイアルの墨
23	鉢	鉢	22	23	8	底に「一」あり、ハイアルの墨
24	鉢	鉢	19	23	85	底に「一」あり、ハイアルの墨
25	鉢	白山鉢	最大径 7		665	底面に「白山」と「火照模」を有する。その中に「久」の款字
26	鉢	白山鉢	最大径 6		208	底の「久野」が透けたうえに赤色
27	鉢	白山鉢	最大径 6		103	底の「久野」が透けたうえに赤色
28	鉢	白山鉢	最大径 6		127	世間に「久野」の名前
29	鉢	白山鉢	最大径 7		27	透眼模、火照模(火照模なし)、穿孔(火照模あり)、織機目形
30	鉢	白山鉢	最大径 24		15	白山の五輪の文字(裏面)、もろ焼(「久野キヨヒコ」の墨あり)、アルミニウム
31	ガラス	素皿	30	30	45	透眼、火照模、火照模(「久」)の墨の文字あり
32	ガラス	素皿	20	28	32	透眼、火照模、火照模(「久」)の墨の文字あり
33	ガラス	素皿	100	217	222	透眼、火照模(火照模なし)、織機目形
34	ガラス	素皿	55	25	55	透眼、火照模、火照模(火照模なし)、織機目形
35	ガラス	素皿	20	20	40	透眼、火照模、火照模(火照模なし)、織機目形
36	ガラス	素皿	27	27	40	透眼、火照模、火照模(火照模なし)、織機目形
37	ガラス	素皿	30	29	40	透眼、火照模、火照模(火照模なし)、織機目形
38	ガラス	素皿	19	22	34	透眼、火照模、火照模(火照模なし)、ハイアル
39	ガラス	素皿	17	22	35	透眼、火照模、火照模(火照模なし)、織機目形
40	ガラス	素皿	16	30	75	透眼、火照模、火照模(火照模なし)、織機目形
41	ガラス	素皿	17	26	41	透眼、火照模(火照模なし)、織機目形
42	ガラス	日本製	71	22	14	透眼、火照模、火照模
43	ガラス	白山鉢	18		40	透眼模、火照模、火照模
44	ガラス	白山鉢	11	13	103	火照模、火照模(火照模なし)、織機目形
45	ガラス	湖田製	30	20	30	透眼、火照模(火照模なし)、M&Gのロゴと空間模様、(昭和 1962 年発売)
46	ガラス	萩原製	150	14	20	透眼、火照模、火照模(「萩原」の墨の文字あり)
47	ガラス	化粧クリム皿	230	GR	24	火照、火照模、火照模(火照模なし)
48	ガラス	インコ皿	26	31	43	透眼、火照模、火照模(「SANKO」の墨の文字あり)、織機インコのものか、会社は昭和 2 年で倒産
49	ガラス	インコ皿	19	30	42	透眼、火照模、火照模(火照模なし)
50	ガラス	白山鉢	12	24	45	透眼模、火照模、火照模
51	ガラス	白山鉢		26.5	103	透眼模、火照模(火照模なし)、(「DAIBICHI」)
52	ガラス	白山鉢	11	13	103	火照模、火照模(火照模なし)、(「DAIBICHI」)
53	ガラス	白山鉢	20	20	30	透眼、火照模(火照模なし)、(「DAIBICHI」)
54	ガラス	白山鉢	12.5	22	22	透眼、火照模(火照模なし)、(「DAIBICHI」)
55	ガラス	白山鉢	12.5	20	22	透眼、火照模(火照模なし)、(「DAIBICHI」)
56	ガラス	白山鉢	12.5	20	44	火照、上部透眼、底部透眼(「DAIBICHI」)、火照なし
57	ガラス	白山鉢	12.5	20	45	火照、火照模、火照模
58	ガラス	アンブレラ	12.5	20	125	火照、火照模(火照模なし)、織機模、織機模(火照模なし)
59	ガラス	アンブレラ	12.5	20	126	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
60	ガラス	アンブレラ	10.5	13	127	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
61	ガラス	アンブレラ	10.5	13	128	火照模、透眼、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
62	ガラス	アンブレラ	10.5	13	129	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
63	ガラス	アンブレラ	10.5	13	130	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
64	ガラス	アンブレラ	10.5	13	131	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
65	ガラス	アンブレラ	10.5	13	132	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
66	ガラス	アンブレラ	10.5	13	133	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
67	ガラス	アンブレラ	10.5	13	134	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
68	ガラス	アンブレラ	10.5	13	135	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
69	ガラス	アンブレラ	10.5	13	136	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
70	ガラス	アンブレラ	10.5	13	137	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
71	ガラス	アンブレラ	10.5	13	138	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
72	ガラス	アンブレラ	10.5	13	139	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
73	ガラス	アンブレラ	10.5	13	140	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
74	ガラス	アンブレラ	10.5	13	141	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
75	ガラス	アンブレラ	10.5	13	142	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
76	ガラス	アンブレラ	10.5	13	143	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
77	ガラス	アンブレラ	10.5	13	144	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
78	ガラス	アンブレラ	10.5	13	145	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
79	ガラス	アンブレラ	10.5	13	146	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
80	ガラス	アンブレラ	10.5	13	147	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
81	ガラス	アンブレラ	10.5	13	148	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
82	ガラス	アンブレラ	10.5	13	149	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
83	ガラス	アンブレラ	10.5	13	150	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
84	ガラス	アンブレラ	10.5	13	151	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
85	ガラス	アンブレラ	10.5	13	152	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
86	ガラス	アンブレラ	10.5	13	153	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
87	ガラス	アンブレラ	10.5	13	154	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
88	ガラス	アンブレラ	10.5	13	155	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
89	ガラス	アンブレラ	10.5	13	156	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
90	ガラス	アンブレラ	10.5	13	157	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
91	ガラス	アンブレラ	10.5	13	158	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
92	ガラス	アンブレラ	10.5	13	159	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
93	ガラス	アンブレラ	10.5	13	160	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
94	ガラス	アンブレラ	10.5	13	161	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
95	ガラス	アンブレラ	10.5	13	162	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
96	ガラス	アンブレラ	10.5	13	163	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
97	ガラス	アンブレラ	10.5	13	164	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
98	ガラス	アンブレラ	10.5	13	165	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
99	ガラス	アンブレラ	10.5	13	166	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
100	ガラス	アンブレラ	10.5	13	167	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
101	ガラス	アンブレラ	10.5	13	168	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
102	ガラス	アンブレラ	10.5	13	169	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
103	ガラス	アンブレラ	10.5	13	170	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
104	ガラス	アンブレラ	10.5	13	171	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
105	ガラス	アンブレラ	10.5	13	172	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
106	ガラス	アンブレラ	10.5	13	173	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
107	ガラス	アンブレラ	10.5	13	174	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
108	ガラス	アンブレラ	10.5	13	175	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
109	ガラス	アンブレラ	10.5	13	176	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
110	ガラス	アンブレラ	10.5	13	177	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
111	ガラス	アンブレラ	10.5	13	178	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
112	ガラス	アンブレラ	10.5	13	179	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
113	ガラス	アンブレラ	10.5	13	180	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
114	ガラス	アンブレラ	10.5	13	181	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
115	ガラス	アンブレラ	10.5	13	182	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
116	ガラス	アンブレラ	10.5	13	183	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
117	ガラス	アンブレラ	10.5	13	184	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
118	ガラス	アンブレラ	10.5	13	185	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
119	ガラス	アンブレラ	10.5	13	186	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
120	ガラス	アンブレラ	10.5	13	187	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
121	ガラス	アンブレラ	10.5	13	188	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
122	ガラス	アンブレラ	10.5	13	189	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
123	ガラス	アンブレラ	10.5	13	190	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
124	ガラス	アンブレラ	10.5	13	191	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
125	ガラス	アンブレラ	10.5	13	192	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
126	ガラス	アンブレラ	10.5	13	193	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
127	ガラス	アンブレラ	10.5	13	194	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
128	ガラス	アンブレラ	10.5	13	195	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
129	ガラス	アンブレラ	10.5	13	196	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
130	ガラス	アンブレラ	10.5	13	197	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
131	ガラス	アンブレラ	10.5	13	198	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
132	ガラス	アンブレラ	10.5	13	199	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
133	ガラス	アンブレラ	10.5	13	200	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
134	ガラス	アンブレラ	10.5	13	201	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
135	ガラス	アンブレラ	10.5	13	202	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
136	ガラス	アンブレラ	10.5	13	203	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
137	ガラス	アンブレラ	10.5	13	204	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
138	ガラス	アンブレラ	10.5	13	205	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
139	ガラス	アンブレラ	10.5	13	206	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
140	ガラス	アンブレラ	10.5	13	207	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
141	ガラス	アンブレラ	10.5	13	208	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
142	ガラス	アンブレラ	10.5	13	209	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
143	ガラス	アンブレラ	10.5	13	210	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
144	ガラス	アンブレラ	10.5	13	211	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
145	ガラス	アンブレラ	10.5	13	212	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
146	ガラス	アンブレラ	10.5	13	213	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
147	ガラス	アンブレラ	10.5	13	214	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
148	ガラス	アンブレラ	10.5	13	215	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
149	ガラス	アンブレラ	10.5	13	216	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
150	ガラス	アンブレラ	10.5	13	217	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
151	ガラス	アンブレラ	10.5	13	218	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
152	ガラス	アンブレラ	10.5	13	219	火照、火照模(火照模なし)、織機模(火照模なし)
153	ガラス	アンブレラ	10.5	13	220	

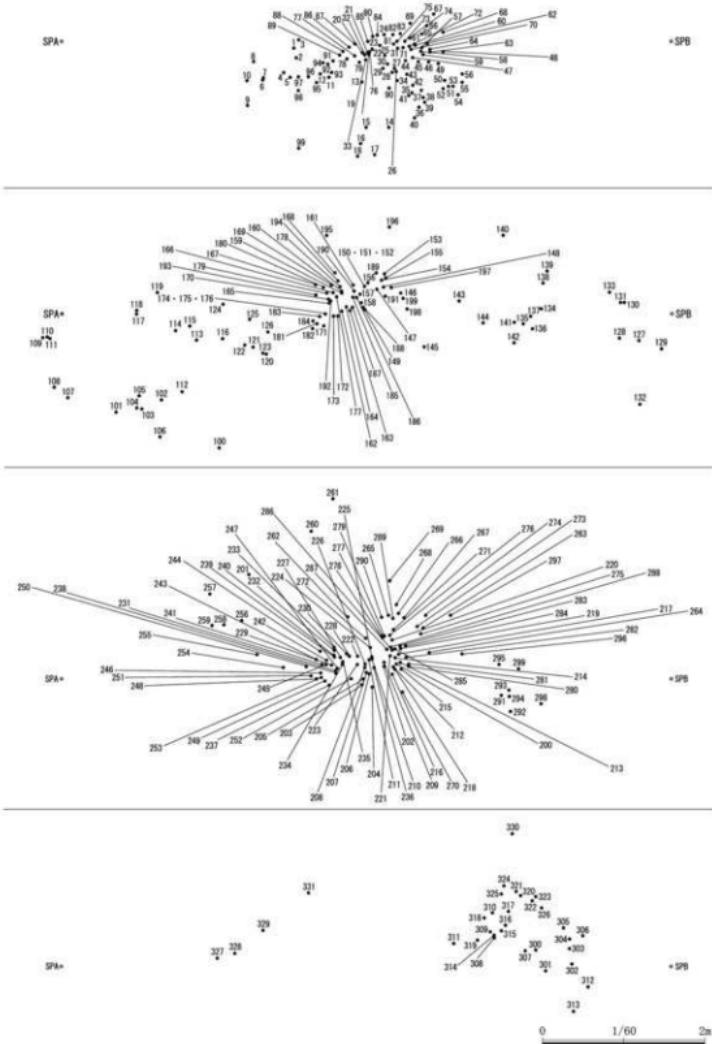
III 発掘調査の成果

第6表 遺物集積地點 SJ02 出土遺物觀察表



第17図 遺物集積地点 SU01・SU02 平面図、SU01断面図、SU02 エレベーション図

III 発掘調査の成果



第18図 遺物集積地点 SU02 遺物分布図

参考文献

- 池田栄史 2019『沖縄戦の発掘 沖縄陸軍病院南風原塚群』(シリーズ「遺跡を学ぶ」137)、新泉社。
- 小川望・小林克・両角まり(編) 2007『考古学が語る日本の近現代』、株式会社同成社。
- 菊池実 2008『戦争遺跡の発掘・陸軍前橋飛行場』(シリーズ「遺跡を学ぶ」047)、新泉社。
- 清瀬市郷土博物館(編) 2020『清瀬市郷土博物館特別展 下宿内山遺跡－江戸～昭和の清瀬を掘る－』。
- 慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室・共和開発株式会社 2011『会津藩保科(松平) 家屋敷跡遺跡(－慶應義塾中等部新体育館・プール建設計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－)』。
- 現代グラスパッケージング・フォーラム 1988『ALL ABOUT BOTTLES ガラス瓶の文化誌』、株式会社講談社。
- 五泉市教育委員会 2003『橋田C遺跡』(老人福祉施設建設工事に伴う発掘調査報告書) 五泉市文化財報告(7)。
- 五泉市教育委員会・国際航業株式会社文化財事業部 2004a『住吉田遺跡・住吉田南遺跡』(能代川関係遺跡発掘調査報告書8) 五泉市文化財報告(8)。
- 五泉市教育委員会・国際航業株式会社文化財事業部 2004b『新田遺跡』(能代川関係遺跡発掘調査報告書3) 五泉市文化財報告(10)。
- 五泉市教育委員会・山武考古学研究所 2004a『新保遺跡・住吉田東遺跡』(能代川関係遺跡発掘調査報告書4) 五泉市文化財報告(11)。
- 五泉市教育委員会・山武考古学研究所 2004b『箕下遺跡』(能代川関係遺跡発掘調査報告書5) 五泉市文化財報告(12)。
- 五泉市教育委員会・吉田建設 2004『榎表南遺跡』(能代川関係遺跡発掘調査報告書9) 五泉市文化財報告(16)。
- 五泉市教育委員会・みくに考古学研究所 2005『榎表遺跡』(能代川関係遺跡発掘調査報告書10) 五泉市文化財報告(17)。
- 五泉市史編集委員会 1994『五泉市史』(資料編 原始・古代・中世)、五泉市。
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1983『県政百年記念「近代の九州陶磁」展』、佐賀県立九州陶磁文化館。
- 桜井準也 2019『増補 ガラス瓶の考古学』、六一書房。
- 佐野宏明(編) 2019『モダン図案』、光村推古書院。
- 沙留地区遺跡調査会 1996『沙留遺跡』(第2分冊・沙留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書-)。
- 菅沼亘 1992[五泉市薬師堂遺跡旧石器時代資料の再検討]『新潟考古』第3号、新潟県考古学会、61-78頁。
- 鈴木公雄ゼミナール(編) 2007『近世・近現代考古学入門「新しい時代の考古学」の方法と実践』慶應義塾大学出版会株式会社。
- 中村 元 2017『新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーションに残る旧陸軍施設関連資料の基礎的検討』『資料研究』第14号、新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」。
- 新潟県 1983『新潟県史』(資料編1 原始・古代・考古)。
- 新潟大学五十年史編集委員会 2000『新潟大学五十年史 部局編』、新潟大学五十年史刊行委員会。
- 平成ボトル俱楽部 2017『日本のレトロびん』、グラフィック社。
- 町田市立博物館 1987『明治印判手の磁器－岩崎安吉氏の寄贈による－』(町田市立博物館図録 第56集)。
- 町田市立博物館 1996『印判手の意匠 近代の絵付け＝型紙摺絵・銅版転写の世界』(町田市立博物館図録 第103集)。
- 宮地英敏 2008『近代日本の陶磁器業』、名古屋大学出版会。

III 発掘調査の成果

- 村松町教育委員会 1973 「矢津遺跡発掘調査概要」。
- 村松町教育委員会 1981 「村松城跡発掘調査概要報告書」。
- 村松町教育委員会 1994 「安出遺跡発掘調査報告書」。
- 村松町史編纂委員会『村松町史』(資料編 第一巻考古・古代・中世)、村松町教育委員会事務局。
- 村松町史編纂委員会 1982 『村松町史』下巻、村松町教育委員会事務局。
- 村松町史編纂委員会 1983 『村松町史』上巻、村松町教育委員会事務局。
- メタアーケオロジー研究会・桜井準也(編)「近現代考古学の射程～今なぜ近現代を語るのか～」、六一書房。
- 柳田誠 1981 「阿賀野川の河岸段丘」『駒沢地理』17、29 - 56 頁、駒澤大学文学部地理学教室。
- 横浜市歴史博物館(編) 2020 『明治・大正ハマの街 - 新市庁舎建設地・洲干島遺跡 -』、公益財團法人横浜市ふるさと歴史財団。

第3章 考察

I 村松秘匿飛行場について

阿部紀佳

はじめに

村松の軍用飛行場は、終戦間際に秘匿飛行場として運用される予定で設営された施設である。聞き取り調査によると、当時の飛行場整地に当たって、付近の住民を動員し、大型重機を多数使用して地ならしを行い、急いで作業を進めたという。しかしながら、元々陸軍用地であったこの場所の土地利用に関する記述はあるのに対し、村松秘匿飛行場の具体的な造成方法についてはほとんどわかつていない。

そこで本稿では、村松秘匿飛行場について、聞き取り調査や文献等から窺い知ることのできた情報を踏まえ、今回の発掘調査で確認した軍用飛行場地点における土層について説明し、滑走路の造成について考察する。

1. 秘匿飛行場について

まず最初に、秘匿飛行場とはどのような施設であるかをつくられた背景とともに明らかにしておきたい。昭和16年の太平洋戦争開始以来、戦場の第一線から報じられる激烈な航空戦の様相を受け、内地の各航空基地が昭和18年度から19年度に増加、および強化された。しかし、敵艦載機の激しい攻撃を受け、航空戦力と航空機生産能力が減退してしまったため、現有戦力をもって本土決戦に備えるに当たり、昭和20年4月から徹底した分散秘匿が行われた。飛行機は、自然の道路を利用して飛行場から遠く離れた森林や村落内に、弾薬や燃料は飛行場から4000m離れた山間や森林内に隠すように指示された。秘匿した飛行機を持ち出して訓練を行うことは、敵の制空圏外にある場合であれ、制空時下降であつて、困難であった。この状況を打破するため、飛行場自体を秘匿することになった。敵に見つからずに大きな飛行場を整備するため、地形が有利な適地調査が機関及び部隊によって行われ、選ばれた地の1つが村松であった。秘匿飛行場の多くは7月にはおむね使用可能な程度に整備され、運用された（本土航空作戦記録 1946）。

事実、村松ステーション周辺は、日清戦争以降より陸軍用地であり、西に愛宕山がそびえ、広大な土地を有している点で、秘匿飛行場を選定する基準に適している。なお、聞き取り調査によると、村松ステーションの北にある圃場で訓練用の整塁が造設されていた場所を重機で均して飛行場に転用し、愛宕山のはずれに飛行機を隠しておく格納庫を造ったという。

その他、新潟県域にある村松以外の秘匿飛行場は2か所ある。1か所は、重機が投入され整備された現魚沼市の八色原飛行場である。八色原飛行場の周囲には、方谷山があり、幅約50m、全長約1500mの滑走路が造設されたことが分かっている（小出町史 1998）。もう1か所は現新潟市西区の山田島飛行場で、付近に木や竹藪のある、人力で整備された幅約300m、全長約1500mの滑走路を有する秘匿飛行場である（黒崎町史 2000、黒崎町の今昔 1991）。整地方法の違いはあれ、3か所の秘匿飛行場には、付近に飛行機を隠すことのできる自然環境が整っていたことと、長さ1500mの滑走路を造ることのできる広大な土地があることが共通している。このように厳密な選定基準に沿って飛行場適地が選ばれ、秘匿飛行場が造設されたことが分かる。

村松秘匿飛行場は、滑走路の形態がほぼ完了したころには終戦を迎え、実戦に役立てられることも、空襲の訓練に使用されることもなかった。終戦後は、飛行場の土地は元の耕作者に返還されたが、耕作を始める前に進駐軍命令によって一時的に立ち入り禁止区画となった。11月中旬には、その禁止も解かれ、進駐軍から返還された（村松町史 1982）。

2. 土層の解釈について

聞き取り調査において、墳塚造設地が重機で均され飛行場が造られたという証言を得ていることは上でも述べたが、ここでは、今回滑走路と判断した第1トレーニングの土層の説明および滑走路の造成について論じる。

まず、第1トレーニングの全体的な土層の解釈を行う。南壁・西壁では共通して自然堆積であるIV層の砂礫を多く含む層、その上のⅢb層が認められる。Ⅲb層を掘削して造られたのがSD02であるが、これは、幅80cm、深さ40cmの溝状造構である。聞き取り調査による、調査区周辺において滑走路造成前には練習用墳塚がつくられていたという証言をうけ、SD02を墳塚跡であると判断している。覆土は黒褐色土と黄褐色土の混合土であるが、これは墳塚造成時に地表に上げたⅢb層および3層の土が、滑走路造成に伴う削平を行った際に、埋め戻されてできたものであると考えられる。

SD02より上層の1層、2層、3層は、しまりの強い土や砂礫を含む土で形成されているため、滑走路の造成に伴う土層であると判断した。南壁では、1層とした表土で圃場側は耕作土、農道側は上層に円礫を含む黒褐色土層、下層に砂礫を多く含む黄褐色土層が認められる。耕作土の層厚は約0.6mであり、村松ステーションの圃場では地表面下0.6mまで重機を使用して天地返しを行っているという証言とも一致している。また、農道に関しては、米軍によって撮影された1947年11月の航空写真において、圃場を細かく区画するために整備されていることが確認できるため、今回確認できた土層についても、農道の敷設に関連する可能性が高い。

次に溝状造構 SD02 がどのように形成されたかについて、聞き取り調査の情報や SD01 の墳塚跡のデータの比較を行なながら考察する。聞き取り調査では、滑走路が築かれた平地には、太平洋戦争以前に陸軍が練習用墳塚を作り、そこで訓練兵の養成を行なったことが分かっている。また、練習用墳塚であると推定している同調査区内の SD01 と下端の幅の値が類似している点や、Ⅲb層まで溝を掘り下げている点が一致していることから、SD02 は墳塚跡であると言える。加えて、墳塚があった部分の層は、黄褐色土と黒褐色土が混ざったような土層であることから、墳塚を造成する際には、Ⅲb層の黄褐色土と3-1層の黒褐色土を地表面上に上げて盛り立て、後に飛行場のため土壤削平を行った際には、盛り上げた土を墳塚の溝を平らに均すために、埋め戻したと解釈できる。

また、第2トレーニングの SX01 と第3トレーニングの SX02 について、両方とも平面的な形状は今回確認できなかった。しかしながら、SD01 と同じようにⅢ層上面が確認面であり、その上に滑走路の造成土であると判断した土層があるという点が一致しており、SD01 と同じ、溝状造構の墳塚跡である可能性が高い。

農道沿いに設定した第1～3トレーニングにおいて、耕作土の下には何らかの遺構が確認できるのに対して、農道より北に設定した第4トレーニングには人為的な痕跡は見られなかった。

おわりに

以上、村松秘匿飛行場の滑走路造成について考察を行い、整地の方法を推定した。今回の発掘調査範囲からは、滑走路の全体的な様相は明らかにすることが出来ず、不確定な要素も多い。また、飛行訓練およびその他墳塚を用いた訓練に使用されるような遺物等の出土も今回は認められなかった。今後の発掘調査では、さらに広い範囲で平面的な調査を行うことで当時の軍用滑走路の造成に関する具体的な様相を明らかにすることが出来るこことを期待したい。

写真出典

国土地理院ウェブサイト <http://www.gsi.go.jp/> 地図・空中写真閲覧サービスより空中写真（米軍撮影）を加工して作成



第1図 村松ステーション周辺の空中写真（1946年撮影）



第2図 村松ステーション周辺の空中写真（1947年撮影）

参考文献

- 黒崎町 2000『黒崎町史』通史編、黒崎町。
小出町教育委員会 1998『小出町史』下巻、小出町。
第一復員局 1946『本土航空作戦記録』第一復員局。
宮田栄門 1991『黒崎町の今昔聞き書き帳』、宮田栄門。
村松町史編纂委員会 1982『村松町史』下巻、村松町教育委員会事務局。

II 練兵場と塹壕について

松井翔吾

はじめに

現在の村松ステーション内に練兵場が設置されたのは、1897年9月に歩兵第三十連隊が村松町に移駐することを契機とする（村松町史編纂委員会 1982）。現在の村松ステーションはこの練兵場の敷地に位置しており、練兵場に伴う練習用塹壕がつくられ、利用された時期は1897年～1945年に至る時期が想定される。また、聞き取り調査から村松ステーション内に練習用塹壕があったことが知られている。今回調査を行った堀・溝状遺構地点SD01（以下、SD01とする）および、軍用飛行場地点SD02（以下、SD02とする）からは利用時期や練習用塹壕として特定できる遺物は出土しなかった。しかし、今回の発掘調査によって両遺構が自然堆積層を掘り込みつくられた、人為的な痕跡を確認することができた。そのため、練習用塹壕である可能性が考えられる。

本稿では、SD01、SD02で検出された落ち込みについて、塹壕として報告されている他遺跡と比較検討を行い、両遺構が練習用塹壕であるか考察を行った。

1. 他の事例との比較検討

塹壕として報告されている遺跡として、管見の限りでは香川県善通寺市旧練兵場遺跡、愛媛大学城北キャンパス内の文京遺跡、高知県南国市向山戦争遺跡3例である。以下、各遺跡の概要を示す。

(1)各遺跡の概要

・旧練兵場遺跡

この遺跡は香川県善通寺市仙遊町二丁目に位置する遺跡である。この地域では、明治29（1896）年に旧陸軍第11師団が開設され、翌年に陸軍演習のため練兵場が開設された。この遺跡では、塹壕と考えられる溝状遺構が計12本検出されている。これら遺構は明治～昭和初期の時代のものと考えられており、掘削後すぐに埋め戻されたことが土層から考えられている。各遺構の規模として、検出された長さ、深さ、幅が示されている。しかし、幅の計測値は上端と下端どちらのものか報告書からは判断できないが、遺構の断面形状は凹形を有しているため上端と下端の幅に大差はないといえる。以上のような溝状遺構がこの遺跡では検出されており、練兵場に伴う練習用塹壕として位置付けられている（角南2002）。

・文京遺跡

この遺跡は愛媛大学城北キャンパス内の遺跡である。城北キャンパス一帯は太平洋戦争が終戦するまで城北練兵場として利用されていた。発掘調査によって、幅1mほど、深さ0.8m～1mの溝状遺構が見つかっている。また、小銃の弾丸や薬莢、軍服のベルト金具など出土しており、軍事訓練として掘られた練習用塹壕として考えられている（愛媛大学埋蔵文化財調査室）。

・向山戦争遺跡

この遺跡は高知県南国市伊達野に位置する遺跡である。この遺跡は第2次世界大戦末期に構築された旧日本軍の「本土決戦」陣地跡である。当遺跡では交通壕が8本検出されており、遺構の規模は場所により若干の異なりをもつが深さは0.5～1.5m、幅は0.6m～1m前後である。遺構の断面形状はほとんどが垂直に立ち上がるという。そのため、上端と下端の幅に大差はない。上記の練習用塹壕と位置づけられている2遺跡と異なり、この遺跡は本土決戦に向けてつくられた遺跡である。遺構の性格は異なるが、SD01と類似し遺構の削平や埋め戻しが行われておらず、つくられた当時の様相に近い遺構であるといえる（高知県文化財団埋蔵文化財センター 2012）。

(2) 遺跡間の比較

検討には深さと幅の規模を比較する。比較には各報告書に記載されている計測値を基にした（第1表）。

第1表 各遺跡の塹壕規模

遺跡	遺構	性格	長さ(m)	幅(m)	深度(m)
村松ステーション	SD01 (塹・溝状遺構)	塹壕	－	3.24(上端) 0.60-0.70(下端)	1.18 (上端から下端)
	SD02 (軍用飛行場)	塹壕	－	不明(上端) 0.55(下端)	0.4(残存値)
旧練兵場遺跡	SD001	塹壕	6.50	1.20	0.15
	SD002	塹壕	4.50	1.10	0.62
	SD006	塹壕	3.50	1.10	0.57
	SD020	塹壕	7.50	1.10	0.28
	SD024	塹壕	2.50	0.75	0.50
	SD043	塹壕	11.50	1.20	0.20
	SD072	塹壕	8.50	1.10	0.53
	SD097	塹壕	9.00	1.20	0.14
	SD104	塹壕	11.50	1.10	0.24
	SD105	塹壕	8.60	1.10	0.60
	SD139	塹壕	6.80	1.10	0.43
	SD231	塹壕	10.50	1.20	0.21
文京遺跡	－	塹壕	－	1.00	0.8-1.0
向山戦争遺跡	－	交通壕	37.00	0.60-1.00	1.50

まず、遺構の深さについて比較を行っていく。SD02、旧練兵場遺跡、文京遺跡は削平や埋め戻しが行われているため、実際の遺構の深さは分からず。そのため、先述の通りつくられた当時の様相に近い遺構である向山戦争遺跡と比較を行う。SD01の上端から底面までの深さ約1.2mであった。向山戦争遺跡の深さは0.5～1.50mと上端から底面までの深さについて1m以上を有するものが向山戦争遺跡でも見られる。

次に、遺構の幅について比較したい。SD01は上端の幅は約3.3m、下端の幅が0.6～0.7mで、SD02では下端の幅は0.55mであった。他の遺跡では旧練兵場遺跡は幅0.75～1.20m、文京遺跡は幅約1.0m、向山戦争遺跡では幅0.6～1mであり、これら3遺跡では塹壕の幅が1m前後を有するものが多いことがわかる。その一方で、SD01とSD02の下端の幅は0.6m前後と1mに満たない。また、SD01の上端の幅は向山戦争遺跡のものと比較しても大きいことがわかる。

2. 考察

まず、遺構の上端から底面までの深さについて比較すると向山戦争遺跡では場所により異なりはあるが、SD01と同じく1m以上の深さを有していることがわかった。一方で、他遺跡では下端の幅が1m前後のものが多いが、SD01、SD02の下端の幅は1mに満たない。さらに、SD01の上端の幅は3.24

mと広い。以上のようなSD01、SD02の形状をどのように考えられるだろうか。

まずは、上端の幅が広い形状の塹壕が造成された可能性を考えられる。明治時代以降に出版された塹壕掘削のマニュアルではNo.12、13のような上端の幅が大きな塹壕の例が示されている。また、下端の幅についてはNo.8～10のように1mに満たないものもあり、塹壕の深さも1m以上のものがNo.3～9など示されている。そして、塹壕の造成に関して『野戦築城教範改正草案』(1908)と『野戦築城教範』(1927)では以下のように示されている。

「第四十一 長時日守備スハキ散兵壕ニシテ全ク敵ニ識別サレサル处置ヲ施シ得ル場合又ハ敵眼ニ対スル遮蔽ノ顧慮ヲ要セサルトキハ一層広キ壕幅ト高キ掩體トヲ有スル散兵壕ヲ採用スルコトアリ (川流堂 1908: 37頁)」

「第二十二 散兵壕ノ断面ハ状況特ニ地形及作業時間ノ多寡等ニ依リ決定スルモノトス (陸軍省 1927: 12頁)」

「第四十三 端末作業法ニ依リ散兵壕ヲ掘進スルニハ通常先ツ必要ナル最小限ノ断面ヲ構築スルモノニシテ其幅員ハ状況特ニ地形ニ応じ作業ノ便否、交通ノ難易及掩護ノ程度竝爾後掘擴セントスル断面等ヲ顧慮シテ之ヲ決定スルモノトス (陸軍省 1927: 27-28頁)」

上記のように、塹壕はその状況や地形に応じてつくることがあり、上端の幅が広い塹壕を採用することもあるということが分かる。そのため、SD01は上端の幅約3.3m、下端の幅0.6～0.7m、上端から底面までの深さ約1.2mの規模でつくられたものと推測できる。

2つ目にはSD01はSD02、旧練兵場遺跡、文京遺跡と異なり削平や埋め戻しが行われず、現在まで至っていることである。SD02の埋土には黒褐色土と黄褐色土の混合土が確認されている。これは、飛行場設営のため塹壕を埋め戻す際に、掘り上げた土を埋土として利用したためと考えられる。一方で、SD01の埋土は第5層では黄褐色土が混じる混合土であるが、上層の第4～2層は自然堆積の第II層と類似しており、黄褐色土の混合は確認できなかった。以上のことから、塹壕を造成する際に第5層の部分まで掘り込み、塹壕利用時に積み上げた土が落ちることによって第5層は形成されたと考えられる。上層の第4～2層は塹壕として利用されている際やそれ以後の人の出入りなどにより塹壕の斜面が崩れた結果形成されたと考えられる。聞き取り調査から子供の遊び場として塹壕が使われていたこと、塹壕の溝が終戦以降も通路として利用されていたことなど戦後も人の出入りがあったと分かっている。さらに、自然条件や動物の活動によって斜面が崩れたことも想像に難くない。

このように、明治時代以降の塹壕掘削マニュアルにSD01、SD02の幅や深さの例が見られること。また、塹壕の構築規模は土の質や状況によって臨機応変に塹壕がつくられたこと。練習用塹壕であるからこそ様々な目的や状況に応じた形態の塹壕がつくられた可能性であること。これらを踏まえれば、今回調査を行ったSD01、SD02が練兵場に伴う練習用塹壕であると位置づけられる。また、SD01の上端の幅の大きさは削平や埋め立てが行われず、現在にまで至ったという経緯を考慮すれば、塹壕利用時の上端の幅は今回の検出状態よりも狭かったが、塹壕の利用時やそれ以後の人の出入り自然条件や動物の活動等により斜面が崩れ、幅が広くなったという推測も可能であろう。さらに、他遺跡との比較検討を行うと、すべての遺構で同様の規模を擁しているとはいえない。それは、塹壕掘削のマニュアルに示されているように様々な規模のものが状況に応じて構築されていたということからも理解できよう。

おわりに

以上のように、他遺跡との比較、塹壕掘削のマニュアルの検討からSD01およびSD02に見られる遺構が練習用塹壕であると位置づけた。また、SD01の上端の幅について塹壕掘削マニュアルにおいても2～3mの幅を有する塹壕が記されていること、埋土の状態やSD01が現在まで削平や埋め立て

が行われていない経緯から推測し2つの解釈を行った。現在、壇場の関する発掘報告は比較的少數である。壇場が報告されている遺跡の中でも、SD01のように削平や埋め立てが行われず現代に至ったという遺構が確認できる例は珍しいものといえる。そのため、練習用壇場がどのように造成され、利用されたかといった具体的な様相について聞き取り調査や歴史学、考古学から更なる検討が必要となるだろう。

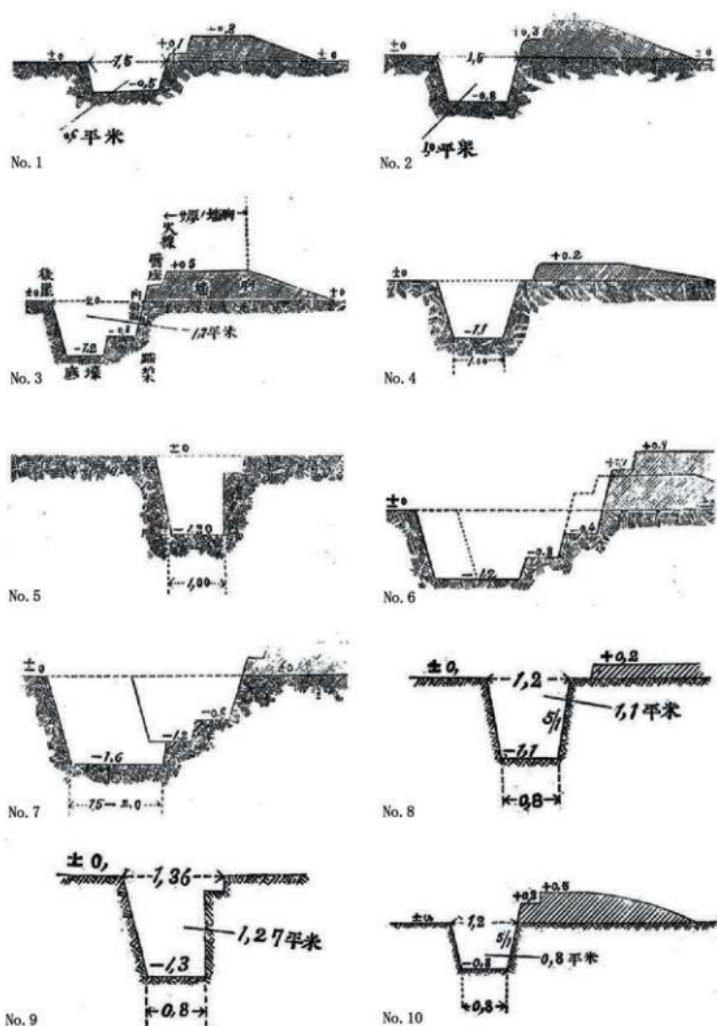
参考文献

- 高知県文化財団理蔵文化財センター 2012『向山戦争遺跡』。
角南聰一郎 2002『旧練兵場遺跡』(元興寺文化財研究所編)、普通寺市。
川流堂 1908『野戦築城教範改正草案』。
村松町史編纂委員会 1982「第5章 軍隊と村松」『村松町史』(下巻)、村松町教育委員会事務局。
陸軍省 1927『野戦築城教範』軍令陸第3号、兵用図書。
愛媛大学理蔵文化財調査室「文京遺跡・御幸遺跡出土の戦争関連遺構・遺物について」war_document.pdf (ehime-u.ac.jp) (閲覧日 2021年2月22日)。

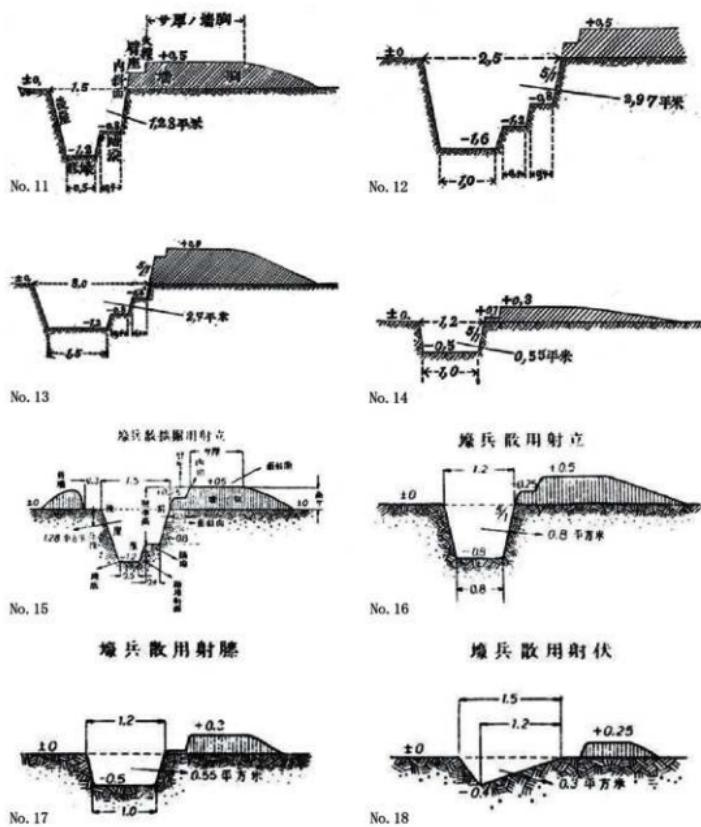
引用図版

- No. 1 ~ 7 武揚堂 1904『野戦築城教範』。
No. 8 ~ 14 川流堂 1908『野戦築城教範改正草案』。
No.15 ~ 18 陸軍省(編) 1927『野戦築城教範』軍令陸第3号、兵用図書。

II 練兵場と塹壕について



第1図 塹壕掘削マニュアル(1)



第2図 塹壕掘削マニュアル (2)

III 遺物集積地点の廃棄について

舟山直希

はじめに

村松ステーション内の近現代遺物の集積造構である遺物集積地点 SU01 では陶磁器やガラス瓶、医療用品が見られた。その中で遺物のはほとんどが注射器やアンプル・バイアル、薬瓶といった医療用品であり、また被熱物も多く見られた。SU02 では陶磁器やガラス瓶といった生活用品が中心であり、医療用品や被熱物はほとんど見られなかった。

本稿は SU01、SU02 の遺物の検討と土地利用の検討を通し、両造構が戦争遺跡と関連するか、また廃棄された遺物がいつ、どこから持ち込まれたのかを明らかにする。

1. 遺物集積地点の遺物について

・ SU01

SU01 で見られた生活用品の中では、年代が特定できる資料がある。味の素の調味料瓶は、1953～1957 年にかけて発売された。他に年代が推測できる資料として、1937 年以降発売されたサントリーの角瓶と思われるガラス片や 1950 年頃の資生堂神薬瓶、1950 年頃の舐め菓子瓶（ペロペロ）の破片が挙げられる。ガラス瓶以外では 1953 年頃の SUNSTAR の歯磨き粉が見られた。

SU01 のガラス瓶では気泡が見られるものと見られないものが確認できた。気泡などを含むような不良品は戦後になるとほとんど見られなくなることや（桜井 2019、12 頁）、1960 年以降にはガラス瓶の底面に見られるナーリングという技法が確認できないことから（桜井 2019、18 頁）、SU01 のガラス瓶は 1930～1950 年代のものが中心であり、SU01 の生活用品は 1930～1950 年代と思われる。

次にアンプルやバイアルなどの医療用品は、製造会社が判明しなかったため、正確な年代は推定できなかった。しかしアンプルに気泡がほとんど見られないことから戦後のものと予測される。

その他、大量の被熱物も見られ、その中にはガラス片が混じったものや、木炭のようなものが確認できた。SU01 で見られた被熱物は 1946 年に発生した村松大火との関連が予想される。村松大火では遺物集積地点近隣の医療機関も（村松病院）被災したが（村松町誌 1982、804 頁）、SU01 は大量の医療用品が見られたことから被熱物は近隣の医療機関との関連が考えられる。しかし生活用品には被熱した痕跡が見られず、堆積層にも被熱物の層は確認できなかった。このことから村松大火などの火災との関連は考えられない。

以上のことから SU01 の遺物は 1960 年代以前で、1930～1950 年代の遺物が中心となる。

・ SU02

SU02 では 1941～1945 年にかけ製造された統制陶器の碗と瓶、おろし金が見られた。また 1937 年頃までのカメセの青のり瓶、1951 年までの味の素の調味料瓶が見られた。

その他 1933 年発売のクラブホルモンの化粧クリーム瓶、1950 年代に使われたビアスの化粧品瓶、戦後と思われる、みや古染の染料瓶などが確認できた。

ガラス瓶には気泡が見られるものと見られないものがあり戦前から戦後のものと考えられる。だがナーリングが確認できなかった為 1960 年以前と考えられる。また、1950 年以降に製造されたガラス瓶が含まれるが、同様にナーリングが見られなかった。他の資料では 1930 年代末ごろに使用されていたマツダ製の真空管部品や 1952 年と 1953 年頃の LION の歯磨き粉、1953 年頃の資生堂の歯磨き粉が確認できた。以上のことから SU02 は 1960 年代以前で、1930～1950 年代のものが中心であると考えられる。

遺物の検討を踏まえ、SU01 と SU02 共に遺物が 1930～1950 年の物を中心とすることが明らかに

なり、両遺構の遺物は同時期と考えられる。廃棄の時期については1950年代の廃棄が予測できる。

またSU01、SU02共に戦争遺跡と関連する廃薬莢といった遺物が確認されないことから戦争遺跡と関連がないと思われる。また両遺構に戦後の遺物が含まれることからも戦後になってからの廃棄と予想できる。

2. 遺物集積地点の土地利用について

次に遺物集積地区が廃棄の場であったかについて考察する。1956年頃まで遺物集積地区は、現在ほど木が生えておらず、車が入れるような土地であった（第1図、第2図参照）。そのためSU01の大量の医療用品を含めた廃棄物を車でまとめて廃棄したことが予想できる。またSU01では木の根に沿って遺物が確認されたため、遺物集積地点に木が生え始める1956年以前の廃棄で、その後木が成長するに伴い遺物が埋まっていたことが予想できる。地方部では法律で廃棄が制限されていた中、高度経済成長期頃まで、破損し不要になった不燃物を集落内や各家庭の裏庭に廃棄していたとされる（桜井2004、19頁）。遺物集積地点の廃棄も同様に、利用されていない土地にまとめて廃棄した可能性が考えられる。

またSU01で見られた被熱物だがゴミを積み重ねて燃やす「野焼き」の際に発生した物であるとも考えられる。野焼きは焼却施設があまり普及していなかった時代に行われたもので（環境省2014、3頁）、SU01の被熱物も野焼きの際に発生した可能性が考えられる。つまりSU01は野焼きの場所であつたとも推測できる。

SU02についても中心となる遺物の年代が同じであることが予測できるため、SU01と同時期の廃棄と考えられる。SU02に関しては生活用品が中心で、遺物集積地区一帯がゴミ捨て場として認知されていたことが考えられる。

以上まとめると遺物集積地点は1956年頃まで生活用品などをまとめて廃棄する場であり、野焼きの場であった可能性も考えられる。

おわりに

以上遺物集積地点で見られた遺物の年代と土地利用の観点から、遺物集積地点は戦争遺跡との関連ではなく、1950年代に生活用品や医療用品をまとめて廃棄したと位置付けた。今後は同時期の都心部や郊外の廃棄事例との比較から地域ごとの廃棄の違いや廃棄についての土地利用について更なる分析が必要だ。

このように近代の廃棄には考古学的観点、当時の文献や廃棄をめぐる法整備や各自治体の条例といったさまざまな分野が関連している。また近代の廃棄の様相も単純ではないことが指摘されるが（桜井2004、62頁）、SU01、SU02の廃棄を検討するために様々な分野からの包括的な検討が必要だろう。

参考文献

- 福葉茂勝 2016 「『ゴミ』ってなんだろう 人類とゴミの歴史」シリーズ 「ゴミと人類」過去・現在・未来 1 あすなろ書房。
- 木下正明 1996 「感染性廃棄物の適正処理について」『廃棄物学会誌』（第7巻）、廃棄物資源循環学会、5-11頁。
- 坂田期雄（編）1979 「都市とゴミ・廃棄物」『明日の都市』（第6巻）、中央法規出版。
- 桜井準也 1997 「高度経済成長期の考古学－都市近郊農村の事例から－」『民族考古』（第4号）、慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室「民族考古」編集委員会。
- 桜井準也 2002 「近世・近現代考古学と生活研究－遺物組成と使用期間の問題をめぐって－」『民族考古』（第6号）、「民族考古」編集委員会。
- 桜井準也 2004 『モノが語る日本の近現代生活』慶應義塾大学出版。

IV SU01 のアンブルについて

村松町史編纂委員会 1982「村松町史」（下巻）、村松町教育委員会事務局。

環境省 2014「日本の廃棄物処理の歴史と現状」一般財團法人 日本環境衛生センター。

https://www.env.go.jp/recycle/circul/venous_industry/ja/history.pdf

2021年2月23日閲覧。

写真出典

国土地理院ウェブサイト <https://www.gsi.go.jp/> 地図空中写真閲覧サービスより空中写真（米軍撮影）を加工して作成



第1図 遺物集積地点周辺の地図（1948年撮影）



第2図 遺物集積地点周辺の地図（1956年撮影）

IV SU01 のアンブルについて

舟山直希

はじめに

今回検討する遺物集積地点 SU01 では多くのアンブル、バイアル、注射器、注射針、薬品瓶などの医療用品が見られた。他には大量の被熱物、陶磁器やガラス製品を中心とした遺物が確認できた。

SU01 から大量に出土した医療用品があるが、その中でも特にアンブルが多数を占めており、アンブルを分析することで、アンブルがいつ、どの様な場所で用いられたのか検討できると考えた。以下アンブルについての概要や観察結果について述べていく。

1. アンブルの概要

アンブルとは、注射器に注入する薬品に、菌が入らないようにするために用いる、注射1回分を入れるガラス製の小容器である。アンブルの製造方法は1950年代まで手加工による室内工業的製造であった（塙谷1970、1頁）。昭和30年代になりようやくアンブル用ガラス生地管が大企業によって生産されるようになり、近代化していく。また1954年に日本電気硝子がダンナーマシンでアンブル管の生産を始めている（桜井2019、73頁）。

2. SU01 のアンブルについて

次に SU01 のアンブルを観察した結果を以下にまとめる。

アンプルについて、底部の型式（第1図参照）が平なものと丸いもの2種類あるのが確認できた。他にも第2図7のアンプルのように底部が内側に窪んでいる物も少量ながら見られた。第2図1～3の底部の形が平なものをA、4～6の底部が丸いものをB型式とする。それぞれの底部が占める割合は、無作為による抽出で300点中Aが48%、Bが52%であった。この結果から、SU01のアンプル全体でもAとBのアンプルが同じ割合で存在していると考えられる。

また、アンプルの頭部（第1図参照）より上が破損、頭部より下が破損していない状態のアンプルが多く見られた。この破損状況はアンプルカットによるものと考えられる。アンプルカットとはアンプル内の薬品を注射器で取り出す際に、アンプルの頭部をアンプルカッターで切断することを言う。全体としてこの頭部で折れたアンプル（言わば使用済みのアンプル）の占める割合がかなり高いと思われた。つまりSU01の医療用品は使用済みのものが大多数で、病院の閉鎖、または移転などに伴い廃棄された可能性が考えられる。

SU01のアンプルの色調は透明が主体だが、青色や茶色ガラスのアンプルも含まれる。

3. 考察

底が平な物をA、底が丸い物をB型式としたが不二硝子の史料では底部が平なものを平底、底部が丸いものを丸底としている。以降不二硝子の史料に準拠する。また少量見られた第2図7の様な底部が、吸い込み底と呼ばれることがわかった。

さらに不二硝子の史料（第3図）中に見られた肩丸、ハカマ付き、逆Rといった肩部のアンプルがSU01でも確認できた。第2図中の1が第3図の肩丸、4が第3図のハカマ付き、7が第3図の逆Rに該当すると思われる。

丸底と平底についてだが、1940年の不破氏による調査では1940年の段階で丸底、平底ともどちらも存在している。またこの時代の大学や病院では一部例外もあるが大凡平底が主流であったことが述べられている。この理由としては平底のアンプルが、丸底よりも扱いやすかった等の記載がある（不破1940、51頁）。また今回出土した青色や茶色のアンプルの用途については封入される薬品を紫外線から守るためにこれがわかった（鳩谷1970、9頁）。

また1940年の段階でアンプルの脆さ、破損が問題化していることや（不破1940、51-52頁）、この段階のアンプルでは気泡が多く見られ品質に問題があることが指摘されている。1940年時点での気泡が見られたということから、物資不足の戦中期に品質が改善されたとは考えにくい。ガラス瓶は明治～大正期のものに多く気泡や変形、肩薄などが確認できるが、戦後になるとこれらの不良品はほとんど見られないとされている（桜井2019、12頁）。これらのことからSU01のアンプルは戦後のものと推定できる。

アンプルについて、五泉市でもアンプルの生産が行われていたことが明らかになっている。1945年4月16日の五泉大火が追い打ちとなり、工場を焼失した酒井工場（酒井準治郎社長）では、ガス会社の小出氏と共同でガラスを加工する工場を作り、アンプルを作っていたことが述べられている（村上1999、29頁）。遺物集積地点から出土したアンプルもこの工場で製造されたアンプルである可能性はある。しかしSU01のアンプルは使用済みのものが多く、戦後のアンプルであり、またSU01からはアンプルだけでなくバイアル、注射器や注射針など他の医療用品も見られたことから廃棄は付近の医療機関によるものと思われる。

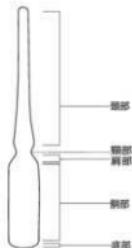
おわりに

以上、SU01出土のアンプルの分析からSU01のアンプルが戦後のものであり、廃棄は近隣の医療機関と位置付けた。アンプルの出土事例については沖縄県南風原町の沖縄陸軍病院南風原壕での出土事例（南風原町教育委員会2008）、近代以降に病院として機能していた松山城二ノ丸では土坑からまとまってアンプル等の医療廃棄物が見つかっている（松山市教育委員会2006、25頁）。今後は他の

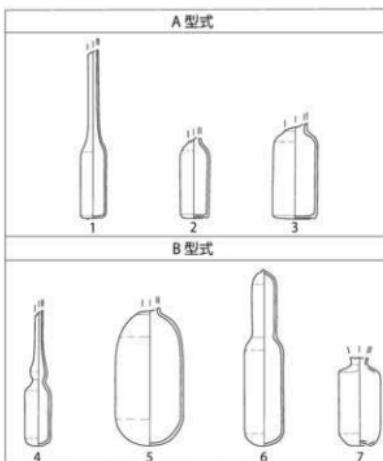
遺跡から出土したアンブルとの比較から、SU01 のアンブルの年代やいつ頃まで使われていたのかを分析し、アンブルが廃棄された年代の検討が必要と考える。

参考文献

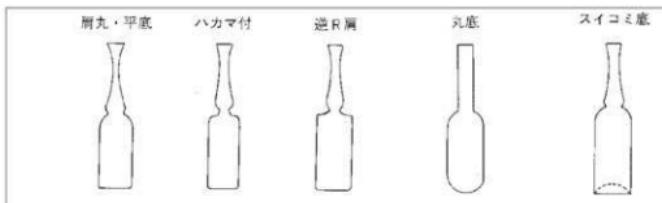
- 稲垣裕美（編）2008『くすりの夜明け－近代の薬品と看護－』内藤記念くすり博物館。
 桜井準也『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房。
 南風原町教育委員会 2008『南風原町文化財調査報告書7：第三二軍司令部津嘉山壕群・津嘉山北地区旧日本軍壕』南風原町教育委員会。
 松山市教育委員会 2006『松山市埋蔵文化財調査年報18』松山市教育委員会／財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター。
 村上宗之 1999『五泉戦後激動の記録』五泉市民新聞社。
 堀谷賢太郎（編）1970『アンブル・管瓶 発展と工業の推移』不二硝株式会社。
 不破橋三 1940『アンブル・ガラス及び血清壠の現状に就ての調査』『大日本薬業協会雑誌』（第48巻、第573号）、第日本薬業協会、43-53頁。



第1図 アンブル模式図



第2図 SU01出土アンブル (S=1/2)



第3図 アンブルの種類（『アンブル・管瓶 発展と工業化の推移』7図）

第4章 文献史学—日本近現代史研究からのアプローチ

五泉市村松地域の旧軍用地と新潟大学

中村 元

はじめに

本稿は、文献史学—日本近現代史研究を専門とする筆者の観点から、戦前に陸軍の兵営及び練兵場等が所在した新潟県五泉市村松地域の旧軍用地が戦後新潟大学に移管されてゆく経緯やその前後の利用状況について、現在把握されている情報を整理し、村松地域の旧軍用地研究の論点を確認することを課題とする。

新潟大学農業部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーション（以下、村松STと表記する）は、かつて新潟県中蒲原郡菅名村（1955年の合併により村松町、さら2006年の合併により現在は五泉市）に駐屯した旧陸軍の練兵場敷地に所在している。日本近現代史研究において、軍隊を誘致しようとする地域社会の動向や誘致した軍隊と地域の関係などに光をあてる「軍隊と地域」というテーマについては、近年急速に研究が蓄積されつつあり^①、最近では戦後の旧軍用地の利用をめぐる問題にも検討の射程が及びつつある^②。村松町と軍隊の関係については、その誘致の経緯などは、吉田律人氏により夙に研究がおこなわれている^③。しかし戦後の状況については、自治体史でわずかに言及されているものの^④、管見の限り未だ十分に検討はなされていない。本稿では、現在村松STとなっている旧練兵場を中心とした旧軍用地に関する情報を整理し、村松地域の旧軍用地研究をいっそう進める上での素材を提示したい。

以下、1ではまず検討の前提として、村松STの概要とその来歴を整理する。2では、新潟大学における村松STを中心とした旧軍用地に関する歴史資料を確認する。3では、以上の1、2及び今次の調査をふまえ、今後の研究上での論点について検討を行う。

1. 村松STの概要とその来歴

村松STは、新潟大学の多くの学部が集まる新潟市西区の五十嵐キャンパスからおよそ車で一時間の五泉市石曾根に所在する。農場部分は約20haで^⑤、2012年度にはそのうち4haの圃場で大豆、ジャガイモ、大根、長ネギ等が栽培され、8haの草地で牧草が栽培され、23頭の乳牛が飼養されていた^⑥。教育面では、学生が宿泊しながら畑作・牧草管理や乳用牛の管理をおこなう実習等が行われている。では、この場所はどのような来歴を経て現在に至ったのだろうか。以下ではこの来歴を、特に近現代の村松地域と軍隊の歴史に注目しつつ整理しておきたい。

1894年から1895年の日清戦争の後、政府は清国からの賠償金等に基づき従来の七個師団に加え新たに五個師団を増設する方針を打ち出し、これにより日本国内には新たな師団、連隊が設置されることとなった。こうした中で、日本各地では地域振興を目的として師団・連隊の兵営を誘致する動きがみられたが^⑦、新潟県でも1894年5月以降陸軍の実地調査の内容が新聞等で報じられ、中蒲原郡が新設連隊の有力な兵営候補地と見なされていく中で、村松町では敷地献納の動きが進められ、敷地に予定される愛宕原を購入・献上するほか、兵営につながる道路整備をうけようることなどを申請する誘致活動がみられた^⑧。なおこの敷地は、厳密には村松町に隣接する菅名村に所在したが、当時から「村松」への部隊設置として理解されていたため、本稿でもこれに倣い記述する。

その後同年8月には、村松への陸軍歩兵第三十連隊設置が正式に決定され、兵営や練兵場などの工事請負入札が公告され、連隊の駐屯に向けた準備が進められた^⑨。かくして準備が進む中、同年11月12日、歩兵第三十連隊が新発田の歩兵第十六連隊内部に開設され、翌1897年9月、歩兵第三十連隊が村松に移駐した。歩兵第三十連隊は、その後三個大隊十二個中隊の陣容に整えられ、将校・兵士合計約1700人、連隊区司令部約30人、憲兵隊約100人その他軍隊関係者は約2000人に及び、その

存在は村松町の経済界に大きな影響を与えた。また以上の過程で整備された歩兵第三十連隊関連の敷地は、營舎が4万坪、練兵場が4万8200坪、射撃場2万2780坪、作業場2755坪、合計11万3735坪であった。本報告書57頁の【第1図】はやや後年の地図ではあるが、この兵営と練兵場の敷地が、後年新潟大学に引き継がれ、そのうち練兵場敷地が村松STへとつながってゆく。その後1904年から1905年の日露戦争を経た1908年には、日露戦争時に臨時編成された四個師団にさらに二個師団を増設した十八師団の師団・連隊の位置が確定される中で、村松の第三十連隊は、高田を新たな衛戍地に定めた第十三師団の隸下におかれた。しかし第一次大戦後の1925年、折からの軍縮の一環で高田の第十三師団の廃止が決定されると、歩兵第三十連隊は仙台の第二師団管下となり、高田の師団跡に移ることになった。先にも述べた通り軍隊の存在が地域経済に大きな影響を与えていた村松では、この事態を町の興廃に関わる問題と捉え、存置運動がおこなわれた⁽³⁰⁾。1925年5月1日、第三十連隊は村松から高田へ移駐し、同月22日、三十連隊の三分の一程度の規模の新発田歩兵第十六連隊第三大隊が村松に移駐した。その後1936年には第十六連隊第三大隊が新発田に移駐となり、空いた兵営に1938年には新発田陸軍病院分院が開設、さらに1941年にこの分院が閉鎖されると、新たに高田へ編成された歩兵第一五八連隊が移駐、さらに1943年6月に歩兵第一五八連隊が新発田に移駐すると、同年10月村松陸軍少年通信兵学校が開設されるなど。村松の兵営と関連敷地は、軒余曲折を経ながらも陸軍の敷地として利用され続けた。

1945年8月、日本のアジア・太平洋戦争敗戦をうけ、同月村松陸軍少年通信兵学校が解散された。同校が使用していた旧村松兵営には、同年9月24日から12月25日までの約三ヶ月、占領軍であるアメリカ軍の部隊が駐屯した。米軍撤退後の1946年には、1945年5月に開設された新潟県立農林専門学校（以下、新潟農專）が、当初の所在地であった南蒲原郡加茂町の新潟県立加茂農林学校から旧村松兵営に移転することが決定した。しかし1946年5月8日、村松町で大火事が起こり（村松大火）、旧兵営の兵舎建物は罹災者の収容施設や、被災した村松国民学校、村松高等女学校の仮校舎となつた。またこの間に旧兵舎建物は新潟鉄道教習所も利用することとなっており、同年6月以降、新潟農專が移転した際に利用した建物は、旧兵営内の兵舎建物の一部に限られた⁽³¹⁾。この新潟農專により、旧練兵場敷地は農場として開拓されることとなつた。

その後1949年には、新潟農專を母体に新潟大学農学部が設置されたが、同学部は翌1950年4月には新潟市河渡の新校舎に移転した⁽³²⁾。並行して存在した新潟農專は、さらに翌1951年3月、最後の卒業生を送り出し閉校された⁽³³⁾。この閉校に際しては同窓生により「新潟農專農場碑」が作成され、この碑は現在も村松STで確認することができる（59頁の【写真1】）。碑の裏には、丹羽鼎三初代校長の撰文として、以下のような言葉が刻まれている。

昭和二十年日本ノ穀倉新潟縣ニ農林専門学校生ル 壘
二十一年五月地ヲ相シテ茲ニ其ノ農場ヲ創ム 終戦直
後世上暗澹タルノ秋 農報図ノ信念ニ燃エ幾多ノ困難
迫害ヲ突破克復シテ良ク耕土三十町歩収穫充棟ノ成
果ヲ挙ケタルハ新潟農林専門学校ノ學徒ナリ 実ニ是
レ本校教育ノ然ラシムルトコロ 範吾我ガ民族将来ノ
發展ニ示スモノト謂フベシ 今本校ノ解散ニ當リ録シ
テ永ク之ヲ後世ニ傳ヘンコトヲ期ス
昭和二十六年春三月 丹羽木聖題文並書

なおこの碑文での「幾多ノ困難迫害ヲ突破克復」という箇所について、新潟農專一期生の羽田清五郎氏らは、農專の村松移転当初、同じ旧兵舎に居を構えた新潟鉄道教習所も農場予定地の一角を開墾し始めており「農場の取り合いのよう」な状況が生じていたことを指していると思われると思われるところとして指摘している。

いる⁽¹⁴⁾。

その後、新潟農専が開拓した旧練兵場跡地である農場は、新潟大学農学部附属農場として引き継がれ、旧兵営内の兵舎建物の一部も、この農場及び同じく農学部の附属施設である農学部附属演習林村松苗畠の付属施設として利用された。なお新潟大学に保存されている資料によれば、1952年に旧兵営の一部の敷地と旧練兵場敷地の北部部分の約250,000m²が大蔵省からの無償所管換をうけ、さらに1953（昭和28）年に旧練兵場敷地の南部部分約81,000m²が新潟県からの寄付により、新潟大学の所有地となっていた⁽¹⁵⁾。1978年には旧練兵場跡地の農場の南部に管理宿舎棟などの施設が新たに建設され、これにより農場や演習林等の農学部附属施設が旧練兵場敷地に集中したことをうけ、その後残っていた旧兵舎建物は解体され、旧兵営敷地は新潟大学の手を離れた。そして2001年、新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センターの設置に伴い農学部附属農場及びその施設は村松STとなり、今日に至っている。

2. 新潟大学に残る歴史資料について

先に見た通り、村松STの敷地は、1897年から1945年まで陸軍の練兵場として用いられ、その後新潟農専による開拓によって農場となり、新潟大学農学部に引き継がれていた。ただしこの敷地はあくまで旧練兵場であり、そこには戦前以来の建築物は残っていない。またこの旧練兵場に隣接する旧兵営敷地には、1970年代後半までは農場の付属施設として利用された旧兵舎建物が残っていたが、こちらも既に解体され残っていない。以上のように、戦後に新潟大学へと引き継がれた旧陸軍施設の建物は現存しないが、村松STには旧陸軍施設に関する歴史資料が僅かではあるが存在する。このうち陸軍標柱などの遺物については、本報告書内で別途紹介されるので、以下では紙媒体の歴史資料である図面3点と、旧兵舎を含む施設の「現況写真」編について簡単に紹介する。

（1）「建物配置図」

「建物配置図」との表題を有する、青焼き・六百分の一の図面である（59頁の【写真2】）。この図面は、2014年に元職員の方から村松STに一枚の兵舎利用図面が寄贈されたものである。寄贈時に封入されていた封筒には、「苗畠旧地図」との手書きの記載があり、図面自体の裏面にも、鉛筆手書きで「村松苗畠旧図」との書き込みがある。作成年などの記述はなく不明であるが、後に触れる「建物現況写真」編の「現有建物面積一覧」の頁に記されている、1977年3月の建物の一部取り壊しの様子が表現されていない点からは、1977年3月以前の図面と考えられる。この図面には鉛筆により様々な書き込みがなされており、特に図面中央には、「使用目的」として、次のように記されている。

1. 農場実習時における学生の合宿等
2. 農場生産物の貯蔵
3. 倉庫
4. 附属演習林苗畠管理等及倉庫

なおここに記されている「附属演習林苗畠」とは、農学部附属演習林村松苗畠を指す。新潟農専林学科に由来し、1956年4月より旧農専校庭内に所在していた農学部の付属組織であり、旧練兵場で畑作物等を研究していた村松農場とは組織としては別個に存在した⁽¹⁶⁾。

この図面にはその他にも利用されていた建物の坪数や用途についても書き込みがあり、本報告書所収の中山氏・石本氏のインタビュー調査などと照らし合わせれば、戦後の新潟大学における旧兵舎利用の状況をより詳しく把握することも可能である。

（2）「新潟大学農学部附属農場建物平面図」（1950年9月）

この図面は、先述の通り、2016年4月の中山氏・石本氏のインタビュー調査をきっかけとして新たに把握された2点の図面のうちの1点で、「新潟大学農学部附属農場建物平面図」との表題を有す

る、青焼き・六百分の一図面である（60頁の【写真3】）。この図面では、上方が旧兵営正門になっており、旧兵営内の建物のうち、正門を入ってすぐ右手の建物と、右手に二つある兵舎のうち正門よりの一つまでの部分、及び正門を入って左手にあるやや小さい建物群が図面に記されている。また図面左下には、「昭和二十五年九月所管換申請添付図面」との付記が見られる。先に1. で述べたように、旧兵営では、1946年（昭和21年）の村松大火後、村松国民学校、村松高等女学校等が施設を利用しておらず、新潟農専及びその後継である新潟大学農学部が利用した建物は限られていた。また図面に記された「昭和二十五年九月」（1950年9月）という時期は、1945年以来この地に所在した新潟農専と、これを母体に1949年に設置された新潟大学農学部が併存している時期であり、翌年3月の新潟農専の閉校を控え、建物の所管換が行なわれることは十分に考えられることである。本図面は、この移行期の旧兵舎利用の状況を表す資料であると考えられる。

（3）「農場用建築物使用設計図」（1950年2月）

この図面も、2016年4月の中山氏・石本氏のインタビュー調査をきっかけとして新たに把握された2点の図面のうちの1点で、「農場用建築物使用設計図」との表題を有する、手書き・二百分の一の図面である（60頁の【写真4】）。この図面は、方眼紙に手書きされたもので、左下部に「1950.2.7.KY」のサインが記されている。この図面も、旧兵舎建物が、戦後、新潟農専や新潟大学農学部附属農場の施設となるなかで、どのように使用されたのかを具体的に示す貴重な資料であるといえる。

（4）『建物現況写真』編

2016年に上記の（2）・（3）の図面と共に発見された『建物現況写真』と題された写真総は、農学部が農場の付属施設として利用していた旧兵舎の内部を記録した貴重な写真を含む写真総である。B4版の上質紙に4枚づつ貼付された写真には、建物名称、図面番号、建築年月日、写真説明が付されており、旧兵舎建物の戦後における利用状況がうかがえる。なお総の冒頭の「現有建物面積一覧」の頁に、1977年3月に老朽化のため建物の一部を取り壊した、との記述が付されている一方、1978年12月に竣工する新管理棟（現在の管理棟）が記載されていない点からは、この総の作成年が、1977年3月から1978年12月までの間の期間であることが推測される。

3. 今後の論点について

最後に1でみた村松STの概要とその来歴、2でみた新潟大学に残る歴史資料をふまえた上で、本報告書2章で紹介しているインタビュー調査や、考古学の手法による発掘調査をふまえ、筆者の関心に即して今後の論点を展望しておきたい。

第一は、村松STの「戦争遺跡」としての性格はどのようなものであるのか、という論点である。2017年に拙稿を書いた段階では、村松STの「塹壕跡」と考えられていた遺構については、全く未検討であった。しかし今次の考古学的調査により「塹壕跡」の具体相が把握されたと同時に、「飛行場」（滑走路）に着目した調査によって新たな知見が得られたことは大きな成果である。この知見を手掛かりとして、村松STの「戦争遺跡」としての性格、特に「塹壕」の残存状況や「飛行場」（滑走路）の遺構をいっそう具体的に把握し、村松STの「戦争遺跡」としての性格をより明確にすることは、新潟県の「戦争遺跡」研究、また現在大学敷地となっている旧軍用地の「戦争遺跡」研究にも資するところが大きいと考えられる。

第二は、戦後の地域社会にとって旧軍用地とはどのようなものであったのか、という論点である。この点については、羽田氏のインタビュー調査やその中の高井氏の発言からもうかがえるように、1946年5月8日の村松大火以降の旧兵営には、小学校や中学校、鉄道教習所や新潟農専など、様々な主体が入居していた。こうした諸主体が旧軍用地を利用することは、戦後の地域社会にとってどのような意味をもったのだろうか。またそれはその後どのように変化したのだろうか。旧軍用地と地域

社会の関係については、研究が着手されつつあるが、村松地域の場合、上記の敗戦直後の大火によってこの関係が先鋭な形で表れている。この点を戦後地域社会史研究の視角から検討することは、大きな意味があると考えられる⁽¹⁸⁾。

第三は、上記の点とも関わるが、戦後の地域社会にとって旧軍用地を大学が利用することはどのような意味をもったのか、という論点である。先のインタビュー調査の中にも見られたように、新潟農専から新潟大学に引き継がれた旧兵営の建物では、教員や職員などが生活していた。この居住生活の一端については、【写真2】から【写真4】として掲げた図面でも確認できる。そして彼らは、旧兵営の敷地の一部や、旧練兵場を開墾した農場を利用し日常的な業務を行っていた。一定の広さを有する旧軍用地を大きく開発するのではなく、このようにいわば「慎ましく」使用することは、地域社会にとってどのような意味を有したのだろうか。のちに旧兵営が所在した地域のうち新潟大学に移管されなかった部分は早くに宅地化し、新潟大学に移管された場合は1980年代以降、順次新潟大学の手を離れ、五泉市の所有地として小学校の敷地や市立体育館となっていくが、それに至る経緯はどのようなものであったのだろうか。これまでの調査で得られた幾つかの知見を手掛かりに、こうした論点を検討することは、旧軍用地・大学・地域社会の関係を問うものであり、この点も戦後地域社会史研究に新たな素材を提供するものになると考える。

むすびにかえて

本稿では以上において、新潟県五泉市村松地域の旧軍用地が戦後新潟大学に移管されてゆく経緯やその前後の利用状況について、現在把握されている情報を整理し、村松地域の旧軍用地研究の論点を検討した。今次の考古学的調査をきっかけとして、新潟県五泉市村松地域の旧軍用地に関する研究がいっそう活性化し進展することに期待したい。

附記

本稿作成にあたっては、多くの方々にご協力を頂きました。

新潟農専一期生の羽田清五郎先生、二期生の山田辰二先生、新潟大学名誉教授の佐藤峰雄先生、同伊藤道秋先生には、インタビュー調査にご協力を頂きました。

また高井恵美子様には、村松大火後、旧兵営に設置された村松国民学校の事柄をはじめ多くの事柄につき有益な御教示を頂きました。

村松ST職員の青木由利子様、元職員の石本光明様、中山昇様には、現在の村松ST敷地内の調査をはじめ、旧兵舎利用に関する聞き取り等、様々な調査にご協力を頂きました。

新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター長の山田宜永先生、同センター耕地生産部長の高橋能彦先生には、村松STでの以上の調査を快くお許しいただきました。

さらに2019年度、2020年度には、清水香先生をはじめとした新潟大学人文学部考古学研究室の皆様により、調査当初からの課題であった村松STの考古学的調査を大きく進めて頂きました。その他にも多くの関係者の皆様にご協力を頂きました。

末筆ながら、ご協力に対しここに改めてあつく御礼申し上げます。

註

(1) 荒川章二『軍隊と地域』(青木書店 2001年)、上山和雄編『帝都と軍隊』(日本経済評論社 2002年)、河西英通『せめぎ合う地域と軍隊』(岩波書店 2010年)、『年報 日本現代史第17号 軍隊と地域』(現代史料出版 2012年)、松下孝昭『軍隊を誘致せよ 陸海軍と都市形成』(吉川弘文館 2013年)、荒川章二ほか編『地域のなかの軍隊』1~8(吉川弘文館 2014~2015年)、中野良『日本陸軍の軍事演習と地域社会』(吉川弘文館 2019年)などを参照。

(2) 歴史学の観点からの荒川章二『軍用地と都市・民衆』(山川出版社 2007年)のほか、職業経

歴への関心に基づいて青森県の旧山田野陸軍演習場の戦後開拓を扱った高瀬雅弘・村上亜弥「戦後開拓地のライフヒストリー（1）—青森県鰐ヶ沢町山田野地区における「緊急開拓」の事例」（『弘前大学教育学部紀要』105号 2011年）、また旧山田野陸軍演習場の歴史を扱った高瀬雅弘編『山田野—陸軍演習場・演習廠舎と跡地の100年』（弘前大学出版会 2014年）、今村洋一『旧軍用地と戦後復興』（中央公論美術出版、2017年）などを参照。

- (3) 吉田律人「新潟県における兵営設置と地域振興—新発田・村松を中心として」（『地方史研究』57卷1号 2007年）。
- (4) 村松町史編纂委員会編『村松町史』下巻（村松町教育委員会事務局 1982年）814頁。
- (5) 「農学部フィールドセンター村松配置図」（新潟大学所蔵）。
- (6) 『新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター年報 12号』2014年 15頁。
- (7) 前掲註1 松下書 56～74頁。
- (8) 前掲註3 吉田論文 4～6頁。
- (9) 前掲註4『村松町史』355頁。以下、村松に駐屯した陸軍部隊及び施設やその敷地利用の変遷に関する記述は、特に断りのない限り同書に依拠した。
- (10) この存置運動については、加藤大輔「軍縮以後における『軍都』村松」（新潟大学人文学部歴史文化学生専攻プログラム 2014年度卒業論文）が検討を行っている。
- (11) 『新潟県立農林専門学校卒業五十周年記念誌 あれから五十年 そして今』（新潟県立農林専門学校卒業五十周年記念誌編集委員会 1999年）94～95頁。
- (12) 『新潟大学五十年史』部局編（新潟大学五十年史刊行委員会、2000年）805頁。
- (13) 前掲註11『新潟県立農林専門学校卒業五十周年記念誌』100頁。
- (14) 「新潟農専農場碑の由来」（前掲註11『新潟県立農林専門学校卒業五十周年記念誌 あれから五十年 そして今』）
- (15) 前掲註6「農学部フィールドセンター村松配置図」
- (16) 抽稿「新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーションに残る旧陸軍施設関連資料の基礎的検討」（『資料研究』14号、2017年）。
- (17) 『新潟大学二十五年史』部局編（新潟大学、1980年）918頁。
- (18) 戦前からの軽轄をふまえ、戦後の地域社会にとっての軍用地の意味を検討した先行研究として、森下徹「信太山丘陵をめぐる軍隊と地域社会—信太山演習場解放運動を中心に—」（『市大日本史』18巻、2015年）がある。

第5章 自然科学分析

トレンチ断面からみた地質層序

ト部厚志

1. 愛宕原の地形・地質概要

五泉市南部に位置する村松地区（旧村松町市街部）の西方には、発掘調査を行った愛宕原と称される段丘面や愛宕山（標高103m）を含む愛宕丘陵が分布する。この愛宕原や愛宕丘陵の周辺には、低位段丘（沖積段丘）や沖積低地が分布している。

愛宕原と愛宕丘陵の東縁は、村松断層によるリニアメントが発達しており、愛宕原は比較的平坦な段丘地形を有しているが、西へ緩く傾斜（約1/70）しており沖積面に移行している。一方、愛宕原の東縁には、比高5m程度の背斜状の地形がみられ、さらにその東縁は北北東～南南西方向の直線的な急崖（比高約15m）を介して沖積低地となっている（高浜ほか1980；渡辺・宇根1985；大竹ほか2007）。また、愛宕丘陵も西側への緩傾斜構造と東側の背斜状隆起地形を示し、東縁は愛宕原から連続する急崖となっている。愛宕原や愛宕丘陵の東縁で認められる隆起地形は、村松断層による変位地形と推定できる。村松断層は、西側隆起の逆断層である可能性が高く、確実度Ⅰの活断層とされ、走向・変位方向・変形地形の類似から、阿賀野川をはさんで北側に位置する笹神丘陵東縁に分布する月岡断層と一連の活断層とされている。

愛宕丘陵は、第四系の砂礫層や泥層からなる矢代田層で構成されている。愛宕原の段丘面を構成する堆積物は、東端部では新第三系の泥岩層を不整合に覆う、層厚2～4mの中～大躍サイズの亜円礫層と層厚約50cmの褐色土（ローム）層からなる（高浜ほか1980）。礫層を構成する礫種は、早出川流域に分布する古生層のスレート、砂岩、チャート、ホルンフェルスと花崗岩類が主体とされている（高浜ほか1980）。

愛宕原を構成する堆積物の特徴から、愛宕原は早出川が形成していた扇状地の末端部が村松断層の運動により、傾動隆起した変動地形であると考えられる。

2. 各トレンチの地質層序

第1トレンチと第4トレンチにおいて観察した層相の記載と解釈を以下に示す（第1、2図）。

第1トレンチ

下位より、①層厚40cm+の砂礫層、②層厚40cmの砂質シルト層、③層厚10cmの黒褐色シルト層、④層厚10～20cmの砂礫層、⑤層厚15cmの黒褐色シルト層、⑥層厚15cmの礫まじりシルト層、⑦層厚15cmの表土から構成される。

①層

記載：層厚40cm+の中礫～細礫サイズの亜円礫層からなり、最大では中礫サイズの亜円礫を含む。礫層の基質は、砂質シルト～やや泥質な中～粗粒砂からなる。

解釈：礫種や礫径の特徴から、愛宕原の段丘面の基底を構成する礫層であると考えられる。

対比：土層区分IVに相当する。

②層

記載：層厚40cmの細礫サイズの亜円礫をわずかに含む明褐色の砂質シルト層からなる。

解釈：層相の特徴から、下位の砂礫層の流路をともなう堆積環境から離水した氾濫原の堆積環境を示唆する。

対比：土層区分III bに相当する。

③層

トレンチ断面からみた地質層序

記載：層厚 10cm の黒褐色の砂質シルト層からなる。細礫サイズの亜円礫や下位の②層のブロックをごくわずかに含む。

解説：層相の特徴から、氾濫原から風成の堆積環境を示唆する。一部に下位の②層のブロックを含むことから、若干の擾乱をうけている可能性がある。

対比：土層区分Ⅲ a に相当する。

④～⑥層

記載：下位より層厚 10cm の中礫サイズの亜円礫を多く含み、基質は粗～中粒砂層からなる。この上位は、層厚 15cm の極粗粒砂や②層起源のローム質なブロックを含む黒褐色のシルト層からなる。本層の基質部分は硬質である。最上位は、層厚 15cm の中礫サイズの亜円礫を比較的多く含む明褐色のシルト層からなる。

解説：新潟地域にみられる段丘堆積物は、一般に、離水前の流路環境を示す砂礫層、離水後の氾濫原からローム層が堆積するような風成の環境、さらに上位には黒褐色を示すシルト層（黒土）から構成される。第1トレンチにおいても、基本的には下位の①層～③層は、段丘堆積物の基本的な層相変化を示している。一方で、④層～⑥層は、下位の砂礫層や下位のシルト層をブロック状に含む層相を示す。各層は全体に擾乱しているわけではなく、地層としての区分と連続性を示している。これらは自然堆積層ではなく、人為的に埋積・整地した過程を示している。

対比：土層区分 1、2、3、I c、I b に相当する。

第2トレンチ

下位より、①層厚 50cm + の砂礫層、②層厚 25cm の砂質シルト層、③層厚 15cm の黒褐色シルト層、④層厚 25cm の疊まじりシルト層、⑤層厚 20cm の表土から構成される。

①層

記載：層厚 50cm + の中礫～細礫サイズの亜円礫を多く含む砂質シルト層からなる。

解説：層相の特徴から、下位の砂礫層の流路をともなうの堆積環境から離水した氾濫原の堆積環境を示唆する。

対比：土層区分Ⅲ b に相当する。

②層

記載：層厚 25cm の黒褐色の砂質シルト層からなる。細礫サイズの亜円礫をごくわずかに含む。

解説：層相の特徴から、氾濫原から風成の堆積環境を示唆する。

対比：土層区分Ⅱ b に相当する。

③層

記載：層厚 15cm の黒褐色のシルト層からなる。細礫サイズの亜円礫をごくわずかに含む。

解説：層相の特徴から風成の堆積環境を示唆する。

対比：土層区分Ⅱ a に相当する。

④層

記載：層厚 25cm の細礫～中礫サイズの亜円礫をわずかに含み、またローム質なブロックも含む黒褐色のシルト層からなる。

解説：前述のように、一般に段丘堆積物の上位には、黒褐色を示すシルト層（黒土）がみとめられる。一方で、④層は、下位の砂礫層や下位のシルト層をブロック状に含む層相を示すことから、自然堆積層ではなく、人為的に埋積した過程を示している。

対比：土層区分 1 に相当する。

第3トレンチ

下位より、①層厚 50cm + のシルト層、②層厚 10～38cm の黒褐色シルト層、③層厚 15～20cm の疊

まじりシルト層、④層厚 15cm の礫まじりシルト層、⑤層厚 20cm の表土から構成される。

①層

記載：層厚 50cm+ の細礫サイズの亜円礫やローム質のシルトブロックを含むシルト層からなる。

解釈：下位の砂礫層や下位のシルト層をブロック状に含む層相を示すことから、自然堆積層ではなく、人為的に埋積した過程を示している。

対比：土層区分 SX02 に相当する。

②層

記載：層厚 10 ~ 38cm のローム質のシルトブロックを含む黒褐色の砂質シルト層からなる。

解釈：下位のシルト層をブロック状に含む層相を示すことから、自然堆積層ではなく、人為的に埋積した過程を示している。

対比：土層区分 3 に相当する。

③層

記載：層厚 15 ~ 20cm の中礫サイズの亜円礫を多く含み、下位層起源のローム質なブロックを含む褐色のシルト層からなる。

解釈：層相の特徴から自然堆積層ではなく、人為的に埋積した過程を示している。

対比：土層区分 2 に相当する。

④層

記載：層厚 15cm の中礫サイズの亜円礫やローム質なブロックも含む黒褐色のシルト層からなる。本層の上半部の基質は、硬質である。

解釈：前述のように、下位の砂礫層や下位のシルト層をブロック状に含む層相を示すことから、自然堆積層ではなく、人為的に埋積した過程を示している。

対比：土層区分 I d に相当する。

第4 レンチ

下位より、①層厚 40cm+ の細礫を含むシルト層、②層厚 40cm の礫まじりシルト層、③層厚 35cm の黒褐色シルト層、④層厚 20cm の礫まじりシルト層、⑤層厚 10cm の表土から構成される。

①層

記載：層厚 40cm+ の細礫サイズの亜円礫を含むシルト層からなる。

解釈：層相の特徴から、下位の砂礫層の流路をともなう堆積環境から離水した氾濫原の堆積環境を示唆する。

対比：土層区分 III b に相当する。

②層

記載：層厚 40cm の細礫サイズの亜円礫を含むシルト層からなる。シルトのブロックを含む。

解釈：層相の特徴から、下位の砂礫層の流路をともなう堆積環境から離水した氾濫原の堆積環境を示唆する。

対比：土層区分 III b に相当する。

③層

記載：層厚 35cm の黒褐色のシルト層からなる。

解釈：層相の特徴から、氾濫原から風成の堆積環境を示唆する。

対比：土層区分 II b に相当する。

④層

記載：層厚 20cm の細礫サイズの亜円礫やローム質なブロックも含む黒褐色のシルト層からなる。

解釈：前述のように、下位の砂礫層や下位のシルト層をブロック状に含む層相を示すことから、自然堆積層ではなく、人為的に埋積した過程を示している。耕作土である可能性もある。

対比：土層区分 I a に相当する。

3. 人为堆積層の形成過程

第1トレンチ～第4トレンチでは、表土の下位に細礫～中礫を比較的多く含んだ人為堆積による地層が挟在する。また、本層位には、下位のローム質なシルトのブロックを含み、このシルトブロックがやや扁平な形態に変形していることもある（第3図）。さらに、本層位では部分的に、基質のシルト層が下位層と比較して硬質である場合がある。一般には、地層の累重を受けて荷重によって、地層が圧密を受けて硬質になることはあるが、表土の直下の層位では地層の荷重による圧密は発生しない。

表土直下の層位の地層において、シルトブロックが扁平に変形していることや、シルト層が下位層と比較して圧密により硬質となっていることは、これらの地層は、人為的に圧密を受けていることを示している。旧陸軍による滑走路建設という史実とあわせると、これらの圧密を受けた地層の存在は、滑走路建設の際の路盤の転圧によるものと推定できる。また、中礫を含む淘汰の悪いシルト層は、全体に搅乱しているわけではなく、層状に整地されたような形態をしめしている。現在の道路建設等と同様に、比較的軟弱なシルトを転圧するのではなく、路盤の強度を得るために砂礫まじりの地層を用いて造成した可能性が高い。

なお、一部のトレンチでは、凹地を埋積するようにローム質なシルトの小片を含む黒褐色のシルト層が分布していることがある。この人為的埋積は、滑走路建設前の旧陸軍の演習地での塹壕などの訓練用の凹地を埋積したものと推定できる。

参考文献

- 大竹正巳・百瀬 敦・遠藤 晋・兼子高志 2007 「比抵抗と密度構造から推定される新潟堆積盆地東縁、
村松断層周辺の基盤構造」、石油技術協会誌第72巻第4号、321-332頁。
高浜信之・福沢恵美子・岡田祐子 1980 『新潟平野東縁・村松地域の活断層・村松断層』、地球科学
第3図 ローム質シルトブロックの圧密による変形第2図 トレンチ1下部の堆積物第1図 トレンチ1上部の堆積物 34巻3号、156-158頁。
渡辺満久・宇根 寛 1985 『新潟平野東縁の活断層と山地の隆起』 地理学評論 58 - 8、536-547頁。



第1図 第1トレンチ上部の堆積物



第2図 第1トレンチ下部の堆積物



第3図 ローム質シルトブロックの圧密による変形

第6章 2019年・2020年度調査のまとめ

西三川砂金山跡および村松ステーション旧陸軍関連施設跡における調査の成果と課題

2019年度に行った佐渡市西三川砂金山跡の石組造構を対象とした測量調査および発掘調査は、佐渡市世界遺産推進課および篠川集落の皆さまのご協力あって実現したものである。西三川砂金山跡で行われた造構の分布調査では、水路跡や堤跡など、石組造構を含む砂金採掘に関する痕跡が数多く確認される（佐渡市世界遺産推進課 2012）。石組造構は幅約30cm程度の割石を方形または楕円形に積み上げ、一辺は石がなく入口と推測されている。18世紀後半頃の「佐州金銀山之図」（新潟県立博物館所蔵）には、茅あるいは藁葺と思われる屋根をもつ石積みの建物が「鍛冶小屋」と示されており、発掘調査では、石組みの内部の幅が約4～5m、高さ約1.7mという、大型の石組造構内にある石開い炉から、鍛造鋤片や粒状滓といった鍛冶の痕跡が確認された（シン技術コンサル 2004）。しかし、これまでの調査では年代を示す遺物の出土や分析が行われていないことから、2例目となる今回の調査では石組造構の役割に加えて、年代を明らかにすることが目的であった。また、本造構に類する石組みが石見地方でも確認され、幕末には西三川砂金山の技術者が採掘の指導として北海道へ渡っていることからも（佐渡市世界遺産推進課 2012）、痕跡として残りづらい砂金採掘跡における技術交流の重要な指標として広域での調査を進めるべき造構である。

今回の発掘調査では、石組みの内部の幅約2～3m、地表面からの高さ約1mという小型の石組造構の表土から、江戸末から幕末・近代を主体とする遺物が多数出土した。造構内部では熔炉、砥石の破片および石組みの間に置かれた鉄製の工具を確認。造構周辺からは磁器の碗や禰德利、燐台の破片、金属製の簪などが出土した。なお、石組造構の周辺に設定したトレーンチでは、入口のほかは表土下にいずれも石組みが検出されている。石組みは外側に向かってゆるく傾斜し、小形の石が多くなることから、土の土手と石組みの間にぐり石を入れた構造であることが推測される。

2020年度には表土下および造構内部の発掘調査を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、調査の継続が不可能と判断し、2019年度で調査を終了した。今回の調査では、内部の造構および年代や砂金採掘における造構の役割を明らかにすることはできなかったが、石の間や表土から多くの遺物が出土することや、石組みが外側に向かってどのように配置されているのかを確認できたことを成果として、今後の西三川砂金山における調査に寄与できれば幸いである。

五泉市新潟大学農学部附属フィールド科学教育センター村松ステーション旧陸軍関連施設跡は、新潟県では初めての本格的な戦争遺跡の発掘調査となった。なお、近現代における軍事施設などの戦争の痕跡は、その大部分が記録されずに消失しているという現状がある。

1990年、第2次世界大戦による戦争遺跡として全国で初めて文化財指定されたのは、沖縄陸軍病院南風原壕群である。軍医や衛生兵、ひめゆり学徒らが傷病兵の治療にあたっていた壕を今でもみることができる。1997年には戦争遺跡保存全国ネットワークが発足し、現在も活動している。戦争の実態を実証的に明らかにできる造構や遺物は、歴史的、学術的に貴重な情報を持つ。しかし、戦後70年以上が経過し、開発や劣化による消失、破損が免れず、さらに、関係者による聞き取り調査は、今後10年あまりではほぼ不可能となる。これが今、戦争遺跡を調査しなければならないと考える理由である。

新潟大学農学部村松ステーションは、明治30年から終戦まで、陸軍の練兵場・射撃場であった場所であり、終戦直前に飛行場の滑走路が作られたという記録が残る（第1表）。発掘調査は当初、中村 元先生による村松ステーションの旧陸軍施設関係資料の調査で明らかになった村松ステーションの「山林」部分にある「塹壕」跡と言い伝えられる堀状の造構を対象に、発掘調査による痕跡の位

置づけを目的として計画し、村松ステーションの先生方および職員の方々のご協力によって調査が実現した。

聞き取り調査では、戦時期の村松について「練兵場内には塹壕が存在し、深いところで1m 60cm、浅いところで1m程」「昭和20年には練兵場敷地の一部にも滑走路が作られた。滑走路は土をローラーで固めた」「飛行機を隠す場所も作られた」「射撃場の奥、山のギリギリはずれに飛行機を入れる格納庫、かなり大きな穴を掘った」「滑走路は地ならし機、ブルドーザー、ローラーなど重機を使ってやつていた」「練兵場には塹壕があって、起伏があちこちにあった」などの内容があった。

村松ステーションは、西に愛宕山や村松公園、約700mから1km東に早出川が流れる、周囲を山や微高地に囲まれた平坦地に位置する。明治30年以降、陸軍の練兵場・射撃場であり、明治45年に発行された地形図には、歩兵營、病院、練兵場、射撃場が表記されている。なお、村松ステーションには、旧陸軍の所有地であったことを示す柱標が今も残されている（第1・2図）。

硫黄島および沖縄陥落後の昭和20年4月以降、B29などの航空機による本土空襲が激しくなる中、日本軍は敵の本土上陸に備え、全国にある主要飛行場に加えて、現在確保している航空機および燃料、弾薬などをさらに分散して収容するため洞窟の構築や、秘匿飛行場の整備を進めた。飛行場の候補地は、滑走路を造成するため土の質や排水が良好であること、飛行機の隠蔽に適した地形として、周囲に山や森林があり、トンネル掘削に適した地形・地質のある場所が推奨された。また、地上にすでにあるものの利用を前提として、例えば耕地を利用する場合には、飛行場の周辺を不整形にして直線部をなくす。飛行場内は付近の耕作地と同様に芝を植える、在來の道路はそのまま利用する、などの指示があったことが分かる（第一復員局1946、防衛省防衛研修所戦史室1968）。なお、新潟県の主要飛行場は東区の新潟空港である。全国各地で作られた空中からの発見を避ける偽装がほどこされた「秘匿飛行場」は新潟県では西区の信濃川沿い、現在の新潟ふるさと村の場所にあったとされる旧山田島飛行場がある。昭和20年の5月に着工し、8月3日に完成しており、規模は不明であるが、1日1200人から1800人が勤員され、全て人力で作業が行われた（黒崎町2000）。魚沼市の八色原飛行場予定地は幅50m、長さ1500m、7月にブルドーザーや重機が導入され、まずブルドーザーで畑を均し、野芝を植え付け、ローラーで圧してコンクリートのように固め、上から見ると畑の畔形のように見える偽装が行われた。昭和20年6月に着工し、8月15日（終戦）にはほぼ完成したという（小出町教育委員会1998）。

村松飛行場は、昭和20年6月に作業隊が来町し、学徒勤員や勤労奉仕として、周辺の学童まで作業に勤員されている。場所は村松練兵場から菅名地区にかけて約30町歩と報じられ、練兵場と射撃場が対象地域として推測される。滑走路の形態がほぼ完成した頃に終戦を迎えた（村松町史編纂委員会1982）。終戦翌年、昭和21年に米軍によって撮影された新津の空中写真（モノクロ）では、村松ステーションの圃場を南北に通る幅約100m、長さ約700～800mの白色ライン、射撃場があった場所にも同じ幅の白色ラインが交差してみえる。各地で撮影された同時期の米軍による偵察写真でも、飛行場滑走路は白色のラインとして認められ（工藤2011）、昭和20年6月海軍施設本部の新設秘密航空基地施設要領には、滑走路の規模は30m×600m、整地転圧のみとなっているが、全国では幅100m、長さ1800mまでの間でそれぞれであることから、今回参照した空中写真にある痕跡が滑走路であると判断した。

発掘調査は村松ステーションにある痕跡を戦争遺跡として位置づける目的で、敷地内の遺構や遺物の確認を行った。調査対象は、圃場にあったとされる軍用飛行場滑走路および塹壕跡、樹林内にある塹壕跡と伝えられる堀・溝状遺構、同樹林内で確認された近現代遺物の集積である。発掘調査は2019年の8月に1次調査として、堀・溝状遺構地点SD01の平面図作成、遺物集積地点のSU01の掘削およびSU02の遺物の採取、2020年の8月に2次調査として、米軍の写真から滑走路と推測される圃場（第3圃場）に設定した軍用飛行場地点および堀・溝状遺構地点SD01のトレント調査、遺物集積地点SU01の掘削・遺物の採取を行った。

その結果、堀・溝状遺構 SD01 の第 1 トレンチでは、自然堆積層の黒褐色土（Ⅱ層）と黄褐色土（Ⅲ層）を掘削して遺構が構築されており、立ち上がりのⅡ層上にはⅡ層とⅢ層の混合土が堆積していることを確認した。これは遺構構築時に掘削された土が、両側に堆積している状況を示し、構築状況や形状および規模が聞き取り調査と一致していることから塹壕跡と判断した。なお、戦争に関する遺物は出土していない。また、同樹林内にある近現代遺物の集積について、SU01・SU02 では、昭和 15 年～昭和 21 年頃に製作された統制陶器や、商標や商品名が分かれる薬品や化粧品の瓶、歯磨き粉などが認められることから、昭和 10～30 年代が主体であると推測される。これらは戦後の廃棄であり、医療廃棄物や被熱して溶融したスラグ状の固体などを含む日用品がどのような要因でどこから運ばれたか、という課題が残る。

圃場にあったとされる軍用飛行場滑走路および塹壕跡について、第 1 トレンチでは塹壕跡と推測される溝状遺構を検出し、第 2・第 3 トレンチでも同様に落込みおよびその上部に堆積している黒色土層を確認した。黒色土層は縦りが強く、砂礫やローム粒・ロームブロックが含まれるという特徴がある。第 1・第 3 トレンチ南壁面では、黒色土層の間に直径 1～15cm の円碟と砂が主体となる砂碟層が認められる。圃場関係者からは圃場のすき込みの際に出てきた石をまとめて廃棄したという話を聞いており、砂碟層は圃場に広く分布していた可能性がある。また、秘匿飛行場に関する多くの記録類の中には、河原から砂や砂利を運び、畑に撒いて地ならしをしたというものがみられ、遺構の上に堆積している黒色土層および砂碟層は、滑走路の造成に関連する土層の可能性が高い。なお、この砂碟層はⅢ層下に認められるロームを含む砂碟層（Ⅳ層）とは異なり、砂と碟が主体であることから、近隣の河川から運ばれ、土を固め、ぬかるみを防ぐ目的で使用された、あるいは塹壕の部分のみに堆積する状況であれば、土が陥没するのを防ぐ目的で使用されたと推測できる。

聞き取り調査には「地ならし機やローラーといった重機を使っていた」「滑走路はローラーで固めた」「練兵場には塹壕があつてそこになっていた。それらを平らにする」という内容がある。塹壕の構築と滑走路の造成により、現在の堆積になった過程について、まず自然堆積（Ⅱ層・Ⅲ層）を掘削して塹壕を構築する過程で、両側に黒褐色土と黄褐色土の混合土が堆積、そして飛行場滑走路の造成に伴い重機が移動できるよう、当時塹壕が構築されていた部分は上部を崩し、落ち込みを埋めた後、周囲の塹壕を構築していない場所の黒褐色土層（Ⅱ層）を削平しながら平らにしたという工程を復元できる。なお、聞き取り調査によれば、滑走路をつくるにあたり、重機やトロッコで土を運んでおり、発掘調査が行われている山梨県南アルプス市の御駒使河原秘匿飛行場では、滑走路の造成に 1m ほど盛土が確認されている（南アルプス市教育委員会 2007）。村松ステーションの圃場の現在の標高は、南東に向かって高くなっている。南東方向にある堀・溝状遺構地点や遺物集積地点は、圃場よりも標高が約 6・7 m 高い位置にあることから、南東から北西に向かって滑走路の造成土が運ばれた可能性がある。また、聞き取り調査では、周辺に飛行機の格納庫がつくられたという。例えば、近隣にある愛宕山に飛行機を格納する横穴を掘削したとすれば、そういった場所の土が利用されることも考えられる。今後、当時の空中写真を用いた比高の検討および地中レーダー探査、射撃場や愛宕山などの飛行場の周辺を探索することによって、戦争遺跡としてはもとより、開発による地形の変遷や旧軍施設および村松ステーションが地域社会とどう関わってきたのかという課題について追究できる。

今後、戦争遺跡の調査における考古学的役割は、さらに重要な位置を占めることになる。地域社会の人々に残る記憶を、地域の歴史に関わる具体的な資料と共に記録することで、戦争の経験を後世に伝えることができる。また、戦争遺跡の調査で考古学や歴史を学ぶことが、地域社会と学生との接点となり、戦争の痕跡を後世に残し、地域に還元する活動を通して、文化財への相互理解を深めることができる。

今回の調査は、新潟大学考古学研究室の小さな成果ではあるが、新潟県で初めての本格的な戦争遺跡の発掘調査として周知されることで、今後、新潟県のみならず全国の近現代遺跡の再評価につながることを期待したい。

（清水 香）

謝辞

佐渡市西三川砂金山跡における発掘調査では、佐渡市世界遺産推進課の滝川邦彦氏に石組遺構をご教示いただき、佐渡市世界遺産推進課の方々にご指導、御協力をいただきました。また、笹川集落では金子一雄氏をはじめとして、集落の皆さまにご支援、御協力をいただきました。

村松ステーションにおける発掘調査では、新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センターの山田宜永先生、高橋能彦先生、吉田智佳子先生および村松ステーションの職員の方々にご指導・御協力をいただきました。

村松ステーションでの活動や聞き取り調査に関して、新潟大学人文学部中村 元先生にご指導・御協力をいただきました。また、地質や土層の解釈に関して、新潟大学災害・復興科学研究所のト部厚志先生にご教授いただきました。末筆ながら記して心より感謝申し上げます。

参考文献

- 安藤広道 2020『慶應義塾大学日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の研究Ⅱ』2016～2019年度科学研究費補助金研究成果報告書、慶應義塾大学民族学考古学研究室。
- 池田榮史 2019『沖縄戦の発掘 沖縄陸軍病院南風原壕群』（シリーズ「遺跡を学ぶ」137）、新泉社。
- 菊池 実 2005『近代日本の戦争遺跡－戦跡考古学の調査と研究』青木書店。
- 菊池 実 2008『戦争遺跡の発掘・陸軍前橋飛行場』（シリーズ「遺跡を学ぶ」047）、新泉社。
- 工藤洋三 2011『米軍の写真偵察と日本空襲 写真偵察機が記録した日本本土と空襲被害』。
- 黒崎町 2000『黒崎町史』通史編、黒崎町。
- 小出町教育委員会 1998『小出町史』下巻（近代・現代・人物）、小出町。
- 佐渡市教育委員会 2004『西三川砂金山石組遺構調査』佐渡市教育委員会。
- 佐渡市世界遺産推進課 2012『佐渡金銀山 西三川砂金山遺跡分布調査報告書』佐渡金銀山遺跡報告書 第16集、佐渡市世界遺産推進課・佐渡市教育委員会・佐渡市。
- シン技術コンサル 2004『鉄砲場遺跡・砂金江道遺跡 一般道静平・西三川線辺地道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』真野町教育委員会。
- 第一復員局 1946『本土航空作戦記録』第一復員局。
- 中村 元 2017『新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーションに残る旧陸軍施設関連資料の基礎的検討』『資料学研究』第14号、新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト「大城の文化システムの再構成に関する資料学的研究」。
- 防衛庁防衛研修所戦史室 1968『本土防空作戦』戦史叢書、朝雲新聞社。
- 南アルプス市教育委員会 2007『ロタコ（御勤使河原飛行場跡）』南アルプス市教育委員会。
- 村松町史編纂委員会 1982『村松町史』下巻、村松町教育委員会事務局。

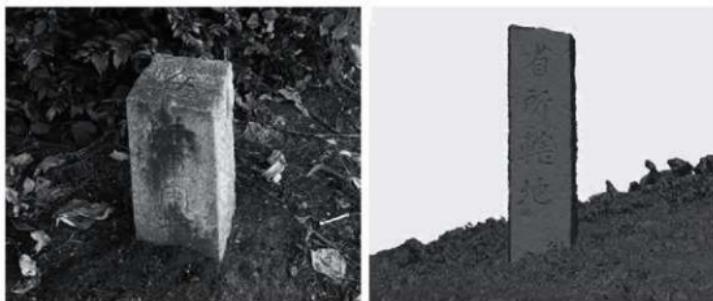
西三川砂金山跡および村松ステーション旧陸軍開連施設跡における調査の成果と課題

第1表 新潟大学農学部村松ステーション関連年表（村松町史編纂委員会 1982、国土地理院地形図参照）

西暦	和暦	開拓する出来事	土地利用
1894年	明治27年	日露戦争	
1895年	明治28年		
1896年	明治29年	新潟田歩兵第十六連隊本部内に歩兵第三十連隊開設、歩兵第三十連隊の村松への移駐が決定される。	
1897年	明治30年	歩兵第三十連隊の村松への移駐が開始される。	
1898年	明治31年	第三十連隊の編成が完了（三百大隊十二個中隊）。村松憲兵分隊が創設される。 連隊敷地（賞金4万円、練兵場4万坪2800坪、射撃場2万2780坪、作業場2755坪、合計11万3715坪（3775325 m ² ）= 東京ドーム約8個分）。このほか、村松衛生病院（4800坪）、村松連隊区司令部、村松憲兵分隊等関連施設あり。	
1899年	明治32年		
1900年	明治33年		
1901年	明治34年		
1902年	明治35年		
1903年	明治36年		
1904年	明治37年	日露戦争	歩兵第三十連隊出征。
1905年	明治38年		
1906年	明治39年		
1907年	明治40年		
1908年	明治41年		
1909年	明治42年		
1910年	明治43年		
1911年	明治44年		
1912年	明治45年		
1913年	大正2年		
1914年	大正3年		
1915年	大正4年		
1916年	大正5年		
1917年	大正6年		
1918年	大正7年		
1919年	大正8年		
1920年	大正9年		
1921年	大正10年		
1922年	大正11年		
1923年	大正12年		
1924年	大正13年		
1925年	大正14年		第三十連隊、村松から高田へ移駐。新潟田歩兵第十六連隊第三大隊が村松に分屯（約2000人の連隊から、約600人の一大隊に減少）。
1926年	大正15年		
1927年	昭和2年		
1928年	昭和3年		
1929年	昭和4年		村松練兵場で「新武器を応用した練習競」（昭4・三・二「新潟新聞」）を行い、一般町民に室内を見学させ、余興を催す。
1930年	昭和5年		
1931年	昭和6年		
1932年	昭和7年		
1933年	昭和8年		
1934年	昭和9年		
1935年	昭和10年		
1936年	昭和11年		村松分屯大隊が、新潟田十六連隊に復帰。
1937年	昭和12年		
1938年	昭和13年		新潟田陸軍病院の分院が旧村松兵舎に開設される。
1939年	昭和14年		
1940年	昭和15年		
1941年	昭和16年		新潟田陸軍病院村松分院が閉鎖される。高田の独立歩兵隊で歩兵第一八五連隊（東部八六部隊）が編成され、村松に駐屯する。
1942年	昭和17年		歩兵第一八五連隊（東部八六部隊）が高田独立歩兵隊の所轄から留守第二總団を基幹として編成された第四二師団に編入し、新潟田に移駐する。
1943年	昭和18年		村松陸軍少年通信兵学校（村松兵舎）が創設する。
1944年	昭和19年		軍用飛行場の設営（本部は村松小学校、滑走路・飛行機格納庫等は、村松練兵場から舊名地区約30町歩。設営には作業隊のほか、村松・五箇原の学生が奉仕活動に従事。滑走路の形態がほぼ完了したころに終戦を迎える）。村松陸軍少年通信兵学校が解散。旧村松兵舎には米造駕駒が駐屯する。
1945年	昭和20年		
1946年	昭和21年		米造駕駒が撤退。新潟県立農林専門学校の旧村松兵舎移転が決定。村松大火。旧練兵場跡地が新潟県立農林専門学校の農場として開拓される。
1947年	昭和22年		
1948年	昭和23年		
1949年	昭和24年		新潟県立農林専門学校を母体として、新潟大学農学部が設置される。
1950年	昭和25年		
1951年	昭和26年		新潟県立農林専門学校が閉校。旧練兵場跡地の農場は、新潟大学農学部の附属農場となる。
～	～		
2001年	平成13年		新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センターの設置（村松ステーション）。

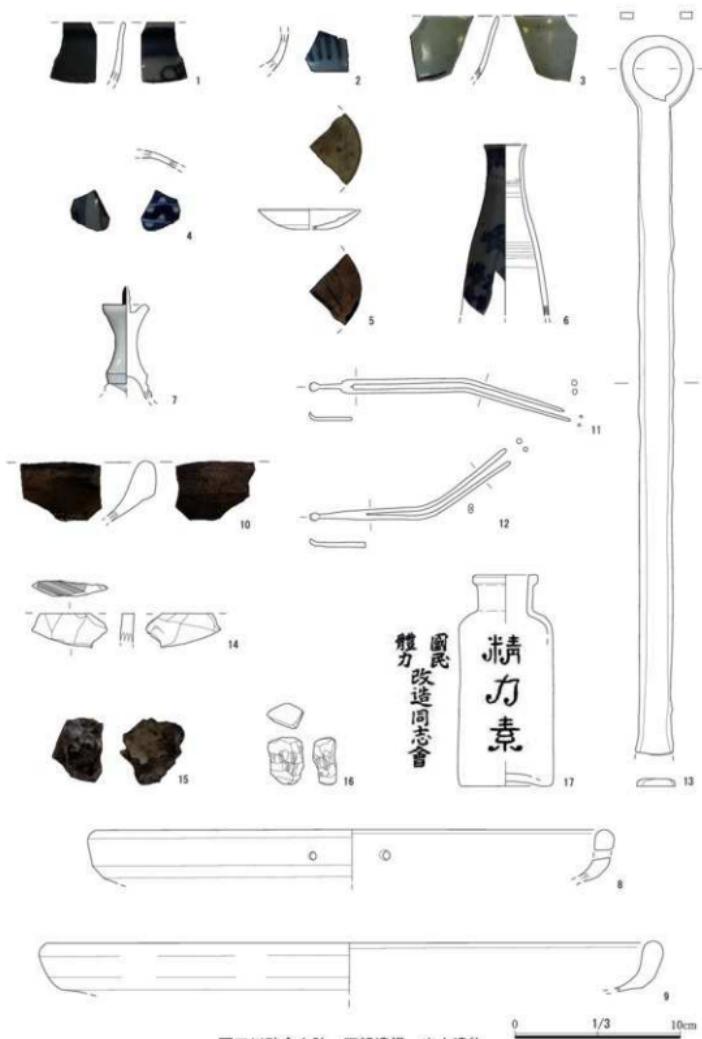


第1図 村松ステーション調査地点位置図（国土地理院地図 全国最新写真【シームレス】を改変）



「4」「陸軍用地」
上部欠損、「口省所轄地」(Metashapeによる加工)

第2図 村松ステーションの標柱



西三川砂金山跡 石組遺構 出土遺物



西三川砂金山跡 石組遺構 出土遺物



西三川砂金山跡 石組遺構 全景写真（北西から）



西三川砂金山跡 石組遺構 全景写真（南東から）



西三川砂金山跡 石組遺構 全景写真（北東から）



西三川砂金山跡 石組遺構南壁 鉄製品

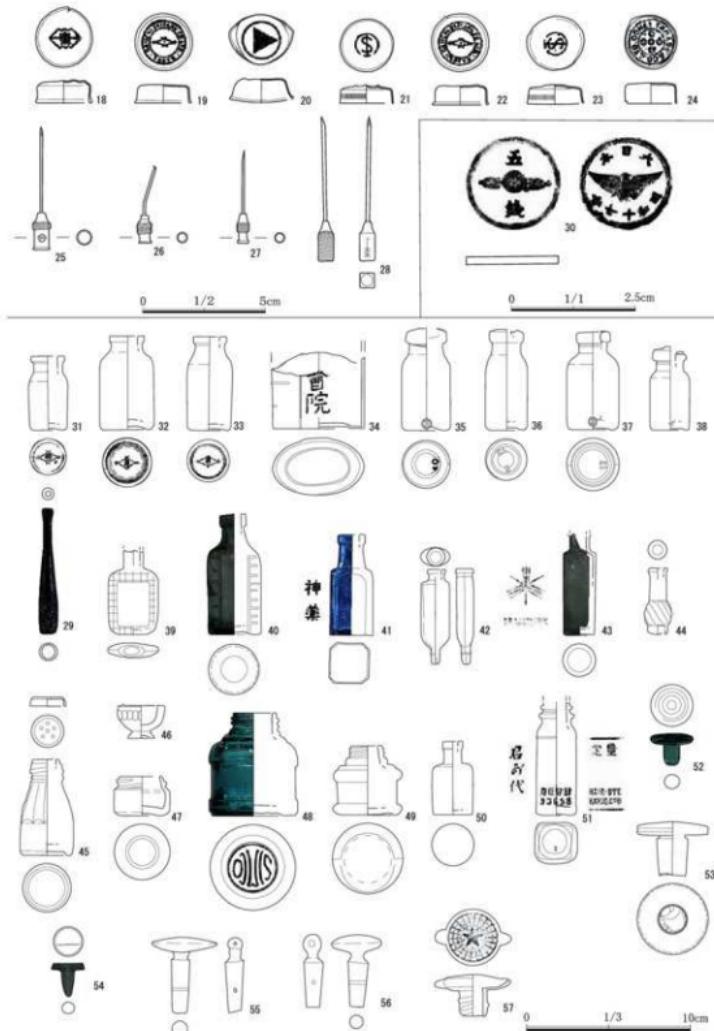


西三川砂金山跡 石組遺構東側 遺物出土状況（北西から）

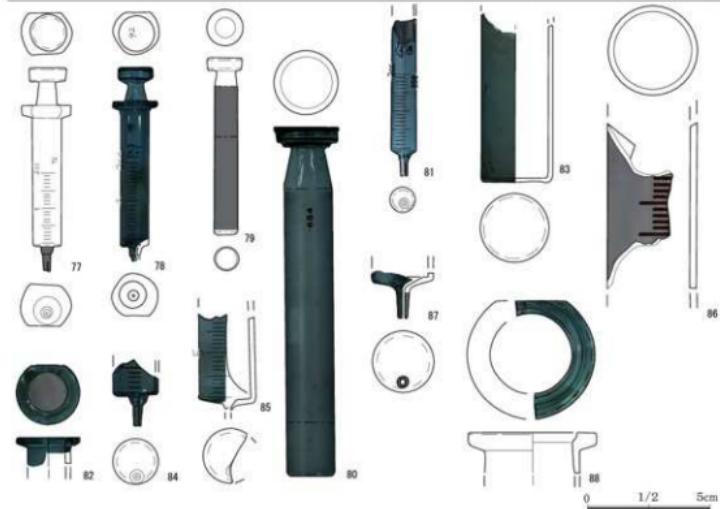
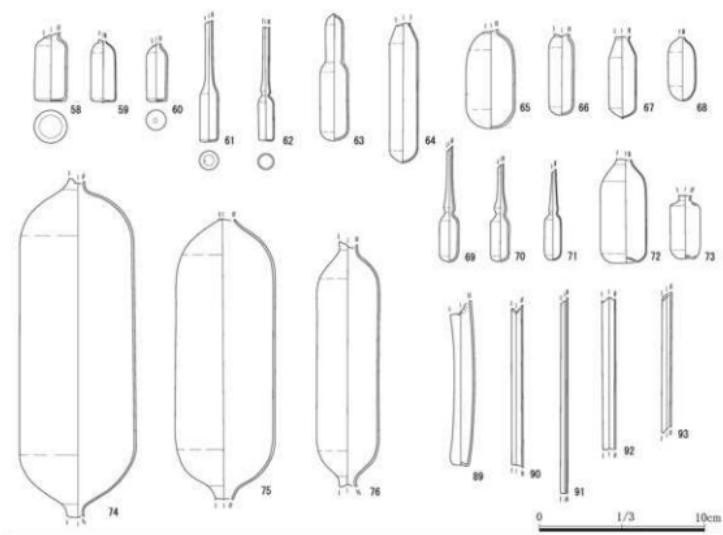


遺物集積地点 SU01 出土遺物(1)

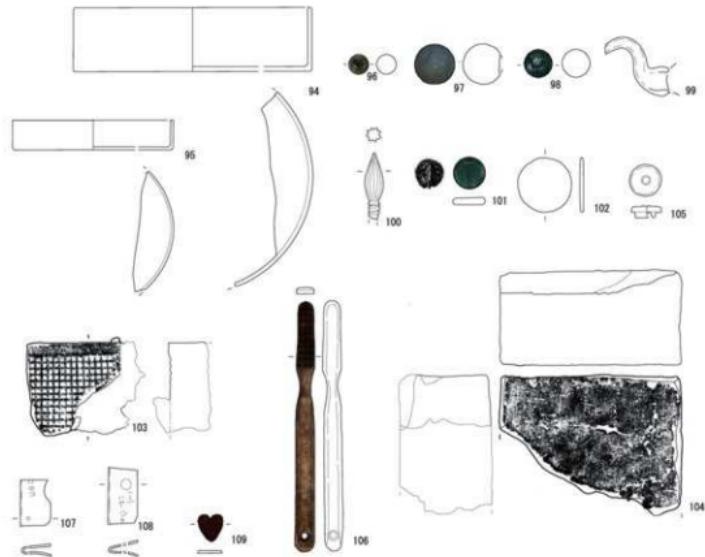
村松ステーション旧陸軍関連施設跡



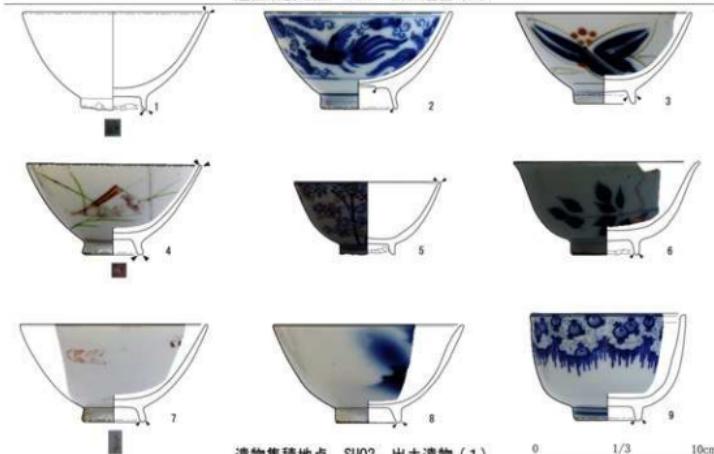
村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU01 出土遺物 (2)



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU01 出土遺物(3)



遺物集積地点 SU01 出土遺物(4)



遺物集積地点 SU02 出土遺物(1)
村松ステーション旧陸軍関連施設跡



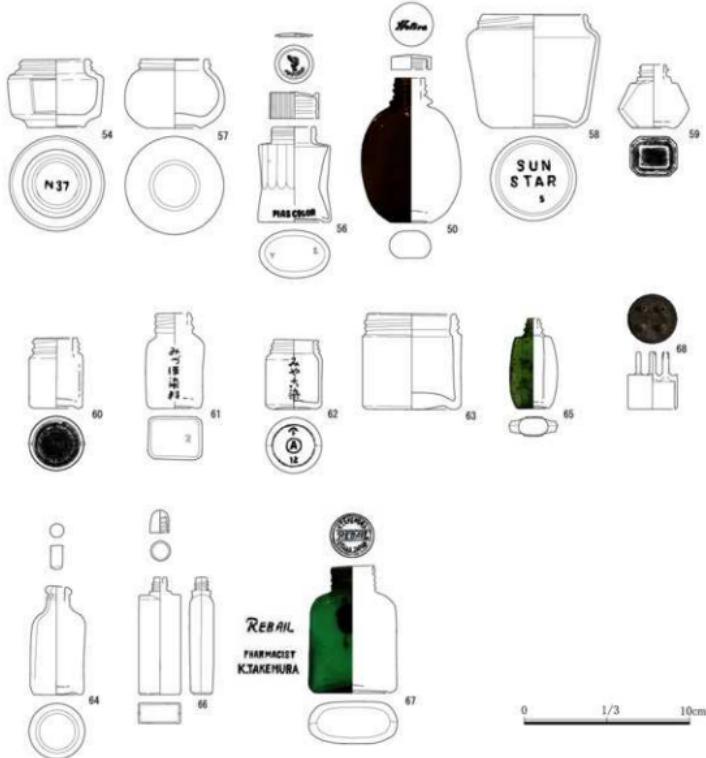
村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU02 出土遺物(2)



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU02 出土遺物(3)



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU02 出土遺物(4)



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU02 出土遺物(5)



SU01 日用品



SU01 飲料瓶



SU01 歯磨き粉 表



SU01 歯磨き粉 裏



SU01 建築材料

村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 (1)



SU01 被熱物



SU01 医療用品



SU01 注射針



SU01 アンプル類



SU02 陶磁器皿・皿



SU02 陶磁器・土器

村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点（2）



SU02 ガラス製品



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第1トレンチ東壁断面およびSD02



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第1トレンチ南壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第1トレンチ西壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第2トレンチ東壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第2トレンチ南壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第2トレンチ西壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第2トレンチ北壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第3トレンチ南壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第3トレンチ西壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第3トレンチ北壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第4トレンチ南壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 軍用飛行場地点 第4トレンチ西壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 堀・溝状遺構地点 SD01（南西から）



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 堀・溝状遺構地点 SD01（南西から）



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 堀・溝状遺構地点 SD01 第1トレンチ完掘状況（南西から）



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 堀・溝状遺構地点 SD01 第1トレンチ完掘状況（北から）



SD01 第1トレンチ西壁 上端(北側)



SD01 第1トレンチ東壁 上端(北側)



SD01 第1トレンチ西壁 下端



SD01 第1トレンチ東壁 下端



SD01 第1トレンチ西壁 上端(南側)



SD01 第1トレンチ東壁 上端(南側)

村松ステーション旧陸軍関連施設跡 堀・溝状遺構地点



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 堀・溝状遺構地点 SD01 第2トレンチ完掘状況（南から）



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 堀・溝状遺構地点 SD01 第2トレンチ北壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 堀・溝状遺構地点 SD01 第2トレンチ東壁断面



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU01 伐採前



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU01 伐採後



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU01 南壁断面（北から）



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU01 完振写真（北東から）



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU02 遺物検出状況



村松ステーション旧陸軍関連施設跡 遺物集積地点 SU02 遺物検出状況



石組遺構周辺の伐採の様子



石組遺構の作業風景



石組遺構における測量の様子



石組遺構の作業風景



休憩時間に頂いたスイカを食べる



石組遺構の作業風景



佐渡歴史伝説館にて



トキ交流会館での夕食の準備の様子



石組造構の作業風景



石組造構における写真撮影の様子



笛川集落センターでの休憩時間の様子



村松ステーションで石本さんのお話を伺う



堀・溝状造構地点における踏査の様子



堀・溝状造構地点における測量の様子



堀・溝状造構地点における写真撮影の様子



村松ステーションでの室内作業の様子



食事の後片付けの様子



研究室での実測の様子



五十嵐キャンパスでの測量の練習の様子



堀・溝状遺構地点までの道程



遺物集積地点における掘削の様子



堀・溝状遺構地点における掘削の様子



村松ステーションでの中村先生による解説



軍用飛行場地点における掘削の様子



軍用飛行場地点における掘削の様子



軍用飛行場地点における掘削の様子



遺物の個別写真の撮影の様子



遺物の集合写真の撮影の様子



図版作成の様子



図版作成の様子

報告書抄録

ふりがな 書名	にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう 新潟大学考古学研究室調査研究報告						
ふりがな 書名	にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう						
ふりがな 書名	にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう にいがただいがくこうごくけんきゅうしつちょうさけんきゅうほうこう						
卷次	第20号						
著者名	青木亮一・浅見泰徳・阿部紀佳・新井健太・下部厚志・遠藤純夏・大島早紀・佐藤山羽・清水 春・中村 元・野村博仁・原田優海・春田雪介・舟山直香・松井翔太・宮島龍志・山本円香						
発行機関	新潟大学考古学研究室						
所在地	平 950-2181 新潟県新潟市西区五十嵐2の町 8050 新潟大学人文学部 ☎ 025 (262) 6298						
発行年月日	令和3年(2021)3月31日						
所収道路	所在地	コード 市町村 道路番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査成因
西三川砂金山跡	新潟県佐渡市西三川 288, 291	15224 1184	37° 55' 09"	138° 19' 21"	2019年4 月30日～ 2019年5月 3日 2019年8 月11日～ 2019年8月 24日	約14m ²	学術調査
	種別 主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
	生産遺跡 (縄山路跡)	石組造構	陶磁器、土器、金属製品 など			石組造構周辺の表土から、幕末・近代の遺 物が出土。	
所収道路	所在地	コード 市町村 道路番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査成因
新潟県五泉市石脊根 6934	15218	37° 41' 27"	139° 11' 44"	2019年8 月18日～ 2019年8月 24日, 2020年8 月17日～ 2020年8月 28日	約30m ²	学術調査	
	種別 主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
	戦争遺跡 明治・大正・昭和	堅壁跡、遺物集積など	陶磁器、ガラス製品、金 属製品など			聞き取り調査や踏査で堅壁跡の可能性を指 摘されていました。堅・溝状遺構、軍用飛行場消 走路と考えられる土崩および遺物集積を確 認。	

編集後記

新潟大学考古学研究室では、2019年度に佐渡市西三川砂金山跡、2019・2020年度に五泉市新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーション旧陸軍関連施設跡の測量・発掘調査を行いました。今回の調査は歴史的な猛暑や世界的な感染症による危機的状況など厳しい状況下で行われました。その中でも新たな成果を見つけ、報告書として刊行できた背景には、先生の熱意あるご指導の下、研究室一同力を合わせ取り組んだことにあると思います。また、笠川集落に住む地域の方々や、村松ステーションの先生および職員の方々の温かなご声援とご協力のおかげで調査を無事成し遂げることができました。心より感謝申し上げます。

報告書作業では、今回よりデジタル作業での原稿作成に挑戦しました。連日の整理作業や原稿執筆、遺物の写真撮影など行いました。慣れない作業に多くの戸惑いと苦労を重ねることもありました。連日の作業にも関わらず、体調を崩す学生も出ることなく最後まで駆け抜けられ、報告書を無事完成させることができ喜ばしい限りです。このような貴重な経験を今後の調査さらには各々の成長へとつなげ込んでいきたいと思います。

最後に、小野浩史さんをはじめとする富士印刷の皆様方には、限られた時間の中奔走していただいたことを深く感謝申し上げます。

(青木亮子・浅見希穂・松井翔吾)

2021年3月31日発行

編集：新潟大学考古学研究室

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町 8050
TEL 025-262-6298

印刷：富士印刷株式会社

〒950-1233 新潟市南区保坂字岡下 333-1
TEL 025-372-3115

発行：新潟大学人文学部

Bulletin of the Department of
Archaeology,Niigata University

20

Contents

Investigataion of Nishimikawa Placer Gold Mine,Sado,Niigata Pref

Investigation of Field Center for Sustainable Agriculture and Forestry

Faculty of Agriculture,Niigata University,Gosen,Niigata Pref

R.Aoki,K.Asami,N.Abe,K.Arai,A.Urabe,
S.Endo,S.Oshima,Y.Satou,K.Shimizu,M.Nakamura,
I.Nomura,Y.Harada,K.Fujita,N.Funayama,
S.Matsui,R.Miyajima,M.Yamaki

March 2021